

神州天馬俠「一」（吉川英治）

序

私は、元来、少年小説を書くのが好きである。大人の世界にあるような、きゆうくつな概念にとらわれないでいいからだ。

少年小説を書いている間は、自分もまったく、童心のむかしに返る、少年の気もちになりきってしまう。——今のわたくしは、もう古い大人だが、この天馬俠を読み直し、校訂の筆を入れていると、そのあいだにも、少年の日が胸によみがえってくる。

ああ少年の日。一生のうちの、尊い季節だ。この小説は、わたくしが少年へ書いた長編の最初のもので、また、いちばん長いものである。諸君の楽しい季節のために、この書が諸君の退屈な雨の日や、淋しい夜の友になりうればと思ひ、自分も好きなまま、つい、こんなに長く書いてしまったものである。

いまの日本は、大人の世界でも、子どもの天地でも、心に楽しむものが少ない。だが、少年の日の夢は、痩せさせてはいけない。少年の日の自然な空想は、いわば少年の花園だ。昔にも、今にも、将来へも、つばさをひろげて、遊びまわるべきである。

この書は、過去の伝奇と歴史とを、わたくしの夢のまま書

いたものだが、過去にも、今と比較して、考えていいところは多分にある。悪いところは反省し、よいところは知るべきだと思ふ。その意味で、鞍馬の竹童も、泣き虫の蛾次郎も、諸君の友だち仲間へ入れておいてくれ給え。時代はちがうが、よく見てみたまえ、諸君の友だち仲間の腕白にも、竹童もいれば、蛾次郎もいるだろう。大人についても、同じことがいえる。

以前、これが「少年倶楽部」に連載されていた当時の愛読者は、成人して、今日では政治家になったり、実業家になったり、文化人になったりして、みな社会の一線に立っている。諸君のお父さんや兄さんのうちにも、その頃の愛読者がたくさんおられることと思う。

わたくしはよくそういう人たちから、少年時代、天馬俠の愛読者でした——と聞かされて、年月の流れに、おどろくことがある。もし諸君がこの書を手にしたら、諸君の父兄やおじさんたちにも、見せて上げてもらいたい。そして、著者の言伝てを、おつたえして欲しい。

——ご健在ですか。わたくしは健在です、と。そして、いまの少年も、また天馬俠を読むようになりました、と。

昭和二四・春

著者

そよ風のうごくたびに、むらさきの波、しろい波、——恵林寺うらの藤の花が、今をさかりな、ゆく春のひるである。

朱の椅子によつて、しずかな藤波へ、目をふさいでいた快川和尚は、ふと、風のたえまに流れてくる、法螺の遠音や陣鉦のひびきに、ふつさりした銀の眉毛をかすかにあげた。

その時、長廊下をどたどたと、かけまろんできたひとりの弟子は、まっさおな面をぺたりと、そこへ伏せて、

「おッ。お師さま！ た、大変なことになりました。あアおそろしい、……一大事でござります」

と舌をわななかせて告げた。

「しずかにおしなさい」

と、快川は、たしなめた。

「——わかっています。織田どのの軍勢が、いよいよ此寺へ押しよせてきたのであろう」

「そ、そうです！ いそいで鐘楼へかけのぼって見ましたら、森も野も鳥も、軍兵の旗指物でうまっています。あア、もうあのとおり、軍馬の蹄まで聞えてまいります……」

いいもおわらぬうちだった。

うら山の断崖から藤だなの根もとへ、どどどどと、土けむりをあげて落ちてきた者がある。ふたりはハツとして顔をむ

けると、ふんぷんとゆれ散った藤の花をあびて鎧櫃をせおつた血まみれな武士が、氣息もえんえんとして、庭さきに倒れているのだ。

「や、巨摩左文次どのじゃ。これ、はやく背のものをおろして、水をあげい、水を」

「はッ」と弟子僧ははだしでとびおりた。鎧櫃をとって泉水の水をふくませた。武士は、気がついて快川のすがたをあおぐと、

「お！ 国師さま」と、大地へ両手をついた。

「巨摩どの、さいこの便りをお待ちしていましたぞ。ご一門はどうなされた」

「はい……」左文次はハラハラと涙をこぼして、

「ざんねんながら、新府のお館はまたたくまに落城です。火の手をうしろに、主君の勝頼公をはじめ、御台さま、太郎君

さま、一門のこり少なの人数をひきいて、天目山のふもとまで落ちていききましたが、目にあまる織田徳川の両軍におしつ

つまれ、みな、はなばなしく討死あそばすやら、さ、刺しち

がえてご最期あるやら……」

と左文次のこえは涙にかすれる。

「おお、殿もご夫人もな……」

「まだおん年も十六の太郎信勝さままで、一きわすぐれた目

ざましいお討死でござりました」

「時とはいいながら、信玄公のみ代まで、敵に一步も領土を

ふませなかったこの甲斐の国もほろびたか……」

と快川は、しばらく暗然としていたが、

「して、勝頼公の最期のおことばは？」

「これに持ちました武田家の宝物、御旗楯無（旗と鎧）の二品を、さきごろからこのお寺のうちへおかくまいくだされてある、伊那丸さまへわたせよとおおせにござりました」

そこへまた、二、三人の弟子僧が、色を失ってかけてきた。

「お師さま！ 信長公の家臣が三人ほど、ただいま、ご本堂から土足でこれへかけあがってまいりますぞ」

「や、敵が？」

と巨摩左文次は、すぐ、陣刀の柄をにぎった。

快川は落ちつきはらって、それを手でせいしながら、

「あいや、そこもとは、しばらくそこへ……」

と床下をゆびさした。急なので、左文次も、宝物をかかえたまま、縁の下へ身をひそめた。

と、すぐに廊下をふみ鳴らしてきた三人の武者がある。いづれも、あざやかな陣羽織を着、大刀の反りうたせていた。眼をいからせながら、きつとこなたにむかつて、

「国師ッ！」

と、するどく呼びかけた。

二

天正十年の春も早くから、木曾口、信濃口、駿河口の八ぼうから、甲斐の盆地へさかおとしに攻めこんだ織田徳川の連合軍は、野火のようないきおいで、武田勝頼父子、典厩信豊、その他の一族を、新府城から天目山へ追いつめて、ひとりのこさず討ちとってしまえと、きびしい軍令のもとに、残党を狩りたてていた。

その結果、信玄が建立した恵林寺のなかに、武田の客分、佐々木承禎、三井寺の上福院、大和淡路守の三人がかくれていることをつきとめたので、使者をたてて、落人どもをわたせと、いくたびも談判にきた。

しかし、長老の快川国師は、故信玄の恩に感じて、断乎として、織田の要求をつっぱねたうえに、ひそかに三人を逃がしてしまった。

織田の間者は、夜となく昼となく、恵林寺の内外をうかがっていた。ところが、はからずも、勝頼の末子伊那丸が、まだ快川のふところにかくまわれているという事実をかぎつけて、いちはやく本陣へ急報したため、すわ、それ逃がしてはと、二千の軍兵は砂塵をまいて、いま——すでにこの寺をさして押しよせてきつつあるのだ。

快川は、それと知っていながら、ゆったりと、朱の椅子から立ちもせず、三人の武将をながめた。

「また、織田どのからのお使者ですか」

と、しずかにいった。

「知れたことだ」となかのひとりが一歩すすんで、

「国師ッ、この寺内に信玄の孫、伊那丸をかくまっているというたしかな訴人があった。縄をうってさしだせばよし、さもなくば、寺もろとも、焼きつくして、みな殺しにせよ、という厳命であるぞ。胆をすえて返辞をせい」

「返辞はない。ふところにはいった窮鳥をむごい獵師の手にわたすわけにはゆかぬ」

と快川のこえはすんでいた。

「よしッ」

「おぼえておれ」と三人の武将は荒々しくひッ返した。そのうしろ姿を見おくと、快川ははじめて、椅子をはなれ、「左文次どの、おでなさい」

と合図をしたうえ、さらに奥へむかつて、声をつづけた。

「忍剣！ 忍剣！」

呼ぶよりはやく、おうと、そこへあらわれた骨たくましいひとりの若僧がある。若僧は、白綸子にむらさきの袴をつけた十四、五歳の伊那丸を、そこへつれてきて、ひざまずいた。「この寺へもいよいよ最後の時がきた。お傳役のそちは一命にかえても、若君を安らかな地へ、お落としもうしあげねばならぬ」

「はッ」

と、忍剣は奥へとつてかえして、鉄の禅杖をこわきにかかえてきた。背には左文次がもたらした武田家の宝物、御旗楯無の櫃をせおって、うら庭づたいに、扇山へとよじのぼっていった。

ワーツという関の声は、もう山門ちかくまで聞えてきた。

寺内は、本堂といわず、廻廊といわずうろたえさわぐ人々の声でたちまち修羅となった。白羽黒羽の矢は、疾風のように、バラバラと、庭さきや本堂の障子襖へおちてきた。

「さわぐな、うろたえるな！ 大衆は山門におのぼりめされ。わしについて、楼門の上へのぼるがよい」

と快川は、伊那丸の落ちたのを見とどけてから、やおら、扠子を衣の袖にいだきながら、恵林寺の楼門へしずかにのぼっていった。

「それ、長老と、ご最期をともにしろ——」

つづいて、一山の僧侶たちは、幼い侍童のものまで、楼門の上にひしひしとつめのぼった。

寄手の軍兵は、山門の下へどツとよせてきて、

「一山の者どもは、みな山門へのぼったぞ、下から焼きころして、のちの者の、見せしめとしてくれよう」

と、うずたかく枯れ草をつんで、ぱツと火をはなった。みるまに、渦まく煙は楼門をつつみ、紅蓮の炎は、百千の火龍となつて、メラメラともえあがった。

楼上の大衆は、たがいにだきあつて、熱苦のさげびをあげて伏しまろんだ。なかにひとり、快川和尚だけは、自若と、椅子にかけて、眉の毛もうごかさず、

「なんの、心頭をしずめれば、火もおのずから涼しい——」
と、一句のことばを、微笑のもととなえて、その全身を、焰になぶらせていた。

三

「おお！ 伊那丸さま。あれをごらんなされませ。すさまじい火の手があがりましたぞ」

源次郎岳の山道までおちのびてきた忍剣は、はるかな火の海をふりむいて、涙をうかべた。

「国師さまも、あの焰の底で、ご最期になったのであろうか、忍剣よ、わしは悲しい……」

伊那丸は、遠くへ向かつて掌を合わせた。空をやく焰は、かれのひとみに、生涯わすれぬものとなるまでやきついた。すると、不意だった。

いきなり、耳をつんぎく呼子の音が、するどく、頭の上で鳴ったと思うと、かなたの岩かげ、こなたの谷間から、槍や陣刀をきらめかせて、おどり立ってくる、数十人の伏勢があった。それは徳川方の手のもので、酒井の黒具足組とみえた。忍剣は、すばやく伊那丸を岩かげにかくして、じぶんは、鉄杖をこわきにしごいて、敵を待った。

「それッ、武田の落人にそういない。討てッ」

と呼子をふいた黒具足の部将は、ひらりと、岩上からとびおりに号令した。下からは、槍をならべた一隊がせまり、そのなかなる、まッ先のひとり、流星のごとく忍剣の脾腹をねらって、槍をくりだした。

「おうッ」と力をふりしぼって、忍剣の手からのびた四尺余寸の鉄杖が、パシリーツと、槍の千段を二つにおって、天空へまきあげた。

「払え！」と呼子をふいた部将が、またどなった。

バラバラとみだれる穂すすきの槍ぶすまも、忍剣が、自由自在にふりまわす鉄杖にあたるが最後だった。藁か棒切れのように飛ばされて、見るまに、七人十人と、朱をちらして岩角からすべり落ちる。ワーツという声のなだれ、かかれ、かかれと、ののしる叫び。すさまじい山つなみは、よせつかえしつ、満山を血しぶきに染める。

一介の若僧にすぎない忍剣のこの手なみに、さすがの黒具足組も胆をひやした。——知る人は知る。忍剣はもと、今川義元の幕下で、海道一のものふといわれた、加賀見能登守その人の遺子であるのだ。かれの天性の怪力は、父能登守のそれ以上で、幼少から、快川和尚に胆力をつ

ちかわれ、さらに天稟の武勇と血と涙とを、若い五体にみながらせている熱血児である。

あの眼のたかい快川和尚が、一山のなかからえりすぐって、武田伊那丸と御旗楯無の宝物を托したのは、よほどの人物と見ぬいたればこそであろう。

新羅三郎以来二十六世をへて、四隣に武威をかがやかせた武田の領土は、いまや、織田と徳川の軍馬に蹂躪されて、焦土となつてしまった。しかも、その武田の血をうけたものは、世の中にこの伊那丸ひとりきりとなつたのだ。焦土のあとに、たった一粒のこつた胚子である。

この一粒の胚子に、ふたたび甲斐源氏の花が咲くか咲かないか、忍剣の責任は大きい。また、伊那丸の宿命もよういではない。

世は戦国である。残虐をもつともしない天下の弓取りたちは、この一粒の胚子をすら、芽をださせまいとして前途に、あらゆる毒手をふるってくるにちがいない。

すでに、その第一の危難は眼前にふつてわいた。忍剣は鉄杖を縦横むじんにふりまわして、やっと黒具足組をおいちらしたが、ふと気がつくとき、伊那丸をのこしてきた場所から大分はなれてきたので、いそいでもとのところへかけあがってくと、南無三、呼子をふいた部将が抜刀をさげて、あっちこっちの岩穴をのぞきまわっている。

「おのれッ」と、かれは身をとばして、一撃を加えたが敵もひらりと身をかわして、

「坊主ッ、徳川家にくだつて伊那丸をわたしてしまえ、さすればよいように取りなしてやる」

と、甘言の餌をにおわせながら、陣刀をふりかぶった。
「けがらわしい」

忍剣は、鉄杖をしごいた。らんらんとかがやく眸は、相手の精気をすって、一步、でるが早い、敵の脳骨はみじんと見えた。

そのすきに、忍剣のうしろに身ぢかくせまって、片膝おりに、種子島の銃口をねらいつけた者がある。ブスブスと、その手もとから火縄がちった——さすがの忍剣も、それには気がつかなかったのである。

かれがふりこんだ鉄杖は、相手の陣刀をはらい落としていた。二どめに、ズーンとそれが横薙ぎにのびたとおもうと、わツと、部将は血へどをはいてぶったおれた。

刹那だ。ズドンと弾けむりがあがった——
はツとして身をしずめた忍剣が、ふりかえってみると種子島をもったひとり、黒具足が、虚空をつかみながら煙のなかであおむけにそりかえっている。

はて？ と眸をさだめてみると、その脾腹へうしろ抱きに脇差をつきたてていたのは、いつのまに飛びよっていたか武田伊那丸であった。

「お、若さま！」

忍剣は、あまりなかれの大胆と手練に目をみはった。

「忍剣、そちのうしろから、鉄砲をむけた卑怯者があったに
よって、わしが、このとおりにしたぞ」

伊那丸は、笑顔でいった。

富士の山大名

一

木の実をたべたり、小鳥を捕って飢えをしのいだ。百日あまりも、釈迦ヶ岳の山中にかくれていた忍剣と伊那丸は、もう甲州攻めの軍勢も引きあげたころであらうと駿河路へ立っていった。峠々には、徳川家のきびしい関所があつて、ふたりの詮議は、厳密をきわめている。

そればかりか、織田の領地のほうでは、伊那丸をからめてきた者には、五百貫の恩賞をあたえるという高札がいたるところに立っているといううわさである。さすがの忍剣も、はたとほうにくれてしまった。

きのうまでは、甲山の軍神といわれた、信玄の孫伊那丸も、いまは雨露によごれた小袖の着がえもなかった。足は茨にさかれて、みじめに血がにじんでいた。それでも、伊那丸は悲しい顔はしなかった。幼少からうけた快川和尚の訓育と、祖父信玄の血は、この少年のどこかに流れつたわっていた。

「若さま、このうえはいたしかたがありません。相模の叔父さまのところへまいって、時節のくるまでおすがりいたすことにしましょう」

かれは、伊那丸のいじらしい姿をみると、はらわたをかきむしられる気がする。で、ついに最後の考えをいいだした。

「小田原城の北条氏政どの、若さまにとっては、叔父君に

あたるかたです。北条どのへ身をよせれば、織田家も徳川家も手はだせませぬ」

が、富士の裾野を迂回して、相模ざかいへくると、無情な北条家ではおなじように、関所をもうけて、武田の落武者がきたら片ツぱしから追いかえせよ、と厳命してあった。叔父であろうが、肉親であろうが、亡国の血すじのものとなれば、よせつけないのが戦国のならいだ。忍剣もうらみをのんでふたたびどこかの山奥へもどるより術がなかった。今はまったく袋のねずみとなつて、西へも東へもでる道はない。

ゆうべは、裾野の青すすきをふすまとして寝、けさはまだ霧の深いころから、どこへというあてもなく、とほとほと歩きだした。やがてその日もまた夕暮れになつてひとつの大きな湖水のほとりへでた。

このへんは、富士の五湖といわれて、湖水の多いところだつた。みると汀にちかく、白旗の宮と額をあげた小さな祠があつた。

「白旗の宮? ……」と忍剣は見あげて、

「才、甲斐も源氏、白旗といえば、これは縁のある祠です。

若さましばらく、ここでやすんでまいりましょうに……」

と、縁へ腰をおろした。

「いや、わしは身軽でつかれはしない。おまえこそ、その鎧櫃をしょっているのです、ながい道には、くたびれがますであらう」

「なんの、これしきの物は、忍剣の骨にこたえはいたしませぬ。ただ、大せつなご宝物ですから、まんいちのことがあつてはならぬと、その気づかいです」

「そうじゃ。わしは、この湖水をみて思いついた」

「なんぞござりますか」

「こうして、その櫃をしょつて歩くうちに、もし敵の目にかつて、奪われたらもう取りかえしがつかぬ」

「それこそ、この忍剣としても、生きてはおられませぬ」

「だから——わしがせめて、元服をする時節まで、その宝物を、この白旗の宮へおあずけしておこうではないか」

「とんでもないことです。それは物騒千万です」

「いや、あずけるといっても、御堂のなかへおくのではない。この湖水のそこへ沈めておくのだ。ちょうどここにある宮の石櫃、これへ入れかえて、沈めておけば安心なものではないか」

「は、なるほど」と、忍剣も、伊那丸の機智にかんじた。

ふたりはすぐ祠にあつた石櫃へ、宝物をいれかえ一滴の水もしみこまぬようにして、岸にあつた丸木のくりぬき舟にそれをのせて、忍剣がひとりで、棹をあやつりながら湖の中央へと舟をすすめていった。

伊那丸は陸にのこつて、岸から小舟を見おくつていた。あかい夕陽は、きらきらと水面を射かえして、舟はだんだんと湖心へむかつて小さくなった。

「あッ——」

とその時、伊那丸は、なにを見たか、さげんだ。

どこから射出したのか、一本の白羽の矢が湖心の忍剣をねらつて、ヒュツと飛んでいったのであつた。——つづいて、雨か、たばしる霰のように、数十本の矢が、バラバラ釣瓶おとしに射かけられたのだ。

さつと湖心には水けむりがあがった。その一しゆん、舟も忍剣も石櫃も、たちまち湖水の波にそのすがたを没してしまつた。

「ややッ」

おどろきのあまり、われを忘れて、伊那丸が水ぎわまでかけたときである。——なにものか、

「待てッ」

とうしろから、かれの襟がみをつかんだ大きな腕があつた。

二

「小童、うごくと命がないぞ」

ずるずると、引きもどされた伊那丸は、声もたて得なかつた。だが、とつさに、片膝をおとして、腰の小太刀をぬき打ちに、相手の腕根を斬りあげた。

「や、こいつが」と、不意をくつた男は手をはなして飛びのいた。

「だれだッ。なにをする——」

とそのすきに、小太刀をかまえて、いいはなつた伊那丸には、おさないながらも、天性の威があつた。

あなたに立つた大男はひとりではなかつた。そろいもそろつた荒くれ男ばかりが十四、五人、蔓巻の大刀に、革の胴服を着たのもあれば、小具足や、むかばきなどをはいた者もあつた。いうまでもなく、乱世の裏におどる野武士の群団である。

「見ろ、おい」と、ひとりが伊那丸をきつとみて、

「綸子の小袖に菱の紋だ。武田伊那丸というやつに相違ないぜ」と、いった。

「うむ、ふんじばって織田家へわたせば、莫大な恩賞がある、うまいやつがひツかかつた」

「やいッ、伊那丸。われわれは富士の人穴を砦として、山大名の一手だ。てめえの道づれは、あのとおり、湖水のまなかで水葬式にしてくれたから、もう逃げようとて、逃げるみちはない、すなおにおれたちについてこい」

「や、では忍剣に矢を射たのも、そちたちか」

「忍剣かなにか知らねえが、いまごろは、山椒の魚の餌食になつてゐるだろう」

「この土蜘蛛……」

伊那丸は、くやしげに唇をかんで、にぎりしめていた小太刀の先をふるわせた。

「さッ、こなけりやふんじばるぞ」

と、野武士たちは、かれを少年とあなどつて、不用意にすみでたところを、伊那丸は、おどりがつて、

「おのれッ」

といいざま、真眉間をわりつけた。野武士どもは、それと、大刀をぬきつれて、前後からおツとりかこむ。

武技にかけては、躑躅ヶ崎の館にいたころから、多くの達人やつわものたちに手をとられて、ふしぎな天才児とまで、おどろかれた伊那丸である。からだは小さいが、太刀は短い、たちまちひとりふたりを斬つてふせた早わざは飛鳥のようだった。

「この童め、味をやるぞ、ゆだんするな」

と、野武士たちは白刃の鉄壁をつくってせまる。その剣光のあいだに、小太刀ひとつを身のまもりとして、斬りむすび、飛びかわしする伊那丸のすがたは、あたかも嵐のなかにもまれる蝶か千鳥のようであった。しかし時のたつほど疲れはでてくる。息はきれる。——それに、多勢に無勢だ。

「そうだ、こんな名もない土賊どもと、斬りむすぶのはあやまりだ。じぶんは武田家の一粒としてのこつた大せつな身だ。しかもおおきな使命のあるからだ——」

と伊那丸は、乱刀のなかに立ちながらも、ふとこう思ったので、いっぽうの血路をやぶって、いっさんににげだした。

「のがすなッ」

と野武士たちも風をついて追いまくってくる。伊那丸は芦の洲からかけあがって、松並木へはしった。ピュッピュッと矢のうなりが、かれの耳をかすって飛んだ。

夕闇がせまってきたので、足もともほの暗くなつたが松並木へでた伊那丸は、けんめいに二町ばかりかけだした。

と、これはどうであろう、前面の道は八重十文字に、藤づるの縄がはってあって、かれのちいさな身でもくぐりぬけるすきもない。

「しまった」と伊那丸はすぐ横の小道へそれていったが、そこにも茨のふさができていたので、さらに道をまがると藤づるの縄がある。折れてもまがっても抜けられる道はないのだ。万事休す——伊那丸は完全に、蜘蛛手がかりという野武士の術中におちてしまったのだ。身に翼でもないかぎりは、この翼からのがれることはできない。

「そうだ、野武士らの手から、織田家へ売られて名をはずか

しめるよりは、いさぎよく自害しよう」

と、かれは覚悟をきめたとみえて、うすぐらい林のなかにすわりこんで、脇差を右手にぬいた。

切っさきを袂にくるんで、あわや身につきたてようとしたときである。ブーンと、飛んできた分銅が、カラッと刀の鐔へまきついた。や? とおどろくうちに、刀は手からうばわれて、スルスルと梢の空へまきあげられていく。

「ふしぎな」と立ちあがったとたん、伊那丸は、ドンとおおむけにたおれた。そしてそのからだはいつのまにか畏なわのなかにつつみこまれて、小鳥のようにもがいていた。

すると、いままで鳴りをしずめていた野武士が、八ぼうからすがたをあらわして、たちまち伊那丸をまりのごとくにしりあげて、そこから富士の裾野へさして追いたてていった。

三

幾里も幾里ものあいだ、ただいちめんに青すすきの波である。その一すじの道を、まっくらな一群の人間が、いそぎに、いそいでいく。それは伊那丸をまん中にかためてかえる、さっきの野武士だった。

「や、どこかで笛の音がするぜ……」

そういったものがあるので、一同ぴつたと足なみをとめて耳をすました。なるほど、寥々々と、そよぐ風のときれに、笛の冴えた音がながれてきた。

「ああ、わかった。咲耶子さまが、また遊びにでているにちがいない」

「そうかしら？　だがあの音いろは、男のようじゃないか。どんなやつが忍んでいるともかぎらないからゆだんをするなよ」

とたがいにいましめあって、ふたたび道をいそぎだすと、あなたの草むらから、月毛の野馬にのったさげ髪の美少女が、ゆらりと気高いすがたをあらわした。

一同はそれを見ると、

「おう、やっぱり咲耶子さまでございましたか」

と荒くれ武士ににげなく、花のような美少女のまえには、腰をおって、ていねいにあたまをさげる。

「じゃ、おまえたちにも、わたしが吹いていた笛の音が聞えたかえ？」

と駒をとめた咲耶子は、美しいほほえみをなげて見おろしたが、ふと、伊那丸のすがたを目にとめて、三日月なりの眉をちらりとひそめながら、

「まあ、そのおさない人を、ぎょうさんそうにからめてどうするつもりです。伝内や兵太もいながら、なぜそんなことをするんです」

と、とがめた。名をさされたふたりの野武士は、一足でて、咲耶子の駒に近よった。

「まだ、ごんじありませんか。これこそ、お頭が、まえまえからねらっていた武田家の小件、伊那丸です」

「おだまりなさい。とりこにしても身分のある敵なら、礼儀をつくすのが武門のならいです。おまえたちは、名もない雑人のくせにして、呼びすてにしたり、縄目にかけるというのは、なんという情けしらず、けっして、ご無礼してはなりません」

ぞ

「へえ」と、一同はその声にちぢみあがった。

「わたしは道になれているから、あのかたを、この馬にお乗せもうすがよい」

と、咲耶子は、ひらりとおりて伊那丸の縄をといた。

まもなくけわしいのぼりにかかって、ややしばらくいくと、一の洞門があった。つづいて二の洞門をくぐると天然の洞窟にすばらしい巨材をしくみ、綺羅をつくした山大名の殿堂があった。

この時代の野武士の勢力はあなどりがたいものだった。徳川北条などという名だたる弓とりでさえも、その勢力範囲へ手をつけることができないばかりか、戦時でも、野武士の区域といえ、まわり道をしたくらい。またそれを敵とした日には、とうてい天下の覇をあらそう大業などは、はかどりっこないのである。

ここの富士浅間の山大名はなにかというに、鎌倉時代からこの裾野一円にばっこしている郷士のすえで根来小角というものである。

つれこまれた伊那丸は、やがて、首領の小角の前へた。獣蝟の燭が、まばゆいばかりかがやいている大広間は、あたかも、部将の城内へのぞんだような心地がする。

根来小角は、野武士とはいえ、さすがにりっぱな男だった。多くの配下を左右にしたがえて、上段にかまえていたが、そこへきた姿をみると座をすべって、みずから上座にすえ、ぴったり両手をついて臣下にひとしい礼をしたのは、伊那丸もややいがいなようすであった。

「お目どおりいたすものは、根来小角ともうすものです。今日こんにちは雑人ぞうじんどもが、礼れいをわきまえぬ無作法ぶさほうをいたしましたとやら、ひらにごかんべんをねがいまする」

はて？ 残虐ざんぎやくと利慾りよくよりなにも知らぬ野盗やとうの頭かしらが、なんのつもりで、こうていちようにするのかと、伊那丸は心ひそかにゆだんをしない。

「また、武田たけだの若君わかしゅともあるおんかたが、拙者せつしゃの館やかたへおいでくださったのは天のおひきあわせ。なにとぞ幾年でもご滞留たいりゅうをねがいまする。ところでこのたびは、織田徳川おだとくがわ両將軍りやうげんのため、ご一門いっもんのご最期さいし、小角せきかくふかくおさつし申しあげます」
なにをいっても、伊那丸は黙然もくねんと、威いをみださずすわっていた。ただこころの奥底おくそこまで見とおすような、つぶらな瞳ひとみだけがはたらいていた。

「つきましては、小角せきかくは微力ゐりきですが、三万さんまんにの野武士のやぶしと、裾野すそのから駿遠甲相すんえんこう四カ国よっかこくの山獵師やまりやうしは、わたくしの指さしひとつで、いつでも目のまえに勢せいぞろいさせてごらんにいれます。そのうえ若君わかしゅが、御大将おんたいしやうとおなりあそばして、富士ヶ根ふじねおろしに武田たけだの旗はたあげをなされたら、たちまち諸国しよこくからこぞつてお味方あじなに馳はせさんじてくることは火ひをみるよりあきらかです」
「おまちなさい」と伊那丸いなまるはじめて口くちをひらいた。

「ではそちはわしに名のりをあげさせて、軍勢ぐんせいをもよおそうという望のぞみか」

「おさつしのとおりでござります。拙者せつしゃには武力ぶりきはあります。が名なはありませぬ。それゆえ、今日こんにちまで髀肉ひにくの歎たんをもっておりましたが、若君わかしゅのみ旗はたさえおかしくださるならば、織田おだや徳川とくがわは鎧袖がいしゆうの一触いっしょくです。たちまち蹴散けちちらしてごむねんをは

らします所存しよせん」

「だまれ小角せきかく。わしは年こそおさないが、信玄しんげんの血ちをうけた武神ぶじんの孫まごじゃ。そちのような、野盗のぬすびとの上かみにはたたぬ。下郎げろうの力をかりて旗上げはせぬ」

「なんじゃ！」と小角せきかくのこえはガラリとかわった。

じぶんの野心おんしんを見ぬかれた腹立はらだちちと、落人おちひとの一少年いちせうねんにピシリとはねつけられた不快ふかいさに、満面まんめんに朱しゆをそそいだ。

「こりや伊那丸いなまる、よく申したな。もう汝なんじの名なをかせとはたのまぬわ、その代りその体ていを売うってやる！ 織田家おだけへわたしして莫大ばくだいな恩賞おんしょうにしたほうが早手はやてまわした。兵太ひょうたツ、この餓鬼がき、ふんじばつて風穴かざあなへほうりこんでしまえ」

「へいッ」四、五人たつて、たちまち伊那丸いなまるをしばりあげた。かれはもう観念かんねんの目めをふさいでいた。

「歩ひけッ」

と兵太ひょうたは繩尻なわじりをとつて、まっくらな間道かんどうを引ひつ立てていった。そして地獄じごくの口くちのような岩穴いわあなのなかへポーンとほうりこむと、鉄柵てつさくの錠じやうをガツキりおろしてたちさった。

うしろ手にしばられているので、よろよろとこころげこんだ伊那丸いなまるは、しばらく顔かほもあげずに倒たふれていた。ザザーツと山砂やまぢりをつつんだ旋風せんふうが、たえず暗澹あんたんと吹きめぐっている風穴かざあなのなかでは、一しゅんのまも目を開あいていられないのだ。そればかりか、夜の更ふけるほど風かぜのつめたさがまして八寒地獄はつかんじごくのそこへ落ちたごとく総身そうみがちぢみあがってくる。

「ああ忍剣にんけんはどうした…：忍剣にんけんはもうあの湖水こすいの藻もくずとなつてしまったのか」

いまとなつて、しみじみと思おもいだされてくるのであった。

「忍剣、忍剣。おまえさえいれば、こんな野武士のはずかしめを受けるのではないのに……」

唇をかんで、転々と身もだえしていると、なにか、とん、とん、とん……とからだの下の地面がなつてくる心地がしたので、

「はてな？ ……」と身をおこすと、そのはずみに、目のまえの、二尺四方ばかりな一枚石が、ポンとはねあがって、だれやら、覆面をした者の頭が、ぬツとその下からあらわれた。

黒衣の義人

—

山大名の根来小角の殿堂は、七つの洞窟からできている。

その七つの洞穴から洞穴は、縦に横に、上に下に、自由自在の間道がついているが、それは小角ひとりもっている鍵でなければ開かないようになっていた。

また、そこには、まえにもいったとおり、二つの洞門があつて、配下の野武士が五人ずつ交代で、篝火をたきながら夜どおし見はりをしている厳重さである。

今宵もこの洞門のまえには、赤い焰と人影がみえて、夜ふけのたいくつしのぎに、何か高声で話していると、そのさいちゆうに、ひとりがワツとおどろいて飛びのいた。

「なんだッ」

と一同が総立ちになったとき、洞門のなかからばらばらと

とびだしてきたのは七、八ひきの猿であった。

「なんだ猿じゃないか、臆病者め」

「どうして檻からでてきたのだらう。咲耶子さまのかわいがっている飼猿だ。それ、つかまえろッ」

と八ぼうへちつてゆく猿を追いかけていったあと、留守になった二の洞門の入口から脱兎のごとくとびだした影！ ひとり黒装束の覆面、そのかげにそっていたのは、伊那丸にそういかなかった。

「何者だッ」

と一の洞門では、早くもその足音をさとつて、ひとりが大手をひろげてどなると、鉄球のように飛んでいった伊那丸が、どんと当身の一拳をついた。

「うぬ！」と風をきつて鳴った山刀のひかり。

よろりと泳いだ影は、伊那丸のちいさな影から、あざやかに投げられて、断崖の闇へのまれた。

「曲者だ！ みんな、でろ」

覆面の黒装束へも襲いかかった。姿はほっそりとしているのに、手練はあざやかだった。よりつく者を投げすて、すばやく逃げだすのを、横あいからまた飛びついていったひとりがむんずと組みついて、その覆面の顔をまぢかく見て、

「ああ、あなたは」と、愕然とさげんだ。

顔を見られたと知った覆面は、おどろく男を突ッばなした。よろりと身をそるところへ、黒装束の腰からさツとほとばしった氷の刃！ 男の肩からけさがけに斬りさげた。——ワツという絶叫とともに闇にたちまよった血けむりの血なまぐささ。

「伊那丸さま」

黒装束は、手まねきするやいなや、岩つばめのようなはやさで、たちまち、そこからかけおりにいってしまった。

二

下界をにらみつけるような大きな月が、人ひとり、鳥一羽の影さえない、裾野のそらの一角に、夜の静寂をまもっている。

その渺としてひろい平野の一本杉に、一ぴきの白駒がつながれていた。馬は、さびしさも知らずに、月光をあびながら、のんきに青すすきを食べているのだ。

いっさんにかけてきた黒装束は、白馬のそばへくるとびつたり足をとめて、

「伊那丸さま、もうここまでくれば大じょうぶです」

と、あとからつづいてきた影へ手をあげた。

「ありがとうございます」

伊那丸は、ほつとして夢心地をさましたとき、ふしぎな黒装束の義人のすがたを、はじめて落ちついてながめたのであるが、その人は月の光をしょっているの、顔はよくわからなかった。

「もう大じょうぶです。これからこの野馬にのって、明方までに富士川の下までお送りしてあげますから、あれから駿府へでて、いずこへなり、身をおかくしなさいまし、ここに関所札もありますから……」

と、黒装束のさしだした手形をみて、伊那丸はいよいよふ

しぎにたえられない。

「そして、そなたはいったいたれびとでござりますぞ」

「だれであろうと、そんなことはないではありませんか。さ、早く、これへ」

と白駒の手綱をひきだしたとき、はじめて月に照らされた覆面のまなざしを見た伊那丸は、思わずおおきなこえで、

「や！ そなたはさっきの女子、咲耶子というのではないか」

「おわかりになりましたか……」 涼しい眸にちらと笑みを見せて、それへ両手をつきながら、

「おゆるしくださいませ、父の無礼は、どうぞわたしにかえてごかんべんあそばしませ……」と、わびた。

「では、そなたは小角の娘でしたか」

「そうです、父のしかたはまちがっております。そのおわびに鍵をそつと持ちだしておたすけもうしたのです。伊那丸さま、あなたのおうわさは私も前から聞いておりました、どうぞお身を大切に、かがやかしい生涯をおつくりくださいませ」

「忘れませぬ……」

伊那丸は、神のような美少女の至情にうたれて、思わずホロリとあつい涙を袖のうちにかくした。

と、咲耶子はいきなり立ちあがった。

「あ——いけない」と顔いろを変えてさげんだ。

「なんです？」

と、伊那丸もその眸のむいたほうをみると、藍いろの月の空へ、ひとすじの細い火が、ツツツと走りあがってやがて消えた。

「あの火は、この裾野すそ一帯の、森や河原にいる野伏のぶせりの力者りきしやに、あいずをする知らせです。父は、あなたの逃げたのをもう知ったとみえます。さ、早く、この馬に。……抜けみちは私がよく知っていますから、早くさえあれば、しんぱいはありません。」

とせき立てて、伊那丸の乗ったあとから、じぶんもひらりと前にのって、手ぎわよく、手綱たづなをくりだした。

その時、すでにうしろのほうからは、百足むかでのようにつらなつた松明たいまつが、山峡やまあいの闇やみから月をいぶして、こなたにむかってくるのが見えた。

「おお、もう近い！」

咲耶子さくやこは、ピシリツと馬うまに一鞭ひとむちあてた。一声たかくいなないた駒こまは、征矢そやよりもはやく、すすきの波をきつて、まっしぐらに、南のほうへさしてとぶ——

三

それよりも前の、夕陽ゆゆうひのうすれかけた湖みづうみの波をザツザときつて、陸おかへさし

て泳いでくるものがあつた。湖水こすいの主ぬしの山椒さんしょうの魚うおかとみれば、水をきつてはいあがったのはひとりの若僧わかそう——かの忍剣にんけんなのであつた。

どっかりと、岸辺きしへへからだを落とすと、忍剣はすぐ衣ころもをさいて、ひだりの肘ひじの矢傷やきずをギリギリ巻きしめた。そして身みをはねかえすが否いなや、白旗しろはたの宮みやへかけつけてみると、伊那丸いなまるのすがたはみえないで、ただじぶんの鉄杖てつじょうだけが立てかけて

のこっていた。

「若さま——、伊那丸さまア——」

二ど三ど、こえ高らかに呼んでみたが、さびしい木魂こだまがえってくるばかりである。それらしい人の影もあたりに見えてはこない。

「さては」と忍剣は、心をくらくした。湖水こすいのなかほどへでたとき、ふいに矢を乱射らんしゃしたやつやつのしわざにちがいない。小さなくりぬき舟ふねであつたため、矢やをかしたのはずみに、くつがえってしまったので、石櫃いしびつはかんぜんに湖心こしんのそこへ沈められ、伊那丸の身を何者かなにものかにうばわれては、あの宝物ほうもつも、永劫えいごうにこの湖から世にだす時節ときふせもなくなるわけだ。

「ともあれ、こうしてはおられない、命いのちにかけても、おゆくえをさがさねばならぬ」

鉄杖てつじょうをひツかかえた忍剣は、八ぼうへ血眼ちまなこをくばりながら、湖水こすいの岸、あなたこなたの森、くまなくたずね歩いたはてに、どこへ抜けるかわからないで、とある松並木まつなみぎをとおつてくと、いた！ 一、二、三町ばかり先を、白い影がとぼとぼとゆく。

「オーイ」

と手をあげながらかけだしていくと、半町ほどのところで、フィとその影を見うしなってしまうた。

「はてな、ここは一すじ道だのに……」

小首こくびをひねって見まわしていると、なんのこと、いつかまた、三町も先にその影が歩いていく。

「こりやおかしい。伊那丸いなまるさまではないようだが、あやしいやつだ。一つつかまえてただしてくれよう」

と宙ちゆうをとんで追いかけていくうちに、また先の者が見えな

くなる。足をとめるとまた見える。さすがの忍剣も少しくたびれて、どっかりと、道の木の根に腰かけて汗をふいた。

「どうもみよなやつだ。人間の足ではないような早さだ。それとも、あまり伊那丸さまのすがたを血眼になつてさがしているの、気のせいかな」

忍剣がひとりでつぶやいていると、その鼻ツ先へ、スーッと、うすむらさき色の煙がながれてきた。

「おや……」ヒョイとふりあおいでみると、すぐじぶんのうしろに、まっ白な衣服をつけた男がたばこをくゆらしながら、忍剣の顔をみてニタリと笑った。

「こいつだ」

と見て、忍剣もグツとにらみつけた。男は背に笈をせおっている六部である。ばけものではないにちがいない。にらまされても落ちついたもの、スパリスパリと、二、三ぶくすつて、ポンと、立木の横で、きせるをはたくと、あいさつもせず、またすたすたとでかけるようすだ。

「さて、六部まで」

あわてて立ちあがったが、もうかれの姿は、あたりにも先にも見えない。忍剣はあきれた。世のなかには、奇怪なやつがいればいるものと、ぼうぜんとしてしまった。

疑心暗鬼とでもいおうか、場合がばあいなので、忍剣には、どうも今の六部の挙動があやしく思えてならない。なんとなく伊那丸の身を闇につつんだのも、きやつの仕事ではないかと思うと、いま目のさきにいたのを逃がしたのがざんねんになつてきた。

「あやしい六部だ。よし、どんな早足をもつていようがこの

忍剣のこんきで、ひつとらえずにはおかぬぞ」
とかれはまたも、いっさんにかけてだした。

月の裾野

—

並木がとぎれたところからは、一望千里の裾野が見わたされる。

忍剣は、この方角とにらんだ道を、一念こめて、さがしていくと、やがて、ゆくてにあたって、一宇の六角堂が目についた。

「おお、あれはいつの年か、このへんで戦いのあつたとき焼けた文殊閣にちがいない。もしかすると、六部の巢も、あれかもしれないぞ……」

と勇みたつて近づいていくと、はたして、くずれかけた文殊閣の石段のうえに、白衣の六部が、月でもながめているのか、ゆうちような顔をして腰かけている。

「こりや六部、あれほど呼んだのになぜ待たないのだ」

忍剣はこんどこそ逃がさぬぞという気がまえで、その前につ立った。

「なにかご用でござるか」

と、かれはそらうそぶいていった。

「おおさ、問うところがあればこそ呼んだのだ。年ごろ十四、五に渡らせられる若君を見失ったのだ。知っていたら教えて

くれ」

「知らない、ほかで聞け」

六部の答えは、まるで忍剣を愚弄している。

「だまれッ、この裾野の夜ふけに、問いたずねる人間がいるか。そういう汝の口ぶりがあやしい、正直にもうさぬと、これだぞッ」

ぬッと、鉄杖を鼻さきへ突きつけると、六部はかるくその先をつかんで、腰の下へしいてしまった。

「これッ、なんとするのだ」

忍剣は、渾力をしぼって、それを引きぬこうとこころみだが、ぬけるどころか、大山にのしかかられたごとく一寸のゆるぎもしない。しかも、六部はへいきな顔で、両膝にほおづえをついて笑っている。

「むッ……」

と忍剣は、総身の力をふりしぼった。力にかけては、怪童といわれ、恵林寺のおおきな庭石をかるがるとさして山門の階段をのぼったじぶんである。なにをッ、なにをッと、引けどねじれど、鉄杖のほうが、 magari そうで、六部のからだはいぜんとしている。すると、ふいに、六部が腰をうかした。

「あッ——」

思わずうしろへよろけた忍剣は、かッとなって、その鉄杖をふりかぶるが早い、磐石もみじんになれと打ちこんだが、六部の姿はひらりとかわって、空をうった鉄杖のさきが、はつしと、石の粉をとばした。

「無念ッ」とかえす力で横ざまにはらい上げた鉄杖を、ふたたびぐりぬけた六部は、杖にしこんである無反りの冷刀を

ぬく手も見せず、ピカリと片手にひらめかせて、

「若僧、雲水」と鏑をふくんだ声でよんだ。

「なにッ」と持ちなおした鉄杖を、まっこうにふりかぶった忍剣は、怒気にもえた目をみひらいて、ジリジリと相手のすきをねらいつめる。

六部はといえば、片手にのばした一刀を、肩から切先まで水平にかまえて、忍剣の胸もとへと、うす気味のわるい死のかけを、ひら、ひら——ときおりひらめかせていく——。たがいの息と息は、その一しゅん、水のようにひそやかであった。しかも、総身の毛穴からもえたつ熱気は、焰となって、いまにも、そうほうの切先から火の輪をえがきそうに見える……。

突として、風を切っておどった銀蛇は、忍剣の真眉間へとんだ。

「おうッ」と、さけびかえした忍剣は、それを鉄杖ではらったが、空をうってのめったとたん、背をのぞんで、六部はまたさつと斬りおろしてきた。

そのはやさ、かわす間もあらばこそ、忍剣も、ぽんとうしろへとびのくより策がなかった。そして、踏みとどまるが早いか、ふたたび鉄杖を横がまえに持つと、

「待て」と六部の声がかかった。

「怯んだかッ」たたき返すように忍剣がいった。

「いやおくれはとらぬ。しかしさまの鉄杖はめずらしい。いったいどの何者だか聞かしてくれ」

「あてなしの旅をつづける雲水の忍剣というものだ。ところで、なんじこそただの六部ではあるまい」

「あやしいことはさらさない。ありふれた木遁の隠形でちょっときさまをからかってみたのだ」

「ふらちなやつだ。さてはきさまは、どこかの大名の手先になって、諸国をうかがう、間諜だな」

「ばかをいえ。しのびに長けているからといって、謀者とはかぎるまい。このとおりの六部を世わたりにする木隠龍太郎という者だ。こう名のつたところできくが、さつききさまのたずねた若君とは何者だ」

「その口にいっわりがないようすだから聞かしてやる。じつは、さる高貴なおん方のお供をしている」

「そうか。では武田の御曹子だな……」

「や、どうして、汝はそれを知っているのだ？」

「恵林寺の焰のなかからのがれたときいて、とおくは、飛騨信濃の山中から、この富士の裾野一帯まで、足にかけてさがしぬいていたのだ。きさまの口うらで、もうおいでになるところは拙者の目につつてきた。このさきは、伊那丸さまはおよばずながら、この六部がお附添いするから、きさまは、安心してどこへでも落ちていったがよかろう」

忍剣はおどろいた。まったくこの六部のいうこと、なすこととは、いちいちふにおちない。のみならず、じぶんをしりぞけて、伊那丸をさがしたそうとする野心もあるらしい。

「たわけたことをもうせ。伊那丸さまはこの忍剣が命にかけて、お護りいたしているのだわ」

「そのお傅役が、さらわれたのも知らずにいるとは笑止千万じゃないか。御曹子はまえから拙者がさがしていたおん方だ、もうきさまに用はない」

「いわせておけば無礼なことを」

「それほどもうすなら、きさまはきさままでかかってにさがせ。どれ、拙者は、これから明け方までに、おゆくえをつきとめて、思うところへお供をしよう」

「この痴れものが」

と、忍剣は真から腹立たしくなって、ふたたび鉄杖をにぎりしめたとき、はるか裾野のあなたに、ただならぬ光を見つけた。

六部の木隠龍太郎も見つけた。

ふたりはじつとひとみをすえて、しばらく黙然と立ちすくんでしまった。

それは蛇形の陣のごとく、うねうねと、裾野のあなたをたからぬいめぐってくる一道の火影である。多くの松明が右往左往するさまにそうもない。

「あれだ！」いうがはいか龍太郎は、一足とびに、石段から姿をおどらした。

「うぬ。汝の手に若君をとられてたまるか」

忍剣も、韋駄天ばしり、この一足が、必死のあらそいとはなった。

二

ただ見る——白い月の裾野を、銀の奔馬にむちをあげて、ひとつの鞍にのつた少年の貴公子と、覆面の美少女は、地上をながるる星とも見え、玉兎が波をけつていくかのようにも見える。たちまち、そらの月影が、黒雲のうちにさえぎられ

ると、裾野もいちめんの如法闇夜、ただ、ザワザワと鳴るすすきの風に、つめたい雨気さえふくんできた。

「あ、折りがわるい——」

と、駒をとめて、空をあおいだ咲耶子の声は、うらめしげであった。

「おお、雲は切れめなくいちめんになってきた。咲耶どの、もう駒をはやめてはあぶない、わしはここでおりますから、あなたは岩殿へお帰りなさい」

「いいえ、まだ富士川べりまでは、あいだがあります」

「いや、そなたが帰ってから、小角にとがめられるであろうと思うと、わしは胸がいたくなります。さ、わしをここでよろしてください」

「伊那丸さま、こんなはてしも見えぬ裾野のなかで、馬をお捨てあそばして、どうなりますものか」

いい争っているすきに、十間とは離れない窪地の下から、ぱつと目を射てきた松明のあかり。

「いたッ」

「逃がすな」と、八ぼうからの声である。

「あッ、大へん」

と咲耶子はピシリッと駒をうった。ザザーッと道もえらまらずに数十間、一気にかけさせたのもつかの間であった。たのむ馬が、窪地に落ちて脚を折ったはずみに、ふたりはいきおいく、草むらのなかへ投げ落とされた。

「それッ、落ちた。そこだッ」

むらがりよってきた松明の赤い焰、山刀の光、槍の穂さき。

ふたりのすがたは、たちまちそのかこみのなかに照らしだされた。

「もう、これまで」

と小太刀をぬいた伊那丸は、その荒武者のまっただなかへ、運にまかせて、斬りこんだ。

咲耶子も、覆面なのを幸いに一刀をもって、伊那丸の身をまろうとしたが、さえぎる槍や大刀に畳みかけられ、はなればなれに斬りむすぶ。

「めんどうくさい。武田の童も、手引きしたやつも、片ッぱしから首にしてしまえ」

大勢のなかから、こうどなった者は、咲耶子と知ってか知らぬのか、山大名の根来小角であった。

時に、そのすさまじいつるぎの渦へ、突として、横合いからことばもかけずに、無反りの大刀をおがみに持って、飛びこんできた人影がある。六部の木隠龍太郎であった。一閃かならず一人を斬り、一気かならず一夫を割る、手練の腕は、超人的なものだった。

それとみて、愕然とした根来小角は、みずから大刀をとって、奮いたった。

と同時に、一足おくれで、かけつけた忍剣の鉄杖も、風を呼んでうなりはじめた。

空はいよいよ暗かった。降るのはこまかい血の雨である。たばしる剣の稲妻にまきこまれた、可憐な咲耶子の身はどうなるであろう。——そして、武田伊那丸の運命は、はたしてだれの手ににぎられるのか？

雲の明るさをあおげば、夜はたしかに明けている。しかし、加賀見忍剣の身のまわりだけは、常闇だった。かれは、とんでもない奈落のそこに落ちて、土龍のようにもがいていた。「伊那丸さまはどうしたであろう。あの武士の群れにとりかえされたか、あるいは、六部の木隠というやつにさらわれてしまったか？——そのどっちにしても大へんだ。アア、こうしちやいられない、グズグズしている場合じゃない……」

忍剣は、どんな危地に立っても、けっしてうろたえるような男ではない。ただ、伊那丸の身をあんじてあせるのだった。地の理にくらいため、乱闘のさいちゆうに、足を踏みすべらしたのが、かえすがえすもかれの失敗であった。

ところが、そこは裾野におおい断層のさけ目であつて、両面とも、切つてそいだかのごとき岩と岩とにはさまれている。数丈の地底なので、さすがの忍剣も、精根をつからして空の明るみをにらんでいた。

「む！ 根気だ。こんなことにくじけてなるものか」

とふたたび袖をまくりなおした。かれは鉄杖を背なかへくくりつけて、護身の短剣をぬいた。そして、岩の面へむかつて、一段一段、じぶんの足がかりを、掘りはじめたのである。すると、なにかやわらかなものが、忍剣の頬をなでては

なれ、なでてははなれするので、かれはうるさそうにそれを手でつかんだ時、はじめて赤い絹の細帯であったことを知った。

「おや？ ……」

と、あおむいて見ると、ちゅうとから藤づるかなにかで結びたしてある一筋が、たしかに、上からじぶんを目がけてさがっている。

「ありがたい！」

と力いっぱい引いてころみだが、切れそうもないので、それをたよりに、するするとよじのぼっていった。

ほんと、大地へとびあがったときのうれしさ。

忍剣はこおどりして見まわすと、そこに、思いがけない美少女が笑みをふくんで立っている。少女の足もとには、謎のような黒装束の上下がぬぎ捨てられてあつた。

「や、あなたは……」

と忍剣はいぶかしそうに目をみはった。その間いにおうじて、少女は、

「わたくしはこの裾野の山大名、根来小角の娘で、咲耶子というものでございます」

と、はっきりしたこわ音でこたえた。

「そのあなたが、どうしてわたしをたすけてくださったのじや」

「ご僧は、伊那丸さまのお供のかたでございませうが」

「そうです。若君のお身はどうなったか、そののみがしんばいです。ごぞんじなら、教えていただきたい」

「伊那丸さまは、ご僧と一しよに斬りこんできた六部のひと

が、おそろしい早技はやわざでどこともなく連れて行ってしまいました。あの六部が、善人か悪人か、わたくしにもわからないのです。それをあなたにお知らせするために夜の明けのを待っていたのです」

「えッ、ではやっぱりあの六部にやらされたか。して六部めは、どっちへいったか、方角だけでも、ごぞんじありませんか」

「わたくしはそのまえに、富士川ふじがわをくだって、東海道から京へでる関所せきしよ札ふだをあけておきましたが、その道へ向かったかどうかわかりませぬ」

「しまった……？」

と、忍剣しのぎは吐息といきをもらした。と、咲耶子さくやこは、にわかにな色をかえてせきだした。

「あれ、父の手下どもが、わたくしをたずねてむこうからくるようです。すこしも早くここをお立ちのきあそばしませ。わたくしは山へ帰りますが、かげながら、伊那丸いなまるさまのお行く末をいのつております」

「ではお別れといたそう。拙僧せつそうとて、安閑あんかんとしておられる身ではありません」

ふたたび鉄杖てつじょうを手にした忍剣にんげんは、別れをつけて、恨みおおき裾野すそのをあとに、いずこともなく草がくれに立ち去った。

——咲耶子さくやこも、しばしのあいだは、そこに立ってうしろ姿すがたを見おくっていた。

二

浜松はままつの城下は、海道一の名将、徳川家康とくがわいえやすのいる都会である。

その浜松は、ここ七日のあいだは、男山八幡おとやまはちまんの祭なので、夜ごと町は、おびただしいにぎわいであった。

「どうですな、鎧屋よろいさん、まだ売れませんか」

その八幡はちまんの玉垣たまがきの前へならんでいた夜店の燈籠とうろう売りがとなりの者へはなしかけた。

「売れませんよ。今日で六日もだしてはいますがだめです」

と答えたのは、十八、九の若者で、たった一組の鎧よろいをあき箱の上にかざり、じぶんのそばには、一本の朱柄あかえの槍やりを立てかけて、ぼんやりとそこに腰かけている。

「おまえさんの燈籠とうろうのほうは、女子供が相手だから、さだめし毎日たくさんの売上げがありましたろう」

「どうしてどうして、あの鬼玄蕃おにげんぱというご城内の悪侍わるざむらいのため、今年はからきし、商あきないがありませんでした」

「ゆうべもわたしがかえったあとで、だれかが、あいつらに斬られたということですが、ほんとでしようかね」

「そんなことは珍しいことじゃありませんよ。店をメチャメチャにふみつぶされたり、片輪かたわにされたかわいそうな人が、何人あるか知れやしません。まったく弱いものは生きていられない世の中ですね」

といってる口のそばから、ワーツという声に向こうからあがって、いままで歡樂かんらくの世界そのままであったにぎやかな町の灯あかりが、バタバタ消えてきた。

燈籠売りははねあがつてあおくなつた。

「大へん大へん、鎧屋さん、はやく逃げたがいいぜ、鬼玄蕃がきやがったにちがいない」

にわか雨でもきたように、あたりの商人たちも、ともどもあわてさわいだが、かの若者だけは、腰も立てずに悠長な顔をしていた。

案のじよう、そこへ旋風のようにあばれまわってきた四、五人の侍がある。なかでも一きわすぐれた強そうな星川玄蕃は、つかつかと鎧屋のそばへよつてきた。泥酔したほかの侍たちも、こいつはいいなぶりものだという顔をして、そこをとりまく。

「やい、町人。この槍はいくらだ」

と玄蕃はいきなり若者のそばにあつた朱柄の槍をつかんだ。

「それは売り物じゃありません」

にべもなく、ひつたくつて槍をおきかえたかれは、あいかわらず、無神経にすましこんでいた。

「けしからんやつだ、売り物でないものを、なぜ店へさらしておく。こいつ、客をつる山師だな」

「槍はわしの持物です。どこへいくんだつて、この槍を手からはなさぬ性分なんだからしかたがない」

「ではこの鎧が売りものなのか。黒皮胴、萌黄緘、なかなかりっぱなものだが、いったいいくらで売なのだ」

「それも売りたい品ではないが、お母が病気なので、薬代にこまるからやむなく手ばなすんです。酔ッぱらつたみなさまがさわいでいると、せつかくのお客も逃げてしまいます。早くあつちへいってください」

「無愛想なやつだ。買うからねだんを聞いているのだ」

「金子五十枚、びた一文もまかりません。はい」

「たかい、銅銭五十枚にいたせ、買ってくれる」

「いけません、まっぴらです」

「ふらちなやつだ。だれがこんなボロ鎧に、金五十枚をだすやつがあるか、バカめッ」

玄蕃が土足をあげて蹴つたので、鎧はガラガラとくずれて土まみれになった。こんならんぼうは、泰平の世には、めつたに見られないが、あけくれ血や白刃になれた戦国武士の悪い者のうちには、町人百姓を蛆虫とも思わないで、ややとすると、傲慢な武力をもつてかれらへのぞんでゆくものが多かった。

「山師めッ」

ほかの武士どもも、口を合わせてのしつた上に鎧を踏みちらして、どつと笑いながら立ちさろうとした時、若者の肩がピリツとあがつた。——と思うまに、朱柄の槍は、いつか、その小脇にひツかかえられていた。

「待てッ」

「なにッ」とふりかえりざま、刀の柄へ手をかけた五人の、おそろしい眼つき。

すわと、弥次馬は、潮のごとくたちさわいだ。——と、その群集のなかから、まじろぎもせず、朱柄の槍先をみつめていた白衣の六部と、ひとりの貴公子ふうの少年とがあつた。

玉垣を照らしている春日燈籠の灯影によく見ると、それこそ、裾野の危地を斬りやぶつて、行方をくりました木隠龍太郎と、武田伊那丸のふたりであつた。

六部の龍太郎は、はたして、なんの目的で伊那丸をうばいとつてきたかわからないが、ここに立ったふたりのようすから察すると、いつか伊那丸もかれを了解しているし、龍太郎も主君のごとく敬っているようだ。しかしそれにしても武田の残党を根だやしにするつもりである敵の本城地に、かく明からさまに姿をあらわしているのは、なんとという大胆な行動であろう。今にもあれ、徳川家の目付役か、酒井黒具足組の目にでもふれたらば最後、ふたりの身の一大事となりはしまいか？

それはとにかく、いつぼう、鎧売りの若者は、はやくも、槍を、穂短にしごいて、ジリジリと一寸にじりに五人の武士へ迫ってゆく――

「小僧ツ、気がちがったか」玄蕃はののしった。

「気は狂っていない！ 町人のなかにも男はいる、天にかわつて、汝らをこらしてやるのだ」

「なまいきなことをほざく下郎だ、汝らがこのご城下で安穩にくらしていられるのは、みなわれわれが敵国と戦っている賜物だぞ。罰あたりめ」

「町人どもへよい見せしめ、そのほそ首をぶツ飛ばしてくれよう」

「うごくくなツ」

鬼玄蕃をはじめ、一同の刀が、若者の手もとへ、ものすさまじく斬りこんだ。

とたんに、朱柄の槍は、一本の火柱のごとく、さツと五本の乱刀を天宙からたたきつけた。

わツと、あいての手もとが乱れたすきに、若者はまた一声「えいッ」とわめいて、ひとりのむなさきを田楽刺しにつきぬくがはやいか、すばやく穂先をくり引いて、ふたたびつぎの相手をねらっている。

その早技も、非凡であったが、よりおどろくべきものは、かれのこい眉毛のかげから、らんらんたる底光をはなつてくる二つの眸である。それは、槍の穂先よりするどい光をもっている。

「やりおつたな、小僧ツ。もうゆるさん」

玄蕃は怒りにもえ、金剛力士のごとく、太刀をふりかぶつて、槍の真正面に立った。かれのがんじょうな五体は、さすが戦場のちまたで鍛えあげたほどだけあつて、小柄な若者を見おろして、ただ一撃といういきおいをしめた。それさえあるのに、あと三人の武士も、めいめいきっさきをむけて、ふくろづめに、一寸二寸と、若者の命に、くいよってゆくのだ。

ああ、あぶない。

「龍太郎――」

と、こなたにいた伊那丸は、息をのんでかれの袖をひいた、そしてなにかささやくと、龍太郎はうなずいて、ひそかに、例の仕込杖の戒刀をにぎりしめた。いざといわば、一気にお

どりこんで、木隠一流の冴えを見せんとするらしい。

ヤツという裂声があたりの空気をつんざいた。鬼玄蕃星川が斬りこんだのだ。朱い槍がサツとさがる——玄蕃はふみこんで、二の太刀をかぶったが、そのとき、流星のごとくとんだ槍の穂が、ビュツと、鬼玄蕃の喉笛から血玉をとばした。「わッ——」と弓なりにそってたおれたと見るや、のこる三人の侍は、必死に若者の左右からわめきかかる、疾風か、稲妻か、刃か、そこはただものすごい黒旋風となった。

「えいッ、木ツ葉どもめ！」

若者は、二、三ど、朱柄の槍をふりまわしたが、トンと石突きをついたはずみに、五尺の体をヒラリおどろすが早いか、社の玉垣を、飛鳥のごとく飛びこえたまま、あなたの闇へ消えてしまった。

バラバラと武士もどこかへかけだした。あとは血なまぐさい風に、消えのこった灯がまたたいているばかり。

「アア、気もちのよい男」

と伊那丸は、思わずつぶやいた。

「拙者も、めずらしい槍の玄妙をみました」

龍太郎は助太刀にでようとおもうまに、みごとに勝負をつけてしまった若者の早技に、舌をまいて感嘆していた。そして、ふたりはいつかそこを歩みだして、浜松城に近い濠端を、しずかに歩いていたのである。

すると、大手門の橋から、たちまち空をこがすばかりの焰の一行が疾走してきた。龍太郎は見るより舌うちして、伊那丸とともに、濠端の柳のかげに身をひそませていると、まもなく、松明を持った黒具足の武士が十四、五人、目の前をは

しり抜けたが、さいごのひとり、

「待て、あやしいやつがいた」とさげびだした。

「なに？ いたか」

バラバラと引きかえしてきた人数は、いやおうなく、ふたりのまわりをとり巻いてしまった。

「ちがった、こいつらではない」

と一目見た一同は、ふり捨ててふたたびゆきすぎかけたが、そのとき、

「ややッ、伊那丸、武田伊那丸」と、だれかいった者があ

四

朱柄の槍をもった曲者が、城内の武士をふたりまで突きころしたという知らせに、さては、敵国の間者ではないかと、すぐ討手にむかってきたのは、酒井黒具足組の人々であった。運わるく、そのなかに、伊那丸の容貌を見おぼえていた者があった。かれらは、おもわぬ大獲物に、武者ぶるいを禁じえない。たちまちドキドキする陣刀は、伊那丸と龍太郎のまわりに垣をつくって、身うごきすれば、五体は蜂の巣だぞ——といわんばかりなけんまくである。

「ちがいない。まさしくこの者は、武田伊那丸だ」

「お城ちかくをうろついているとは、不敵なやつ。尋常にせねば縄をうつぞ、甲斐源氏の御曹司、縄目を、恥とおもわば、神妙にあるきたまえ——」

侍 頭の坂部十郎太が、おごそかにいいわたした。

伊那丸は、ちりほども臆したさまは見せなかつた。りんとはった目をみひらいて、周囲のものをみつめていたが、ちらと、龍太郎の顔を見ると——かれも眸をむけてきた。以心伝心、ふたりの目と目は、瞬間にすべてを語りあつてしまふ。

「いかにも——」龍太郎はそこでしずかに答えた。

「ここにおわすおん方は、おさつしのとおり、伊那丸君であります。天下の武将のなかでも徳川どのは仁君とうけたまわり、おん情けの袖にすがつて、若君のご一身を安全にいたしたいお願いのためまいりました」

「とにかく、きびしいお尋ね人じゃ、おあるきなさい」

「したが、落人のお身の上でこそあれ、無礼のあるときは、この龍太郎が承知いたさぬ、そう思しめして、ご案内なさい」

龍太郎は、戒刀の杖に、伊那丸の身をまもり、すすきをあげむく白刃のむれは、長蛇の列のあいだに、ふたりをはさんで、しずしずと、鬼の口にもひとしい、浜松城の大手門のなかへのまれていった。

雷火変

—

本丸とは、城主のすまうところである。築山の松、滝をたえた泉、鶺鴒があそんでいる飛石など、戦のない日は、平和の光がみちあふれている。そこは浜松城のみどりにつつ

まれていた。

伊那丸と龍太郎は、あくる日になって、三の丸、二の丸とおつて、家康のいるここへ呼びだされた。

「勝頼の次男、武田伊那丸の主従とは、おん身たちか」

高座の御簾をあげて、こういつた家康は、ときに、四十の坂をこえたばかりの男ざかり、智謀にとんだ名将のふうはおのずからそなわっている。

「そうです。じぶんが武田伊那丸です」

龍太郎は、かたわらに両手をついたが、伊那丸ははつきりこたえて、端然と、家康の顔をじいともみつめた。——家康も、しかと、こつちをにらむ。

「おう……天目山であいはてた、父の勝頼、また兄の太郎信勝に、さても生写しである……。あの戦のあとで検分した生首に瓜二つじゃ」

「うむ……」

伊那丸の肩は、あやししく波をうった。かれをにらんだ二つの眸からは、こらえきれない熱涙が、ハラハラとはふり落ちてとまらない。

この家康めが、織田と力をあわせ、北条をそそのかして、武田の家をほろぼしたのか、父母や兄や、一族たちをころしたのか——と思うと、くやし涙は、頬をぬらして、骨に徹してくる。眼もらんらんともえるのだった。

「若君、若君……」

と、龍太郎はそつと膝をついて目くばせをしたが、伊那丸は、さらに心情をつつまなかつた。

「おお……」と家康はうなずいて、そしてやさしそうに、

「父の領地は焦土となり、身は天涯の孤児となった伊那丸、さだめし口惜しかりう、もつともである。いずれ、家康もとくと考えおくであろうから、しばらくは、まず落ちついて、体をやすめているがよからう」

家康はなにか一言、近侍にいいつけて、その席を立ってしまった。ふたりはやがて、酒井の家臣、坂部十郎太のうしろにしたがって、二の丸の塗籠造りの一室へあんないされた。伊那丸は、ふたりきりになると、ワツと袂をかねで、泣いてしまった。

「龍太郎、わしは口惜しい……くやしかった」

「ごもつともです、おさつしもうしまする」

とかれもしばらく、伊那丸の手をとって、あおむいていたが、きつと、あらたまつていった。

「さすがにいまだご若年、ごむりではありますが、だいじなときです。お心をしかとあそばさねば、この大望をはたすことはできません」

「そうであった、伊那丸は女々しいやつ……」

と快川和尚が、幼心へうちこんでおいた教えの力が、そのとき、かれの胸に生々とよみがえった。にっこりと笑って、涙をふいた。

「わたくしの考えでは、家康めは、あのするどい目で、若さまのようすから心のそこまで読みぬいてしまったとぞんじまます。なかなか、この龍太郎が考えた策にのるような愚将ではありませんせぬから、必然、お身の上もあやういものと見なければなりません」

「わしもそう思った。それゆえに、よしや、いちじの計略に

せよ、家康などに頭をさげるのがいやであった。龍太郎、その教えどおりにしなかった、わしのわがままはゆるしてくれよ」

果然、ふたりはまえから、家康の身に近よる秘策をいだいて、わざと、この城内へとらわれてきたのらしい。しかし、すでにそれを、家康が見破ってしまったからには、鮫をうたんだため鮫の腹中にはいって、出られなくなったと、おなじ結果におちたものだ。

このうえは、家康がどうであるか、敵のようによつてこの窮地から活路をひらくか、あるいは、浜松城の鬼となるか、武運の分れめを、一挙にきめるよりほかはない。

二

日がくると、膳所の侍が、おびただしい料理や美酒をはこんできて、うやうやしくふたりにすすめた。

「わが君の志でござります。おくつろぎあって、じゅうぶんに、おすごくくださるようにとのおことばです」

「過分です。よしなに、お伝えください」

「それと、城内の掟でござるが、ご所持のもの、ご佩刀などは、おあずかりもうせとのこととござりますが」

「いや、それはことわりです」と龍太郎はきっぱり、

「若君のお刀は伝家の宝刀、ひとの手にふれさせていい品ではありませんせぬ。また、拙者の杖は護仏の法杖、笈のなかは三尊の弥陀です。ご不審ならば、おあらためなさるがよいが、お渡しもうすことは、誓ってあいなりません」

「では……」

と、その威厳いげんにおどろいた家臣たちは、おずおずと笈うしのなかをあらためたが、そのなかには、龍太郎の言明ごんめいしたとおりの、三体のほとけの像ぞうがあるばかりだった。そして、杖つえのあやし点には気づかず、そこそこに、そこからさがってしまった。

「若君、けっして手をおふれなさるな、この分では、これもあやしい」

と、膳部ぜんぶの吸物すいもの椀わんをとって、なかの汁じゅうを、部屋へやの白壁しろかべにパツとかけてみると、墨すみのように、まっ黒くろに変化へんかして染しまった。

「毒だ！ この魚いさなにも、この飯いひにも、おそろしい毒薬どくやくがまぜてある。伊那丸いなまるさま、家康いえやすの心はこれではつきりわかりました。うわべはどこまでも柔和にやわにみせて、わたしたちを毒害どくがいしようという肚はらでした」

「ではここも？」

と伊那丸いなまるは立ちあがって、塗籠ぬりごめの出口でぐちの戸かどをおしてみると、はたして開あかない。力ちからいっぱい、おせど引ひけど開あかなくなっている。

「若君——」

龍太郎りゅうたろうはあんがいおちついて、なにか伊那丸いなまるの耳みみにささやいた。そして、夜のふけるのを待まちって、足帯あしおび、脇差わきざしなど、しっかりと身支度みじたくしはじめた。

やがて龍太郎りゅうたろうは、笈うしのなかから取りのけておいた一体いつたいの仏像ぶつぞうを、部屋へやのすみへおいた。そして燭台しょくたいの灯ともしびをその上へ横倒よこたひしにのせかける。

部屋へやの中なかは、いちじ、やや暗くくなったが、仏像ぶつぞうの木きに油あぶらが

しみて、ふたたびプスプスと、まえにもまして、明るい焰ほのおを立ててきた。

龍太郎りゅうたろうは、伊那丸いなまるの体ていをひしと抱かかきしめて、反対はんたいのすみによった。そして、できるだけ身をちぢめながら、じつとその火ひをみつめていた。プス……プス……焰ほのおは赤あかくなり、むらさき色いろになりしてゆくうちに、パツと部屋へやのなかが真暗まごになつたせつな、チリチリッちりちりと、こまかい火ひの粉こなが、仏像ぶつぞうからうつくしくほとばしりはじめた。

「若君、耳みみを耳みみを」と、いいながら龍太郎りゅうたろうも、かたく眼まなこをつぶった。

その時——

轟然ごうぜんたる音響おんきょうとともに、仏像ぶつぞうのなかにかけてあつた火薬くわやくが爆発ばくはつした。——浜松城はままつじょうの二の丸にのまるの白壁しろかべは、雷火らいかに裂さかれてくずれ落ちた。

ガラガラと、すさまじい震動しんどうは、本丸ほんまる、三の丸さんまるまでもゆるがした。すわ変事へんじと、旗本はたもとや、役人やくにんたちは、得物えものをとってきしてみると、外廓そとくわの白壁しろかべがおちたところから、いきおいよくふきだしている怪火かいり！ すでに、矢倉やぐらへまでもえうつろうとしているありさまだ。

「火事ひごとッ、火事ひごとッ——」

降りかかる火ひの粉こなをあびて、口々くちくちにうろたえた顔かほをあおむかせていると、ふたたび、どツと、突きくずしてきた白壁しろかべの口くちから、紅蓮くれないをついてあらわれた者ものがある。無反むそりの戒刀かいとうをふりかぶった木隠こがくれ龍太郎りゅうたろう、つづいて、武田たけだ伊那丸いなまるのすがた。

「曲者くせものッ——」

と下したでは、騒然そうぜんと渦うずをまいた。その白刃しろやいばの林はやしをめがけて、焰ほのお

のなかから、ひらりと飛びおりた伊那丸と龍太郎——
ああ、その危うさ。

三

小太刀をとっては、伊那丸はふしぎな天才児である。
木隠龍太郎も戒刀の名人、しかも隱形の術からえた身のかる
さも、そなえている。

けれど、伊那丸も龍太郎も、けっして、匹夫の勇にはやる
者ではない。どんな場合にも、うろたえないだけの修養はあ
る。——だのに、なぜ、こんな無謀をあえてしたろう？ 白
刃林立のなかへ、肉体をなげこめば、たちまち劍のさきに、
メチャメチャに刺されてしまうのは、あまりにも知れきつた
結果だのに。

しかし、ひとたび人間が、信念に身をかためてむかう時は、
刀刃も折れ、どんな悪鬼も羅刹も、かならず退けうるとい
う教えもある。ふたりがふりかぶった太刀は、まさに信念の一
刀だ。とびおりた五尺の体もまた、信念の鎖帷子をきこん
でいるのだった。

「わッ」

とさけんだ下の武士たちは、ふいにふたりが、頭上へ飛び
おりてきたいきおいにひるんで、思わず、サツとそこを開い
てしまった。

どんと、ふたりのからだだが下へつくやいな、いちじに、乱
刀の波がどツと斬りつけていったが、

「退れッ」

と、龍太郎の手からふりだされた戒刀の切ッ先に、乱れた
つ足もと。それを目がけて伊那丸の小太刀も、飛箭のごとく
突き進んだ。たちまち火花、たちまち劍の音、斬りおられた槍
は宙にとび、太刀さきに当たったものは、無残なうめきをあげ
て、たおれた。

「退けッ！ だめだ」

と城の塀にせばめられて、人数の多い城兵は、かえって自
由を欠いた。武士たちは、ふたたび、見ぎたなく逃げ出した。
龍太郎と伊那丸は、血刀をふって、追いちらしたうえ、昼間
のうちに、見ておいた本丸をめがけて、かけこんでいった。
家康にちかづいて、武田一門の思いを知らそうと思つたこ
とは破れたが、せめて一太刀でも、かれにあびせかけなけれ
ば——浜松城の奥ふかくまではいつてきたかいない。めざ
すは本丸！

あいてはひとり！

と、ほかの雑兵には目もくれないで、まっしぐらに、武者
走り（城壁の細道）をかけぬけた。

天の筏

一

矢倉へむかった消火隊と、武器をとって討手にむかった者
が、あらかたである。——で、家康のまわりには、わずか七、
八人の近侍がいるにすぎなかった。

「火はどうじゃ、手はまわったか」

寝所をでた家康は、そう問いなながら、本丸の四阿へ足をむけていた。すると、闇のなかから、ばたばたとそこへかけよってきた黒い人影がある。

「や！」

と侍たちが、立ちふさがって、きつと見ると、物の具で身をかためたひとりの武士が、大地へ両手をついた。

「お上、武田の主従が、火薬をしかけたうえに狼藉におよびました。ご身辺にまंनीちがあつては、一大事です。はやくお奥へお引きかえしをねがいまする」

「おう、坂部十郎太か。たかが稚児どうような伊那丸と六部の一人や二人が、檻をやぶつたとて、なにをさほどにうろたえることがある。それよりか、城の火こそ、はやく消さねばならぬ、矢倉へむかえ！」

「はッ」と十郎太が、立ちかけると――

「家康ッ！」と、ふいに、耳もとをつんざいた声とともに、闇のうちからながれきたつた一閃の光。

「無礼ものッ！」

とさけびながら、よろりと、しりえに、身をながした家康の袖を、さつと、白い切ツ先がかすってきた。

「何者だ！」

とその太刀影を見て、ガバと、はねおきるより早く、斬りまげていった十郎太の陣刀。

「お上、お上」

と近侍のものは、そのすきに、家康を屏風がこいにして、本丸の奥へと引きかえしていった。

「無念ッ――」

長蛇を逸した伊那丸は、なおも、四、五間ほど、追いかけてゆくのを、待てと、坂部十郎太の陣刀が、そのうしろから慕いよつた。

と、伊那丸はなんにつまずいたか、ア――と闇をおよいだ。

ここぞと、十郎太がふりかぶつた太刀に、あわれむごい血煙が、立つかと思えたせつな、魔鳥のごとく飛びかかってきた龍太郎が、ヤツと、横ざまに戒刀をもって、薙ぎつけた。

「むッ……」と十郎太は、苦鳴をあげて、たおれた。

「若君――」

と寄りそつてきた龍太郎、

「またの時節があります。もう、すこしも、ご猶予は危険です。さ、この城から逃げださねばなりません」

「でも……龍太郎、ここまできて、家康を討ちましたのは、さんねんだ。わしは無念だ」

「ごもつともです。しかし、伊那丸さまの大望は、ひろい天下にあるのではござりませぬか。家康ひとりには小さな敵です。さ、早く」

とせき立てたかれは、むりにかれの手をとって、築山から、城の土塀によじのぼり、狭間や、わずかな足がかりを力に、二丈あまりの石垣を、すべり落ちた。

途中に犬走りという中段がある。ふたりはそこまでおりて、ぴったりと石垣に腹をつけながら、しばらくあたりをうかがっていた。上では、城内の武士が声をからして、八ぼうへ手配りをさけびつつ、縄梯子を、石垣のそとへかけおろしてきた。南無三――とあなたを見れば、火の手を見た城下の旗本たち

が、闇をついて、これまた城の大手へ刻々に殺到するけはいである。

「どうしたものでしょう？」

さすがの龍太郎も、ここまできて、はたと当惑した。もう濠までわずかに五、六尺だが、そのさきは、満々とたたえた外濠、橋なくして、渡ることはとてもできない。ふつう、兵法で十五間以上と定められてある濠が、どっちへまわっても、陸と城との境をへだてている。するといきなり上からヒューツと一団の火が尾をひいて、ふたりのそばに落ちてきた。闇夜の敵影をさぐる投げ松明である。ヒューツ、ヒューツ、とつづけざまにおちてくる光——

「いたッ、犬走りだ」

と頭のうえで声がしたとたん、光をたよりに、バラバラと、つるべうちに射てきた矢のうなり、——鉄砲のひびき。

「しまった」と龍太郎は伊那丸の身をかばいながら、石垣にそつた犬走りを先へさきへとにげのびた。しかし、どこまでいっても陸へでるはずはない。ただむなしく、城のまわりをまわっているのだ。そのうちには、敵の手配はいよいよきびしく固まるであろう。

矢と、鉄砲と、投げ松明は、どこまでも、ふたりの影をおいかけてくる。そのうちに龍太郎は、「あッ」と立ちすくんでしまった。

ゆくての道はとぎれている。見れば目のまえはまっくらな深淵で、ごうーッという水音が、闇のそこに渦まいていようす。ここぞ、城内の水をきって落としてくる水門であったのだ。

矢弾は、ともすると、鬢の毛をかすつてくる。前はうずまき深淵、ふたりは、進退きわまった。

「ああ、無念——これまでか」と龍太郎は天をあおいで嘆息した。

と、そのまえへ、ぬツと下から突きだしてきた槍の穂？

「何者？」

と思わず引つつかむと、これは、冷たい雫にぬれた棹のさきだった。龍太郎がつかんだ力に引かれて、まっ黒な水門から筏のような影がゆらゆらと流れよってきた。その上にたつて、棹を手ぐつてくるふしぎな男はたれ？ 敵か味方か、ふたりは目をみはって、闇をすかした。

二

「お乗りなさい、はやく、はやく」

筏のうえの男は、早口にいった。いまはなにを問うすきもない。ふたりは、ヒラリと飛びうつた。

ザーツとはねあがった水玉をあびて、男は、力まかせに石垣をつく。——筏は外濠のなみを切つて、意外にはやく陸へすすむ。そして、すでに濠のなかほどまできたとき、

「その方はそも何者だ。われわれをだれとおもって助けてくれたのか」

龍太郎が、ふしんな顔をしてきくと、それまで、黙々として、棹をあやつっていた男は、はじめて口を開いてこういった。

「武田伊那丸さまと知つてのうえです。わたくしは、この城

の掃除番、森子之吉という者ですが、根から徳川家の家来ではないのです」

「おう、そういうえば、どこやらに、甲州なまりらしいところもあるようだ」

「何代もまえから、甲府のご城下にすんでおりました。父は森右兵衛といつて、お館の足軽でした。ところが、運わるく、長篠の合戦のうちに、父の右兵衛がとらわれたので、わたくしも、心ならず徳川家に降っていましたが、ささいなあやまちから、父は斬罪になってしまったのです。わたくしにとつては、怨みこそあれ、もう奉公する気のない浜松城をすてて、一日もはやく、故郷の甲府にかえりたいと思つてゐる間に、武田家は、織田徳川のためにほろぼされ、いるも敵地、かえるも敵地というはめになってしまいました。ところへ、ゆうべ、伊那丸さまがつかまつてきたという城内のうわさです。びつくりして、お家の不運をなげいていました。けれど、今宵のさわぎには、てっきりお逃げあそばすであろうと、水門のかげへ筏をしのばして、お待ちもうしていたのです」

「ああ、天の助けだ。子之吉ともうす者、心からお礼をいいます」

と、伊那丸は、この至誠な若者を、いやしい足軽の子とさげすんではみられなかった。いくどか、頭をさげて礼をくり返した。そのまに、筏はどんと岸についた。

「さ、おあがりなさいませ」と子之吉は、葦の根をしっかりと持って、筏を食いよせながらいった。

「かたじけない」と、ふたりが岸へ飛びあがると、

「あ、お待ちください」とあわててとめた。

「子之吉、いつかはまたきつとめぐりあうであらう」

「いえ、それより、どつちへお逃げなさるにしても、この濠端を、右にいつてはいけません。お城固めの旗本屋敷が多いなかへはいつたら袋のねずみです。どこまでもここから、左へ左へとすすんで、入野の関をこえさえすれば、浜名湖の岸へでられます」

「や、ではこの先にも関所があるか」

「おあんじなさいますな、ここに藁と、わたくしの鑑札があります。お姿をつつんで、これをお持ちになれば大じょうぶです」

子之吉は、下からそれを渡すと、岸をついて、ふたたび、筏を濠のなかほどへすすめていったが、にわかには、どぶんとそこから水けむりが立った。

「ややッ」と、岸のふたりはおどろいて手をあげたが、もうなんともすることもできなかった。

子之吉は、筏をはなすと同時に、脇差をぬいて、みごとにわが喉笛をかッ切ったまま、濠のなかへ身を沈めてしまったのである。後日に、徳川家の手にたおれるよりは、故主の若君のまえで、報恩の一死をいさぎよくささげたほうが、森子之吉の本望であったのだ。

伊那丸と龍太郎が外濠をわたって、脱出したのを、やがて知った浜松城の武士たちは、にわかには、追手を組織して、入野の関へはしった。

ところが、すでに二刻もまえに、蓑をきた兩名のものが、この関へかかったが、足輕鑑札を持っているので、夜中ではあったが、通したということなので、討手のものは、地だんだをふんだ。そして、長駈して、さらに次の浜名湖の渡し場へさしていそいだ。

いっぼう、伊那丸、龍太郎のふたりは、しゅびよく、浜名湖のきしべまで落ちのびてきたが、一難さってまた一難、ここまできながら、一艘の船も見あたらないのでむなしくあつちこつちと、さまよつていた。

月はないが、空いちめんに磨ぎだされ、かがやかしい星の光と、ゆるやかに波を繕る水明りに、湖は、夜明けのようにほの明るかった。すると、ギイ、ギイ……とどこからか、この静寂をやぶる櫓の音がしてきた。

「お、ありやなんの船であろう？」

と伊那丸が指したほうを見ると、いましも、弁天島の岩かげをはなれた一艘の小船に、五、六人の武士が乗りこんで、こなたの岸へ舵をむけてくる。

「いずれ徳川家の武士にちがいない。伊那丸さま、しばらくここへ」

と龍太郎はさしまねいて、ともにくさむらのなかへ身をしずめていると、まもなく船は岸について、黒装束の者がバラバラと陸へとびあがり、口々になにかざわめき立ってゆく。「せっかく仕返しにまいったのに、かんじんなやつがいなかったのはざんねんしごくであつた」

「いつかまた、きやつのがたを見かけしだいに、ぶつた斬つてやるさ。それに、すまいもつきとめてある」

「あの小僧も、あとで家へかえつて見たら、さだめしびつくりして泣きわめくにちがいない。それだけでも、まアまア、いちじの溜飲がさがつたというものだ」

ものかげに、人ありとも知らずにこう話しながら、浜松のほうへつれ立ってゆくのをやり過ぎた龍太郎と伊那丸は、そこを、すばやく飛びだして、かれらが乗りすてた船へとびうつるが早いか、力のかぎり櫓をこいだ。

「龍太郎、いったいいまのは、何者であろう？」

船に腰かけていた伊那丸が、ふといいだした。

「さて、この夜中に、黒装束で横行するやからは、いずれ、盗賊のたぐいであつたかもしれませぬ」

「いや、わしはあのなかに、ききおぼえのある声をきいた。盗賊の群れではないと思う」

「はて……？」龍太郎は小首をかしげている。

「そうじゃ、ゆうべ、八幡前で、鎧売りに斬りちらされた悪侍、あのときの者が二、三人はたしか今の群れにまじつていた」

「おお、そうおっしゃれば、いかにも似通うていたやつもおりましたな」

と、龍太郎はいつもながら、伊那丸のかしこさに舌をまいた。そのまに、船は弁天島へこぎついた。

「若君——」と船をもやってふりかえる。

「浜松から遠くもない、こんな小島に長居は危険です。わたくしの考えでは、夜のあけぬまえに、渥美の海へこぎだして、伊良湖崎から志摩の国へわたるが——ばんご無事かとぞんじますが」

「どんな荒海、どんな嶮岨をこえてもいい。ただ——ときもはやく、かねがねそちが話したおん方にお目にかかり、また忍剣をたずね、その他の勇士を狩りあつめて、この乱れた世を泰平にしずめるほか、伊那丸の望みはない」

「そのお心は、龍太郎もおさっしいたしております。では、わたくしは弁天堂の禰宜か、どこぞの漁師をおこして食べ物を用意をいたしてまいりますから、しばらく船のなかでお待ちくださいまし」

と龍太郎は、ひとりで島へあがつていった。そしてあなたこなたを物色してくると、白砂をしいた、まばらな松のなかにチラチラ灯りのもれている一軒の家が目についた。

「漁師の家と見える、ひとつ、訪れてみよう」

と龍太郎は、ツカツカと軒下へきて、開けっぱなしになっている雨戸の口からなかをのぞいてみると、うすぐらい灯のそばに、ひとりの男が、朱にそまった老婆の死骸を抱きしめたまま、よよと、男泣きに泣いているのであった。

二

龍太郎が、そこを立ちさろうとすると、なかの男は、蹙音を耳にとめたか、にわかにはねおきて、壁に立てかけてあった得物をとるやいなや、ばらッと、雨戸のそとへかけおいた。

「待てッ、待て、待てッ！」

あまりその声のするどきに、龍太郎も、ギョツとしてふりかえった。すると——そのせつな、真眉間へむかつて、ぶんとうなつてきたするどい光りものに——はッとおどろいて身をしずめながら、片手にそれをまきこんで袖の下へだきしめてしまった。見ればそれは朱柄の槍であった。

「こりや、なんだって、拙者の不意をつくか」

「えい、吐かすな、おれのお母をころしたのは、おまえだろう。天にも地にも、たったひとりのお母さまのかたきだ。どうするかおぼえている！」

「勘ちがいするな、さようなおぼえはないぞ」

「だまれ、だまれッ、めったに人のこないこの島に、なんの用があつて、うろついていた。今しがた、宿から帰ってみれば、お母さまはズタ斬り、家のなかは乱暴狼藉、あやしいやつは、汝よりほかにないわッ」

目に、いっばい溜め涙をひからせている。憤怒のまなじりをつりあげて、いッかなきかないのだ。この若者は浜松の町で、稀代な槍法をみせた鎧売りの男で——いまは、この島に落ちぶれているが、もとは武家生まれの、巽小文治という者

であった。

「うろたえ言をもうすな、だれが、恨みもないきさまの老母などを、殺すものか」

「いや、なんといおうが、おれの目にかかったからにはのがすものか」

「うぬ！ 血まよって、後悔いたすなよ」

「なにを、この朱柄の槍でただひと突き、おふくろさまへの手向けにしてくれる。覚悟をしろ」

「えい！ 聞きわけのないやつだ」

と、龍太郎もむツとして、槍のケラ首が折れるばかりにひツたくと、小文治も、金剛力をしぼって、ひきもどそうとした。

「ヤツ——」とその機をねらった龍太郎が、ふいに穂先をツ放すと、力負けした小文治は、槍をつかんだままタタタタと、一、二間もうしろへよろけていった。——そこを、「おお——ツ」ととびかかった龍太郎の抜き討ちこそ、木隠流のとくいとす、戒刀のはやわざであった。

いつか、裾野の文殊閣でおちあつた加賀見忍剣も、この戒刀のはげしさには膏汗をしばられたものだった。ましてや、若年な巽小文治は、必然、まツ二つか、袈裟がけか？ どっちにしても、助かりうべき命ではない。

と見えたが——意外である！ 龍太郎の刀は、サツと空を斬って、そのとたんに槍の石突きがトンと大地をついたかと思つと、小文治の体は、五、六尺もたかく宙におどって、龍太郎の頭の上を、とびこえてしまった。

この手練——かれはただ平凡な槍使いではなかつた。

龍太郎は、とっさに、眸を抜かれたような気持がした。すぐ踏みとまって、太刀を持ちなおすと、すでにかまえなおした小文治は槍を中段ににぎって、龍太郎の鳩尾へピタリと穂先をむけてきた。

かつて一ども、いまのようにあざやかに、敵にかわされたためしのない龍太郎は、このかまえを見るにおよんで、いよいよ要心に要心をくわえながら、下段の戒刀をきわめてしげんに、頭のうえへ持つていった。

玄妙きわまる槍と、精妙無比な太刀はここにたがいの呼吸をはかり、たがいに、兎の毛のすきをねらい合つて一瞬一瞬、にじりよつた。

天聡一陣！ ものすごい殺氣が、みるまにふたりのあいだにみなぎってきた。ああ龍虎たおれるものはいずれであろうか。

三

船べりに頬杖ついて、龍太郎を待っていた伊那丸は、宵からのつかれにさそわれて、いつか、銀河の空の下でうっとり眠りの国へさまよっていた。——松かぜの奏でや、舷をうつ波の鼓を、子守唄のように聞いて。

——すると。

内浦鼻のあたりから、かなり大きな黒船のかがが瑠璃の湖をすべって、いっさんにこつちへむかってくるのが見えだした。だんだんと近づいてきたその船を見ると徳川家の用船でもなく、また漁船のようでもない。舳のぐあいや、帆柱のさ

まなどは、この近海に見なれない長崎型の怪船であった。

ふかしぎな船は、いつか弁天島のうらで船脚をとめた。そして、親船をはなれた一艘の軽舸が、矢よりも早くあやつられて伊那丸の夢をうつつに乗せている小船のそばまで近づいてきた。

ポーンと鈎繩を投げられたのを伊那丸はまったく夢にも知らずにいる。——それから、船のすべりだしたのすら気づかずにはいたが、フト胸ぐるしい重みを感じて目をさました時には、すでに四、五人のあらくれ男がよりたかつて、おのれの体に、荒縄をまきしめていたのだった。

「あッ、龍太郎——ッ」

かれは、おもわず絶叫した。だがその口も、たちまち綿のようなものをつめられてしまったので、声も立てられない。ただ身をもがいて、伏しまろんだ。

水なれた怪船の男どもは、毒魚のごとく、胴の間や軽舸の上におどり立って、なにかてんでに口ぜわしくさげびあっている。

「それッ、北岸へ役人の松明が見えだしたぞ」

「はやく軽舸をあげてしまえッ」

「帆綱に集れ——ッ、帆綱をまけ——」

キリキリッ、キリキリッと帆車のきしむおとが高鳴ると同時に、軽舸の底にもがいていた伊那丸のからだは、

「あッ」というまに鈎綱にひっかけられて、ゆらゆらと波の上へつるしあげられた。

龍太郎はどうした？ この伊那丸の身にふってわいた大変事を、まだ気づかずにいるのかしら？ それとも、巽小文治

の稀代な槍先にかかってあえなく討たれてしまったのか……？

西北へまわった風を帆にうけて、あやしの船は、すでにすでに、入江を切って、白い波をかみながら、外海へでてゆくではないか。

大鷲の鎖

—

うわべは歌詠みの法師か、きらくな雲水と見せかけてころはゆだんもすきもなく、武田伊那丸のあとをたずねて、きようは東、あすは南と、血眼の旅をつづけている加賀見忍剣。裾野の闇に乘じられて、まんまと、六部の龍太郎のために、大せつな主君を、うばいさられた、かれの無念さは思いやられる。

したが、不屈なかれ忍剣は、たとえ、胆をなめ、身を粉にくたくまでも、ふたたび伊那丸をさがしださずに、やむべきか——と果てなき旅をつづけていた。

おりから、天下は大動乱、鄙も都も、その渦にまきこまれていた。

この年六月二日に、右大臣織田信長は、反逆者光秀のために、本能寺であえなき最期をとげた。

盟主をうしなった天下の群雄は、ひとしくうろたえまよった。なかにひとり、山崎の弔い合戦に、武名をあげたものは

秀吉であつたが、北国の柴田、その他、北条徳川なども、おのおのこの機をねらつて、おのれこそ天下をとらんものと、野心の関をかため、虎狼の鏃をといで、人の心も、世のさまも、にわかには陰しくなつてきた。

そうした世間であつただけに、忍剣の旅は、なみたいていなものではない。しかも、酬いられてきたものは、けつきよく失望——二月あまりの旅はむなしかった。

「伊那丸さまはどこにおわすか。せめて……アア夢にでもいいから、いどころを知りたい……」

足をやすめるたびに嘆息した。

その一念で、ふと忍剣のあたまに、あることがひらめいた。

「そうだ！ クロはまだ生きているはずだ」

かれはその日から、急に道をかえて、思い出おおき、甲斐の国へむかつて、いっさんにとつてかえした。

忍剣が気のついたクロとは、そまなにかわらないが、かれのすがたは、まもなく、変りはてた恵林寺の焼け跡へあらわれた。

二

忍剣は数珠をだして、しばらくそこに合掌していた。すると、番小屋のなかから、とびだしてきた侍がふたり、うむをいわさず、かれの両腕をねじあげた。

「こらッ、そのほうはここで、なにをいたしておつた」

「はい、国師さまはじめ、あえなくお亡くなりはてた、一山の靈をとむろうていたのでござります」

「ならぬ。甲斐一帯も、いまでは徳川家のご領分だぞ。それをあずかる者は、ご家臣の大須賀康隆さまじゃ。みだりにこらをうろついていることはならぬ、とつとたちされ、かれれ！」

「どうぞしばらく。……ほかに用もあるのですから」

「あやしいことをもうすやつ。この焼けあとに何用がある？」

「じつは当寺の裏山、扇山の奥に、わたしの幼なじみがおります。久しぶりで、その友だちに会いたいとおもひまして、はるばる尋ねてまいつたのです」

「ばかをいえ、さような者はここにいない」

「たしかに生きていますはずです。それは、友だちともうしても、ただの人ではありません。クロともうす大驚、それをひと目見たいのでございます」

「だまれ。あの黒鷲は、当山を攻めおとした時の生捕りもの、大せつに餌をやつて、ちかく浜松城へ献上いたすことになっているのだ、汝らの見せ物ではない。帰れというに帰りおらぬか」

ひとりが腕、ひとりが襟がみをつかんで、ずるずるとひきもどしかけると、忍剣の眉がピリツとあがった。

「これほど、ことをわけてもうすのに、なおじゃまだてするとゆるさんぞ！」

「なにを」

ひとりが腰縄をさぐるすきに、ふいに、忍剣の片足がどんと彼の脾腹をけとばした。アツと、うしろへたおれて、悶絶したのを見た、べつな侍は、

「おのれッ」と太刀の柄へ手をかけて、抜きかけた。

——それより早く、

「ヤツ」と、まっこうから、おがみうちに、うなりおちてきた忍剣の鉄杖に、なにかはたまろう。あいては、カッと血へどをはいてたおれた。

それに見むきもせず、鉄杖をこわきにかかえた忍剣はいっさんに、うら山の奥へおくへとよじのぼってゆく。——と、昼なおくらしい木立のあいだから、いような、魔鳥の羽ばたきがつめたい雫をゆりおとして聞えた。

三

らんらんと光る二つの眼は、みがきぬいた琥珀のようだ。その底にすむ金色の瞳、かしらの逆羽、見るからに猛々しい真黒な大鷲が、足の鎖を、ガチャリガチャリ鳴らしながら、扇山の石柱の上になつて、ものすごい絶叫をあげていた。

そのくろい翼を、左右にひろげるときは、一丈あまりの巨身となり、銀の爪をさか立てて、まっ赤な口をあくときは、空とぶ小鳥もすくみ落ちるほどな威がある。

「おおいた！ クロよ、無事でいたか」

おそれげもなく、そばへかけよってきた忍剣の手になでられると、鷲は、かれの肩に嘴をすりつけて、あたかも、なつかしい旧友にでも会ったかのような表情をして、柔和であつた。

「おなじ鳥類のなかでも、おまえは靈鷲である。さすがにわしの顔を見おぼえているようす……それならきつとこの使命をはたしてくれるであろう」

忍剣は、かねてしたためておいた一片の文字を、油紙にくるんでこよりとなし、クロの片足へ、いくえにもギリギリむすびつけた。

この鷲にもいろいろな運命があつた。

天文十五年のころ、武田信玄の軍勢が、上杉憲政を攻めて上野乱入にかかったとき、碓氷峠の陣中であつたのがこの鷲であつた。

碓氷の合戦は甲軍の大勝となつて、敵将の憲政の首まであげたので、以来、信玄はその鷲を館にもちかえり、愛育していた。信玄の死んだあとには、勝頼の手から、供養のためと恵林寺に寄進してあつたのである。ところがあつた時、檻をやぶつて、民家の五歳になる子を、宙天へくわえあげたことなどがあつたので、扇山の中腹に石柱をたて、太い鎖で、その足をいましてしまった。

幼少から、恵林寺にきていた伊那丸は、いつか忍剣とともになつていた。獐猛な鷲も、伊那丸や忍剣の手には、猫のようであつた。そして、恵林寺が大紅蓮につつまれ、一山のこらず最期をとげたなかで、鷲だけは、この山奥につながれていたために、おそろしい焰からまぬがれたのだ。

「クロ、いまこそわしが、おまえの鎖をきつてやるぞ、そしてその翼で、大空を自由にかけまわれ、ただ、おまえをながいあいだかわいがつてくださつた、伊那丸さまのお姿を地上に見たらおりにゆけよ」

そういいながら、鎖に手をかけたが、鷲の足にはめられた鉄の環も、またふとい鎖も断れればこそ。

「めんどうだ——」と、忍剣は鉄杖をふりかぶって、石柱の角にあたる鎖をはッしと打った。

そのとき、ふもとのほうから、ワーツという、ただならぬ鬨とぎの聲こゑがおこった。鎖くさりはまだきれいでないが、忍剣はその声こゑに、小手をかざして見た。

はやくも、木立のかげから、バラバラと先頭の武士がかけつけてきた。いうまでもなく、大須賀康隆の部下である。扇山へあやしの者がいりこんだと聞いて、捕手をひきいてきたものだった。

「売僧まいそう、その靈鳥れいちようをなんとする」

「いらざるごと。この驚おどろこそ、勝頼公のみ代から当山に寄進されてあるものだ！ どうしようとなたのかつてだ」

「うぬ！ さては武田たけだの殘党ざんとうとはきまつた」

「おどろいたかつ」と、いきなりブーンとふりとばした鉄杖にあたつて、二、三人ははねとばされた。

「それ！ とりにがすな」

ふもとのほうから、追々おしおしとかけあつてきた人数を合あして、かれこれ三、四十人、槍やりや太刀たちを押おつとつて、忍剣の虚をつき、すきをねらつて斬きつてかかる。

「飛び道具をもつた者は、梢こすえのうえからぶツばなせ」

足場がせまいので、捕手の頭かしらがこうさけぶと、弓、鉄砲てつぱうをひツかかえた十二、三人のものは、猿ましろのごとく、ちかくの杉すぎや樺けやきの梢こすえにのぼつて、手早く矢をつがえ、火繩ひなわをふいてねらいつける。

下では忍剣にんけん、近よる者を、かたツぱしからたたきふせて、怪力のかぎりをふるつたが、空からくる飛び道具をふせぐべ

き術すべもあろうはずはない。

はやくも飛んできた一の矢！ また、二の矢。

夜叉やしやのごとく荒れまわつた忍剣は、突とつとして、いっぽうの捕手をかけくずし、そのわずかなすきに、ふたたび驚おどろの鎖くさりをねらつて、一念力、戛然かつぜんとうつた。

まれた！ ギャーツという絶鳴ぜつめいをあげた驚おどろは、猛然と翼つばさを一はたきさせて、地上をはなれたかと思ふまに、一陣の山嵐をおこした翼のあおりをくつて、大樹たいじゆの梢こすえの上からバラバラとふりおとされた弓組、鉄砲組。

「ア、ア、ア！」とばかり、捕手の軍卒ぐんそつがおどろきさわぐうちに、一ど、雲井くもいへたかく舞いあがった魔鳥まちょうは、ふたたびすさまじい天聰てんそうをまいて翔かけおりるや、するどい爪つめをさかだてて、旋廻せんかいする。

ふるえ立った捕手どもは、木の根、岩角いわかどにかじりついて、ただアレヨアレヨと胆たまを消しているうちに、いつか忍剣のすがたを見うしない、同時に、偉大なる黒鷲くろわしのかげも、天空はるかに飛びさつてしまった。

鞍馬くらまの竹童ちくどう

—

はなしはふたたびあとへかえつて、ここは波明るき弁天島べんてんじまの薄月夜うすづきよ——

いっぽうは太刀たちの名人、いっぽうは鍊磨れんまの槍やり、いづれ劣おとら

ぬ切ッ先に秘術の妙をすまして突きあわせたまま、松風わたる白砂の上に立ちすくみとなつて居るのは、白衣の木隠龍太郎と朱柄の持ち主、巽小文治。

腕が互角なのか、いずれに隙もないためか、そうほううごかず、彫りつけたごとくくらみあつて居るうちに、魔か、雲か、月をかすめて疾風とともに、天空から、そこへ翔けおりてきたすさまじいものがある。

バタバタという羽ばたきに、ふたりは、はッと耳をうたれた。弁天島の砂をまきあげて、ぱッと、地をすつてかなたへ飛びさつた時、不意をおそわれたふたりは、思わず眼をおさえて、左右にとびわかれた。

「あッ——」とおどろきの叫びをもらしたのは、龍太郎のほうであつた。それは、もうはるかに飛びさつた、驚の巨きなのおどろいたのではない。

いま、鏡のような入江をすべつて浜名湖から外海へとでてゆく、あやしい船の影——それをチラと見たせつなに、龍太郎のむねを不安にさわがしたのは、小船にのこした伊那丸の身の上だつた。

「もしや？」とおもえば、一刻の猶予もしてはおられない。やにわに、小文治という眼さきの敵をすてて、なぎさのほうへかけたした。

「卑怯もの！」

追いつがった小文治が、さッと、くりこんでいった槍の穂先、ヒラリ、すばやくかわして、千段をつかみとめた龍太郎は、はつたとふりかえつて、

「卑怯ではない。わが身ならぬ、大せつなるおかたの一大事

なのだ、勝負はあとで決してやるから、しばらく待て」

「いいのがれはよせ。その手は食わぬ」

「だれがうそを。アレ見よ、こうしているまにも、あやしい船が遠のいてゆく、まんいちのことあつては、わが身に代えられぬおんかた、そのお身のうえが気づかわしい、しばらく待て、しばらく待て」

「才あの船こそ、めつたに正体を見せぬ八幡船だ。して、小船にのこしたというのはだれだ。そのしだいによつては、待つてもくれよう」

「いまはなにをつつも、武田家の御曹子、伊那丸さまにわたらせられる」

しばらく、じつと相手をみつめていた小文治は、にわかに、槍を投げすててひざまずいてしまった。

「さては伊那丸君のお傳人でしたか。今宵、町へわたつたとき、さわがしいおうわさは聞いていましたが、よもやあなたがたとは知らず、さきほどからのしつれい、いくえにもごかんべんをねがいまする」

「いや、ことさえわかればいいわけはない、拙者はこうしてはおられぬ場合だ。さらば——」

ほとんど一足跳びに、もとのところへひつ返してきた龍太郎が、と見れば、小船は舳綱をとかれて、湖水のあなたにただようているばかりで、伊那丸のすがたは見えない。

「チェッ、さんねん。あの八幡船のしわざにそういない。おのれどうするか、覚えていろ」

と地だんだ踏んでにらみつけたが、へだては海——それもはや模糊として、遠州灘へ浪がぐれてゆくものを、いかに、

龍太郎でも、飛んでゆく秘術はない。

二

ところへ、案じてかけてきたのは、小文治だった。

「若君のお身は？」

「しまったことになった。船はないか、船は」

「あの八幡船のあとを追うなら、とてもむだです」

「たとえ遠州灘のもくずとなってもよい！ 追えるところまでゆく覚悟だ。たのむ、早くだしてくれ」

「小船は一艘ありますが、八幡船のゆく先ばかりは、いままで領主のご用船が、死に身になって取りまいても、霧のように消えて、つきとめることができなほどでござります」

「ええ、なんとしたことだ——」

と、思わずどツかり腰をおとししてしまった龍太郎は、われながらあまりの不覚に、唇をかみしめた。

小文治は、それを見ると、不用意なじぶんの行動が後悔されてきた。母をうしなった悲しさに、いちずに龍太郎を下手人とあやまったがため、このことが起つたのだ。さすれば、とうぜん、じぶんにも罪はある。

かれは、いくたびかそれをわびた。そして、あらためて素性を名のり、永年よき主をさがしていたおりであるゆえ、ぜひとも、力をあわせて伊那丸さまを取りかえし、ともども天下につくしたいと、真心こめて龍太郎にたのんだ。

龍太郎も、よい味方を得たとよろこんだ。しかし、さてこれから八幡船の根城をさがそうとなると、それはほとんど雲

にかくれた時、鳥をもとめるようなものだった。——むろん小文治にも、いい智恵は浮かばなかった。

「こうなつてはしかたがない」

龍太郎はやがてこまぬいて腕から顔をあげた。

「お叱りをうけるかもしれぬが、一たび先生のところへ立ち帰って、この後の方針をきめるとしよう。それよりほかに思案はない」

「して、その先生とおっしゃるおかたは」

「京の西、鞍馬の奥にすんではいるが、ある時は、都にもいで、またある時は北国の山、南海のはてにまで姿を見せるといふ、稀代なご老体で、拙者の刀術、隠形の法なども、みなその老人からさずけられたものです」

鞍馬ときくさえ、すぐ、天狗というような怪奇が聯想されるところへ、この話をきいた小文治は、もつと深くその老人が知りたくなつた。

「龍太郎どのの先生とおっしゃる——そのおかたの名はなんともうされますか」

「まことの姓はあかしませぬ。ただみずから、果心居士と異号をつけております。じつはこのたびのことも、まったくその先生のおさしずで、織田徳川が甲府攻めをもよおすと同時に、拙者は、六部に身を変じて、伊那丸さまをお救いにむかつたのです。それがこの不首尾となつては、先生にあわせる顔もないしだいが、天下のこと居ながらにして知る先生、またきつと好いおさしずがあらうと思う」

「では、どうかわたしもともに、お供をねがいまする」
「異存はないが、さきをいそぐ、おしたくを早く」

小文治は、家に取ってかえすと、しばらくあって、粗服ながら、たしなみのある旅支度に、大小を差し、例の朱柄の槍をかついで、ふたたびでてきた。

「お待たせいたしました。小船は、わたしの家のうしろへ着けておきましたから……」

という言葉に、龍太郎がそのほうへすすんで行くと、小船の上には、ひとつの棺がのせてある。

武士にかえた門出に、小文治は、母の亡骸をしずかな湖の底へ水葬にするつもりと見える。

と、あやしい羽音が、またも空に鳴った。はッとしてふたりが船からふりあおぐと、大きな輪をえがいていた怪鳥のかが、潮けむる遠州灘のあなたへ、一しゅんのまに、かけりさった。

三

みんな空をむいて、同じように、眉毛の上へ片手をかざしている。

烏帽子の老人、市女笠の女、侍、百姓、町人——雑多人がたかつて、なにか評議の最中である。

「さて、ふしぎなやつじやのう」

「仙人でしようか」

「いや、天狗にちがいない」

「だって、この真昼なかに」

「おや、よく見ると本を読んでいますよ」

「いよいよ魔物ときまった」

この人々は、そも、なにを見ているのだろう。

ここは近江の国、比叡山のふもと、坂本で、日吉の森からそびえ立った五重塔のてっぺん——そこにみんなの瞳があらつまっているのだった。

なるほどふしぎ、人だかりのするのもむりではない。太陽のまぶしさにさえぎられて、しかとは見えないが、鶴のごとき老人が、五重塔のてっぺんにたしかにいるようだ。しかも目のいい者のことばでは、あの高い、登りようもない上でのんきに書物を見ているという。

「なに、魔物だと？ だけどけ、どいてみる」

「や、今為朝がきた」

群集はすぐまわりをひらいた。今為朝といわれたのはどんな人物かを見ると、丈たかく、色浅ぐろい二十四、五歳の武士である。黒い紋服の片肌をぬぎ、手には、日輪巻の強弓と、一本の矢をさかしまに握っていた。

「む、いかにも見えるな……」

と、五重塔のいただきをながめた武士は、ガツキリ、その矢をつがえはじめた。

「や、あれを射ておしまいなさいますか」

あたりの者は興にそそられて、どよみ立った。

「この霊地へきて、奇怪なまねをするにつくいやつ、ことによったら、南蛮寺にいるキリシタンのともがらかもしれぬ。

いずれにせよ、ぶツばなして諸人への見せしめとしてくれる」

弓の持ちかた、矢番も、なにさまおぼえのあるらしい態度だ。それもそのはず、この武士こそ、坂本の町に弓術の道場をひらいて、都にまで名のきこえている代々木流の遠矢の

達人、山県鷲之助という者であるが、町の人は名をよばずに、今為朝とあだなしていた。

「あの矢先に立ってはたまるまい……」

人々がかたずをのんでみつめるまに、矢筈を弦にかけた鷲之助は、陽にきらめく鏃を、虚空にむけて、ギリギリと満月にしぼりだした。

塔のいただきにいる者のすがたは、下界のさわぎを、どこふく風かというようすで、すましこんでいるらしい。

四

「日吉の森へいってごらんなさい。今為朝が、五重塔の上でた老人の魔物を射にゆきましたぜ」

坂本の町の葭賞茶屋でも、こんなうわさがばつとたつた。床凡にかけて、茶をすすっていた木隠龍太郎は、それを聞くと、道づれの小文治をかえりみながら、にわかについと立ちあがった。

「ひよっとすると、その老人こそ、先生かもしれない。このへんでお目にかかることができればなによりだ、とにかく、いそいでまいってみよう」

「え？」

小文治はふしんな顔をしたが、もう龍太郎がいつさんにかけたしたので、あわててあとからつづいてゆくと、うわさにたがわぬ人群れた。

両足をふんまえて、狙いさだめた鷲之助は、いまや、プツンとばかり手もとを切ってはなした。

「あ——」と群集は声をのんだ、矢のゆくえにひとみをこらした。と見れば、風をきつてとんでいった白羽の矢は、まさしく五重塔の、あやしき老人を射抜いたとおもったのに、ぱツと、そこから飛びたつたのは、一羽の白鷺、ヒラヒラと、青空にまいあがったが、やがて、日吉の森へ影をかくした。「なアんだ」と多くのものは、口をあいたまま、ぼうぜんとして、まえの老人がまぼろしか、いまの白鷺がまぼろしかと、おのれの目をうたぐって、睫毛をこすっているばかりだ。

そこへ、一足おくれてきた龍太郎と小文治はもう人の散ってゆくのに失望して、そのまま、叡山の道をグングン登っていった。

ふたりはこれから、比叡山をこえ、八瀬から鞍馬をさして、峰づたいにいそぐのらしい。いうまでもなく果心居士のすまいをたずねるためだ。

音にきく源平時代のむかし、天狗の棲家といわれたほどの鞍馬の山路は、まったく話にきいた以上のけわしさ。おまけにふたりがそこへさしかかってきた時は、ちょうど、とつぶり日も暮れてしまった。

ふもとでもらった、螢火ほどの火繩をゆいつのたよりにぶって、うわばみの歯のような、岩壁をつたい、百足腹、鬼すべりなどという嶮路をよじ登ってくる。

おりから初秋とはいえ、山の寒さはまたかくべつ、それにいちめん朦朧として、ふかい霧が山をつつんでいるので、いつか火繩もしめって、消えてしまった。

「小文治どの、お気をつけなされよ、よろしいか」

「大じょうぶ、ごしんぱいはいりません」

とはいったが、小文治も、海ならどんな荒浪にも恐れぬが、山にはなれないので、れいの朱柄の槍を杖にして足をひきずりひきずりついていった。千段曲りという坂道をやっとおりると、白い霧がムクムクわきあがっている底に、ゴオーツというすごい水音がする。溪流である。

「橋がないから、その槍をおかしなさい。こうして、おたがいに槍の両端を握りあってゆけば、流されることはありません」
龍太郎は山なれているので、先にかかるがると、岩石へとびうつつた。すると、小文治のうしろにあたる断崖から、ドドドツとまっ黒なものが、むらがつておりてきた。

「や？」と小文治は身がまえて見ると、およそ五、六十ぴきの山猿の大群である。そのなかに、十歳ぐらいな少年がただひとり、鹿の背ののつて笑っている。

「おお、そこへきたのは、竹童ではないか」

岩の上から龍太郎が声をかけると、鹿の背からおりた少年も、なれなれしくいった。

「龍太郎さま、ただいまお帰りでございましたか」

「む、して先生はおいでであらうな」

「このあいだから、お客さまがご滞留なので、このごろはずっと荘園においでなさいます」

「そうか。じつは拙者の道づれも、足をいためたごようすだ。おまえの鹿をかしてあげてくれないか」

「アアこのおかたですか、おやすいことです」

竹童は口笛を鳴らしながら、鹿をおきずてにして、岩燕のごとく、溪流をとびこえてゆくと、猿の大群も、口笛につい

て、ワラワラとふかい霧の中へかけを消してしまった。鹿の背をかりて、しばらくたどつてくると、小文治は馥郁たる香りに、仙境へでもきたような心地がした。

「やっと僧正谷へまいりましたぞ」

と龍太郎が指さすところを見ると、そこは山芝の平地で、甘いにおいをただよわせている果樹園には、なにかの実が熟れ、大きな芭蕉のかげには、竹を柱にしたゆかしい一軒の家が見えて、ほんのりと、灯りがもれている。

門からのぞくと、庵室のなかには、白髪童顔の翁が、果物で酒を酌みながら、総髪にゆったりっぱな武士とむかいあつて、なにかしきりに笑い興じている。

「龍太郎、ただいま帰りました」

とかれが両手をついたうしろに、小文治もひかえた。

「なんじゃ？ おめおめと帰つてきおつたと」

翁——それは別人ならぬ果心居士だ。龍太郎の顔を見ると、ふいと、かたわらの藜の杖をにぎりとつて、立ちあがるが早いか、

「ばかもの」ピシリと龍太郎の肩をうった。

五

果心居士は、なにも聞かないうちに、すべてのことを知っていた。八幡船に伊那丸をうばわれたことも、巽小文治の身の上も。——そして、きょうのひる、日吉の五重塔のつぺんにいたのもじぶんであるといった。

かれは、仙人か、幻術師か、キリシタンの魔法を使う者か？

はじめて会った小文治は、いつまでも、奇怪な謎をとくことに苦しんだ。

しかし、だんだんと膝をまじえて話しているうちに、ようやくそれがわかってきた、かれは仙人でもなければ、けつして幻術使でもない。ただおそろしい修養の力である。みな、自得の研鑽から通力した人間技であることが納得できた。

浮体の法、飛足の呼吸、遠知の術、木遁その他の隠形など、みなかれが何十年となく、深山にくらしていたたまもので、それはだれでも劫をつめば、できないふしぎや魔力ではない。

ところで、果心居士がなにゆえに、武田伊那丸を龍太郎にもとめさせたか、それはのちの説明にゆずって、さしあたり、はてなき海へうばわれたおんかたを、どうしてさがしだすかの相談になった。

「竹童、竹童——」

居士は例の少年をよんで、小さな錦のふくろを持ってこさせた。そのなかから、机の上へカラカラと開けたのは亀の甲羅でつくった、いくつもいくつもの駒であった。

かれの精神がすみきらないで、遠知の術のできないときは、この亀卜という占いをたてて見るのが常であった。

「む……」ひとりで占いをこころみて、ひとりうなずいた果心居士は、やがて、客人のほうへむいて、

「民部どの、こんどはあなたがいったがよろしい」といった。龍太郎はびっくりして、それへ進んだ。

「しばらく、先生のおおせながら、余人にその儀をいいつけにならねば、手まえのたつ瀬も、面目もござりませぬ。

どうか、まえの不覚をそそぐため、拙者におおせつけねがいうぞんじます」

「いや龍太郎、おまえには、さらに第二段の、大せつなる役目がある。まずこれをとくと見たがよい」

と、革の箱から取りだして、それへひろげたのは、いちめんの山絵図であった。

「これは？」と龍太郎は腑におちない顔である。

「ここにおられる、小幡民部どのが、苦心してうつされたもの。すなわち、自然の山を城廓として、七陣の兵法をしいてあるものじゃ」

「あ！ ではそこにおいでになるのは、甲州流の軍学家、小幡景憲どのご子息ですか」

「いかにも、すでにまえから、ご浪人なされていたが、武田のお家のほろびたのを、よそに見るにしのびず、伊那丸さまをたずねだしてふたたび旗あげなさろうという大願望じゃ、おなじ志のものどもがめぐりおうたのも天のおひきあわせ、したが、伊那丸さまのありかが知れても、よるべき天嶮がなくてはならぬ。そこで、まずひそかに、二、三の者がさきにまいて地理の準備、またおおくの勇士をも狩りもよおしておき、おんかたの知れしだいに、いつなりと、旗あげのできるようにいたしておくのじゃ」

「は、承知いたしました。して、この図面にあります場所は？」
という龍太郎の問いに応じてこんどは、小幡民部が膝をすすめた。

「武田家に縁のふかき、甲、信、駿の三カ国にまたがっている小太郎山です。また……」

と、軍扇の要をもつて、民部は掌を指すように、ここは何山、ここは何の陣法と、こまかに、噛みくだいて説明した。

肝胆あい照らした、龍太郎、小文治、民部の三人は、夜のふけるをわすれて、旗上げの密議をこらした。果心居士は、それ以上は一言も口をさし入れない。かれの任務は、ただこままでの、気運だけを作るにあるもののようにであった。

翌日は早天に、みな打ちそろつて僧正谷を出立した。龍太郎と小文治は、例のすがたのまま、旗あげの小太郎山へ。

また、小幡民部ひとり、深編笠をいただき、片手に鉄扇、野袴といういでたちで、京都から大阪もよりへと伊那丸のゆくえをたずねもとめていく。

その方角は、果心居士の亀トがしめしたところであるが、この占いがあたるか否か。またあるいは音にひびいた軍学者小幡が、はたしてどんな奇策を胸に秘めているか、それは余人がうかがうことも、はかり知ることできない。

智恵のたたかい

—

板子一枚下は地獄。——船の底は真っ暗だ。

空も見えなければ、海の色も見えない。ただときおりドドーン、ドドドドドーン！と胸の間にぶつかってはくだけける怒濤が、百千の鼓を一時にならすか、雷のとどろきかとも

思えて、人の魂をおびやかす。

その船ぞこに、生ける屍のように、うつぶしているのは、武田伊那丸のいたましい姿だった。

八幡船が遠州灘へかかった時から、伊那丸の意識はなかった。この海賊船が、どこへ向かっていくかも、おのれにどんな危害が迫りつつあるのかも、かれはすべてを知らずにいる。「や、すっかりまいっていやがる」

さしもはげしかった、船の動揺もやんだと思うと、やがて、入口をポンとはねて、飛びおりにきた手下どもが伊那丸のからだを上へにないあげ、すぐ船暈ざましの手当にとりかかった。

「やい、その童の脇差を持ってきて見せろ」

と舳からだみごえをかけたのは、この船の張本で、龍巻の九郎右衛門という大男だった。赤銅づくりの太刀にもたれ、南蛮織のきらびやかなものを着ていた。

「はて……？」と龍巻は、いま手下から受けとった脇差の目貫と、伊那丸の小袖の紋とを見くらべて、ふしんな顔をしていたが、にわかにつつ立って、

「えらい者が手に入った。その小童は、どうやら武田家の御曹子らしい。五十や百の金で、人買いの手にわたす代物じゃねえから、めったな手荒をせず、島へあげて、かいほうしろ」

そういって、三人の腹心の手下をよび、なにかしめしあわせたうえ、その脇差を、ソツともとのとおり、伊那丸の腰へもどしておいた。

まもなく、輕舸の用意ができると、病人どうような伊那丸を、それへうつして、まえの三人もともに乗りこみ、すぐ鼻先

の小島へむかってこぎだした。

「やい！ 親船がかえってくるまで、大せつな玉を、よく見はっていなくっちゃいけねぞ」

龍巻は二、三ど、両手で口をかこつて、遠声をおくった。

そしてこんどは、足もとから鳥が立つように、あたりの手下をせきたてた。

「それッ、帆綱をひけ！ 大金もうけだ」

「お頭領、また船をだして、こんどはどこです」

「泉州の堺だ。なんでもかまわねえから、張れるッたけ帆をはって、ぶつとおしにいそいでいけ」

キリキリ、キリキリ、帆車はせわしく鳴りだした。船中の手下どもは、飛魚のごとく敏捷に活躍した。舳に腰かけている龍巻は、その悪魔的な跳躍をみて、ニタリと、笑みをもらしていた。

二

この秋に、京は紫野の大徳寺で、故右大臣信長の、さかなな葬儀がいとなまれたので、諸国の大小名は、ぞくぞくと京都にのぼっていた。

なかで、穴山梅雪入道は、役目をおえたのち、主人の徳川家康にいとまをもらつて、甲州北郡へかえるところを、廻り道して、見物がてら、泉州の堺に、半月あまりも滞在していた。

堺は当時の開港場だったので、ものめずらしい異国の色彩があふれていた。唐や、呂宋や、南蛮の器物、織物などを、

見たりもとめたりするのも、ぜひここでなければならなかった。

「殿、見なれぬ者がたずねてまいりましたが、通しましょうか、いかがしたものでござります」

穴山梅雪の仮の館では、もう燭をともし、侍女たちが、琴をかなでて、にぎわっているところだった。そこへひとりの家臣が、こう取りついできた。

「何者じゃ」

梅雪入道は、もう眉にも霜のみえる老年、しかし、千軍万馬を疾駆して、鍛えあげた骨ぶしだけは、たしかにどこかちがつている。

「肥前の郷士、浪島五兵衛ともうすもので、二、三人の従者もつれた、いやしからぬ男でござります」

「ふーむ……、してその者が、何用で余にあいたいともうすのじゃ」

「その浪島ともうす郷士が、あるおりに呂宋より海南にわたり、なおバタバヤ、ジャガタラなどの国々の珍品もたくさん持ちかえりましたので、殿のお目にいれ、お買いあげを得たいともうすので」

「それは珍しいものが数あろう」

梅雪入道は、このごろしきりに、堺でそのような品をあとめていたところ、思わず心をうごかしたらしい。

「とにかく、通してみろ。ただし、ひとりであるぞ」

「はい」家臣は、さがっていく。

入れちがつて、そこへあんないされてきたのは、衣服、大小や、かっぶくもりっぱな侍、ただ色はあくまで黒い。目

はおだやかとはいえない光である。

「取りつぎのあった、浪島とはそちか」

「へッ、お目通りをたまわりまして、ありがとうぞんじます」

「さっそく、バタバヤ、ジャガタラの珍品などを、余に見せてもらいたいものであるな」

「じつは、他家へ吹聴したくない、秘密な品もござりますゆえ、願わくばお人払いをねがいまする」

という望みまでいれて、あとはふたりの座敷となると梅雪はさらにまたせきだした。

「して、その秘密な品とは、いかなるものじゃ」

「殿——」

浪島という、郷士のまなこが、そのときいような光をおびて、声の調子まで、ガラリと変った。

「買ってもらいたいのは、ジャガタラの品物じゃありません。

武田菱の紋をうった、りっぱな人間です。どうです、ご相談にのりませんか」

「な、なんじゃッ？」

「シッ……大きな声をだすと、殿さまのおためにもなりませんぜ。徳川家で、血眼になってる武田伊那丸、それをお売りもうそうということなんで」

「む……」入道はじつと郷士の面をみつめて、しばらくその大胆な押し売りにあきれていた。

「けっして、そちらにご不用なものではありませんまい。武田の御曹子を生けどって、徳川さまへさしだせば、一万石や二万石の恩賞はあるにきまっています。先祖代々から禄をはんだ、武田家の亡びるのさえみすて、徳川家へついたほどの

あなただから、よろこんで買ってくださいるだろうと思って、あてにしてきた売物です」

ほとんど、強請にもひどい口吻である。だのに、梅雪入道は顔色をうしなつて、この無礼者を手討ちにしようともしない。

どんな身分であろうと、弱点をつかれると弱いものだ。穴山梅雪入道は、事実、かれのいうとおり、ついこのあいだまでは、武田勝頼の無二の者とたのまれていた武将であった。

それが、織田徳川連合軍の乱入とともに、まっさきに徳川家にくだつて、甲府討入りの手引きをしたのみか、信玄らしい、恩顧のふかい武田一族の最期を見すて、じぶんだけの命と栄華をとりとめた武士である。

この利慾のふかい武士へ、伊那丸という餌をもつて釣りにきたのは、いうまでもなく、武士に化けているが、八幡船の龍巻であった。

三

都より開港場のほうに、なにかの手がかりが多かろうと、目星をつけて、京都から堺へいりこんでいたのは、鞍馬を下山した小幡民部である。

人手をわけて、要所を見張らせていた網は、意外な効果を、はやくも告げてきた。

「たしかに、八幡船のやつらしい者が三人、侍にばけて、穴山梅雪の宿をたずねた——」

この知らせをうけた民部は、たずねさきが主家を売って敵

にはしった、犬梅雪であるだけに、いよいよそれだと直覺した。

いっぽう、その夜ふけて、梅雪のかりの館をでていった三つのかげは、なにかヒソヒソささやきながら堺の町から、くらしい波止場のほうへあるいていく。

「おかしら、じゃアとにかく、話はうまくついたっていうわけですね」

「上首尾さ。じぶんも立身の種になるんだから、いやもおうもありやあしな。これからすぐに島へかえって、伊那丸をつれてさえくれば、からだの目方と黄金の目方のとりかえッこだ」

「しッ……うしろから足音がしますぜ」

「え？」

と三人とも、脛にきずもつ身なので、おもわずふりかえりと、深編笠の侍が、ピタピタあるき寄ってきて、なれなれしくことばをかけた。

「おかしら、いつもご壮健で、けっこうでござりますな」

「なんだって？ おれはそんな者じゃアない」

「エへへへ、わたしも、こんな、侍姿にばけているから、ゆだんをなさらないのはごもつとですが、さきほど町で、チラとお見うけて、まちがいが無いのです」

「なんだい、おめえはいったい？」

「こう見えても、ずいぶん浪の上でかせいだ者です」

「おれたちの船じゃなからう、こっちは知らねえもの」

「そりゃア数ある八幡船ですから」

「しッ。でっかい声をするねえ」

「すみません。船から船へわたりまわったことですからな、ながいお世話にはなりませんでしょうが、おかしらの船でも一どはたらいたことがあるんです」

話しながら、いつか陸はずれの、小船のおいてあるところまできてしまった。あとをついてきた侍すがたの男は、ぜひ、もう一ど船ではたらいたいからとせがんでたくみに龍巻を信じさせ、沖にすがたを隠している、八幡船の仲間のうちへ、まんまと乗りこむことになった。

その男の正体が、小幡民部であることはいうまでもない。なまじ町人すがたにばけたりなどとすると、かえってさきが、ゆだんをしないと見て、生地のままの反間苦肉がみごとに当たった。

民部のところは躍っていた。けれどもうわべはどこまでもぼんやりに見せて、たえず、船中に目をくぼっていたが、どうもこの船にはそれらしい者を、かくしているようすが見えない。で、いちじはちがったかと思つたが、梅雪をおとずれたという事実は、どうしても、民部には見のがせない。

船は、その翌日、闇夜にまぎれて、堺の沖から、ふたたび南へむかつて、満々と帆をはった。

四

伊那丸は、日ならぬうちに気分もさわやかになった。それと同時に、かれは、生まれてはじめて接した、大海原の壯観に目をみはった。

ここはこの島かわからないけれど、陸のかけは、一里ば

かりあなたに見える。けれど、伊那丸には、龍巻の手下が五、六人、一歩あるくにもつきまといつて逃げることも、どうすることもできなかつた。

「ああ……」忍剣を思い、咲耶子をしのび、龍太郎のゆくえなどを思うたびに、波うちぎわに立っている伊那丸のひとみに涙が光った。

「なんとかしてこの島からでたい、名もしれぬ荒くれどもの手にはずかしめられるほどなら、いッそこの海の底に……」

夜はつめた磯の岩かげに組んだ小屋にねる。だが、そのあいださえ、羅刹のような手下は、交代で見張っているのだ。

「そうだ、あの親船が返ってくれば、もう最期の運命、逃げるなら、いまのうちだ」

きツと、心をけっして、頭をもたげてみると、もう夜あけに近いころとみえて、寝ずの番も頼杖をついていねむっている。

「む！」はね起きるよりはやく、ばらばらと、昼みておいた小船のところへ走りだした。ところがきてみると、船は毎夜、これらの用心で、十間も陸の上へ、引きあげてあつた。

「えい、これしきのもの」

伊那丸は、金剛力をしぼって、波のほうへ、綱をひいてみたが、荒磯のゴロタ石がつかえて、とてもうごきそうもない。

——ああこんな時に、忍剣ほどの力がじぶんに半分あればと、益なくくり言もかれの胸にはうかんだであらう。

「野郎ツ、なにをする！」

われを忘れて、船をおしている伊那丸のうしろから、松の木のような腕が、グツと、喉輪をしめあげた。

「見つかったか」伊那丸は齒がみをした。

「こいつ。逃げる気だな」

喉に門をかけられたまま、伊那丸はタタタタと五、六

歩あとへ引きもどされた。

もうこれまでと、脇差の柄に手をやって、ヤツと、身をねじりながら切ッ先をとばした。

「あッ——き、斬りやがったなッ」

とたん——目をさましてきた四、五人の手下たちも、それツと、權や太刀をふるって、わめきつ、さけびつ撃ちこんできたが、伊那丸も捨身だった。小太刀の精のかぎりをつくして、斬りまわった。

しかし何せよ、慄悍無比な命しらずである。ただでさえ精のおとろえている伊那丸は、無念や、ジリジリ追われ勝ちになつてきた。

五

その時であつた。

空と波との水平線から、こなたの島をめがけて、征矢のように翔けてきた一羽のくろい大鷲。

ぱツと、波をうっては水けむりをあげた。空に舞っては雲にかくれた。——やがて、そのすばらしい雄姿を目のあたりに見せてきたと思うと、伊那丸と五人の男の乱闘のなかを、さつと二、三ど、地をかすって翔けりまわった。

「わーッ、いけねえ！」

のこらずの者が、その巨大な翼にあおりたおされた。むろ

ん、伊那丸も、四、五間ほど、飛ばされてしまった。

嵐か、旋風か、伊那丸は、なんとということをも意識しなかった。ただ五人の敵！ それに一念であるため、立つよりはやく、そばにたおれていたひとりりを、斬りふせた。

くろい大鷲は、伊那丸の頭上をはなれず廻っている。砂礫をとばされ、その翼にあたって、のこる四人も散々になって、気を失った。——ふと、伊那丸は、その時はじめて、ふしぎな命びろいをしたことに気づいた。空をあおぐと、才才！ それこそ、恵林寺にいたころ、つねに餌をやって愛していたクロではないか。

「お！ クロだ、クロだ」

かれが血刀を振って、狂喜のこえを空になげると、クロはずかにおりてきて、小船のはしに、翼をやすめた。

「ちがいない。やはりクロだった。それにしても、どうして、あの鎖をきったのであろう」

ふと見ると、足に油紙の縫ったのが巻きしめてある。伊那丸はいよいよふしぎな念に打たれながら、いそいで解きひらいてみると、なつかしや、忍剣の文字！

若さま、このてがみが、あなたさまの、お目にふれまじたら、若さまのおてがみも、かならず私の手にとどきましよう。忍剣いのちのあらんかぎり、ふたたびお目にかからずにはおりません。甲斐の山にて。

ハラハラと、とめどない涙を、その数行の文字にはふり落として立ちすくんでいた伊那丸は、いそいで小屋に取ってか

えし、今の窮状をかんとんに認めて、かけもどって来た。夜はほのぼのと、八重の汐路に明けはなれて来た。

見れば、クロはよほど飢えていたらしく、五人の死骸の上を飛びまわって、生々しい血に、舌なめずりをしていた。

同じように、かえし文を、鷲の片足へむすびつけて、それのおわったとき、伊那丸の目のまえに、さらに呪いの悪魔が悠々とかけを見せてきた。

八幡船の親船がかえってきたのだ。もうすぐそこ——島から数町の波間のちかくへ。

「いよいよ最期となった。クロ！ わしの運命はおまえのつばさに乗せてまかすぞよ」

坐して死をまつも愚と、伊那丸は鷲の背中へ、抱きつくように身をのせた。

思うさま、人の血をすすったクロは、両の翼でバサと大地をうったかと思うと、伊那丸の身を軽々とのせたまま、天空高く、舞いあがった。

笛ふく咲耶子

一

「あれ、あれ、ありやあなんだ？」

「おお、島からとび立ったあやしい魔鳥」

「鷲だッ。くろい大鷲だ」

白浪をかねで、満々と帆を張ってきた八幡船の上では多く

の手下どもが、あけぼのの空をあおいで、潮なりのようにおどろき叫んでいた。

さわぎを耳にして、船部屋からあらわれた龍巻九郎右衛門は、ギラギラ射かえす朝陽に小手をかざして、しばらく虚空に旋回している大鷲の影をみつめていたが、

「ややッ」にわかには色をかえて、すぐ、

「あの鷲を射おとせッ、はやくはやく。遠のかねえうちだ」とあらあらしく叱咤した。おう！ 手下どもは武器倉へ渦をまいて、弓鉄砲を取るよりはやく、宙を目がけて火ぶたを切り、矢つぎばやに、征矢の嵐をはなしたが、鷲はゆうゆうと、遠く近くとびまわって、あたかも矢弾の弱さをあざけているようだ。

「民蔵民蔵、新米の民蔵はどうしたッ」

龍巻が足を踏みならして、こうさけんだ時、船底からかけあがってきたのは、民蔵と名をかえて、堺から手下になつて乗りこんでいた、かの小幡民部であった。

「おかしら、お呼びになりましたかい」

「どこへもぐりこんでいるんだ。てめえに、ちようどいい腕だめしをいいつける。あの大鷲の上に、人間が抱きついているんだ、島から伊那丸が逃げだしたにちげえねえ、てめえの腕でぶち落として見ろ」

「えッ、伊那丸とは、なんですか」

「そんなことをグズグズ話しちゃいられねえ、オオまた近くへきやがった、はやく撃てッ」

「がってんです！」

小幡民部の民蔵は、伊那丸と聞いてギクツとしたが、龍巻

に顔色を見ずかされてはと、わざと勇みたつて、渡された種子島の銃口をかまえ、船の真上へ鷲がちかよってくるのを待った。

と見るまに、鷲はふたたび低く舞つて、帆柱のてっぺんをさつとすりぬけた。

「そこだ」龍巻はおもわず拳を握りしめる。

同時に、狙いすましていた民部の手から、ズドン！ と白い爆煙が立った。

「あたった！ あたった」

ワーツという喊声、船をゆるがしたせつな、大鷲はまぢかに腹毛を見せたまま、ななめになつてクルクルと海へ落ちてきた——と見えたのは瞬間。——大きなつばさで海面をたたいたかと思うまに、ギャーツと一声、すごい絶鳴をあげて、猛然と高く飛び上がった。

そのとたんに、大鷲の背から海中へふり落とされたものがある——いうまでもなく武田伊那丸であった。龍巻は、雲井へかけり去つた鷲の行方などには目もくれず、すぐ手下に輕舸をおろさせて、波間にただよっている伊那丸を、親船へ引きあげさせた。

「民蔵でかしたぞ。きさまの腕前にやおそれிட்ட」

と龍巻は上機嫌である。そしていままでは、やや心をゆるさずにいた民部を、すっかり信用してしまった。

二

堺見物もおわつたが、伊那丸のことがあるので、帰国をの

ばしていた穴山梅雪の館へ、ある夕べ、ひとりの男が密書を持っておとずれた。

吉左右を待ちかねていた梅雪入道は、くつきょうな武士七、八名に、身のまわりをかためさせて、築山の亭へ足をはこんできた。そこには、黒衣覆面の密書の使いが、両手についてひかえていた。

「書面は、しかと見たが、今宵のあんないをするというそのほうは何者だの」

と梅雪はゆだんのない目くばりであった。

「龍巻の腹心の者、民蔵と申しまする」

「して、伊那丸の身は、ただいまでこへおいてあるの？」

「しばらく船中で手当を加えておりましたが、こよい亥の刻に、かねてのお約束どおり、船からあげて阿古屋の松原まで頭が連れてまいり、金子と引きかえに、お館へお渡しいたすてはずになつておりまする」

よどみのない使いの弁舌に、梅雪入道も疑いをといたとみえ、すぐ家臣に三箱の黄金をになわせ、じぶんも頭巾に面をかくして騎馬立ちとなり、剛者十数人を引きつれて、阿古屋の松原へと出向いていった。

「殿さま、しばらくお待ちねがいます」

途中までくると、案内役の民蔵は、梅雪入道の鞍壺のそばへよつて、ふいに小腰をかがめた。

「少々おねがいの儀がござります。お馬をとめて、無礼者とお怒りもありますようが、阿古屋の松原へついでには間にあわぬこと、お聞きくださいませしようか」

「なんじゃ、とにかくもうしてみい」

「は、余の儀でもござりませぬが、今日お館のご威光を見、またかくお供いたしているうちに、八幡船の手下となつていることが、つくづく浅ましく感じられ、むかしの武士にかえて、白日のもとに、ご奉公いたしたくなくなつてまいりました」

「悠長なやつ、かような出先にたつて、なにを述懐めたことをぬかしおるか。それがなんといたしたのだ」

「ここに一つの手柄をきつと立てますゆえ、お館の家来の端になりと、お加えなされてくださりませ」

「ふう——どういふ手柄を立てて見せるな」

「この三箱の黄金をかれにわたさずして、まんまと、武田伊那丸を龍巻の手よりうばい取つてごらんに入れますが」

「ぬからぬことをもうすやつだ。して、その策は？」

「わが君、お耳を……」

小幡民部の民蔵が、なにをささやいたものか、梅雪はたちまち慙ぶかいその相好をくずして、かれのねがいを聞きとどけた。そして、えらびだした武士二、三人に、密命をふくませ、そこからいずこともなく放してやると自身はふたたび、民蔵を行列の先頭にして、闇夜の街道を、しずしずと進んでいった。

三

まもなく着いた、阿古屋の松原。

梅雪入道は鞍からおりて、海神の社に床几をひかえた。

と——やがて約束の亥の刻ごろ、浜辺のほうから、百鬼夜行、八幡船の黒々とした一列が、松明ももたずに、シトシトと足

音そろえて、ここへさしてくる。

「民蔵、民蔵」

と鳥居まえで、合図をしたのは龍巻にちがいがなかった。民蔵は梅雪のそばをすりぬけて、そこへかけていった。

「お頭ですか」

「む、いつけた使いの首尾はどうだった」

「こちらは、殿さまごじしんで、早くからきて、あれに待っています。そして伊那丸は？」

「ふんじばってつれてきた、じゃおれは、梅雪とかけあいをつけるから、きさまが縄尻を持っていろ。なかなか童のくせに強力だから、ゆだんをして逃がすなよ」

龍巻は二、三十人の手下をつれて、梅雪のいる拝殿の前へおしていった。

縄尻をうけた民蔵は、

「やいッ、歩かねえか」わざと声をあららげて、伊那丸の背中をつく。——その心のうちでは、手をあわせている小幡民部であった。

しばらくのあいだ、龍巻と談合していた梅雪は、伊那丸の面体を、しかと見さだめたうえで、約束の褒美をわたそうといった。龍巻も心得て、うしろへ怒鳴った。

「民蔵、その童をここへひいてこい」

「へい」

民蔵は縄目にかけて伊那丸を、梅雪入道の前へひきすえた。拝殿の上から、とくと、見届けた梅雪は、大きくうなずいて、

「でかしておった。武田伊那丸にそういない」

その時、むっくり首をあげた伊那丸は、穴山のすがたを、

かツとにらみつけて、血を吐くような声でいった。

「人でなしの梅雪入道！」

「な、なにッ」

「お祖父さま(信玄)の時代より、武田家の禄を食みながら、徳川軍へ内通したばかりか、甲府攻めの手引きして、主家にあだなした犬侍。どの面さげて、伊那丸の前へおった、見るもげがれだ。退れッ」

「ワツハツハハハハ」梅雪は内心ギクとしながら、老獺なる嘲笑にまぎらわして、

「なにをいうかと思えば、小賢しい無礼呼ばわり。なるほどその昔は、信玄公にも仕え、勝頼にも仕えた梅雪じゃが、いまは、主でもなければ君でもない。武田の滅亡は、お許の父、勝頼が暗愚でおわしたからじゃ。うらむならお許の父をうらめ、馬鹿大将の勝頼をうらむがよい」

「ムムツ……よういつたな！」

不道の臣に面罵されて、身をふるわせた伊那丸は、やにわに、ガバとはねおきるがはやいか、両手を縛されたまま、梅雪に飛びかかって、ドンと、かれを床几から蹴とばした。

「なにをするか」

縄尻をひいた民蔵の力に、伊那丸はあおむけざまにひっくり返った。ア——おいたわしい！とおもわず睫毛に涙のさす顔をそむけて、

「ふ、ふざけたまねをすると承知しねえぞ。立て！こっちの隅へ寄っていろい！」

ズルズルと引きずってきて、拝殿の柱へ縄尻をくくりつけた。龍巻はそれをきっかけにして、

「じゃあ殿さま、伊那丸はたしかに渡しましたから、約束の金を、こっちへだしてもらいましょうか」

「む、いかにも褒美をつかわそう、これ、用意してきた黄金をここへ持て」

と、家臣になわせてきた三箱の金をそこへ積ませると、「さすがは大名、これだけの黄金をそくぎに持ってきたのはえらいものだ」

と、ニタリ笑つぽに入つた。

「やい野郎ども、はやくこの黄金を輕舸へ運んでいけ。どりや、用がすんだら引きあげようか」

と手下にそれをかつがせて、龍巻も立とうとすると、「ヤッ、大へんだ、おかしら、少ウしお待ちなさい」

と民蔵がことさら大きな声で、出足をとめた。

「なんでえ、やかましい」

龍巻は、舌うちをしてふりかえつた。社の廻廊にたつて、小手をかざしていた民蔵は、なおぎょうさんにとびあがつて、「一大事一大事！ おかしら、沖の親船が焼ける！ あれあれ、親船が燃えあがつてる！」

と、手をふりまわした。

四

「なにッ、親船が？」

龍巻も、さすがにギョツとして、浜辺のほうをすかしてみると、まッ暗な沖合にあたって、ボウと明るんできたのは、いかにも船火事らしい。

「やややや」龍巻の目はいようにかがやく。

見るまに沖の明るみは一団の火の玉となつて、金粉のごとき火の粉を空にふきあげた。夜の潮は燦爛と染められて、あたかも龍宮城が焼けおちているかのような壮観を現じた。

「ちえッ、とんでもねえことになつた。それッ、早く漕ぎつけて、消しとめろ」

とぎょうてんした龍巻は、二、三十人の手下たちとともに、一どにドツと海神の社をかけたでいくと、にわかには、鳥居わきの左右から、ワツという声つなみ！

「海賊ども、待て」

「御用、御用」

たちまち氷雨のごとく降りかかる十手の雨。——かける足もとを、からみたおす刺股、逃げるをひきたおす袖がらみ。

驚きうろたえるあいだに、バタバタと、捕つてふせ、ねじふ

せ、刃向かうものは、片っぱしから斬り立ててきた、捕手の人数は、七、八十人もあろうかと思えた。

陣笠、陣羽織のいでたちで、塚奉行所の提灯を片手に打ちふり、部下の捕手を激励していた佐々木伊勢守へ、荒獅子のごとく奮迅してきたのは、頭の、龍巻九郎右衛門であった。

「おのれッ」とさえぎる捕手を斬りとばして、夜叉を思わせる太刀風に、ワツと、開いて近よる者もない折から穴山梅雪

一手の剛者が、捕手に力をかして、からくも龍巻をしばりあげた。

「民蔵、そのほうの奇策はまんまと図にあつた。こなたより奉行所へ密告したため、アレ見よ、沖でも、この通りなさわぎをしているわい……小きみよい悪党ばらの最後じゃ」

穴山梅雪は、帰館すべくふたたびまえの駒にのって、持ってきた黄金をも取りかえし、武田伊那丸をも手に入れて、得々と社頭から列をくりだした。

「手はじめの御奉公、首尾よくまいって、民蔵めも面目至極です。殿のご運をおよろこびもうしあげます」

「ういやつだ。こよいから余の近侍にとり立ててくれる。伊那丸の縄をとって、ついてこい」

いっぽう、捕手にかこまれて、引ッ立てられた龍巻は、この態をみると、あたりの者をはねとばして、形相すくく、民蔵のそばへかけよった。

「畜生。う、うぬはよくも、おれを裏切りやがったな。一どは、縄にかかっても、このまま、獄門台に命を落とすような龍巻じゃねえぞ。きつとまたあばれだして、きさまの首をひんねじる日があるからおぼえていろ！」

「おお、心得た。だが、拙者は腕力は弱いから、その時には、また今夜のように、智慧くらべで戦おうわい」

久しぶりに、小幡民部らしい口調でこたえた民蔵は、子供の悪たれでも聞きながすように笑って、他の武士たちと同列に、梅雪の館へついていった。

五

ここしばらく、京都に滞在している徳川家康の陣営へにわかにも目通りをねがってでたのは、梅雪入道であった。

家康は、もうとツくに、甲州北郡の領土へ帰国したものと思っていた穴山が、また途中から引きかえしてきたのは、

なにごとかと意外におもって、そくぎに、かれを引見した。梅雪は御前にでて、入道頭をとくいそうにふり立てて、かねて敵探中の伊那丸を捕縛した顛末を、さらに誇張して報告した。さしずめ、その恩賞として、一万石や二万石のご加増はあつてしかるべしであるうといわんばかり。

「ふム……そうか」

家康のゆがめた口のあたりに二重の皺がきざまれた。これはいつも、思わしくない感情をあらわすかれの特徴である。

「浜松のご城内へまで潜入して、君のお命をねらった不敵な伊那丸、生かしておきましたは、ながく徳川御一門をおびやかす奉るは必定とぞんじまして……」

「待て、待て、わかっておる……」

梅雪はあんがい、いや、大不服である。

あれほど、伊那丸の首に、恩賞のぞみのままの沙汰をふれておきながら、この無愛想な口ぶりはどうだ。

しかし家康は、梅雪がうぬぼれているほど、かれを腹心とは信じていない。

日本の歴史にも、中華史上にも少ないくらいな、武士の面よしが、武田滅亡のさいに、一人あつた。一人はこの梅雪、一人は小山田信茂である。

織徳連合軍におわれた勝頼主従が、その臣、小山田信茂の岩殿山をたよって落ちたとき、信茂は、柵をかまえて入城をこぼみ、勝頼一門が、天目山の討死を見殺しにした。そして、それを軍功顔に、織田の軍門へ降っていった。

信長の子、織田城之助は、小山田を見るよりその不忠不人情を罵倒して、褒美はこれぞと、陣刀一閃のもとに首を討ち

おとした。——そういう例もある。

ましてや、梅雪入道は、武田家譜代の臣であるのみならず、勝頼とは従弟の縁さえある。その破廉恥は小山田以上といわねばならぬ。

——けれど家康は、城之助とちがって、何者をも利用することを忘れない大将であった。

「梅雪、伊那丸を捕えたともうすが、それだけか」

「は？ それだけとおおせられますか」と

「たわけた入道よな。武田家の護り神とも崇めておった御旗楯無の宝物は、たしかに、伊那丸がかくしているはずじゃ。その儀をもうすのにわからぬか」

「はッ、いかさま。それまでには気がつきませんでした。さつそく、糺明いたしてみます」

「仏つくつて、魂いれぬようなことは、家康、大のきらいじゃ。伊那丸の首と、御旗楯無とをそろえて、持参いたしてこそ、はじめて、まったき一つの働きをたてたともうすもの」
「願わくば、ここ二月のご猶予を、この入道にお与えくださいませ。きつとその宝物と、伊那丸の塩漬け首とを、ともにごらんに供えまする」

梅雪入道は、家康にかたく誓って、そこそこに塚へ立ちもどった。にわかにか来一同をまとめて、領土へ帰国の旨を布令だした。

その前にさきだって、小幡民部の民蔵は、いずこへか二、三通の密書をとばした。はたしてどことどことへ、その密書がいったかは、何人といえども知るよしはないが、うち一通は、たしかに鞍馬山の僧正谷にいる、果心居士の手もとへ

送られたらしい。

塚を出発した穴山の一族郎党は、伊那丸をげんじゆうな鎖駕籠にいれ、威風堂々と、東海道をくだり、駿府から西にまがって、一路甲州の山関へつづく、身延の街道へさしかかった。

こころあたりは、見わたすかぎり果てしもない晩秋の広野である。

——ああそこは伊那丸にとつて、思い出ふかき富士の裾野。加賀見忍剣と手に手をとつて、さまよいあるいた富士の裾野。けれど、鎖網をかけた、駕籠のなかなる伊那丸の目には、なつかしい富士のすがたも見えなければ、富士川の流れも、枯れすすきの波も見えない。

ただ耳にふれてくるものは、蕭々と鳴る秋風のおと、寥々とすだく虫の音があるばかり。

すると、どこでするのか、だれのすさびか、秋にふさわしい笛の音がする。その妙な音色は、ふと伊那丸の心のそこへまで沁みとおってきた。——かれは、まッ暗な駕籠のなかで、じつと耳をすました。

「お！ 咲耶子、咲耶子の笛ではないか」

思わずつぶやいた時である。なにごとか、いきなりドンと駕籠がゆれかえった。

六

「ぶれい者、お供先に立ってはならぬ」

「あやしい女、ひッ捕えろ！」数人は、バラバラと前列のほ

うへかけあつまった。穴山の郎党たちは、たちまち、押しかぶさつて、ひとりの少女をそこへねじふせた。

「しばらくお待ちくださいまし。わたくしは、けつしてあやしい者ではありません。穴山梅雪さまのご通行を幸いに、お訴えもうしたいことがあるのです」

「だまれ、ご道中でさようなことは、聞きとどけないわ、帰れッ」

と、家来どもののしる声を聞いて、駕籠の扉をあけさせた梅雪は、

「しさいあり気な女子じゃ。なんの願いか聞いて取らせる。これへ呼べ」と一同を制止した。

うるわしいお下髪にむすび、帯のあいだへ笛をはさんだその少女は、おずおずと、梅雪の駕籠の前へすすんで手をついた。

「訴えのおもむきをいうてみい。また、このようなさびしい広野に、ただひとりおるそちは、いったい何者の娘だ」

「野武士の娘、咲耶子ともうします。お訴えいたすまえに、おうかがいしたいのは、うしろの鎖駕籠のなかにいるおかたです。もしや武田伊那丸さまではございませんでしようか」

「それを聞いてなんとする」
梅雪はおそろしい目を咲耶子の挙動に注ぎかけた。

けれど彼女は、むじゃきに咲いた野の花のよう、なんのおそれもわだかまりもなく、あとのことばをさわやかにつつけた。

「まことは、まえに伊那丸さまから、ご大切な宝物とやらを、

父とわたくしとで、お預かりもうしておりましたが、そのために、親娘の者が、ひとかたならぬ難儀をいたしておりますゆえ、きょう、お通りあそばしたのを幸い、お返しもうしたのでござります」

「ふーむ、して、その宝物とやらはどんな物だ」

「このさきの、五湖の一つへ沈めてありますゆえ、どんな物かはぞんじませぬが、このごろ、あっちこっちの悪者がそれを嗅ぎつけて、湖水の底をさぐり合っております。なんでも石櫃とやらにはいつている、武田さまのお家の宝だともうすこととござります」

「む、よう訴えてきた。褒美はぞんぶんにとらすからあんないせい」

梅雪の顔は、思いがけない幸運にめぐり合ったよろこびにあふれた。――が、駕籠側にいた民蔵は、サツと色をかえて、この不都合な密告をしてきた少女を、人目さえなければ、ただ一太刀に斬つてすてたいような殺気をありありと目のなかにみなぎらせた。

行列はきゆうに方向を転じて、五湖の一つに沈んでいる宝物をさぐりにむかった。けれども、道案内に立った咲耶子は西も東もわからぬ広野を、ただグルグルと引きずりまわすみなので、一同は、道なき道につかれ、梅雪もようやくふしんの眉をひそめはじめた。

「民蔵はいないか、民蔵」と呼びつけて、

「小娘の挙動、だんだんと合点がいかな。あるいは、野かせぎの土賊ばらが、手先に使っている者かも知れぬ、も一ど、ひッ捕えてただしてみろ」

「かしこまりました」

民蔵は得たりと思った。ばらばらと前列へかけ抜けてきて、いきなり、むんずと咲耶子の腕首をつかんだ。

「小娘ッ」まことは甲州流兵法の達人小幡民部が、こういつてにらんだ眼光は射るようだった。

「なんでござりますか」

「さきほどからみるに、わざと、道なき野末へあんないしていくはあやしい。いったいどこへまいる気だ」

「知りませぬ、わたしは、ひとりで好きに歩いているのですから」

「だまれ、五湖へあんないいたすともうしたのではないか」

「だれが、穴山さまのような、けがらわしい犬侍のあんないになど立ちましようか」

「おのれ、さては野盗の手引きか」

「いいえ、ちがいます」

「吐かすなッ。さらば何者にたのまれた」

「御旗楯無の宝物が欲しさに、慾に目がくらんで、わたしのような少女にまんまとだまされた！ オホホホ……ヤッとお気がつかれましたか」

「おのれッ」

抜く手も見せず、民蔵がサツと斬りつけた切ッ先からヒラリと、蝶のごとく跳びかわした咲耶子は、バラバラと小高い丘へかけあがるよりはやく、帯の横笛をひき抜いて、片手に持ったまま宙へ高く、ふってふってふりまわした。

ああ！ こはそもなに？ なんの合図。

それと同時に、ただいちめんの野と見えた、あなたこなた

のすすきの根、小川のへり、窪地のかげなどから、たちまち、むくむくとうごきだした人影。

ウワーッと喊声をあげて、あらわれたのは四、五十人の野武士である。手に手に太刀をふりかざして、あわてふためく穴山一党のなかへ、天魔軍のごとく猛然と斬りこんだ。

ニッコと笑って、丘に立った咲耶子が、さつと一閃、笛をあげればかかり、二閃、さつと横にふればしりぞぎ、三閃すればたちまち姿をかくす——神変ふしぎな胡蝶の陣。

天翔る鞍馬の使者

—

きょうも棒切れを手にもって、友だち小猿を二、三、三、四つ、僧正谷から、百足虫腹の嶮岨をつたい、鞍馬の大深林をあそびまわっているのは、果心居士の童弟子、いが栗あたまの竹童であった。

「おや、こんなところへだれかやってくるぞ……このごろ人間がよくのぼってくるなア」

竹童がつぶやいた向こうを見ると、なるほど、菅笠に脚絆がけの男が、深林の道にまよってウロウロしている。

「オーイ、オーイ——」

とかれが口に手をあてて呼ぶと、菅笠の男が、スタスタこちへかけてきたが、見ればまだ十歳ぐらいの男の子が、たつたひとり、多くの猿にとり巻かれていたのでへんな顔をし

た。

「おじさん、どこへいくんだい、こんなところにマゴマゴしている、うわばみに食べられちゃうぜ」

「おまえこそいったい何者だい、鞍馬寺の小坊主さんでもなし、まさか山男の伴でもあるまい」

「何者だなんて、生意気をいうまえに、おじさんこそ、何者だかいうのが本来だよ。おいらはこの山に住んでる者だし、おじさんはだまって、人の山へはいつてきた風来人じゃないか」

「おどろいたな」と旅の男はあきれ顔に——「じつは僧正谷の果心居士さまとおっしゃるおかたのところへ、塚のあるおから手紙をたのまれてきたのさ」

「アア、うちのお師匠さまへ手紙を持ってきたのか、それならおいらにおだしよ。すぐとどけてやる」

「じやおまえは果心居士さまのお弟子か、やれやれありがたいに会った」

と、男は竹童に手紙をわたしてスタスタ下山していった。「いそぎの手紙だといけないから、さきへこいつに持たしてやろう」

と竹童はその手紙を、一匹の小猿にくわえさせて、鞭で僧正谷の方角をさすと、猿は心得たようにいっさんにとんでいく。そのあとで、

「さッ、こい、おいらとかけッくらだ」

竹童は、とくいの口笛を吹きながら、ほかの猿とごつたになつて、深林の奥へおくへとかけこんでいったが、ややあつて、頭の上でバタバタという異様なひびき。

「おや？——」と、かれは立ちどまった。小猿たちは、なんにおびやかされたのか、かれひとりを置き捨てにして、ワラワラとどこかへ姿をかくしてしまった。

「やア……やア……やア奇態だ」

なにもかも忘れはてたようである。あおむいたまま、いつまでも棒立ちになっている竹童の顔へ、上の梢からバラバラと松の皮がこぼれ落ちてきたが、かれは、それをはらうことすらも忘れていた。

そも、竹童の目は、なんに吸いつけられているのかと見れば、じつさい、おどろくべき怪物——といつてもよい大うわばみが、鞍馬山にはめずらしい大鷲を、翼の上から十重二十重にグルグル巻きしめ、その首と首だけが、そうほうまつ赤な口から火焰をふきあつて、ジツとにらみあつていた。まさに龍攘虎搏よりもすごい決闘の最中。

「や……おもしろいな。おもしろいな。どっちが勝つだろう」竹童おどろきもせず、口アングリ開いて見ていることややしばし、たちまち、鼓膜をつんざくような大鷲の絶鳴とともに、大蛇に巻きしめられていた双の翼がバサツとひろがったせつな、あたりいちめん、嵐に吹きちる紅葉のくれないを見せ、寸断されたうわばみの死骸が、バラバラになつて大地へ落ちてきた。

それを見るや否や、雲を霞と、僧正谷へとんで帰った竹童。果心居士の莊園へかけこむがはいか、めずらしい今の話を告げるつもりで、

「お師匠さま、お師匠さま」と呼びたてた。

「うるさい和子じゃ。あまり飛んで歩いてばかりいると、ま

たその足がうごかぬようになるぞよ」

芭蕉亭の竹縁に腰かけていた居士の目が、ジロリと光る、その手に持っている手紙をみた竹童は、ふいとさっきの用を思いだして、うわばみと驚の話ができなくなった。

「あ、お師匠さま、さきほど、お手紙がまいりましたから、猿に持たせてよこしました。もうごらんなさいましたか」と目の玉をクルリとさせる。

「横着なやつめ。小幡民部どのからの大切なご書面、もし失のうたらどうするつもりじゃ」

「ハイ」

竹童は頭をかいて下をむいた。居士は、白髯のなかから苦笑をもらしたが、叱言をやめて語調をかえる。

「ところでこの手紙によって急用ができた、竹童、おまえちよつとわたしの使いにいつてくれねばならぬ」

「お使いは大好きです。どこへでもまいります」

「ム、大いそぎで、武蔵の国、高尾山の奥院までいつてきてくれ、しさいはここに書いておいた」

「お師匠さま、あなたはごむりばかりおっしゃります」

「なにがむりじゃの」

「この鞍馬の山奥から、武蔵の高尾山までは、二百里もございませう。なんでちよつといつてくるなんていうわけにくいものですか、だからつねづねわたしにも、お師匠さまの飛走の術をおしえてくださいともうすのに、いつこうおしえてくださらないから、こんな時にはこまっています」

「なぜ口をとがらすか、けつしてむりをいいつけるのではない。それにはちよつどいい道案内をつけてやるから、和子は

ただ目をつぶってさえいれればよい」

「へー、では、だれかわたしを連れていつてくれるんですか」
「オオ、いまここへ呼んでやるから見ておれよ」

と果心居士は、露芝の上へでて、手に持ったいちめんの白扇をサツとひらき、要にフツと息をかけて、あなたへ投げると、扇はツイと風に乗って飛ぶよと見るまに、ひらりと一羽の鶴に化してのどかに空へ舞いあがった。

ア——と竹童は目をみはっていると、たちまち、宙天からすさまじい疾風を起してきた黒い大鷲、鶴を目がけてパツと飛びかかる。鶴は白毛を雪のごとく散らして逃げまわり、驚のするどい爪に追いかけてられて、果心居士の手もとへ逃げて下りてきたが、そのとたん、居士がひよいと手をのばすと、すでに、鶴は一本の扇となつて手のうちにつかまれ、それを追ってきた大鷲は、居士の膝の前に翼をおさめて、ピツタリおとなしくうづくまっている。

二

「竹童竹童、その泉の水を少々くんでこい」

「ハイ」

あつけにとられて見ていた竹童は、居士にいつつけられたまま、岩のあいだから、こんこんと湧きいでている泉をすくってきた。

「かわいそうにこの驚は、片目を鉄砲で撃たれているため、だいぶ苦しがつている。はやくその霊泉で洗ってやるがよい。すくなおる」

「ハイ」

竹童は草の葉ひとつかみを取ってひたし、いくたびか驚の目を洗ってやった。大驚は心地よげに竹童のなすがまにまかせていた。

「おまえの道案内はこの驚だ。これに乗ってかける時は千里の旅も一日の暇じゃ、よいか」

「これに乗るんですか、お師匠さま、あぶないナ」

「たわけめが」

喝！ と叱りつけた果心居士は、竹童がアツというまに襟くびをグツとよせて、

「エーッ」と一声、片手につかんでほうりなげた。ブーンと風を切った竹童のからだは、珠のごとく飛んで、はるかあなただの築山の上へいって、ヒョッコリ立ったが、たちまち、そこからかけもどってきてニコニコ笑いながら澄ましている。

「お師匠さま、またいたずらをなさいましたね」

「どうだ、どこかけがでもしたか」

「いいえ、そんな竹童ではごさいません。わたしはお師匠さまから、まえに浮体の術を授かっておりますもの」

「それみよ。なぜいつもその心がけでおらぬ。この驚に乗っていくのがなんであぶない、浮体の息を心得てのれば一本の藁より身のかるいものだ」

「わかりました。さっそくいってまいります」

「才書面にて認めておいたが、時おくれては、武田伊那丸さまのお身があぶない、いや、あるいは小幡民部どのの命にもかかわる、いそいでいくのじゃ」

「そして、だれにこの手紙をわたすのですか」

「高尾の奥院にかくれている、加賀見忍剣どのという者にわたせばよい。その忍剣はこの驚のすがたを毎日待ちこがれているであろう。またこの驚も靈驚であるから、かならず忍剣のすがたを見れば地におりていくにちがいない」

「かしこまりました。よくわかりました」

「かならず道草をしてはならぬぞ」

「ハイ、心得ております」

と竹童はしたくをした——したくといっても、例の棒切れを刀のように腰へさして、稗と草の芽を団子にした兵糧をブラさげて、ヒラリと驚の背にとびつくが早い、驚は地上の木を葉をワラワラとまきあげて、青空たかく飛びあがった。

伊那丸とちがつて竹童は、浮体の法を心得ているうえ、深山にそだつて鳥獣をあつかいなれている。かれはしばらく目をつぶっていたがなれるにしたがつて平気になりはるかの下界を見廻しはじめた。

「才才高い高い、もう鞍馬も貴船山も半国ヶ岳も、あんな遠くへ小ツちゃくなつてしまった。やア、京都の町が右手に見える、むこうに見える鏡のようなのは琵琶湖だナ、この眼下は天津の町……」

と夢中になつていっているうちに、ヒュツとなにかが、耳のそばをうなつてかすりぬけた。

「や、なんだ」

と竹童はびっくりしてふりかえった時、またもや下からとんできたのは白羽の征矢、つづいてきらきらとひかる鍬が風を切つて、三の矢、四の矢と隙もなくうなつてくる。

「おや、さてはだれか、この驚をねらうやつがある、こいつ

はゆだんができないゾ」

と竹童は例の棒切れを片手に持って、くる矢くる矢をパラパラと打ちはらっていたが、それに気をとられていたのが不覚、たいせつな果心居士の手紙を、うっかり懐中から取りおとしてしまった。

「アッ、アアアアア……しまった！」

ヒラヒラと落ちいく手紙へ、思わず口走りながら身をのぼしたせつな、竹童のからだまで、あやうく鷺の背中からふりおとされそうになった。

三

大津の町の弓道家、山県之助は、このあいだ、日吉の五重塔であやしいものを射損じたというので、かれを今為朝とまでたたえていた人々まで、にわかに関市に返して、さんざんに悪い評判をたてた。

それをうるさいと思つてか、蔦之助は、以来ピツタリ道場の門をとぎして、めつたにそとへすがたを見せず、世間の悪口もよそに、兵書部屋へこもり、ひたすら武技の研究に余念がなかつた。

その日も、しずかに兵書をひもといていた蔦之助は、ふと町にあたって、ガヤガヤという人声がどよみだしたので、文字から目をはなして耳をそばだてた。とそこへ、下僕の関市が、あわただしくかけこんできてこういう。

「旦那さま旦那さま。まアはやくでござらんさいまし、とてもすばらしい大鷲が、比叡のうしろから飛びまわってまい

りました。お早く、お早く」

「鷲？」

と蔦之助は部屋から庭へヒラリと、身をおどらして大空をあおぐと、なるほど、関市のぎょうさんなしらせも道理、かつて話に聞いたこともない黒鷲が、比叡の峰の背からまっさかさまに大津の空へとかかってくるところ。

「関市！ 張りの強い弓を！ それと太矢を七、八本」

「へい」と関市が、大あわてで取りだしてきた節巻の籐にくすね引きの弦をかけた強弓。とる手もおそしと、槇の葉鏃の太矢をつがえた蔦之助は、虚空へむけて、ギリギリとひきしぼるよと見るまに、はやくも一の矢プツン！ と切る、すぐ関市が代り矢を出す。それを取ってさらに射る。その迅さ、あざやかさ、目にもとまらぬくらい。

しかしその矢は、二どめからみな宙にあがって二つにおれ、ハラリ、ハラリと地上に返ってくる。てつきり鷲の上には何者かがいる！ 蔦之助ももとより射おとすつもりではない。そのふしぎな人物をなんとかして地上へおろしてみたら、あるいは、日吉の塔の上にいる、奇怪な人間のなぞもとけようかと考えたのであつた。

矢数はひょうひょうと虹のごとく放たれたが、時間はほんの瞬間、すでに大鷲は町の空を斜めによぎって、その雄姿を琵琶湖のほうへかけさせたが、なにか白い物をとちゅうからヒラヒラと落とさした。それを見て、

「よしッ」

ガラリと弓を投げすてた蔦之助は、紙片の落ちたところを目ざして、息もつかさずにかけた。

飛ぶがごとく町はずれをでたかれは、一念がとどいて、ある原へ舞いおちたものをひろった。手にとって開いてみれば、芭蕉紙ぐるみの一通の書面。

加賀見忍剣どのへ知らせん この状を手にされし日 たち
だちに錫杖を富士の西裾野へむけよ たずねたもう
御方あらん 同志の人々にも会い給わん

かしん居士

四

竹童は弱った。しんそこからこまった。

大切な手紙を取りおとしては、お師匠さまから、どんなお叱りをうけるか知れないと、かれはあわてて驚をおろした。そこはうつくしい鳩鳥の浮いている琵琶湖のほとり、膳所の松原のかげであった。

「これク口よ、おいらが手紙をさがしてくるあいだ、後生だから待つてるんだぞ、そこで魚でも取って待つているんだぞ、いいか、いいか」

竹童は驚にたいして、人間にいい聞かせるとおりのことをばを残し、スタスタ松と松のあいだを走りだしてくると、反対にむこうからも息をきって、こなたへいそいできたひとりの武士があつた——いうまでもなく山県蔦之助である。

ふたりはバツタリ細い小道でゆき会った。竹童がなにげなく蔦之助の片手をみると、まさしくおとした手紙をつかんでいる。蔦之助もまた、素はだし尻きり衣服に、棒切れを腰に

さした、いような小僧のすがたに目をみはった。

「これ子供、子供。……つんぽか、なぜ返辞をせぬ」

「おじさん、おいら子供じゃないぜ」

「なに子供じゃないと、では何歳じゃ」

「九ツだよ。だけれど大人だけの働きをするから子供じゃない、アアそんなことはどうでもいい、おいらおじさんに聞きたいけれど、そっちの手につかんでいるものはなんだい？ 見せておくれよ」

「ばかをもうせ。それより拙者のほうがきくが、いましがた、

お津の町の上をとんでいた驚が、ここらあたりでおいた形跡はないか、どうじゃ」

「白ばツくれちやいけな。その手紙をおだしよ」

「この童めツ、無礼をもうすな」

「なにツ、返さなきやこうだぞ」

と、竹童からだは小さいが身ごなしの敏捷おどろくばかり、不意に蔦之助に飛びかかったと思うと、かれの手から手紙をひつたくって、バラバラと逃げだした。

「小僧ツ——」と追い討ちにのびた蔦之助の烈剣に、あわや、

竹童まツ二つになったかと思れば、切ッ先三寸のところから一躍して四、五間も先へとびのいた。

「きやつ、ただ者ではない」ととっさにおもった蔦之助は、いっさんに追いかけながら、ピュツと手のうちからなげた流星の手裏剣！ それとは、さすがに用心しなかつた竹童の踵をぷツつり刺しとめた。

「あッ！」ドタリと前へころんだところを、すかさずかけよってねじつけた、蔦之助の強力。それには竹童も泣きそうに

なった。

「おじさん、おじさん、なんだっておいらの手紙をそんなにほしがるんだい——苦しいから堪忍しておくれよ。この手紙は大切な手紙だから」

「なんじゃ、ではこの書面は汝が持っていた物か」

「ああ、おいらが遠方の人へとどけにいくな」

「ではいませがた、鷲の上ののつていたのは？」

「おいらだよ、アア、喉がくるしい」

「えッ、そのほうが」

とびつくりして、竹童をだきおこした鷲之助は、しばらくしげしげとかれの姿をみつめていたが、やがて、松の根方へ腰をおろして、心からこのおさない者に謝罪した。

「知らぬこととはもうせ、飛んだ粗相をいたした。どうかゆるしてくれい、そこで、あらためて聞きたいが、御身はその手紙にある果心居士のお弟子か」

「そうだ……」竹童も岩の上にあぐらをかいて、腰のふくろから薬草の葉を取りだし、手でやわらかにもんだやつを踵のきずへはりつけている。

「ではさきごろ、日吉の五重塔へ登っていたのも居士ではなかったか、恥をもうせば、里人の望みにまかせて射たところが、一羽の鷲となって逃げうせた」

「おじさんはむちやだなあ、おいらのお師匠さまへ矢をむけるのは、お月さまを射るのと同じだよ」

「やっぱりそうであったか、いや面目もないことであった。

ところで、さらにくだいようじゃが、そちの持っている書面にある加賀見忍剣ともうすかたは、ただいまどこにおいでに

なるのか、また、たずねるお方とはどなたを指したもののか、山県鷲之助が頭をさげてたのむ。どうか教えてもらいたい」

「いやだ」

竹童はきつくかぶりをふった。

「なぜ？」

「わからないおじさんだナ、なんだって人がおとした手紙のなかをだまって読んだのさ。だからいやだ」

「ウーム、それも重々拙者が悪かった、ひらにあやまる」

「じゃあ話してやってもいいが、うかつな人にはうち明けられない、いったいおじさんは何者？」

「父はもと甲州二十七将の一人であったが、拙者の代となつてからは天下の浪人、大津の町で弓術の指南をしている山県鷲之助ともうすものじゃ」

「えッ、じゃあおじさんも武田の浪人か——ふしぎだなア：：おいらのお師匠さまも、ずっと昔は武田家の侍だったんだ」

といいかけて竹童は、まえに居士から口止めされたことに気がついたか、ふツと口をつぐんでしまった。そのかわり、これから、居士の命をうけて武州高尾にいる忍剣のところへいくこと、また過日、小幡民部から通牒がきて、なにごとか伊那丸の身边に一大事が起っているらしいということ、さては、書中にある御方という人こそ信玄の孫武田伊那丸であることまで、残るところなく説明した。

聞きおわった鷲之助は、こおどりせんばかりによるこんだ。武田滅亡の末路をながめて、悲憤にたえなかつたかれは、伊那丸の行方を、今日までどれほどたずねにたずねていたか知

れないのだ。

「これこそ、まことに天冥のお引きあわせだ。拙者もこれよりすぐに、富士の裾野へむけて出立いたす、竹童とやら、またいつかの時にあうであらう」

「ではあなたも裾野へかけつけますか、わたしもいそがねば、伊那丸さまの一大事です」

「おお、ずいぶん気をつけていくがよい」

「大じょうぶ、おさらばです」

竹童はふたたび鷺の背にかくれて、舞いあがるよと見るまに、いつきに琵琶湖の空をこえて、伊吹の山のあなたへ――。

いっぼう、山鳥之助は、その日のうちに、武芸者姿いさましく、富士ヶ根さして旅立った。

五

「まだきょうも空に見えない、ああクロはどうしたろう……？」

毎日高尾の山巔にたつて、一羽の鳥影も見のがさずに、鷺の帰るのを待ちわびている者は、加賀見忍剣その人である。

快風一陣！ かれを狂喜せしめた便りは天の一角からきた。クロの足にむすびつけられた伊那丸の血書の文字、竹童もたらしてきた果心居士の手紙。かれははふりおつる涙をほらいつつ、二通の文字をくり返しくりかえし読んだ。

「これを手に受けたらその日に立てとある――オオ、こうしてはいられないのだ。竹童とやら、はるばる使いにきてご苦労だったが、わしはこれからすぐ、伊那丸さまのおいでにな

るところへいそがねばならぬ、鞍馬へ帰ったら、どうかご老台へよろしくお礼をもうしあげてくれ」

「ハイ承知しました。だけれどお坊さん、おいらは少しこまったことができてしまった」

「なんじゃ、お使いの褒美に、たいがいのことは聞いてやる、なにか望みがあるならもうすがよい」

「ううん、褒美なんかいらないけれど、そのクロという鷺はお坊さんのものなんだネ」

「いやいや、この鷺はわたしの飼う鳥でもない、持主といえ、武田家にご由緒のふかい鳥ゆえ、まず伊那丸君の物とでももうそうか」

「ネ、おいら、ほんをいうと、このクロと別れるのがいやになってしまったんだよ。きつと大切にして、いつでも用のある時には飛んでいくから、おいらにかしといてくれないか」
天真爛漫な願いに、忍剣もおもわず微笑んでそれをゆるした。竹童は大よろこび、あたかも友だちにだきつくようにクロの背なかへふたたび身を乗せて、忍剣に別れを告げるのも空の上から――いずこともなく飛びさってしまった。

間もなく、高尾の奥院からくだったきた加賀見忍剣は、神馬小舎から一頭の馬をひきだし、鉄の錫杖をななめに背にむすびつけて、法衣の袖も高からげに手綱をとり、夜路山路のきらいなく、南へ南へと駒をかけとばした。

ほのぼの明けた次の朝、まだ野も山も森も見えぬ霧のなかから、

「オーイ、オーイ」

と忍剣の駒を追いかけてくる者がある。しかも、あとから

くる者も騎馬と見えて、パパパパとひびく蹄の音、はて何者かしらと、忍剣が馬首をめぐらせて待ちうけているとたちまち、目の前へあらわれてきた者は、黒鹿毛にまたがった白衣の男と朱柄の槍を小わきにかいこんだりりしい若者。

「もしやそれへおいでになるのは、加賀見忍剣どのではござらぬか」

「や！ そういわれる其許たちは」

「おお、いつか裾野の文殊閣で、たがいに心のうちを知らず、伊那丸君をうばいあった木隠龍太郎」

「またわたくしは、巽小文治ともうす者」

「おお、ではおのおのがたも、ひとしく伊那丸さまのおんために力をおあわせくださる勇士たちでしたか」

「いうまでもないこと。忍剣どのおはなしは、くわしくのちにうけたまわった。じつは我々兩名の者は、小太郎山に砦をきづく用意にかかっておりましたが、はからずも主君伊那丸さまが、穴山梅雪の手にかまれて、きょう裾野へさしかかるゆえ、出会せよという小幡民部どのからの謀状、それゆえいそぐとところでござる」

「思いがけないところで、同志のおのおのと落ち会いましたことよ。なにをつつみましよう。まこと、わたくしもこれよりさしていくところは、富士の裾野」

「忍剣どのも加わるとあれば、千兵にまさる今日の味方、穴山一族の木ッ葉武者どもが、たとえ、幾百幾千騎あろうとも、おそれるところはござりませぬ」

「きょうこそ、若君のおすがたを拝しうるは必定です」

「おお、さらば一刻もはやく！」

轡をならべて、同時にあてた三騎の鞭！ 一声高くないなき渡って、霧のあなたへ、駒も勇士もたちまち影を没しきつたが、まだ目指すところまでは、いくたの嶮路いくすじの川、渺茫裾野の道も幾十里かある。

霧ははれた。そして紺碧の空へ、雄大なる芙蓉峰の麗姿が、きょうはことに壮美の極致にえがきだされた。

富士は千古のすがた、男の子の清い魂のすがた、大和撫子の乙女のすがた。——日本を象徴した天地に一つの誇り。

いまや、その裾野の一角にあつて、咲耶子がふつたただ一本の笛の先から、震天動地の雲はゆるぎだした。閃々たる稲妻はきらめきだした。

雨を呼ぶか、雷が鳴るか、穴山軍勝つか、胡蝶陣勝つか？ 武田伊那丸と小幡民部の民蔵は、どんな行動をとりだすだろうか？ 富士はすべて見おろしている——

水火陣法くらべ

一

胡蝶の陣！ 胡蝶の陣！

裾野にそよぐ穂すすきが、みな閃々たる白刃となり武者となつて、声をあげたのかと疑われるほど、ふいにおこつてきた四面の伏敵。

野末のおくにさそいこまれて、このおとしあなにかかった穴山梅雪入道は、馬からおちんばかりにぎょうてんしたが、

あやうく鞍つばに踏みこたえて、腰なる陣刀をひきぬき、「退くな。たかの知れた野武士どもがなにほどぞ、一押しにもみつぶせや！」

と、うろたえさわぐ郎党たちを上げました。

音にひびいた穴山一族、その旗下には勇士もけつしてすくなくない。天野刑部、佐分利五郎次、猪子伴作、足助主水正などは、なかでも有名な四天王、まっさきに槍の穂をそろえておどりたち、

「おうッ」

と、吠えるが早い、胡蝶の陣の中堅を目がけて、無二無三につきすすんだ。それにいきおいつけられたあとの面々、「それッ。烏合のやつばら、ひとりあまさず、討つてとれ」と、具足の音を霰のようにさせ、槍、陣刀、薙刀など思もおもいな得物をふりかざし、四ほうにパツとひらいて斬りむすんだ。

「やや一大事！ だれぞないか、伊那丸の駕籠をかためていた者は取つてかえせ、敵の手にうばわれては取りかえしがつかぬぞッ」

たちまちの乱軍に、梅雪入道がこうさけんだのも、もつとも、大切な駕籠はほうりだされて、いつのまにか、警固の武士はみなそのそばをはなれていた。

「心得てござります」

いち早くも、梅雪の前をはしりぬけて、れいの——伊那丸がおしこめられてある鎖駕籠の屋根へ、ヒラリととびあがって八ほうをにらみまわした者は、別人ならぬ小幡民部であった。

かりにも、乗物の上へ、土足で跳ひあがった罪——ゆるし給え——と民部は心に念じていたが、とは知らぬ梅雪入道、ちらとこの態をながめるより、

「お、新参の民蔵であるな、いつもながら気転のきいたやつ……」

とたのもしそうにニッコリとしたが、ふとまた一ほうをかえりみて、たちまち顔いろを変えてしまった。

二

咲耶子がふった横笛の合図とともに、押しつつんできた人数はかれこれ八、九十人、それに斬りむかっていた穴山方の郎党もおよそ七、八十人、数の上からこれをみれば、まさに、そうほう互角の対陣であった。

しかし、一ほうは勇あつて訓練なき野武士のあつまり。こなたは兵法のかけ引き、実戦の経験もたしかな兵である。

梅雪入道ならずとも、とうぜん、勝ち穴山方にありと信じられていた。ところが形勢はガラリとかわつて、なにごとぞ、四天王以下の面々は名もなき野武士の切ッ先にかいまわされ、胡蝶の陣の変化自在の陣法にげんわくされて、浮き足みだしくてくずれ立ってきた。と見るや、怒りたつた入道は、

「ええ腑甲斐のない郎党ども、このうえは、梅雪みずからけちらしてくれよう！」

両の手綱を左の手にあつめ、右手に陣刀をふりかざしてあわや、乱軍のなかへ馬首をむけてかけ入ろうとした。

とそのとき、

「しばらくしばらく、そもわが君は、お命をいずこへ捨てに
いかれるお心でござるか！」

声たからかに呼びとめた者がある。

「なに？」ふりかえてみると、それは、伊那丸の駕籠の上
に立った小幡民部。梅雪はせきこんで、

「やあ、民蔵、汝はなにをもつて、さような不吉をもうすの
じゃ」

「されば、殿の御身を大切と思えばこそ」

「して、なんのしさいがあつて」

「眼を大にしてごらんあれ。敵は野武士といいながら、神変
ふしぎな少女の陣法によつてうごくもの、これすなわち奇兵
でござる。あなどつてその策におちいるときは、殿のお命と
てあやうきこと明らかでござりまする」

「うーむ、してかれの陣法とは」

「伏現自在の胡蝶の陣」

「やぶる手策は？」

「ござりませぬ」

「ばかなッ」

「うそとおぼし召すか」

「おおき、年端もゆかぬ女童が指揮する野武士の百人足らず、
なんで破れぬことがあるうか」

「ではしばらくここに四ほうを觀望なさるがなにより。お
お佐分利五郎次の組子はやぶれた、ああ足助主水正もたちま
ち袋のねずみ……」

「なんの、余が四天王じゃ、いまにきつと盛り返して、あの
手の野武士をみな殺しにするであらうわ」

「危ういかな、危ういかな、かしこの窪地へ追いこまれた
猪子伴作、天野刑部、その他十七、八名の味方の者どもこそ、
すんでに敵の術中におちいり、みな殺しとなるばかり」

「や、や、や、や、や！」

「おお！ 殿にもご用意あれや、早くも伊那丸の駕籠を目が
けて、総勢の力をあつめてくるような敵の奇変と見えまする
ぞ」

「お、お、お、民蔵民蔵、汝になんぞ策はないか」

梅雪のようすは、にわかにはうろたえて見えだした。

「おそれながら、しばしのあいだ、殿の采配を拙者におかし
たまわるなら、かならず、かれの奇襲をやぶつて味方の勝利
となし、なお、野武士を指揮なすあやしき少女をも生けどつ
てごらんに入れます」

「ゆるす、すこしも早く味方の者を救いとらせい」

さしも強情な穴山梅雪も、論より証拠、民部のことばのと
おり、味方がさんざん敗北となつてきたのを見て、もうゆう
よもならなくなつたのであらう。こなたへ駒を寄せてきて、
小幡民部の手へ采配をさずけた。

「ごめん」

受けとつて押しいただいた民部は、駕籠の上に立つたまま、
八ほうの戦機をきつと見渡したのち、おごそかに軍師たるの
姿勢をとり、采のさばきもあざやかに、

さッ、さッ、さッ。

虚空に半円をえがいて、風をきること三度。

ああなんといい見事さ、それこそ、本朝の諸葛亮か孫呉
かといわれた甲州流の軍学家、小幡景憲の軍配ぶりとそッく

りそのまま。

「や？」

よもや、新参の民蔵が、その人の一子、民部であろうとは、夢にも知らない梅雪入道、おもわず驚嘆の声をもらしてしまつた。

三

月の夜には澄み、朝は露をまろばせても、聞く人もないこの裾野に、ひとり楽しんでる笛は、咲耶子が好きで好きでたまらない横笛ではないか。

しかし、その優雅な横笛は、時にとつて身を守る剣ともなり、時には、猛獣のような野武士どもを自由自在にあやつるムチともなる。

いましも、小高い丘の上にとつて、その愛笛を頭上にたかくささげ、部下のうごきから瞳をはなたずにいた彼女のすがたは、地上におりた金星の化身といおうか、富士の女神とたとえようか、文なす黒髪は風にみだれて、麗しいともなるともいえない。

「アッ——」

ふいに、彼女の唇を洩れたかすかなおどろき。

その眸のかがやくところをみれば、いまがいままでしどろもどろにみだれたつていた、穴山梅雪の郎党たちはひとりの武士の采配を見るや、たちまちサツと退いて中央に一行となつた。

それは民部の立てた蛇形の陣。

咲耶子はチラと眉をひそめたが、にわかには右手の笛をはげしく斜めにふって落とすこと二へん、最後に左の肩へサツとあげた。——とみた野武士の猛勇は、ワツと声つなみをあげて、蛇形陣の腹背から、勝ちにのつて攻めかかった。

そのとき早く、ふたたび民部の采配が、龍を呼ぶごとくさつとうごいた。と見れば、蛇形の列は忽然と二つに折れ、まゑとは打つてかわつて一糸みだれず、扇形になってジリジリと野武士の隊伍を遠巻きに抱いてきた。

「あッ、いけない。あれはおそろしい鶴翼の計略」

咲耶子はややあわてて、笛を天から下へとふってふつてふりぬいた。

それは退軍の合図であつたと見えて、いままで攻勢をとつていた野武士たちは、一どにどツと潮のごとく引きあげてきたようす。が、民部の采配は、それに息をつく間もあたえず、たちまち八射の急陣と変え、はやきこと奔流のように、追えや追えやと追撃してきた。

「才、なんとしたことであろう」

あまりの口惜しさに、咲耶子はさらに再三再四、胡蝶の陣を立てなおして、応戦をこころみだが、こなたで焰の陣をしけば、かれは水の陣を流して防ぎ、その軍配は孫呉の化身か、楠の再来かと、あやしまれるほど、機略縦横の妙をきわめ、手足のごとく、奇兵に奇兵を次いでくる。

さすがの胡蝶陣に妙をえた咲耶子も、いまはほどこすに術もなくなくなった。精銳無比の彼女の部下の刃も、いまはしだいしだいに疲れてくるばかり。

「それッ、この機をはずすな！」

「いずこまでも追って追って追いまくれッ」

「裾野の野武士を根絶やしにしてくれようぞ」

穴山の四天王猪子伴作、足助主水正、その他の郎党は、民部が神のごとき采配ぶりにたちまち頽勢を盛りかえし、猛然と血槍をふるって追撃してきた。

西へ逃げれば西に敵、南に逃げれば南に敵、まったく民部の作戦に翻弄されつくした野武士たちは、いよいよ地にもぐるか、空にかけるのほか、逃げる路はなくなってしまった。

と、咲耶子のいる丘の上から、悲調をおびた笛の音が一声高く聞えたかと思うと、いままでワラワラ逃げまどっていた野武士たちの影は、忽然として、草むらのうちにかくれてしまった。胆をけた穴山一族の将卒は、血眼になって、草わけ、小川の縁をかけまわったが、もうどこにも一人の敵すら見あたらず、ただいちめんの秋草の波に、野分の風がザアザアと渡るばかり。

狐につままれたようならたえざまを、丘の上からながめた咲耶子は、帯のあいだに笛をはさみながら、ニッコリ微笑をもらして、丘のうしろへとびおりようとしたその時である。

「咲耶子とやら、もうそちの逃げ道はないぞ」

りんとした声が、どこからか響いてきた。

「え？」思わず目をみはった彼女の前に、ヒラリとおどりあがってきたのは、いつのまにここへきたのか、さっきまで采配をとって敵陣にすがたをみせていた小幡民部であった。

「あッ」

さすがの彼女もびっくりして、丘のあなたへ走りだすと、そのまえに、四天王の佐分利五郎次が、八、九人の武士と

もに、槍ぶすまをつくってあらわれた。ハツと思つて横へまわれれば、そこからも、不意にワーツと鬨の声があがった。うしろへ抜けようとすればそこにも敵。

いまはもう四面楚歌だ。絶望の胸をいだいて、立ちすくんでしまふよりほかなかった。とみるまに、丘の上は穴山方の薙刀や太刀で、まるで剣をうえた林か、針の山のように、いっばいにうずまつてしまった。

「咲耶子、咲耶子、もういかにもがいても、この八門鉄壁のなかからのがれることはできぬぞ、神妙に繩にかかつてしまえ」

小幡民部は、声をはげましてそういった。

無念そうに、唇をかみしめていた咲耶子は、ふたたびかくれた野武士たちを呼びだすつもりか、帯のあいだの横笛をひきぬいて、さつと、ふりあげようとしたが、その一瞬、

「えい、不敵な女め」

佐分利五郎次が、飛びかかるが早いか、ガラリとその笛を打ちおとすと、とたんに、右からも、走りよつた足助主水正が早業にかけられて、あわれ、野百合のような小娘は、情け容赦もなくねじあげられてしまった。

天罰くだる

一

たったひとりの少女を生けどるのに四天王ともある者や、

多くの荒武者が総がかりとなったのは、大人げないと恥ずべきであるのに、かれらは大将の首でもとったように、ワツと、勝鬨をあげながら、丘の上からおりていった。

まもなく、馬前へひッ立てられてきた咲耶子をひとめ見た梅雪入道は、鞍の上からはったとにらみつけて、

「こりや小娘ツ、ようも汝は、道しるべをいたすなどともうして、思うさまこの方をなぶりおったな。いまこそ、その細首をぶち落としてくれるから待っておれ」

面に朱をそそいで、鞍の上からののしったのち、
「民蔵民蔵」とはげしく呼び立てた。

「はッ」と走りだした小幡民部は、チラと、入道のおもてを見ながら片手をつかえた。

「なんぞご用でござりまするか」

「おお民蔵か、あっぱれなそのほうの軍配ぶり、褒美は帰国のうえじゆうぶんにとらすであろう、ところで、不敵なこの小娘、生かしておけぬ、そちに太刀とりをもうしつくるほどに、余が面前で、血祭りにせい」

「あいや、それはしばしご猶予ねがいまする」

「なに、待てともうすか」

「御意にござりまする。いまこの小娘を血祭りにするときは、ふたたびまえにもてあましたる野武士が、復讐に襲うてくること必定。もとより、千万の野武士があらわれようとて、おそるるところはござらぬが、この小娘をおとりとして、さらに殿のお役に立てようがため、せつかく生捕りにいたしたものの、むざむざここで首にいたすのはいかがとぞんじます」

「奇略にとんだその方のことゆえ、なお上策があればまかせ

おくが、して、この小娘をおとりにしてどうする所存であるか」

「秘中の秘、味方といえども、余人のいるところでは、ちともしかねます」

「もつともじゃ、ではこれへしたためて見せい」

ヒラリと投げてきたのは一面の軍扇。

民部は即座に矢立をとりよせ、筆をとって、サラサラ八行の詩を書き、みずから梅雪の手もとへ返した。

「どれ」と、入道はそれを受けとり、馬上で扇面の文字を読み判じて――

「む、どこまでもそちは軍師じゃの」と膝をたたいて、感嘆した。その秘策とは、すなわち、これから馬をすすめて五湖の底にあるという武田家の宝物御旗楯無をさぐりだし、同時に、伊那丸をもそこで首にしてしまおうというおそろしい献策。

じつは穴山梅雪も、これから甲斐の国へはいる時は、武田の残党もあろうゆえ、伊那丸を首にする場所にも、心をいためていたところだった。しかし、この富士の裾野なら安心でもあるし、御旗楯無の宝物まで、手にはいれば一挙両決、こんなうまいことはない。すぐまた都へ取ってかえし、家康から、多大の恩賞をうけ、そのうえ帰国してもけっしておそくはない。

「そうだ、この小娘もそのとき首にすれば、世話なしというもの……」

梅雪はとっさにそう思ったらしい、あくまで信じきっている民部の献策にまかせて、ふたたび郎党を一列に立てなおし、

民部と咲耶子を先にして、裾野を西へ西へとうねっていった。そのあいだに民部は、なにごとかひくい声で、咲耶子にさやいたようであった。かしこい彼女は、黙々として聞えぬふりで歩いてしたが、その瞳は、ときどき意外な表情をして民部にそがれた。そんな、こまかいふたりの挙動は、はるかあとから騎馬でくる梅雪の目に、べつだんあやしくもうつらなかつた。

やがて、裾野の野道がつきて、長い森林にはいつてきた。そこをぬけると、青いさざなみが、木の間から見えだした。

「おお湖水へでた！ 湖が見えた！」

軍兵どもは、沙漠に泉を見つけたように口々に声をもらした。そのほとりには、小さな社があるのも目についた。つかつかと社の前へあゆみ寄つた小幡民部は、「白旗の宮」とあるその額を見あげながら、口のうちに、「白旗の宮？ ……源家にゆかりのありそうな……」とつぶやいて小首をかしげたが、ふいと向きなおつて、こんどはおそろしい血相で、咲耶子をただしはじめた。

「これッ。武田家の宝物をはずめた湖水は、ここにそういうあるまい、うそいつわりをもうすと、痛いめにあわずぞ、どうじゃー！」

「は、はい……」咲耶子は、にわかに神妙になつて、そこへひざまずいた。

「もうお隠しもうしても、かなわぬところでござります。おっしゃるとおり、御旗楯無の宝物は、石櫃におさめて、この湖のそこに沈めてあるにそういありません」

「まったくそれにちがいないか！」

「神かけていつわりはもうしませぬ」
「よし、よく白状いたした。おお殿さま。ただいまのことばをお聞きなされましたか」

ちようどそこへ、おくればせに着いた梅雪のすがたをみて、民部が、こういいながら馬上を見上げると、かれは笑つぽに入つてうなずいた。

「聞いた。かれのもうすところたしかとすれば、すぐ湖水からひきあげる手くばりせい」

「はッ、かしこまりました」

民部はいさみ立つたさまをみせて、郎党たちを八ぼうへ走らせた。まもなく、地理にあかるい土着の里人が、何十人となくここへ召集されてきた。そして、狩りだされてきた里人や郎党は、多くの小船に乗りわかれて、湖水の底へ鈎綱をおろしながら、あちらこちらと漕ぎまわつた。

二

陸のほうでは穴山梅雪入道が白旗の宮のまえに床几をすえ、四天王の面々を左右にしたがえて悠然と見ていた。

と、かれの貪慾な相好がニヤニヤ笑みくずれてきた。——湖水の中心では、いまでも鈎にかかった獲物があつたらしい。多くの小船は、たちまちそこに集まって鈎をおろし、エイヤエイヤの声をあわせて、だんだんと浅瀬のほうへひきずつてくるようすだ。

伊那丸と忍剣が智慧をしぼって世の中からかくしておいた宝物も、こうして、苦もなく発見されてしまった。まもなく

梅雪入道の床几の前へ運ばれてきたものは、真青に水苔さびたその石櫃。

「殿さま、ご苦心のかいあって、いよいよご開運の秘宝もめでたく手に入りました。祝 着にぞんじまする」

里人たちに恩賞をやって追いかえたのち、民部はそばから祝いのことをのべた。

「そのほうの手柄は忘れはおかぬぞ。この宝物に伊那丸の首をそえてさしだせば、いかにけちな家康でも、一万石や二万石の城地は、いやでも加増するであろう。そのあかつきには、そのほうもじゅうぶんに取りたて得さす」

「かたじけのうぞんじます。しかし、お望みの物が手にはいりたからには、いっこくも猶予は無用、この場で伊那丸を首にいたし、あの鎖駕籠へは宝物のほうを入れかえにして、寸時もはやく家康公へおとどけあるが上分別とこころえます」

「おお、きょうのような吉日はまたとない。いかにもこの場できやつを成敗いたそう、その介錯もそちに命じる！ぬかるな！」

「はッ、心してつとめます」

梅雪の目くばせに、きツとなつて立ちあがった民部はずばやく下緒を取つて襷となし、刀のつかにしめりをくれた。そのまに、二、三人の郎党は、小船の板子を四、五枚はずしてきて、武田伊那丸の死の座をもうけた。

「これこれ、せんこくの小娘もことのついでじゃ。そこへならべて、民蔵の腕だめしにさせい。旅の一興に見物いたすもよからうではないか」

宮の根もとにくくりつけられていた咲耶子は、罪人のよう

に追つたてられて、板子のならべてあるとなりへすえられた。彼女は、もうすっかり覚悟を決めてしまったか、ほつれ髪もおのかせず、白百合の花そのまま顔をしずかにうつむけている。

いっぽうでは、鎧の音をさせて、ずかずかと迫つていった四天王の面々が、例の鎖駕籠のまわりへ集まり、乗物の上からかぶせてある鉄の網をザラザラとはずしはじめた。

長い道中のあいだ日のめを見ることなく、乗物のうちにゆられてきた伊那丸は、いよいよ運命の最後を宣告され、悪魔の断刀をうけねばならぬこととなった。四天王の天野刑部は、ガチャリ、ガチャリと荒々しく錠の音をさせて、駕籠の引き手をグイとおし開け、

「伊那丸、これへでませいッ」と、涙もなく、ただの罪人でも呼びだすようにどなった。

が——駕籠のなかは、ひっそりとして音もない。

「やい、伊那丸、さツさとこれへでてうせぬか」

猪子伴作は、次にこうわめきながら、駕籠の扉口を土足ではげしくけとばした。と、足もとが、不意に軽くすくわれたので、伴作はあツといつてうしろへよろめく。

すわ！

殺気はたちまちそこにはりつめた。天野、佐分利、足助の三人は、陣刀のつかを握りしめつつ、駕籠口へ身がまえた。

三

「おお夜が明けたようだ……」

つぶやく声といっしょに、伊那丸のすがたは、しずかにそこへあらわれた。じたばたすると思いのほか、落ちつきはらったようすに、四天王の者どもはやや拍子ぬけがいたらしい。

「歩けッ」

左右からせきたてて、小船の板子をしいた死の座へ伊那丸をひかえさせた。そして床几にかけた梅雪に目礼をしてひきさがる。

「おッ、伊那丸さま——」

「あ！ そなたは」

席をならべて伊那丸と咲耶子は、たがいにはツとしたが、彼女は、せつなに顔をそむけ、なにげないようすをした。で伊那丸も、さまざまな疑惑に胸をつつまれながら、眸をそらして、こんどはきつと、入道の顔をにらみつけた。——梅雪もまげずに、

「こりや伊那丸、さだめし今まで窮屈であつたらうが、いますぐ楽にさせてくれる。この世の見おさめに、泣くとも笑うとも、ぞんぶんに狂つて見るがいい」

と、にくにくしい毒口をたたいた。

「さて大人気ない武者どもよ——」

伊那丸は声もすずしくあざわらつて、

「わしひとりの命をとるのに、なんとぎようぎようしいことであろう。冥土におわす祖父信玄やその他の武將たちによい土産ばなし、甲州侍のなかにも、こんな卑劣者があつたと笑うてやろう！」

「えい、口がしこいやつめ、民蔵、早々この童の息のねをとめてしまえ！」

梅雪は、号令した。

声におうじて、

「はッ」と、武者ぶるいして立ちあがった民部は、伊那丸のうしろへまわつて、ピタリと体をきめ、見る目もさむき業刀をスラリと腰からひきぬいた。

「お覚悟なさい！ 太刀取りの民蔵が君命によってみ首はもうしうけた」

「……………」

覚悟——それは伊那丸にとつていまさらのことではない。

かれは糸とりみだすさまもなく、観念の眼をふさいでいる。

正面の梅雪入道をはじめ、四天王以下の大衆も、かたずをのんで、民部の太刀と伊那丸のようすとを見くらべていた。

湖水の波も心あるか、冷たい風を吹きおこして、松の梢にかなしむかと思われ、陽も雲のうちにかくされて、天地は一瞬、ひそとした。

そのとき、民部の口からかすかな声。

「八幡」

水もたまらぬ太刀をふりかぶつて、伊那丸の白い頸をねらいますました。——と、そのするどい眼気が、キラと動いたと見えたと一瞬、

「ええいッ！」

武田伊那丸の首が落ちたかとおもうと、なにごとぞ、梅雪のまッこうめがけて、とびかかった小幡民部、

「悪逆無道の穴山入道、天罰の明刀をくらえ！」

耳をつんざく声だつた。

ふいをくつた梅雪は、ぎようてんして身をさけようとした

が、ヒュツと、眉間をかすめた剣光に眼もくらんで、「わーッ」額の血しおを両手でかさえたまま、床几のうしろへもんどり打ってぶつたおれた。

「曲者」愕然と、おどろあがった四天王たち。同時に、その余の群猛も渦をまいて、

「うぬツ、気が狂ったカッ」

「裏切者ツ——退くな」

とばかり、一どに総立ちになるやいなや、民部の上へ、どツとなだれを打ってきた剣の怒濤。

湖南の三騎士

—

梅雪入道は、みだれ立つ郎党たちの足もとを、逃げまわりながら、

「曲者は武田の残党だツ。伊那丸を逃がすなツ」と絶叫した。

民部はその姿をおつて、

「おのれツ」

無二無三に斬りつけようとしたが、佐分利五郎次にささえられ、じゃまなツ、とばかりはねとばす。そのあいだに、天野、猪子、足助などが、鋒先をそろえてきたため、みすみす長蛇を逸しながら、それと戦わねばならなかった。

いっほう、民部にかかりあつまった雑兵は、伊那丸のほう

へ、バラバラと、かけ集まったが、それよりまえに、咲耶子が、腰の繩を切るがはやいか、伊那丸の手をとって、

「若君。早く早く」

と、よれたかる武者二、三人を斬りふせながらせきたてた。とたんに背なから、一人の武者がかぶりついた。伊那丸は身をねじって、ドンと前へ投げつけ、かれのおとした陣刀をひろいとるがはやいか、近よる一人の足をはらって、さらに、咲耶子へ槍をつけていた武者を斬ってすてた。すべては一瞬の間だった。

伊那丸じしんですら、じぶんでどう動いたかわからない。穴山がたの郎党も、たがいに目から火をだしての狼狽だった。そして白熱戦の一瞬がすぎると、だれしも命は惜しく、八ぼうへワツと飛びのく。——

ひらかれた中心にあるのは、伊那丸と咲耶子とである。二人は背なかあわせに立って、血ぬられた陣刀と懐剣を二方にきつとかまえている。

目にあまるほどの敵も、うかと近よる者もない。ただわアわアと武者声をあげていた。すると、あなたから加勢にきた四天王の足助主水正。

「えい、これしきの敵にひまどることがあろうか」

大身の槍に行き足つけて、伊那丸の真正面へ、タタタタツ、とばかりくりだした。

伊那丸の身は、その槍先に田楽刺しと思われたが、さツとかわしたせつな、槍は伊那丸の胸をかすって流ること四、五尺。

「あツ」

片足を宙にあげてのめりこんだ主水正、しまつたと槍をくりもどしたが、時すでに、ズンとおりの伊那丸の太刀に千段を切りおとされて、無念、手にのこつたのは穂をうしなつた半分の柄ばかり。

「やッ」

捨鉢に柄を投げつけた。そして陣刀をぬきはらつたが、たびたびの血戦になれた伊那丸は、とっさに咲耶子と力をあわせ、いっぽうの雑兵をきりちらして、湖畔のほうへ疾風のようにかけた。

二

そこには、白旗の宮のまえから、追いつ追われつしてきた小幡民部が、穴山の旗本雑兵を八面にうけて、今や必死に斬りむすんでいる。

しかし、小幡民部は、こうした斬合はごく不得手であった。太刀をもつて人にあたることは、かれのよくすることではない。

けれど、軍配をもつて陣頭に立てば、孫呉のおもかげをみるごとくであり、帷幕に計略をめぐらせば、孔明も三舎を避ける小幡民部が、太刀打ちが下手だからといっても、けつしてなんの恥ではない。かれの偉さがひくくなるものではない。民部の本領はどこまでも、奇策無双な軍学家というところにあるのだから。

だが、それほど智恵のある民部が、なんで、こんな苦しい血戦をみずからとめ、みずから不得手な太刀を持って斬り

むすぶようなことをしたのである。なぜ、もつといい機会をねらつて、らくらくと伊那丸を救わないのか。

民部ははじめ、こう考えた。

穴山梅雪の領内、甲州北郡の土地へはいつてからでは、伊那丸を助けることはよいであるまい。これはなんでも途中において目的をはたしてしまうのかぎる。——でかれは、出発にさきだつて鞍馬の果心居士、小太郎山の龍太郎、小文治などの同志へ通牒をとばしておいた。

ところが、裾野へかかつてきた第一日に、咲耶子という意外なものがあらわれた。かれは少女のふしぎな行動を見て、はアこれは伊那丸君を救おうという者だナ、と直覚したが、なにしろ、梅雪の警固には、四天王をはじめ、手ごわい旗本や郎党が百人近くもついているので、あくまで入道をゆだんさせるため、奇計をもつて咲耶子を生けどり、なお、心ひそかに、待つ者がくるひまつぶしに、この湖水までおびきよせたのだ。

ところが、民部の心まちにしている人々は、いまもつてすがたが見えない。——で、いまは最後の手段があるばかりと、途中で咲耶子にもささやいておいたとおりの、驚天動地の火ぶたを切つたのである。

致命傷にはなるまいが、怨敵梅雪へは、たしかに一太刀手ごたえをくれてあるから、このうえはどうかして、一ぼうの血路をひらき、伊那丸君をすくいだそうと民部は心にあせつた。しかし、まえにも、いったとおりの、剣を持っては万夫不当のかれではないから、無念や、そこへ追われてきた伊那丸と咲耶子のすがたを見ながら、四天王の天野、猪子、佐分利な

どにささえられて近よることもできない。

それどころか、いまは民部のじぶんがすでにあぶないありさま。

天野刑部は月山流の達人として、刃渡り一尺四寸の鉈薙刀をふるってりゅうりゅうとせまり、佐分利五郎次は陣刀せんせんと斬りつけてくる。その一人にも当りがたい民部は、はッはッと火のような息を吐きながら、受けつ、逃げつ、かわしつつしていたが、一ぼうは湖、だんだんと波のきわまで追いつめられて、もうまったく袋のねずみだ、背水の陣にたおれるよりほかない。

「よしッ、もうこのほうはひきうけた。猪子伴作は伊那丸のほうへいつてくれ」

「おお承知した」

天野刑部の声にこたえた伴作は、笹穂の槍をヒラリと返して、一ぼうへ加勢にむかった。ところへ、いっさんにかけてきたのは伊那丸と咲耶子、そうほうバツタリと出会いながら、ものをいわず七、八合槍と太刀の秘術をくらべて斬りむすんだが、たちまち、うしろから足助主水正、その他の郎党が嵐のような勢いで殺到した。

あなたでは民部の苦戦、ここでは伊那丸と咲耶子が、腹背の敵にはさみ討ちとされている。ニカ所の狂瀾はすさまじい旋風のごとく、たばしる血汐、丁々ときらめく刃、目も開けられない修羅の血戦。

三つの命は刻々とせまった。

そのころから、秀麗な富士の山肌に、一抹の墨がなすられたきた、——と見るまに、黒雲の帯はむくむくとはてなくひ

ろがり、やがて風さえ生じて、澄みわたっていた空いちめん

にさわがしい色を呈してきた。

雲団々、陽はたちまち暗く、たちまち、ぱッと明るく、明暗たちどころにかわる空の変化はいちいち下界にもうつって、修羅のさけびをあげている湖畔の渦は、しんに凄愴、極致の壮絶、なんといいあらわすべきことばもない。

おりしもあれ！

はるか湖水の南岸に、ポチリと見えだした一点の人影。

画面点景の寸馬豆人そのまま、人も小さく馬も小さくしか見えないが、たしかに流星のごときはやさで湖畔をはしつてくる。それが、空の明るくなった時はくつきりと見え、陽がかげるとともに、暗澹たる蘆のそよぎに見えなくなる。

そも何者？

おお、いよいよ奔馬は近づいてきた。しかもそれは一騎ではない。あとからつづくもう一騎がある。

いや、さらにまた一騎。

まさしくここへさしてくる者は三騎の勇士だ。そのはやきこと疾風、その軽きことかける天馬かとあやしまれる。

三

わーッ、わーッと湖畔にあがったどよみごえ。

さては伊那丸がとらえられたか、咲耶子が斬られたか、あるいは、小幡民部がたおれたのであろうか。

いやいや、そうではなかった。——一声たかくいなないた駒のすがたが、忽然とそこへあらわれたがため。

まッ先におどりこんできたのは、高尾の神馬、月毛の鞍にまたがった加賀見忍剣、例の禅杖をふりかぶって真一文字に、「やあやあ、お心づよくあそばせや伊那丸さま！ 加賀見忍剣、ただいまこれへかけつけましたるぞッ。いでこのうえは穴山一族のへ口へ口武者ども、この忍剣の降魔の禅杖をくらつてくたばれ！」

天雷くだるかの大音声。

むらがる剣を雑草ともおもわず、押しかかる槍ぶすまを枯れ木のごとくうちはらつて、縦横無尽とあばれまわる怪力は、さながら金剛力士か、天魔神か。

時をおかず、またもやこの一角へ、ドツと黒鹿毛の馬首をつツこんできたのは、これなん戒刀の名人木隠龍太郎、つづいて、朱柄の槍をとつては玄妙無比な巽小文治のふたり。

紫白の手綱を、左手に引きしぼり、右手に使いなれた無反りの一剣をひっさげた龍太郎は、声もたからかに、

「それにおいであるのは小幡民部殿か。木隠龍太郎、小太郎山よりただいまご助勢にかけむかってまいったり。木ッ葉武者どもは、拙者がたしかに引きうけもうしたぞ」

黒鹿毛の蹄をあげて、無二無三にかけちらしながら、はやくも鞍上の高きところより、右に左に、戒刀をふるって血煙をあげる。

「いかに穴山入道はいずれにある。巽小文治が見参、卑劣者よ、いずれにまいったか」

十方自在の妙槍をひッ抱え、馬に泡をかませながら、乱軍のうちを血眼になって走りまわっていたのは小文治である。

「うぬ、小ざかしい、いいぐさ」

その姿をチラと見て、まッしぐらにかけよってきた四天王の猪子伴作は怒喝一番、

「素浪人ッ」

さツと下から笹穂の槍を突きあげた。

「おうッ」と横にはらつて返した朱柄の槍。

人交ぜもせず、一騎打ちとなった槍と槍は、閃光するどく、上々下々、秘練を戦わせていたが、たちまち、朱柄の槍さきにかかつて、猪子伴作は田楽刺しとなって、草むらのなかへ投げとばされた。

と、白旗の宮の裏から、よろばいだした法師武者がある。

こなたの混乱に乗じて、そこなる馬に飛びつくや否、死にものぐるいであなたへむかつて走りだした。

オオそれこそ、さきに一太刀うけて、さわぎのうちにどこかへもぐりこんでいた梅雪入道ではないか。

「やッ、きやつめ！」

こなたにあつて、天野刑部の大雑刀と渡りあつていた木隠龍太郎は、奮然と、刑部を一刀の下に斬つてすて、梅雪の跡からどこまでも追いかけた。

ピシリ、ピシリ、ピシリ！ 戒刀の平を鞭にして追いとぶこと一町、二町、三町……だんだんと近づいて、すでに敵のすがたをあいさることわずかに十七、八間。

すると、何者が切つてはなしたのか、梅雪の馬のわき腹へグサと立った一本の矢、いなく声とともに、人もろとも馬はどうと屏風だおれとなった。

行く手の丘に小高いところがあつた。その松の切株の上に立っていたひとりの武者者は、いなく馬の声をきくと、

弓を小わきに持ってヒラリと飛びおりてきた。

悪入道の末路

一

征矢にくるった馬の上から、もんどり打っておとされた穴山梅雪は、朱にそんだ身を草むらのなかより起すがはいか、無我夢中のさまで、道もない雑木帯へ逃げこんだ。

しずかなること一瞬、たちまち、パパパパパパッと地を打ってきた蹄鉄のひびき、天馬飛空のような勢いをもって乗りつけてきたのは木隠龍太郎である。怨敵梅雪が道なきしげみへ逃げこんだと見るや、ヒラリと黒鹿毛を乗りすてて右手なる戒刀を引ッさげたまま、

「卑怯なやつ、未練なやつ、一国の主ともあろうものが恥を知れや、かえせ梅雪！ かえせ梅雪！」

と呼ばわりながら、身を没するような熊笹のなかを追いのぼっていった。

だが、梅雪のほうはそれに耳をかすどころでなく、命が助かりたいの一心で、丘のいただき近くまでよじのぼってくるど、不意に目の前へ、猿かむささびか雷鳥か、上なる岩のいただきから一足とびにはッたとびおりてきたものがある。

「あッ」

おびえきっている梅雪の心は、ふたたびギョツとして立ちすくんだけれど、ふと驚異のものを見なおすとともに、これ

こそ天来のすくいか、地獄に仏かとおどりした。それはたくましい重藤の弓を小わきに持った若い、そしてりんりんたる武者であるから。

梅雪は本能的にさげんだ。

「おおよいところで！ 余は甲州北郡の領主穴山梅雪じゃ、いまわしのあとより追いかけてくる裾野の盗賊どもを防いでくれ、この難儀を救うてくれたら、千石二千石の旗本にも取り立て得させよう。いいや恩賞は望みしだい！」

「さては遠くから見た目にたがわず、そのほうが穴山梅雪入道か」

「かかる姿をしているからとて疑うな、余がその梅雪にちがいないのじゃ、そちが一生の出世の蔓は、いまとせまったわしの危急を救うてくれることにあるぞ」

「だまれ、やかましいわいッ」わかき武者は、その頬べたをはりつけんばかりにどなりつけて、

「音にひびいた甲州の悪入道。よしやどれほどの宝を捧げてこようと、なんで汝らごとき犬侍のくされ扶持をうけようか、たいがいこんなことであろうと、汝の迷足へ遠矢を射たのはかくもうすそれがしなのだ」

「げッ、さてはおのれも」

絶望、驚愕、憤怒！

奈落へ突きのめされた梅雪は、あたかも虎穴をのがれんとして、龍淵におちたような破滅とはなった。もうこのうえはいちかばちか、命はただそれ自分をたのみことにあるのみだ。「うーム。ようもじゃま立てをいたしたな！ 老いたりといえども穴山梅雪、その素ッ首をはねとばしてくれよう」

「ハハハハハハ、片腹かたはらいたい臆病者おくびょうもののたわ言たわごとこそ、あわれあれ、もう汝なんじの天命てんめいは、ここにつきているのだ、男らしく観念くわんねんしてしまえ」

「エエ、いわしておけば」

死身しにみの勇ゆうを奮ふるいおこした梅雪ばいせつの手は、カッと、陣刀じんたうの柄つかに鳴なって、あなや、絞刀こうたうの鞘さやはッッて飛びくこと六、七尺しちしゃく！オオッとはかり、武芸者ぶげいしやのまッこのぞんで斬り下げてきた。

「笑止しょうしや、蠅螂とうろうの斧おのだ」

ニヤリと笑わらった若き武芸者ぶげいしやは、さわぐ気色けしきもなく身みをかわして、左手ゆんでに持もった弓ゆづりの弦つるがヒューッと鳴なるほどたたきつけた。

「あッ」と梅雪ばいせつは二の太刀たがひを狂くるわせ、熊笹くまざさの根ねにつまづいてよろよろとした。

「老いぼれ」

すかさずその襟えりがみをムズとつかんだ武芸者ぶげいしやは、その時ときがサガサと丘かみの下したからかけあがってくる木隠龍太郎こかくりゆうたろうの姿すがたをみとめた。

「あいや、それへおいであるのは、武田伊那丸君たけだいなまるぎみのお身内みうちでござらぬか」

「オオ！」

びっくりして、高き岩頭いわがしらをふりあおいだ龍太郎りゆうたろうは、見なれぬ武芸者ぶげいしやのことばをあやしみながら、

「いかに、伊那丸さまのお傳人もりびと、木隠龍太郎こかくりゆうたろうという者ものでござるが、もしや、貴殿きでんは、このなかへ逃げこんだ血まみれなる法師武者ほうしむしやのすがたをお見かけではなかつたか」

「その入道にゅうだうなれば、わざわざこれまでお登りなされるまでもないこと」

「や！ では、そこにおさえているやつが？」

「オオ、山県やまがた之助のすけが伊那丸君いなまるぎみへ、初見参ういげんざんのごあいさつがわりに、ただいまそれへおとどけもうすぐござろう」

「いかと思えば、若き武芸者ぶげいしや——それはかの近江おうみの住人山県やまがた之助のすけ——カラリと左手の弓ゆづりを投げすてて、梅雪ばいせつ入道にゅうだうの体ていに双もろ手をかけ、なんの苦もなくゆらッとはかり目の上にさしあげて、

「それ、お受けあれや龍太郎どの！」声こゑと一しよに梅雪ばいせつの体ていを、丘おかの下したへ、投げとばしてきた。

二

スポンと紅葉こうようの茂しげりへおちた梅雪ばいせつのからだは、毬まりのごとくころがりだして、土つちとともに、ゴロゴロと熊笹くまざさの崖がけをころがってきた。龍太郎りゆうたろうは、心得こころえたりと引ッつかんで、さらに上なる人ひとをあおぎながら、

「山県やまがた之助のすけどのとやら、まことにかたじけのうござった。

そもいかなるお人かぞんじませぬが、おことばに甘あまえて初見参ういげんざんのお引出ひきだえもの、たしかにちようだいつかまつた。お礼れいは伊那丸さまのご前にまいったうえにて」

「拙者せつしやもすぐあとよりつづきますゆえ、なにぶん、君きみへのお引合ひきあわせを」

「委細承知いさいしやうち、はや、まいられい！」

へトへトになつた梅雪ばいせつを小こわきにかかえた龍太郎りゆうたろうは、さつ

き乗りすててきた駒のところへと、いっさんにかけおりていった。

と、同時に、上からも身軽にヒラリヒラリと飛びおりてきた鳶之助。

龍太郎は、黒鹿毛にまたがって、鞍壺のわきへ、梅雪をひッつるし、一鞭くれて走りだすと、山県鳶之助も、遅れじものと、つづいていく。

一ほう、白旗の宮の前では、穴山の郎党たちは、すでにひとりとして影を見せなかった。そこには凱歌をあげた忍剣、小文治、民部、咲耶子などが、あらためて、伊那丸を宮の階段に腰かけさせ、無事をよろこんでほッと一息ついていた。人々のすがたはみな、紅葉を浴びたように、点々の血汐を染めていた。勇壮といわんか凄美といわんか、あらわすべきことばもない。

なかでも忍剣は、疲れたさまもなく、なお、綽々たる余裕を禅杖に見せながら、

「木ッ葉武者はどうでもよいが、当の敵たる穴山入道を討ちもらしたのは、かえすがえすもさんねんであった。いったいきやつはどこにうせたか」

「たしかにここで拙者が一太刀くれたと思いましたが」

と小幡民部も、無念なていに見えたけれど、伊那丸はあえて、もとめよともいわず、かえって、みなが気のつかぬところに注意をあてた。

「それはとにかく龍太郎のすがたが、このなかに見えぬようであるが、どこぞで、傷手でもうけているのではあるまいか」

「お、いかにも龍太郎のが見えぬ」

一同は入りみだれて、にわかにあたりをたずねだした。すると、咲耶子は耳ざとく駒の蹄を聞きつけて、

「みなさまみなさま。あなたからくるおかたこそ龍太郎さまにそういござりませぬ。オオ、なにやら鞍わきにひッつるして、みるみるうちにこれへまいります」

「や！ ひッさげたるは、たしかに人」

「穴山梅雪？」

「オオ、梅雪をつるしてきた」

「龍太郎の手柄じゃ、でかしたり、さすがは木隠」

口々にさげびながらかれのすがたを迎えさわぐなかにも、忍剣は、ほとんど児童のように狂喜して、あおぐように手をふりながらおどりあがっている——と見るまに、それにもどつてきた龍太郎は、どんと一同のなかへ梅雪をほうりやって、手綱さばきもあざやかに鞍の上から飛びおりた。

「それッ」

待ちかまえていた一同の腕は、期せずして、梅雪のからだにのびる。いまはいやも応もあらばこそ、みにくい姿をズルズルと伊那丸のまえへ引きだされてきた。

民部は、その襟がみをつかんで、

「入道ッ、面をあげろ」と、いった。

「むウ……ム、残念だッ」

穴山梅雪は眉間を一太刀割られているうえに、ここまでのあいだに、いくどとなく投げられたり鞍壺にひッつるされたりしてきたので、この世の者とも見えぬ顔色になっていた。

「さて民部、手荒なことをいたすまい」

もっともうらみ多きはすの伊那丸が、意外にもこういったので、民部も忍剣も、意外な顔をした。

伊那丸はしずかに、階段からおりて、梅雪入道の手をとり、宮の板縁へ迎えあげて、礼儀ただしてこういった。

「いかに梅雪、いまこそ迷夢がさめたであろう、わしのような少年ですら、甲斐源氏を興さんものと、ひたすら心をくだいているのに、いかにとはいえ、二十四将の一人に数えられ、武田家の血統でもある其許が、あかざる慾のためにこのみにくき末路はなにごと。それでも甲州武士かと思えば情けなさに涙がこぼれる。いざ！ このうえはいさぎよく自害して、せめて最期を清うし、末代末練の名を残さぬようにいたすがよい」

「ええうるさいッ」梅雪はもの狂わしげに首をふって、――

「余に自害せいとぬかすか、バカなことを！」

「なんと、もがこうが、すでに天運のつきたるいま、のがれることはなるまいが」

「なろうとなるまいと、汝らの知ったことか。こりや伊那丸、縁からいえば汝の父勝頼の従弟、年からいつても長上にあたるこの梅雪に、刃を向ける気か、それこそ人倫の大罪じゃぞ」

「それゆえにこそこのとおり、礼をただして迎え、自害をすすめ、本分をとげさせんといたすものを、さりとは未練なことば」

「いや、もう聞く耳もたぬ」

「では、どうあっても自害せぬか」

「いうまでもない。余は汝らの命によって、死ぬわけがない。死ぬるのはいやだ！」

「アア、救いがたき卑劣者――」

伊那丸は空をあおいで長嘆してのち、

「このうえはぜひもない……」とつぶやくのを聞いた梅雪は、伊那丸の命令がくだらぬうち、先をこして、やにわに鎧とおしをひき抜き、

「童ッ！ 冥途の道づれにしてくれる」

猛然とおどりかかッて、伊那丸の胸板へ突いていったが、ヒラリとかわして凜々たる一喝の下。

「悪魔ッ」

パツと足もとをはらうと見るまに、五体をうかされた梅雪は、板縁の上から輪をえがいて下へ落とされた。

「人非人、斬ってしまえッ！」伊那丸の命令一下に、

「はッ」

声におうじてくりだした巽小文治の朱柄の槍、梅雪の体在地にもつかぬうちにサツと突きあげ、ブーンと一ふりふってたたき落とした。そこをまた木隠龍太郎の一刀に、梅雪の首は、ゴロリと前に落ちた。

「それでよし、死骸は湖水の底へ」

板縁に立って、伊那丸はしずかに目をふさいでいう。

折から山県之助もかけつけた。あらためて伊那丸に志をのべ、一同にも引きあわされて、一党のうちへ加わることになった。

ポツリ、ポツリ、大粒の雨がこぼれてきた。空をあおげば団々のちぎれ雲が、南へ南へとおそろしいはやさで飛び、たちまち、灰色の湖水がピカリッ、ピカリッと走ってまわる稲妻のかげ。

濛々たる白い幕が、はるか裾野の一角から近づいてくるなと見るまに、だんだんに野を消し、ながき渚を消し、湖水を消して、はや目の前まできた。と思う間もあらせず、ザザザザザザアーツと盆をくつがえすという、文字どおりな大雨の襲来。

めでたく穴山梅雪を討ちとりはしたが、離散して以来のつもる話もあるし、これからさきのそうだんもある折から、爽快なる大雨の襲来は、ちょうどいい雨宿りであろうと、一同は、白旗の宮のあれたる拝殿に入り、そして伊那丸を中心に、しばらく四方の物語にふけていた。

自然城・小太郎山

一
武州高尾の峰から、京は鞍馬山の僧正谷まで、たつた半日でとんでかえったおもしろい旅の味を、竹童はとても忘れることができない。

果心居士のまえに、首尾よくすましたお使いの復命をしたのち、その晩、寝床にはいったけれども、からだはフワフワ雲の上を飛んでいるような心地、目には、琵琶湖だの伊吹山

だの東海道の松並木などがグルグル廻って見えてきて、いくら寝ようとしても寝られればこそ。

「アアおもしろかったなア、あんな気持のいい思いをしたのは生まれてはじめてだ。お師匠さまは意地悪だから、なかなか飛走の術なんか教えてくれないけれど、おいらにクロという飛行自在な友だちができたから、もう飛走の術なんかいらないや。それにしても今夜はクロはどうしているだろう……天狗の腰掛松につないできたんだけれど、あそこでおとなしく寝ているかしら、きつとおいらの顔を見たがって啼いてるだろうナ。アアもう一ど、クロの背なかへ乗ってどこかへ遊びにゆきたい……」

「竹童竹童」となりの部屋で果心居士の声がする。

「ハイ」

「ハイじゃあない、なにをこの夜中にブツブツ寝言をいっている。なぜ早く寝ないか」

「ハイ」

竹童はそら躰をかきだしたが、心はなかなか休まらないで、いよいよ頭脳明晰になるばかりだ。

「ハハア、竹童のやつめ、鷲の背なかで旅をした味をしめて、なにか心にたくらみおるな。よしよし明日はひとつなにかでこらしておいてやろう」

いながらにして百里の先をも見とおす果心居士の遠知の術、となりの部屋に寝ている竹童のはらを読むぐらいなこと
はなんでもない。

とも知らず、夜が明けるか明けないうちに、亀の子のようにムツクリ寝床から首をもたげだした竹童、

「しめた！ お師匠さまはあのとおりな躰、いくらなんでも寝ているうちのことは気がつくまい。どれ、今のうちにおいらの羽をのばしてこようか」

ほそっこい帯をチヨコンとむすび、例の棒切れを腰にさして、ゆうべ食べのこした木の芽団子をムシヤムシヤはおぼりながら、猿のごとく莊園をぬけだした。

そのはよいことは、さながら風！

空にはまだ有明けの月があった。あっちこっちの岩穴からムクムクと白いものを噴いている、朝の霧である。竹童のあい影が平地から崖へ、崖から岩へ、岩から溪流へと走っていくほどに、足音におどろかされた狼や兎、山鳥などが、かれの足もとからツイツイと右往左往に逃げまわる。

いつもの竹童ならば、こんな場合、すぐ狼を手捕りにする、兎を溪流のなかへほうりこむ。とてもいたずらをして道草するのだが、きょうはどうしてそれどころではない。なにしろこれからお師匠さまの朝飯となるまでに、日本国じゅうの半分もまわってこようという勢いなだから。

「やアどうしたんだらう、いない！ いない！」

やがて、瘤ヶ峰のてっぺんにある、天狗の腰掛松の下にたつた竹童は、素ッ頓 狂な声をだしてキヨロキヨロあたりを見まわしていた。

「おかしいな、きのうかえってから、この松の木の根っこへあんな太い縄でしばっておいたのに、どこへとんでっちゃったのだらう」

がっかりして、しばらくあっちこっちをうろろした竹童は、とうとう目から大粒の涙をポロリポロリとこぼしながら、

あかつきの空にむかって声いッぱい！

「クロクロクロクロ。クロクロクロクロクロ」

それでも影を見せてこないの、かれはグンニヤリとなり、天狗の腰掛松へよりかかってしまったが、ふとこのあいだ居士が扇子をなげて鷲を呼びよせた幻術をおもいだし、

「よし、おいらもあの術をまねしてみよう」

竹童はもう目の色かえて一心である。呪文はわからないが、腰の棒切れをぬぎ、一念こめて、エエイッと気合を入れて虚空へ投げる。

棒はツツツと空へ直線をえがいてあがった。

「やア、奇妙奇妙」竹童は嬉しさのあまり、手をたたき、踊りをおどって狂喜した。

と見る、谷をへだてたあなたから、とんでくるのはクロではないか、間の谷を、わずか二つ三つの羽ばたきでさっとくるなり、投げあげられた棒切れを、パクリとくわえて、かれのそばまで降りてきた。竹童が有頂天となったのもむりではない。

二

まもなく、かれはゆうべの夢を実行して、京から大阪、大阪から奈良の空へと遊びまわっている。町も村も橋も河も、まるで箱庭のような下界の地面がみるみるながれめぐってゆく。そのあげくに、ふと思いついたのは、おととい忍剣のいったことばである。

「オオそうだ、なんでもきょうあたりは、富士の裾野に大そ

うどうがあるはずだ。おいらはまだ生まれてから戦いというものをみたことがない。これから一つ裾野までとんでいって、勇ましいところを空から見物してやろう」

つねづね、果心居士からよくお叱言ばかりいただいているくせに、竹童はもう鞍馬山へ帰るのもわすれて、こんな大望をおこした。思いたつては、矢も楯もたまらないかれだった。すぐその足で、富士の姿を目あてに驚をとばした。いかなる名馬で地を飛ぶよりも、こうして空中を自由に飛行する快味は、まるでじぶんがじぶんではなく、生きながら、神か仙人になったような愉快さである。——だが、ここまできたときとちがって、驚はそれから先一向竹童の自由にならない。富士の裾野とは方角ちがいな、北へ北へと向かつて、勝手に雲をぬつてとぶ。

「やい、クロ。そんなほうへいくんじやない、こらッ、こらッ、こらッ！」

竹童はあわてて、いくどもいくども、方向をかえようとしたが、さらにききめがなく、地上へもどらんとしても、いつものようにスラスラと降りてもくれない。ああいったいこれはどうしたことだ。

「チエーツ、畜生、畜生、畜生」

かれはクロの上でかんしゃくをおこし、じれだし、最後にベソをかきだした。

そもそも今日は竹童にとっていかなる悪日か、ベソをかくことばかり突発する日だ。しかし、そう気がついてもうおそい、いくら泣いてもわめいても、驚に一身をたくして雲井の高きにある以上、クロの翼がつかれて、しぜんに大地へ降

りるのをまつよりほかはない。それはまだよかったが、泣き面に蜂、つづいておそるべき第二の大難が起つてきた。

すでに今朝から陰險な相をあらわしていた空は、この時になつて、いっそうわるい気流となり、雷鳴とともに密雲の層はだんだんとあつくなつて、呼吸づまるような水粒の疾風が、たえず、さっさとぶつつかつてきた。

そして、驚が雲より低くいくときは、滝のごとき雨が竹童の頭からザツザとあたり、上層の雲にはいるときは白濛々の夢幻界にまよい、髪の毛も爪の先も、氷となつて折れるような冷寒をかんじる。しかも、クロはこの難行苦行にも屈する色なく、なおとぶことは稲妻よりもはやい。

すると漠々たる雲の海から、黒い山脈の背骨がもっこりとして見えだした。竹童はどうにかして、ここから降りようと苦策を案じ、いきなり手をのばして驚の両眼をふさいでしまった。

人間でも目をふさいでは歩けないから、こうしてやったらきつと止まるだろうという、竹童が必死の名案、はたせるかな驚もおどろいたさまで、糸目のくるつた尻のようにクルクルとめぐりまわりました。かれの計略が図にあたって急に元氣よく、

「もうこつちのものだぞ、しめた、しめた」

とよろこんだが、あわれそれも束の間。

たちまち鳴りはためいた雷が、かれの耳もとをつんざいた一せつな、下界にあつては、ほとんどそうぞうもつかないような朱電が、ピカッピカッと、まつげのさきを交錯したかと思うまもあらばこそ。

「あッ」

といった竹童のからだは、おそるべき稲妻の震力にあつて、驚の背なかからひッちぎられた、そしてまっさかさまとなつて、いずことも知れぬ下へ一直線におちていくのと見る間に——追いつがった驚の嘴は、いきなりパクリと竹童の帯をくわえ、わらか小魚でもさらつていくように、そのまま、模糊とした深岳の一角へ、ななめさがりにかけりだした。

三

「ア痛、アイタタタッ……」

跛をひきながら、草むらよりころげだしたのは竹童である。地上二、三十尺のところまできて、ふいに驚の嘴からはなされたのだ。

これが尋常の者なら、悩乱悶絶はむろんのこと、地に着かぬうちに死んでいるべきだが、山気をうけた一種の奇童、三歳児のときから果心居士にそだてられて、初歩の幻術や浮体の秘法ぐらひは、多少心得ている竹童なればこそ、五体の骨をくだかなかつた。

「才才痛い。クロの野郎め、おいらがあんなにかあいがつてやるのに、よくも恩人をこんな目にあわせやがったな、アア痛、痛、痛、畜生畜生、どうするか覚えていろ！」

腰骨をさすりながら、ふと後ろをふりかえって見ると、なんとにくいやつ、すぐじぶんのそばに、すました顔で、翼をやすめているではないか。

「けッ、癩にさわる！」

竹童はいきなり帯の棒切れをひッこ抜き、クロをねらつて

ピュッと打つてかかる。と、驚も猛鳥の本性をあらわして、ギャツとばかり、竹童の頭から一つかみと爪をさかだつてきた。

「こいつめッ、生意気においらにむかつてくる気だな」

とかんしゃくすじを立てた勢いで、ブーンと棒を横ならびにはらいとばすと、こはいかに、驚の片足が、ムンズとのびて竹童の胸をつかみ、

「これ竹童、なにが生意気なのじゃ」とにらみつけた。

「あッ、あなたはお師匠さま？」

さらぬだに目玉の大きい竹童が、瞳をみはつてあきれ返つた。なんと、驚とおもつて打つていたのは、鞍馬におけるはずのお師匠さま、果心居士ではないか。

ふしぎ、ふしぎ。かれは天空から落ちたときよりぎょうてんして、からだを石のようにこわくさせ、口もきけず、逃げもできず、ややしばらくというもの、そこにモジモジとしていたが、ガラリと棒切れをすてて、地べたへ額をすりつけてしまった。

「お師匠さま。わたしがわるうござりました。どうぞごかんべんあそばしてくださいまし」

「びっくりしたか、どうじゃ悪いことはできないものであるう」

居士は、ニヤリと笑つて、足もとの岩へ腰をおろした。

「まったくこんな胆をつぶしたことはございません。これからけつしてお師匠さまにむだんで遠くへまいりませんから、どうかおゆるしく下さいまし」

「よしよし、仕置はさんざんすんでいるのじゃから、もうこ

のうえのごことはいうまい」

「エ、じゃアとんでくるうちに、あんな目にあわしたのもお師匠さまでしたか。エ、お師匠さま。どうして人間が驚になんかになってとべるのでしょうか？」

「ソレ、ゆるすといえませんがまた甘えてくる。さようなことはどうでもよい、おまえにはまた一ついつけることがある。ほかでもないが、これから富士の人穴へ行って、そこに住みおる和田呂宋兵衛という賊のかしらに会うのじゃ。しかし容易なことでは、かれにうたがわれるから、あくまでおまえは子供らしく、いざとなったらかくかくのことをもうしべろ……」

と居士はあかぎの杖をもって、なにかこまごまと書いて示したりささやいたりして旨をふくませたのち、

「よいか、そこで呂宋兵衛が、うまうまとこちらのことばに乗ったとみたら、そくぎに、五湖の白旗の宮におわす、武田伊那丸君その余のかたがたにおしらせするのじゃ、なかなか大役であるからばかにしないでつとめなければなりませんぞ」

「かしこまりました。ですけれどお師匠さま」

「驚がないというのであろう。いまほんもののクロを呼んでやるから、しばらくそのへんにひかえていなさい」

「ハイ」

竹童はそこでやっと落ち着いて、あたりの景色を見直した。ところでここはいったいどの何山だろうか？

いま、さしもの豪雨もやんで、空は瑠璃いろに澄んできたが、眼下ははてしもない雲の海だ。それからおしてもここは

かなりの高地にちがいないが、この山そのものがあたかも天然の山城廓をなして、どこかに人工のあとがある。

すると、コーン、コーン、コーンと深いところで石でも切るような音。と思えば、ザザザと谷をけずるような響きもしてきた。竹童はこの深山に妙だなど思いながら、なにごろなくながめまわしてくと、天斧の石門、蜿々となき柵、谷には栈橋、駕籠渡し、話にきいた蜀の栈道そのままなどころなど、すべてはこれ、稀代な築城法の人工を加味した天嶮無双な自然城だ。

「これはすてきもないところだな、いったいなんのためにこんな砦があるのだろうか」

竹童はふしぎな顔をして、もとのところへ帰ってきてみると、いつのまにか、ほんもののクロが居士のそばにちゃんとひかえている。

「竹童、早々したくをしていかねばならぬ。用意はできているか」

「ハイいつでもかまいません。けれどお師匠さま、でがけにひとつうかがいたいことがございます」

「そんなことをいってるとまに時刻がたつ」

「いいえ、たった一言、いったいここはどここの何山で、だれのもっている砦でございませうようネ」

「おまえなどは知らないでもいいことだが、お使いをする褒美として聞かしてやろう。ここは甲斐と信濃と駿河の堺、山の名は小太郎山」

「え、小太郎山」

「砦にこもる御方はすなわち武田伊那丸さまだ」

「エッ、ここがあの小太郎山で、伊那丸さまの立てこもる根城となるのでございますか」

ふかいわけはわからないが、竹童はそう聞いて、なんとなく胸おどり血わいて、じぶんも、甲斐源氏の旗上げにくみする一人であるように勇みたつた。

奇童と怪賊問答

—

富士の裾野に、数千人の野武士をやしなっていた山大名の根来小角は亡びてしまった。しかし、野盗の巢である人穴の殿堂はいぜんとして、小角の滅亡後にも、かわっている者があつた。すなわち、和田呂宋兵衛という怪人である。

あれほどしたたかな小角が、どうして亡されたかといえ、じぶんの腹心とたのんでいた呂宋兵衛にうらぎられたがため、——つまり飼犬に手をかまれたのと同じことだ。

呂宋兵衛というのは、仲間の異名である。

かれは、和田門兵衛という、長崎からこの土地へ流れてきた南蛮の混血児であつた。右の腕には十字架、左の腕には呂宋文字のいれずみをしているところから、野武士の仲間では門兵衛を呂宋兵衛とよびならわしていた。また碧瞳紅毛、金蜘蛛のようなこの魁偉な容貌にも、呂宋兵衛の名のほうがふさわしかった。

呂宋兵衛は富士の人穴へきてから、たちまち小角の無二の

者となつた。かれの父が、南蛮人のキリシタンであつたから、呂宋兵衛もはやくから修道者となり、いわゆる、切支丹流の幻術をきわめていた。小角はそこを見こんで重用した。

しかし根が邪悪な呂宋兵衛は、たちまちそれにつけあがつて陰謀をたくらみ、策をもって、小角を殺し、配下の野武士を手なづけ、人穴の殿堂を完全に乗っ取つてしまつた。

小角のひとり娘の咲耶子は、あやうく父とともに、かれの毒手にかかるころだつたが、節を変えぬ七、八十人の野武士もあつて、ともに裾野へかくれた。そしていかなる苦しみもなめても、呂宋兵衛をうちとり、小角の霊をなぐさめなければならぬと、毎日広野へでて、武技をねり、陣法の工夫に他念がなかつた。

——その健気な乙女ごころを天もあわれんだものか、彼女はゆくりなくも、きょう伊那丸と一党の人々に落ちあうことができた。

かつて、伊那丸が人穴の殿堂にとらわれたときに、咲耶子のやさしい手にすくわれたことがある。いや、そんなことがなくつても、思いやりのふかい伊那丸と、侠勇勃々たる一党の勇士たちは、かならずや、咲耶子の味方となることを辞せぬであろう。

一ほう、山大名の呂宋兵衛は裾野へかくれた咲耶子の行動にゆだんせず、毎日十数人の謀者をはなっている。

きょうも、途中雷雨にあつて、ズブぬれとなりながら野馬をとばして人穴へかえつてきた三人の謀者は、すぐ呂宋兵衛のまえへでて、五湖のあたりにおこつた急変を注進した。

「おかしら、一大事でございます」

「なに、一大事だ」

身はぜいたくをしているが、心にはたえず不安のある呂宋兵衛は、琥珀の盃を手からおとし、さらに、謀者のさぐってきたちくいち——伊那丸と咲耶子のうごきを聞くにおよんで、その顔色はいちだんと恐怖的になった。

「むウ、ではなにか、武田伊那丸のやつらが、穴山梅雪を討ちとり、また湖水の底から宝物の石櫃を取り出したというのか。あのなかの御旗楯無は、とツくにこっちで入れかえて、売りとはしてしまつたからいいようなものの、それと知つたら、伊那丸のやつも咲耶子も、一しよになつてここへ押しよせてくることは必定だ。こいつは大敵、ゆだんがならねえ、すぐ手配りして、要所要所を嚴重にかためる」

立ちあがつて、わめくようにいいつけた時、石門から取次ぎを受けた野武士のひとりが、ばらばらと進んできて口げわしく、

「おかしらへ申しあげます。ただいま、一の門へ、穴山梅雪の残党が二、三十人まいて、ぜひお願いがあるといつてきました。どうしたものでございましょうか」

「穴山の残党なら、湖畔で伊那丸のために討ちもらされた落武者だろう。こんなときには、少しのやつも味方の端だ。そのなかからおもだつた者だけ二、三人とおしてみる」

「承知しました」

とひつ返した手下の者は、やがて、殿堂の広間へ、ふたりの武士をあんないしてきた。呂宋兵衛は上段の席から鷹揚にながめて、

「富士浅間の山大名和田門兵衛は身どもでござるが、おたず

ねなされたご用のおもむきは？」

「さっそくのご会見、かたじけのうぞんじます。じつは拙者は、穴山の四天王足助主水正ともうしまする者」

「また某は、佐分利五郎次でござる、すでにごぞんじであるが、ざんねんながら、伊那丸与党の奸計にかり、主君の梅雪は討たれ、われわれ四天王のうちたる天野、猪子の両名まであえなき最期をとげました」

「その儀はいま、手下の者からもくわしくうけたまわつた」
「主君のほろびたうえは、甲斐へかえるも都へかえるも詮なきこと、追腹きつて相果てようかと思いましたが、それも犬死、ことによるべなき残り二、三十人の郎党どもがふびんゆえ、それらの者を集めておとずれまいつたしだい、どうぞ、われわれ両名をはじめ一同を、この山寨におとめおきくださるまいか」

「才、それはそれはご心中おさつしもうす、武士は相身たがい、かならずお力になりもうそう」

呂宋兵衛は、ひそかによるこんだ。

折もおり、いまの場合、一勇士が、場なれた郎党を二、三十人も連れて、味方についてくるとはなんたる僥倖、かれは足助と佐分利に客分の資格をあたえ、下へもおかずもてなしたうえ、にわかにな強くなつて、軍議の開催をふれだした。

妖韻のこもつた鐘がゴーンと鳴りわたると、鎧を着た者、雑服の者、陸続として軍議室にはいつてくる。

そこは四面三十七間、百二十畳の籐の筵をしき、黒く太やかな円柱左右に十本ずつの大殿堂。一ぼうの中庭からほの

かな日光ははいるが、座中陰惨としてうす暗く、昼から短檠をともした赤い光に、ぼくと照らしだされた者は、みなこれ、呂宋兵衛の腹心の強者ぞろい。

「わらうべし、わらうべし、乳くさい伊那丸や咲耶子などが、烏合の小勢でよせまいろうとて、なにをぎょうぎょうしい軍議などにおよぼうか。拙者に二、三百の者をおあずけくたさるならば、ただひと押しにけちらしてみせようわ」

破鐘のような声でいう者がある。

見れば山寨第一の膂力、熊のごとき鬚をたくわえているとどろきまたほち轟又八だった。すると一ぼうから、軍謀第一のきこえある丹羽昌仙がしかつめらしく、

「おひかえなさい、轟、敵をあなどることはすでに亡兆でござるぞ。伊那丸は有名なる信玄の孫、兵法に精通、つきしたがう傳人もみな稀代の勇士ときく。すべからくこの天嶮に拠つて、かれのきたるところを策によって討つが上乘」

「やアまた、昌仙の臆病意見、富士の山大名ともある者が、あれしきの者に恐れをなしたといわれては、四隣の国へもの笑い。これよりすぐに、五湖へまいって、からめ捕るこそ、上策」

「いや小勢とはいいいながら、かれは智あり仁あり勇ある者ども。平野の戦はあやうし、あやうし」

「くだい、拙者はどこまでも討つてでる」

「だまれ轟、まだ衆議も決せぬうちに、僭越千万な」

両名の争論につづいて、一統の意見も二派にわかれ、座中なんとなく騒然としてきたころ――

これまた何たる皮肉！ 空から中庭のまん中へ、ズシーン

とばかり飛び降りてきた、雷獣のような一個の奇童がある。

二

「や！」

「あッ」

「なにやつ？」

あまりのことに一同は、しばらく開いた口もふさがらず、ヒョッコリ庭先にたった、面妖な子供をみつめるのみ。子供とはいうまでもない竹童で、人見知りもせず、ニヤリと白い歯を見せた。

「やア、この人穴には、ずいぶんお侍が大勢いるんだなあ。おじさんたちは、いったいそこでなにをしているんだい」

「バカッ」

いきなり革足袋のままとびおりた轟又八、竹童の襟がみをおさえて、

「こらッ、きさまは、どこの炭焼きの餓鬼だ、またどこのすきまからこんなところへしのびこんでまいった」

「しのびこんでなんかきやしないよ、アア苦しいや、苦しいよ、おじさん……」

「ふざけたことをぬかせ、しのびこまずにこらるべきところではない」

「だっておいらは空からおりてきたんだもの、空はいきぬけだから、ツイきてしまったんだよ」

「なに、空から？ ——」

人々は思わず、物騒らしい顔を空にむけた。

そして、再び奇怪なる少年の姿を見なおし、こいつ天狗の化身ではあるまいかと、舌をまいた。はるかにながめた、呂宋兵衛は、

「これこれ又八、とにかくふしぎな童、おれが素性をただし
てみるから、これへ引きずってこい」

「はッ」と、又八は、かるがると竹童をひつつるして席へあがり、呂宋兵衛のまえへかれをほうりだした。

なみいる人々は、鬼のごとき武骨者ばかりで、あたりは大伽藍のような暗殿である。大人にせよ、この場合、生きた心地はなかるべきだが、竹童はケロリとして、

「ヤ、呂宋兵衛は混血児だ。京都の南蛮寺にいるバテレンとそっくり……」

口にはださないがめずらしそうに目をみはったので、呂宋兵衛は、

「小僧ッ」とにらんで、一喝あびせた。

「なんだい、おいらにや、竹童っていう名があるんだよ」

「だまれ、さっするところそのほうは、伊那丸からはなされた隠密にちがいない、思うに、屋根の上について、ただいまの評定をぬすみ聞きしたのであろう」

「知らない知らない。おいらそんなことを知ってるもんか」

「いいや、汝の眼光、樵夫や炭焼きの小僧でないことはあきらかだ。いったい何者にたのまれてここへまいった。首の飛ばないうちにしてしまえ！」

「おいらが隠密なら、おじさんたちに、すがたなど見せるものか、おいらは、天道さまのまえだろうが、どこだろうが、

ちっともうしろ暗いところがなから、平気さ」

「うーム、まったくそれにそういらないか」

「アア。そこになるとおじさんたちはかわいそうだね、もぐらみたいに明るいとところをいばって歩けない商売だから、おいらみたいな、ちびが一ぴきとびこんでも、その通りびくびくする」

不敵な竹童の面がまえを、じつとみつめていた呂宋兵衛は、ことばの紕間は無益と知って、口をつぐみ、黙然と右手の人さし指をむけ、天井から竹童の頭の上へ線をかいた。

「おや」

と竹童が、なにやらさわるものに手をやると、上より一すじ絹糸のようなものがたれ、襟くびから手にはいまわってきたのは一ぴきの金蜘蛛だった。

キャツというかと思えば、竹童はニッコリ笑っていきなり、蜘蛛を驚づかみにし、あんぐり口のなかへほおぼって、ムシヤムシヤ噛みつぶしてしまつたようす。

「む、む……」と、呂宋兵衛はいよいよゆだんのない目で、かれの一挙一動をみまもっていると、竹童は唇をつぼめて、噛みためていたなかのものを、

「プッ——」と呂宋兵衛の顔を目がけて吹きつけた。

——その口からとびだしたのは、きたないかみつぶしではなくて、美しい一羽の毒蝶、ヒラヒラと毒粉を散らした。

「エイッ」

呂宋兵衛が扇をもつて打ちおとせば、蝶の死骸はまえからそこにあつた一片の白紙に返っている。

「わかつた、きさまは鞍馬山の果心居士の弟子だな」

「だから、竹童という名があるといったじゃないか」
「さてこそ、ものにおどろかぬはず、しかし有名な果心居士の弟子が、富士の殿堂と知らずに、くるわけがない、なんのご用か、あらためて聞こうではないか」

「ムム、そう尋常におっしやるなら、わたくしもお師匠さまから受けたお使いのしだいをすなおに話しましょう」

「では、果心先生から、この呂宋兵衛へのお使いでござるか」
「そうです。さて、お師匠さまのお伝えというのは、きょうなにげなく鞍馬から富士のあたりをみましたところ、いちまつの殺気が立ちのぼって、ただならぬ戦雲のきざしが歴々としてござりました。あらふしぎ、いま天下信長公の亡きのちは、西に秀吉、東に徳川、北条、北国に柴田、滝川、佐々、前田のともがらあって、たがいに、中原を狙うといえども、いづれも満を持してはなため今日、そも何者がうごくのであろうかと、ご承知でもござりませうが、先生、ご秘蔵の亀卜をカラリと投げて占われました」

「才オ」

呂宋兵衛はもとより、なみいる猛者どもも、この奇童のよどみなき弁によわされてしわぶきすらたてず、ひろき殿堂は、人なきようにシーンと静まりかえってしまった。

三

竹童は、ここでいささか得意気に、ちいさな体をちよこなんとかしまらせ、両腕をはって、ことばをつぐ。

「お師匠さまがつらつら亀卜の卦面を案じまするに、すなわ

ち、——富岳二鳳雛生マレ、五湖二狂風生ジ、喬木十悪ノ罪ヲ抱イテ雷二裂カル——とござりましたぞうです」

「なにになに？ 喬木、雷に裂かると易にでたか」

呂宋兵衛の顔色土のごとく変るのを見て、竹童は手をふりながら、

「おどろいてはいけません、それは穴山梅雪の身の上でした。ところで、裏をかえして見ますると、つまり裏の卦、参伍綜錯して六十四卦の变化をあらわします。これによって結果を考えましたところ、今夕酉の下刻から亥の刻のあいだに、昼よりましたおそろしい大血戦が裾野のどこかで起るということがわかりました」

「むウ、それはあたつていた。して、勝負の結果は」

「さればでござります。にわかになんか驚かすのってまいたのもそのため、残念ながらあなたの命は、こよい乾の星がおつるとともに、亡きかずに入り、腹心のかたがたもなかば以上は、あえない最期をとげることとなるそうでござります。これを、層雲くずれの凶兆ともうしまして、曆数の運命、ぜひないことだと、お師匠さまも吐息をおもらしなさいました」

「えッ、なんといった。しからば呂宋兵衛のいのちは、こよいかぎり腹心のものも大半はほろぶとな？」

「そうおっしやったことはおっしやいましたが、ここに一つ、たすかる秘法があるので。お師匠さまは、わたくしにその秘法をさずけ、あなたに会って、あることと交換にして教えてこい、だが、呂宋兵衛はするいやつゆえ、もしも、こっちできくことをちゃんと答えなかつたら、なんにもいわずに逃

「待てまて、たずねることがあらば、なんでも答えるほどに、その層雲くずれの凶兆を封じる秘法をおしえてくれ」

「ですから、まずわたくしのほうのたずねることからお答えくださいまし」

「よし、なんでも問うてみるがいい」

「ではおききもうします」

と、竹童はやおらひと膝のりだし、

「湖水のそこに沈めてありました石櫃をあげて、なかにあった御旗楯無の宝物をすりかえたのはたしかにあなた——これはお師匠さまも遠知の術でわかっております。されどその宝物を、あなたはだれにわたしましたか、または、この山寨のうちにあるのですか。ききたいのはつまりそのこと一つです」

呂宋兵衛は、心中すくなからずおどろいた。果心居士といえば、京で有名な奇道士だが、まさか、これまでに自分のしたことを知っていようとは思わなかった。それほど道士なれば、竹童のことばもほんとうにそういまいだらうし、ひそかに湖水からすりかえてうばった宝物は、いまでは手もとにないのだから打ち明けたところで、こっちに損得はない——と思った。

「そんなことならたやすいこと、いかにもあきらかに答えてやろう。だが……」

と呂宋兵衛が武士だまりの者へ、チラとめくばせをすると、バラバラと立ちあがったふたりの荒くれ武士が、いきなりムズと竹童の左右から両腕をねじ押さえた。

「ア、おじさんたちはおいらをどうするんだい！」

「いやおこるな、竹童。こっちのいうことだけ聞いて逃げられぬ用心。そうしていても耳はきこえようからよく聞けよ。御旗楯無の宝物は、ここにいる轟又八に京へ持たせて、いまはぶりも金まわりもよい羽柴秀吉に金子千貫で売りとばした。それゆえ、いまの持主は秀吉、この山寨には置いてない。さ、このうえは果心先生からおさずけの秘法をうけたまわろう」

「たしかにわかりました。では先生の秘法をおさずけもうします。そもそも層雲くずれの大難は、どんな名将でもがれることのできぬものでござりますが、その難をさけるには、まず夜の酉から亥のあいだに、四里四方けがれの無い平野へでて、ふだんの護り神をおがみ、壇をきずいて霊峰の水をさげます。——次に、おのれの生年月日をしたためて、人形の紙をみ神光で焼くこと七たび、かくして、十方満天の星をいのりませれば、兇難たちどころに吉兆をあらわして、どんな大敵に遭いませうとも、けっしておくれをとるということがありません」

呂宋兵衛は、怪力もあり幻術にも長じているが、異邦人の血のまじっている証拠には、戦いというものに対して、すこぶる考えがちがう。それに修道者でもあっただけに、迷信にとらわれやすかった。

つまりかれがもっているいちばんの弱点に、うまうまと乗じられた呂宋兵衛は、まったく竹童の言に惑酔して穴山の残党がなんといおうと、轟や昌仙のやからが疑わしげに反省をもとめても、頑としてきかず、秘法の星まつりを行うべく、手下の野武士に致命した。

ために、軍議はしぜんと、夜に入つて四里四方けがれなき平野に、その式をすましたうえ、出陣ときまつてしまった。その用意のものものしいさわぎのなかで、有卦に入つたのは竹童だ。別間でたくさんな馳走をされ、鞍馬では食べつけない珍味の数々を、箸と頤のつづくかぎりたらふくつめこみ、さて、例の棒切れ一本さげて、飄然とここを辞してかえる。

さしも、はげしかった昼の雷雨に、乱雲のかげは、落日とともに澄みぬいていた。西の甲武連山は茜にそまり、東相豆の海は無限の紺碧をなして、天地は紅と紺と、光明とうす闇の二色に分けられ、そのさかいに巍然とそびえているのは、富士の白妙。

——すると、この夕方を、人穴から上へ上へとはいあがつていく豆つぶ大の人影が見えた。それはどうも竹童らしい。見るまに、二合目の下あたりから驚にのつて、おともなく五湖のほうへとび去った。

銀河の箭づくり

一

富士の二合目をはなれ、いっきに、五湖の水明かりをのぞんで飛行していた竹童は、夜の空から小手をかざして、しきりに、下界にある伊那丸主従のいどころをさがしている。

「才才暗い、暗い、暗い。天もまッ暗、地もまッ暗。これじ

やいったいどこへ降りていいんだか、お月さまでもでてくれなきやア、けんとうがつきあしない」

大空で迷子星になった竹童は、例の、寝るまもはなさぬ棒切れを右手にもち、左の手を目的はたへかざして、驚の上から、「オオーイ、オオーイ」と、とうとう声をはりあげて呼びだした。

しかし、竹童の声ぐらいいは、竹童じしんが乗っている鷲の羽風に消しとばされてしまった。そのかわり、人ではないが、はるかな地上にあたって、馬のいななくのが高く聞えた。

「おや、馬のやつが返辞をしたぞ」

と、つぶやいたが、その竹童のかんがえはちがっている。動物は動物にたいして敏感であるから、いま、下のほうでいなないた馬は、ここにさしかかってきた闇夜飛行の怪物の影に、おどろいたものにそういらない。

けれど竹童は、馬が答えたものと信じて、いきなり、棒切れをピューツと下へふった。と、クロはたちまち身をさかしまにして、ツツツツ——と木の葉おとしに降りていく。

「あ、ここはどこかのお宮の庭だな……」

驚からおりて、しばらくそのあたりをあるいていた竹童は、やがて、拝殿からもれるほのあかりをみとめ、そつと忍びよってみると、たしかに六、七人のささやき声がある。

「いた！」かれは思わず叫んで、

「おじさん！ おじさんたち」

呼ぶ声と一しよに、拝殿のなかにいた者は、どやどやと、それへでてきて、七つの人影をあらわした。

「何者じゃッ」と竹童をねめつけた。

「おいらだよ、鞍馬山の竹童だよ」

「おお、竹童か」

ほとんど、そのなかの半分以上の者が、口をあわしてこういった。木隠龍太郎も、忍剣も、民部も蔦之助も小文治も竹童にとればみな友だちだ。

ただ、床几にかけて、かれを見おろしていた伊那丸だけが、すこし解せないようすである。

「龍太郎。そちたちはこの童をよう知っているようじゃが、いったいどこのものであるの」

「さきほどお話しもうしあげました、果心居士の童弟子でござります」

「おおあれか」

伊那丸はニッコリして竹童を見なおした。竹童もニヤリと笑って、ともするとなれなれしく、じぶんの友だちにしてしまいうさだ。

「これ竹童、伊那丸君のおんまえ、つつ立ってではならぬ、すわれすわれ」

「いや、そう叱らぬがよい、鞍馬の奥でぞだつた者じゃ、その天真爛漫がかえって美しい。したが、おまえはここへ、何用があつてきたのか」

「はい」竹童はかしこまって、

「お師匠さまのいいつけでござります」

「なに、果心先生からここへお使いに？」

「さようでござります。みなさまは、きょう穴山梅雪をお討ちになつて、さだめしホツとなされたでござりましようが、勝つて兜の緒をしめよ、ここでごゆだんをなされては大へん

でござります」

「む、伊那丸はけっしてゆだんはしておらぬぞよ」

「では、湖水の底から引きあげた石櫃の蓋をとつて、なかをあらためてごらんになりましたか」

「いや、ほかのところへかくしたものとちがつて、湖底へ沈めておいた石櫃、あらためるまでもない」

「ところが、お師匠さまの遠知の術では、どうも、石櫃のなかの宝物にうたがひがあるとおっしゃいました。それゆえ、にわかにお師匠さまにいいふくめられて、この竹童が、鷲の翼のつづくかぎり、とびまわつたのでござります。どうぞみなさま、いっこくもはやく、石櫃をおあらためくださいまし」

「さては、それが伊那丸のゆだんであつたかもしれぬ。忍剣、忍剣、ともあれ石櫃をここへ。また、小文治と龍太郎は、あるかぎりのかがり火をあたりにたき立ててください」

「はッ」

席を立つた者たちが三つ脚のかがり火を、左右五、六カ所へ炎々と燃したるまに、忍剣は、さきに梅雪の郎党たちが、湖底から引きあげておいた石櫃をかかえてきて、やおら、伊那丸のまえにすえた。

「こう見たところでは、蓋の合口に異状はないが」

「青苔がいちめんについているさまともうし、一ども人の手にふれたらしい点はみえませぬ」

「とにかく、蓋をはらつてみい」

「心得ました」

と忍剣は立ちあがつて、グイと法衣の袖をたくしあげ嚴重な石の蓋をポンとはねのけてみた。

「や、やッ」まず忍剣がきもをつぶした。

「どういたした。なんぞ変りがあったか」

伊那丸もおもわず床几から腰をうかした。

「ちえっ。これごらんなさりませ」

と、くやしそうに忍剣が石櫃を引っくりかえすと、なかからごろごろとこがりだしたのは、御旗楯無の宝物に、似ても似つかぬただの石ころ。

「むウ……」

伊那丸は顔いろをうしなった。それはむりではない、武田家重代の軍宝——ことに父の勝頼が、天目山の最期の場所から、かれの手に送りつたえてきたほど大せつな品。それが……

ないですもうか。

御旗楯無の宝物は、武田家の三種の神器だ。これを失っては、甲斐源氏の家系はなんの権威もなくなってしまふ。伊那丸をはじめ他の六人まで、ひとしくここに、色をうしなつたも当然である。

「アア、やっぱり、おいらの先生はえらい——」

そのとき、嘆ずるようにいったのは竹童だった。

「ああ、どこまで武田家は衰亡するのであろうか……」

と嘆じあわして、伊那丸もつぶやく。

「大じょうぶだよ」竹童は棒切れを杖にしてふいにつっ立ち、気の毒そうに伊那丸の面を見あげた。

「大じょうぶだ大じょうぶだ。そのなかの物がなくなつても、ぬすんだやつはわかっているから……おいらがちゃんとかぎつけてきてあるから——」

「なに！ ではおまえがその者を知っているか」

「ああ知っている。そいつは、人穴の殿堂にいる和田呂宋兵衛という悪いやつだよ。そして、盗んだ宝物は、手下を京都へやって、羽柴秀吉に売ってしまったんだ——これはきょうおいらが呂宋兵衛と問答して、鎌をかけてきてきたんだからまちがいのないことなんだ」

「えッ、では御旗楯無をぬすんだやつも、あの人穴の呂宋兵衛か……」

と、伊那丸が意外そうな瞳を咲耶子に向けると、彼女も、思いがけぬことのように、

「わたしにとれば父をころした悪人。伊那丸さまにはお家の賊、八つざきにしてもあきたりない悪党でござります」

と、やさしい眉にもうらみが立った。

伊那丸は床几をはなれ、そしてうごかぬ決意を語気にしめしていった。

「みななもの、わしはこれからすぐ人穴の殿堂へ駈けいり、呂宋兵衛の首を剣頭にかけて、祖先におわびをいたすつもりだ。一つには、恩義のある咲耶子への助太刀、われと思わんものはつづけ、御旗楯無をうしなつて、武田の家なく、武田の家なくして、この伊那丸はないぞ！」

「お勇ましいおことば、われわれとて、どこまでも君のお供いたさずにはおりませぬ」

山県蔦之助、忍剣、龍太郎、小文治などの、たのもしげな

勇士たちは、声をそろえてそういった。

「おう、わたしを入れてここに七騎の勇士がある。咲耶子も心づよく思うがよい、きつとこよいのうちに、きやつ首を、この剣の切ッ先にさしてみせよう。忍剣、馬を馬を！」

「はッ」

バラバラと樹立ちへはいった忍剣は、梅雪一党が乗りすてた駒のなかから、逸物をよって、チャリン、チャリン、チャリン、と轡金具の音をひびかせて、伊那丸のまえまで手綱をとってくると、いままで黙然としていた小幡民部が、

「しばらく——」と、駒をおさえて頭をさげた。

三

「なんじゃ、民部」

「お怒りからられて、これより人穴の殿堂へかけ入ろうという思し召しは、ごもつともではござりますが、民部はたつてお引きとめもうさねばなりません」

「なぜ？」伊那丸はめずらしく苦い色をあらわした。

「けつして、かれをおそれるわけではありませんが、音にきこえた天嶮の野武士城、いかに七騎の勇があつても攻めて落ちるはずのものとは思われませぬ」

「だまれ、わしも信玄の孫じゃ！ 勝頼の次男じゃ！ 野武士のよる山城ぐらいが、なにものぞ」

かれにしては、これは稀有なほど、激越なことばであった。

民部には、またじゆうぶんな敗数の理が見えているか、

「いいや、おことはともおもえませぬ」

と、つよく首をふって、

「いかに信玄公のお孫であろうと、兵法をやぶって勝つという理はありません。なにごともし節がだいじです。しばらくこの裾野にかくれて呂宋兵衛が山をでる日を、おまちあそばすが上策とこころえまする」

「そうだ」

その時、横からふいにことばをはさんだのは竹童で、さらに頓狂な声をあげてこうさげんだ。

「そうだ！ おいらもうっかりしていたが、そいつは今夜きつと山をでるよ、うそじゃない、きつと山をでる！ 山をでる！」

「竹童、それはほんとうか」

民部は、目をかれにうつした。

「うそなんかおいら大きらいだ、まったくの話をするとお師匠さまが呂宋兵衛に、おまえの命はこよいのうちにあぶないぞっておどかしたんだよ。おいらはその使いになって、今夜子の刻（十一時から一時）のところに、裾野四里四方人氣のないうころへでて、層雲くずれの祈禱をすれば助かると、いいかげんなことを教えてきてあるんだけれど、それも、いま考えあわせてみると、みんなお師匠さまがさきのさきまでを見ぬいた計略で、わざとおいらにそういわせたにちがいない」

おどろくべき果心居士の神機妙算、さすがの民部もそれまでにことが運んでいようとは気がつかなかつた。

子の刻一天までには、まだだいぶあいだがある。伊那丸は一同にむかい、それまではここにあって、じゆうぶんに体をやすめ、英気をやしなっておくように敵命した。

竹童は勇躍して、

「それでは夜中になると、まためざましい戦いがはじまるな。おいらもいまからしっぴかり英気をやしなっておくことだ……」

と、ク口をだいて、お堂の端へゴロリと寝てしまった。

と、かれは横になるかならないうちに、

「おや、笛が鳴ったぞ」

と頭をもたげてキョロキョロあたりを見まわした。見ると、咲耶子がただひとり、社前の大楠の切株につっ立ち、例の横笛を口にあてて、音もさわやかに吹いているのだった。

竹童は初めのうち、なんのためにするのかとうたがっていらしいが、まもなく、笛の音が裾野の闇へひろがっていくと、あなたごなたから、ムクムクと姿をあらわしてきた野武士のかげ。それがたちまち、七十人あまりにもなって、咲耶子のまえに整列したのにはびっくりしてしまった。

咲耶子は、あつまつた野武士たちに、なにかいいわした。

そしてしずかに伊那丸の前へきて、

「この者たちは、いずれも父の小角につかえていた野武士でござりますが、きょうまで、わたくしとともにこの裾野へかくれ、折があれば呂宋兵衛をうって仇をむくいようとしていた忠義者でござります。どうかこよいからは、わたくしともどもに、お味方にくわえてくださりますよう」

伊那丸はまんぞくそうにうなずいた。

時にとつて、ここに七十人の兵があるとないとでは、小幡民部が軍配のうえにおいても、たいへんなちがいであった。

ましてや、いまここに集められたほどの者は、みなへいぜ

いから、咲耶子の胡蝶の陣に、練りにねり、鍛えにきたえられた精鋭ぞろい。

かくて一同は、敵の目をふさぐ用意に、ばたばたかがり火を消し、太刀の音をひそませ、箭づくり、刃のしらべはいうまでもなく、馬に草をも飼って、時刻のいたるをまちわびている。

待つほどに更くるほどに、夜はやがて三更、玲瓏とさえかえた空には、微小星の一粒までのこりなく研ぎすまされ、ただ見る、三千丈の銀河が、ななめに夜の富士を越えて見える。

「グウー、グウ、グウーグウ……」

そのなかで、竹童ばかりが、鷲の翼をはねぶとんにして、さもいい気もちそうに、いびきをかいて寝こんでいた。

魔人隠形の印

—

まさに、夜は子の刻の一天。

人穴の殿堂をまもる、三つの洞門が、ギギーイとあいた。

と、そのなかから、焰々と燃えつつながれだしてきたのは、半町もつづくまっ赤な焰の行列。無数の松明。その影にうごめく、野武士、馬、槍、十字架、旗、すべて血のように染まって見えた。

なかでも、一丈あまりな白木の十字架は、八人の手下にゆ

らゆらとささえられ、すぐそばに呂宋兵衛が、南蛮錦の陣羽織に身をつつみ、白馬にまたがり、十二鉄騎にまもられながら、妖々と、裾野の露をはらっていく。

すすむこと二、三里、ひろい平野のまん中へでた。呂宋兵衛は馬からひらりと降り、二、三百人の野武士を指揮して、見るまにそこへ壇をきずかせ、十字架を立て、かがり火を焚いて、いのりのしたくをととのえさせた。

「念珠を念珠を、これへ——」

呂宋兵衛は、まえにもいったとおり、南蛮の混血児でキリシタンの妖法を修する者であるから、層雲くずれの祈禱も、じぶんが信じる異邦の式でゆくつもりらしい。

手下の者から、念珠をうけとったかれは、それを頸へかけ、胸へ、白金の十字架をたらしめて、しずしずと壇の前へすすんだ。

護衛する野武士たちは、しわぶきもせず、いっせいに槍の穂さきを立てならべた。なかにはきょう味方についた穴山の残党、足助主水正、佐分利五郎次、その他の者もここにまじっている。

壇にむかって、七つの赤蠅をともし、金明水、銀明水の浄水をささげて、そこにぬかずいた呂宋兵衛は、なにかわけのわからぬいのりのことばをつぶやきながら、いっしんに空の星を祈りだした。

すると、どこからともなく、ザツ、ザツ、ザツ、ザツと草をなでてくるような風音。つづいて、地を打ってくる馬蹄のひびき。

「や！」かれはぎよっと、頭をあげて、

「あの物音は？ あのひびきは？ おお馬だツ、人声だ。ゆだんするな！」

叫ぶまもなく、ピュツ、ピュツと、風をきってくる霰のよな征矢。——早くも、四面の闇からワワーツという喊声か聞えだした。

「さては武田伊那丸がきたか」

「いやいや咲耶子が仕返しにまいったのだらう」

「うろたえていずとかがり火を消せ、はやく松明をすてしまえ、敵方の目じるしになるぞ」

あたりはたちまち暗暝の地獄。

ただ、燃えいぶつた煙と、ののしる声と、太刀や槍の音ばかりが、ものすごくましていった。

もう、どこかで斬りあいのはじまったらしい。

星明かりをすかしてみると、敵か味方か入りみだれてよくわからないが、白馬黒鹿毛をかけまわしている七人の影は、たしかに襲ってきた七勇士。それに斬りまわされて、呂宋兵衛の手下どもは、

「だめだ、足を斬られた」

「敵はあんがいてごわいぞ。もう大変な手負いがでた」

「殿堂へ逃げろ！」

「人穴へ引きあげろ！」

と声をなだれあわせて、思いおもいな草の細径へ蜘蛛の子のちるように逃げくずれた。

それらの、雑兵や手下には目もくれず、さきほどから馬上下りりんとかけまわっていた伊那丸は、

「咲耶子はいずれにある。咲耶子、咲耶子」

と、しきりに呼びつづけていた。

「おお伊那丸さま、わたくしはここでござります」

近よってきた白鹿毛の上には、かいがいしい装束をした彼女のすがたが、細身の薙刀を小脇に持って、にっこりとしていた。

「咲耶子、呂宋兵衛めは、いずれへ姿をかくしたのであろう。忍剣も龍太郎も、いまだに討つたと声をあげぬが」

「わたくしも、余の者には目もくれず、八ぼうさがしてまわりました。影も形も見あたりませぬ。さんねんながら、どうやら取り逃がしたらしゅうござります」

「いや、民部がしいた八門の陣、その逃げ口には、伏兵がふせてあるゆえ、かならず討ちもらす気づかいはない」

とふたりが、馬上で語り合っているすぐうしろで、ふいに、悪魔の嘲笑が高くした。

「わ、はッはわはッは……このバカもの！」

「や！」

ふりかえってみると、人影はなく、星の空にそびえている一基の十字架。

「いまの声は、たしかに呂宋兵衛」

「奇ッ怪な笑い声、咲耶子、心をゆるすまいぞ」

きつと、十字架をにらんで、ふたりが息を殺したせつなである、一陣の怪風！ とたんに、星祭の壇に燃えのこつていた赤蟬が、メラメラと青い焰に音をさせてあたりを照らした。

明滅の一瞬、十字架のうしろにかくれていたおぼろげなかげは、たしかに怪人、和田呂宋兵衛。

「おのれッ！」

「怨敵」

敵将のすがたを目のあたりに見て、なんのひるみも持たず。伊那丸は太刀をふりかぶり、咲耶子は薙刀の柄をしごいて八幡！ 十字架の根もとをねらって斬りつけた。

と——ほとんど同時である。

伊那丸がたの軍師、小幡民部は、無二無三に駒をここへ飛ばしてきながら、

「やあ、待ちたまえ若君。かならずそれへ近よりたもうな。

あ、あ、あッ、危ないッ！」

と、かれは狂気ばしって絶叫した。

が——その注意はすでに間に合わなかった。

ふたりのえものは、もう、ザクツと十字架のかけを目がけてふりこんでしまった。と見るまに、ああ、そもなんの詭計ぞ、足もとから轟然たる怪火の炸裂。

ぼかツと、渦をふいた白煙とともに、宙天へ裂けのぼつた火の柱、同時に、バラバラツとあたりへ落ちてきたいちめん火の雨——それも火か土か肉か血か、ほとんど目を開けて見ることができない。

二

すさまじい雷火の焰が、パツと立ったせつな、ゲラゲラゲラと十字架のかけで大きく笑う声が出た。

怪人呂宋兵衛の目である。口である。

悪魔の面！ それがあざわらった。

「あッ——」

伊那丸の馬は、蹄を蹴って横飛びにぶつたおれた。咲耶子は、竿立ちとなった駒のたてがみにしがみついて、焰のまえに悶絶した。

倒れたのは、馬ばかりか、人ばかりか、二尺角の白木の十字架まで、上から真ツ二つにさけ、余煙のなかへゆら、――と横になりかかってきた。

雷火の炸裂は、詭計でもなんでもない。怪人呂宋兵衛が、ふところに秘めておいた一塊の強薬を、祭壇に燃えのこつていたろうそく火へ投げつけたのだ。

長崎や堺あたりで、南蛮人が日本人と争闘すると、常習にやるかれらの手口である。民部はそれを知っていたので、あわてて駒を飛ばしてきたが、一足おそかった、裂けた十字架が、いましもドスンと大地へ音をひびかせた時である。

「人穴の賊。そこうごくなッ！」

民部は、乗りつけてきた馬の鞍から飛びおるより早く、壇の上につつ立っているかれを目かけて斬りつけた。

「じゃらくさいわッ」

呂宋兵衛は、民部の第一刀をひッばずして、いきなり鬼のような手で彼の右手をねじあげた。

もうふところに強薬は持っていないので、まえのような危険はないが、腕と腕、剣と剣の打ちあいでも、民部は呂宋兵衛の敵ではない。

「うーむ、この小僧ツ子め」

酒香童子もかくやの形相で、大きな唇へやい歯をかませた呂宋兵衛は、いきなり民部の利腕をひとふりふって、やッと一声、壇の上から大地へ投げつけた。

「無念」

一代の軍師、小幡民部も、腕の勝負ではいかんともするこゝとができない。はねおきようとすると、はやくも、呂宋兵衛の山のような体がのしかかってきて、グイとのどわをしめつけ、

「おう、てめえが伊那丸の腰について、穴山梅雪を討つたという小ざかしい小幡民部というやつだな。こりやい首にめぐり会った。山荘へのみやげにしてやる。覚悟をしろ」

鎧通しをひきぬぎ、逆手にもって、グイと民部の首根にせまった。民部は、そうはさせまいと、下から短剣をぬぎ、足をもがき、ここ一髪のあらそいとなって、たがいに必死。

伊那丸も咲耶子も、みすみすかたわらにありながら、いまの雷火にふかれて、ふたりとも氣を失ってしまっている。

「うーむッ」

もみ合っているふたりのあいだから、おそろしい苦鳴があがった。さては、民部が首をかき落とされたか、呂宋兵衛が脾腹をえぐられたか、どツちか一つ。

三

さきにはね起きたのは、呂宋兵衛であった。

かれの左の足に、一本の流れ矢がつき刺さっていた。つづいて民部も飛びおきた。またすさまじい短剣と短剣の斬りあいになる。

「やッ、呂宋兵衛、ここにおったか」

そのとき、ゆくりなくもきあわせた巽小文治が、朱柄の槍

をしごいて、横から突っこんだ。

「じやまするなッ」

ガラリとはらう。さらに突く。

さらにはらう。またも突きだす。

この妙槍みょうそうにかかつては、さすがの呂宋兵衛も、弱腰になつた。それさえ、大敵と思うところへ、加賀見忍剣かがみんけん、木隠龍太郎こかくれりゅうたろう、山県やまがたつたのすけ之助の三人が、このあやしき物音を知つて、いっせいに蹄ひづめをあわせて、三方から、野嵐のあらしのごとく馬を飛ばしてくるようす。

「呂宋兵衛、呂宋兵衛、汝なんじ、いかに猛もうなりとも、ふくろのなかのねずみどうようだ、時うつればうつるほど、ここは鉄刀てつとう鉄壁てつぺきにかこまれ、そとは八門暗剣はつもんあんけんの伏兵ふくへいにみちて、のがれる道はなくなるのじや、神妙しんみょうに観念かんねんしてしまえ」

小幡民部こはたみんぶがののしると、呂宋兵衛はかつと眼まなこをいからせて、わざとせせら笑つた。

「だまれッ。汝なんじらのようなとうすみとんぼ、百ももびきこようと千ちびきあつまろうと、この呂宋兵衛の目から見れば子供のいたずらだわ」

「舌長したながなやつ、その息いきのねをとめてやるッ」
「なにを」

と呂宋兵衛は立ちなおつて、剣を、鼻はなばしらの前へまっすぐ持ち、あたかも、不死身ふじみの印いんをむすんでいるような形。

ふしぎや、小文治こぶんじの槍やりも民部の太刀も、その奇妙きみょうな構かまえを、どうしても破やぶることができない。ところへ、同時にかけあつまったまへの三人。

この態ていを見るより、めいめい、ひらりひらりと鞍くらからおり

て、かけよりざま、

「おうッ、巽たつみ小文治こぶんじどの、龍太郎りゅうたろうが助太刀すけだちもうすぞ」

「加賀見忍剣かがみんけんこれにあり、いで！ 目にもみせてくれよう」とばかり、呂宋兵衛の前後からおつつんだ。

さすがのかれも、ついにあわてだした。そして、一太刀も合わせず、ふいに忍剣にんけんの側わきをくぐつて疾風しつふうのように逃げだした。

「待てッ」

すばやくとびかかった龍太郎が、戒刀かいとうの切きッ先するどく薙なぎつけると、呂宋兵衛はふりかえつて、右手の鎧よろい通とおしを手裏剣しゅりけんがわりに、

「えいーッ」

気合きあいととも投げつけた。

龍太郎りゅうたろうは身をしずめながら、刀のみねで、ガラリとそれをはらい落とした。

と、なにごとだろう？

ピラピラと、魚鱗ぎょりんのような閃光せんこうをえがいて飛んできた鎧よろい通とおしが、龍太郎の太刀たちにあたると同時に、銀粉ぎんぶんのふくろが切れたように、粉々こなこなとくだけ散つて、あたりにはわかには月光げんじゆつしと霧きりにつつまれたかのようになつた。

「や、や。あやしい妖気ようき」

「きやつはキリシタンの幻術師げんじゆつし、かたがたもゆだんするな」
「この忍剣にんけんにならつて、破邪はじやのかたちをおとり召まされい」

と、まっさきに忍剣にんけんが、大地ちがひにからだをピツタリ伏ふせ、地から上をすかしてみると、いましも、黒い影かげがするするとあなたへ足あしをはやめている。

「おのれッ」

とびついていった忍剣の禅杖が、力いッぱい、ブーンとうなった。とたんに、一陣の怪風——そして、わッ、と、さけんだのはまぎれもない呂宋兵衛である。

たしかに手ごたえはあったらしいが、かれもさるもの、すばやく隠形の印をむすび、縮地飛走の呪をと見えるかと思われ、たちまち雷獣のごとく身をおどらせ、おどろく人々の眼界から、一気に二、三町も遠くとびさってしまった。

「あ、あ、あ、あ、あ！」とさすがの忍剣も、龍太郎もそのゆくえを、ただ見まもるばかり。

目ばたきするまに、一、二、三町もとんだ呂宋兵衛のあとには、うすい虹か、あわい霧のようなものが一すじ尾をひいてのこった。

四

いつまで見送って、たがいに歯がみしていたところで及ばぬことと、忍剣は一同をはげました。そして、そこにたおれている、伊那丸と咲耶子とに、手当を加えた。

さいわいに、ふたりはさしたる重傷を受けていたのではなかった。けれど、やがて気がついてから、賊将、呂宋兵衛をとり逃がしたと知って、無念がったことは、ほかの者より強かった。ことに、伊那丸は父にて勝気なたち。

「かれらの策におちて、おくれをとったときこえては、のちの世まで武門の名おれ。わしはどこまでも、呂宋兵衛のいくところまで追いつめて、かれの首を見ずにはおかぬ。民部、止

めるなッ」

いいすてるが早い、馬の鞍つぽをたたいて、まっしぐらに走りだした。と咲耶子も、

「お待ちあそばせや、伊那丸さま。人穴の殿堂は、この咲耶子が空んじている道、踏みやぶる間道をごあんないたしましようぞ」

手綱をあざやかに、ひらりと駒におどった武装の少女は一鞭あてるよと見るまに、これも、伊那丸にかけつづいた。

ことここにいたっては、思慮ぶかい小幡民部も、もうこれまでである、いちかばちかと、決心して、

「加賀見忍剣どの。木隠龍太郎どの」
と声高らかに呼ばわった。

「おお」

「おお」

「そこもとたちふたりは、若君の右翼左翼となり、おのおの二十名ずつの兵を具して、おそばをはなれず、ご先途を見とどけられよ、早く早く」

「かしこまつた」

軍師に礼をほどこして、ふたりは馬に鞭をくれる。

「つぎに山県篤之助どの。巽小文治どの」

「おう」

「おう」

「ご両所たちは搦手の先陣。まず小文治どのは槍組十五名の猛者をつれて、人穴の殿堂よりながれ落ちていいる水門口をやり、まっ先に洞門のなかへ斬りこまれよ」

「心得た」

小文治は朱柄の槍をひツかかえて、十五名の力者をひきつれ、人穴をさして、たちまち草がくれていく。

「さて薦之助どの、そこもとは残る十七名の兵をもって、一隊の弓組をつくり、殿堂をかこい嶮所に登って廓のなかへ矢を射こみ、ときに応じ、変にのぞんで、奇兵となつて討ちこまれい！」

「承知いたしました」

「拙者は、のこりの者とともに後詰をなし、若君の旗本、ならびに、総攻めの機をうかがつて、その時ごとに、おのおのへ合図をもうそう。さらばでござる」

軍配のてはずを、残りなくいいわした民部は、ひとりそこに踏みとどまり、人穴攻めの作戦図を胸にえがきながら、無月の秋の空をあおいで、

「敗るるも勝つも、小幡民部の名は、おしくもなき一介の軍配とりじゃ。しかし……しかし伊那丸さまは大せつな甲斐源氏の一粒種、あわれ八幡、あわれ軍の神々、力わかき民部の采配に、無辺のお力をかしたまえ」

正義の声は、いつにあつても、だれの口からほとばしつても、ほがらかなものである。

五

英気をやしなうため、宵のくちに、ほんのちよつと寝ておくつもりだった竹童は、いつか鼻から提灯をだしてわれにもなく、大いびき。

このぶんでほつておいたら、かならずや、夜が明けるのも

知らずに寝ているにちがいない。

ところが、好事魔おとし、せつかくの白河夜船を、何者とも知れず、ポカーンと頬つぺたをはりつけて、かれの夢をおどろかせた者がある。

「あ痛ッ、アた、た、た、た！」

ねぼけ眼ではねおきた竹童は、むちゃくちゃに腹が立ったと見えて、いつにない怒りようだ。

「おいッ、おいらをぶんなぐつたのは、いったいどのどん畜生だ、さアかんべんできない、ここへでろ、おいらの前へでてうせろッ」

あまり太くもない腕をまくりあげて、そこへしゃちこ張つたのはいいが、竹童、まだなにを寝ぼけているのか、そこにいた人の顔を見ると、急にすくんで、膝ツ子のまえをかきあわせ、ペコペコお辞儀をしはじめたものだ。

「竹童、おまえは大そう強そうに怒るな」

「はい……」

「どうした。おいらの前へでてうせろといばつておつたではないか。なぐつたわしはここにいる」

「はい、いいえ……」

「不埒者めがッ」

なんのこと、あべこべにまた叱られた。

もっとも、それはべつだんふしぎなことではない。いつのまにか、ここにきていた人間は、竹童が小太郎山にいることとばかり思っていた、果心居士その人だったのだ。

しかし、いくら飛走の達人でも、どうして、いつのまにこんなところへきたんだらうと、竹童はじぶんのゆだんをつね

って、目ばかりパチパチさせている。

けれど、なんととしても、このお師匠さまは人間じゃあない。ほとんど神さま、このおかたに会ってはかなわないから、三どめの大目玉をいただかないうちに、なんでもかでも、こっちからあやまってしまおうほうが先手だと、そこは竹童もなかなかずるい。

「お師匠さま。お師匠さま。どうもすみませんでございまして。お使い先で、グウグウ寝てしまったのは、まったくこの竹童、悪いやつでございました。どうぞごかんべんなされてくださいまし」

「横着な和子ではある。わしのいう叱言を、みんなさきにじぶんからいつてしまう」

「いいえ、お師匠さまの叱言よけではございませんが、ひとりでに、じぶんが悪かったと、ピンピン頭へこたえてくるのでございます」

「しかたのないやつ」
果心居士も竹童の叱言には、いつも途中から苦笑してしま

った。
「けれど、叱言ではないが——そちも大せつな使者に立った者ではないか。なぜ、伊那丸さまのご先途まで見とどけてくるか、あるいは、ひとたび小太郎山まで立ち帰ってきて、ようすはこれこれとわしに返辞を聞かせぬのじゃ」

「はい。ですからわたしは、しばらくここに寝こんでいて、夜中にみなさまがここをでる時、ご一しよについていって見ようと思っていたのでござります」

「たわけ者め。そのご一同がどこにいる？」

「えッ」

竹童は始めてあたりを見まわし、

「おや？ もう子の刻が過ぎたのかしら、伊那丸さまも見えにならず、忍剣さまも、……蔦之助さまもおかしいなあ、だれもいないや。お師匠さま、みなさまはもう戦にでておしまいなされたのでしょうか？」

「もう子の刻もとツくにすぎ、裾野の戦も一段落となつてい

るわ」
「アアしまった！ しまった！ すっかり寝こんでなにも知らなかった。お師匠さま、竹童はどうしてこういつまでおろかなのでござりましょう」

「どうじゃ。わしに打たれたのがむりと思うか」

「けっしてごむりとは思いません。これからこんなゆだんをいたしませんように、もっとたくさんおぶちなされてくださいまし」

「よいよい。それほど気がつけば、本心にこたえたのじゃろう。ところで竹童、また大役があるぞ」

「もうたくさん寝ましたから、どんなむずかしいご用でも、きつとなまけずに勤めまする」

「む、ほかではないが、こよいの計略は呂宋兵衛の妖術にやぶられ、いままた、伊那丸さまはじめ、その他の旗本たちは人穴の殿堂さして攻めのぼっていった。しかし、かれには二千の野武士があり、幾百の猛者、幾十人の智者軍師もいることじゃ。なかなか七十人や八十人の小勢でおしよせたところで、たやすく嶮所の廓は落ちまいと思う」

「わたくしもあのなかを見てきましたが、どうしてどうして、

おそろしい厳重な山荘でございました」

「それゆえ、力で押さず、智でおとす。しかし、智にたよって勇をうしなってもならぬゆえ、わざと伊那丸さまにはお知らせいたさず、そちにだけ第二の密計をさすけるのじゃ。竹童、耳を……」

「はい」

とすりよると、果心居士は白鬚につつまれた唇からひそやかに、二言三言の秘策をささやいた。

それが、いかにおどろくべきことであつたかは、すぐ聞いている竹童の目の玉にあらわれて、あるいは驚嘆、あるいは壮感、あるいは危惧の色となり、せわしなく、瞳をクルクル廻転させた。

「よいか、竹童！」

はなれながら、果心居士はさいごにいった。

「一心になつて、おおせの通りやりまする」

「そのかわり、この大役を首尾よくすましたら、伊那丸さまにおねがいして、そちも武士のひとりに取り立てて得さすであらう」

「ありがとうございます。お師匠さま、侍になれば、わたくしでも、刀がさせるのでござりましょうね」

「差せるさ」

「差したい！ きつと差してみせるぞ」

竹童は、その興奮で立ちあがった。

しかし、かれのひきうけた大役とはいつたいなんだらう。

もとより鞍馬山靈の気をうけたような怪童子、あやぶむことはあるまいが、居士の口吻からさっしても、ことなかなか容易

ではないらしい。

早足の燕作

一

夜もすがら、百八カ所で焚きあかしているかがり火のため、人穴城の殿堂は、さながら、地獄の祭のように赤い。

和田呂宋兵衛たちが、おおきな十字架をささげて、層雲くずれの祈禱にでいつたあとは、腹心の轟又八が軍奉行の格になって、伊那丸と咲耶子をうつべき、明日の作戦に忙殺されていた。

「東の空がしらみだしたら一番貝、勢ぞろいの用意とおもえ。富士川が見えだしたら、二番貝で部署につき、三番貝はおれがふく。同時に、八方から裾野へくだつて、時刻時刻の合図とともに、遠巻きの輪をちぢめて、ひとりあまさず討つてとる計略。かならずこの手はずをわすれるなよ」

一同へ軍令をおわつた轟又八は、やや得意ないろで広場にたち、あすの天候を観測するらしいので、暗天を見あげていたが、ふと、なにがしゃくにさわつたのか、

「ふふん、この闇の晩に、なにが見えるんだ。バカ軍師め、人のせわしきも知らずに、まだあんなところでのんき面をかまえていやがる」

上のほうへはきだすようにつぶやき、そのまま、殿堂の物の具部屋へ隠れてしまった。

又八をして、ぷんぷんと怒らせたものとは、いったいなんであろうか——と空をあおいで見ると、炎々とのぼるかがりの煙にいぶされて、高い櫓がそびえていた。そのてっぺんに、さつきから、ひとりの影が立っている。

山寨の軍師、丹羽昌仙であった。

轟 又八がバカ軍師とののしったわけである。昼間から、攻守両意見にわかれて、反対していたのだ。そこで昌仙は詮なきこととあきらめたか、呂宋兵衛が裾野をでるとすぐ、軍備にはさらにたずさわらず、継子のように、ひとり望楼のいただきへあがって、寂然とたちすくみ、四顧暗々たる裾野をにらみつけている。

かれは、さつさつたる高きところの風に吹かれながら、そも、なにをみつめているのだろうか。

星こそあれ、無月荒涼のやみよ。——おお、はるかに焰の列が蜿々とうごいていく。呂宋兵衛らの祈禱の群れだ、火の行動は人の行動。ちりぢりになる時も、かたまる時も、しずかな時も、さわぐ時も、なるほど、ここにあれば手にとるごとくわかる。

と、なににおどろいたものか、昌仙の顔いろが、サツと変って、ふいに、

「あああ」

と望楼の柱につかまりながら身をのばした。見れば、はるかかなたの火が、風に吹き散らされた螢のごとく、算をみだしてきはじめたのだ。

「むウ」

思わず重くるしいうめき声。

「しまった！ あの竹童という小僧の奇策にはかられた。もうおそい——」

と、かれがもらした痛嘆のおわるかおわらぬうち、遠き闇にあたって、ズーンと立った一道の火柱、それが消えると、一点の微光もあまらず、すべてを暗黒がつつんでしまった。

「それ見ろ！ このほうがいったとおりでだッ」

昌仙は手をのばして、いきなり天井へ飛びつき、そこにたれていた縄の端をグイと引いた。と、——人穴城の八方にしかけてある自鳴鉦がいつせいに、ジジジジジジッ……とけたたましく鳴り渡る。

これ、大手一の門二の門三の門、人穴門、水門、間道門の四つの口、すべて一時に護るための手配。いうまでもなく出門は厳禁。無断持場をうごくべからず——の軍師合図。

さらに、櫓番へ声をかけて、部下の一人で、もと道中かせぎの町人であった、燕作という者をよびあげ、かねて用意しておいたらしい一通の密書をさすけた。

そして口ぜわしく、

「これを一刻もはやく羽柴秀吉どのにわたしてこい。ぐずぐずいたしておると、この山寨から一歩もでられなくなる。すぐいけよ、なんのしたくもしてはならんぞ」

と、いいつけた。

燕作は、野武士の仲間から、韋駄天といわれているほど足早な男。頭をさげて、昌仙からうけた密書をふところへ深くねじおさめ、

「へい、承知いたしました。ですが、その秀吉さまは、山崎の合戦ののち、いったいどこのお城にお住いでござりましょ

うか」

「近江の安土か、長浜の城か、あるいは京都にご滞在か、ま
ずこの三つを目標指していけ」

「合点です。では——」

と立って、クルリとむきなおるが早いか、韋駄天の名にそ
むかず、飛鳥のように望楼をかけおりていった。

二

ふいに自鳴鉦を聞いた轟 又八は、青筋をかんかんに立
て立腹した。

「こつちで攻めだす用意をしているのに、どこまでもおれに楯
をつくふつごうな丹羽昌仙。軍師といえどもゆるしておいて
はくせになる」

恐ろしい血相で、望楼の登り口へかけよつてくると、出合
いがしらに、上からゆうゆうと昌仙がおりてきた。

「おお、轟、籠城の用意は手ぬかりなكارうな」

「だまれ。いつ頭領から籠城の用意をしろとおふれがでた。

しかも、夜が明けしだいに、裾野へ討つてでるしたくのさい
ちゆうだわ」

「ならぬ！ 呂宋兵衛さまから軍配を預っている、この昌仙
がさようなことはゆるさぬ。七つの門は一寸たりともあける
ことまかりならんぞ」

「めくら軍師ッ。かしらの呂宋兵衛さまも帰らぬうち、洞門
を閉めてしまつてどうする気だ」

「いまにみよ、祈祷にでたものはちりぢりばらばら、呂宋兵衛

さまも手傷をうけて命からがら立ちかえつてくるであろう
わ」

「ばかばかしい！ そんなことがあつてたまるものか」

と又八が大口をあいてあざわらつていると、折もおりだ。
祈祷の列に加わつていった足助水正と佐分利五郎次などが、
さんばら髪に、血汐をあびて逃げかえつてきた。

「やア、その姿は——？」

今もいまとて、強情をはつていた轟又八、目をみはつてこ
うさけぶと、裾野から逃げかえつてきた者どもは声をあわせ
て、

「一大事、一大事。まんまと敵の計略におちいつて、頭領の
ご生死もわからぬような総くずれ——」

つづいて逃げてきた手下の口から、
「伊那丸じしんが先手となり、小幡民部が軍師となつて、も
うすぐここへ攻めよせてくるけはい」
と報告された。さらにあいだも待たず、

「あやしいやつが二、三十人ばかり、嶮岨をよじ登つて、人穴
の裏へまわつたようす」

「前面の雨ヶ岳にも、軍兵の声かきこえてきた。水門口のそ
とでも、鬨の声があがつた——」

一刻一刻と、矢のような注進。

そのごうごうたるさわぎのなかへ、風に乗つてきたごとく、
こつぜんと走りかえつてきた和田呂宋兵衛は、一同にすがた
を見せるよりはやく、

「なにをうろたえまわっているかッ、洞門をまもれ、水門へ
人数をくばれ、バカッ、バカッ、バカッ」

八方へ狂気のごとくとなりつけた。そのくせ、かれじしんからして衣はさかれ目は血ばしり、おもては青味をおびて、よほど度を失っているのだからおかしい。

昌仙は、それ見ろ、といわんばかり、

「おさわぎなさるな、頭領。大方こんなこととぞんじて、すでに手配はいたしておきました」

「おお軍師。このちはかならず御身のことばにそむくまい。

どうか寄手のやつらを防ぎやぶってくれ」

「ご安堵あれ、北条流の蘊奥をきわめた丹羽昌仙が、ここにあるからは、なんの、伊那丸ごときにこの人穴を一步も踏ませることはござらぬ」

轟又八は、いつのまにか、こそこそと雑兵のなかへ姿をかくしてしまった。

三

はやくも、一の洞門に関の声があがる。

まッ先に攻めつけてきたのは武田伊那丸であった。要所のあるないは咲耶子。すぐあとから、加賀見忍剣と木隠龍太郎のふたりが、右翼左翼の力をあわせて、おのおの二十人ほどひきつれ、えいや、えいや、洞門の前へおしよせてきた。

いっぽう——人穴から、どツと流れおちている水門口へかかった巽小文治は、槍ぞろい十五名の部下をつれて、水門をぶちこわそうとしたが、頭の上へガラガラと岩や大木を投げつけてくるのに悩まされた。のみならず、水門には、頑丈な鉄柵が二重になっているうえ、足場のわるい狭隘な谿谷であ

る。おまけに、全身水しぶきをあびての苦戦は一通りでない。

うら山の嶮にのぼって、殿堂へ矢を射こもうとした山県篤之助以下の弓組も、とちゅう、おもわぬ道ふさぎの柵にはばめられたり、八方わかれの謎道にまよわされたりして、やっとたどりついたが、はやくもそれと知った丹羽昌仙が、望楼のうえから南蛮銃の筒口をそろえて、はげしく火蓋を切ってきた。

丹羽昌仙の北条流の軍配と、二千の野武士と、この天嶮無双な砦によった人穴の賊徒らは、こうしてビクともしなかつた。

ついにむなしくその夜は明けた。——二日目もすぎた。三日目にも落とすことができなかつた。ああなにせよ小勢、いかに伊那丸があせつても、しよせん、百人足らずの小勢では洞門ひとつ突き破ることもむずかしそうである。

「民部、わしはこんどはじめて、戦の苦しさを知った。あさはかな勇にはやったのが恥かしい。しかし武夫、このまま退くのは残念じゃ」

前面の高地、雨ヶ岳を本陣として、ひとまず寄手をひきあげた伊那丸が、軍師小幡民部とむかい合つて、こういったのがちようど九日目。

「ごもっともでござります」民部も軍扇を膝について、おなじ無念にうつむきながら思わず、

「ああ、ここにもう二、三百の兵さえあれば、策をかえて、一つの戦略をめぐらすことができるのだが」

とつぶやくと、伊那丸も同じように、嘆をもらして、「そのむかし、武田菱の旗の下には、百万二百万の軍兵が招

かずしてあつまつたものを」

「また、わが君のおうえにも、かならず輝きの日がまいりましょう。いや、不肖民部の身を賭しましても、かならずそ

ういたさねば相なりませぬ」
「うれしいぞ民部。けれど、みすみす敵を目のまえにしなから、わずか七、八十人の味方とともにこのありさまでいるようでは……」

と無念の涙をたたえていると、いままで、うしろに黙然としていた木隠龍太郎が、なに思ったか、

「伊那丸さま——」
とすみだして、

「どうぞ某に四日のお暇をくださいますよう」といいだした。

「なに四日の暇をくれともうすか」

「されば、ただいま民部どのが、欲しいとおっしゃっただけの兵を、かならずその日限のうちに、若君のおんまえまで召しあつめてごらんにいれまする」

「おお龍太郎どの——」

と民部は、うれしそうな声と顔をひとつにあげて、

「民部、畢生の軍配のふりどき、ぜひともごはいりよをおねがいもうすぞ」

「しかし、いまの戦国多端のときに、二、三百の兵を四日にあつめてくるのは容易でないこと。龍太郎、それはまちがいないことか……」

伊那丸は気づかわしそうな顔をした。

が龍太郎はもう立ちあがって、敢然と礼をしながら、

「ちと心算もござりますゆえ、なにごとく拙者の胸におまかせをねがいます。ではわが君、民部どの、きょうから四日の

ちに、三百人の軍兵とともにお目にかかるでござりましょう」

「飯屋の幕をしぼって、陣をでた木隠龍太郎は、みずから「項羽」と名づけた黒鹿毛の駿馬にまたがり、雨ヶ岳の山麓から真一文字に北へむかった。

すると、かれのすがたを見かけた者であろうか、

「おおうい。おおうい木隠どの——」

と呼びかけてくる者がある。駒をとめてふとふりかえると、本栖湖のほうから槍組二隊をひきつれてそこへきた巽小文治が、せんとくに朱柄の槍をかついで立ち、

「おそろしい勢いで、どこへおいでなさるのじゃ」とふしぎそうにかれを見あげた。

「おお小文治どのか、拙者はにわかには大役をおびて、これから小太郎山へ立ちかえるところだ」

「ふーむ、ではいよいよ人穴攻めは断念でござるか」

「どうしてどうして。ほんとうの合戦はこれから四日目だ。なにしろいそぎの出先、ごめん——」

「おお待ちしてくれ。いったいなんの用で小太郎山へお帰り召さるのじゃ」と小文治がききかえすまに、駿馬項羽のかけは木隠をのせて、疾風のごとく遠ざかってしまった。

難攻不落の人穴攻めは、こうしてあと四日ののちを待つことになった。しかし、伊那丸や、忍剣や民部などの七将星の

ほかに、果心居士の秘命をうけている竹童は、そもそもこの大事なときを、どこでなにをまごごしているのだろう。

いくらのおんきな竹童でも、まさか、お師匠さまの叱言をわすれて、裾野の野うさぎなんかと、すすきのなかでグウグウ昼寝もしていまいが、もういいかげんに、なにかやりだしてもよいじぶん。

ぐずぐずしていれば、丹羽昌仙の密使が、秀吉のところへついて、いかなる番狂わせが起ろうも知れず、四日とたてば、木隠龍太郎の吉左右もわかってくる。どっちにしても、ここ二、三日のうちに果心居士の命をはたさなければ、こんどこそ竹童、鞍馬山から追んだされるにきまつている。

四

安土の山は焼け山だ。

安土の城も半分は焼けくずれている。

岩は赭くかわき、石垣はいぶり、樹木の葉は、みなカラカラ坊主になって黒い幹ばかりが立っていた。

その石段を、びよい、びよい、びよい。まるでりすのようなはやさでかけのぼっていったのは、竹ノ子笠に道中合羽をきて旅商人にばけた丹羽昌仙の密使、早足の燕作だ。

中途でちよつと小手をかざし、四方をながめまわして、

「ああ変るものだなあ。戦国の世の中ほど、有為転変のはやいものはない。どうだい、ついこの夏までは、右大臣織田信長の居城で、この山の緑のなかには、すばらしい金殿玉楼が見えてよ、金の鯨や七重のお天主が、日本中をおさえるようにそびえていた安土城だ。それが、たった一日でこのありさま。おもえば明智光秀という野郎も、えらい魔火をだし

やあがったものだなア……」

燕作でなくても、ひとたびここに立って、一朝の幻滅をかなみ、本能寺変いらいの、天下の狂乱をながめる者は、だれか、惟任日向守の大逆をにくまずにいられようか。

けれど、その光秀じしん、悪因悪果、土冠の竹槍にあえない最期を上げてしまった。で、いまではこの安土城のあとへ、信長の嫡孫、三法師丸が清洲からうつされてきて、焼けのこの本丸を修理し、故右大臣家の跡目をうけついでいる。

だが、三法師君は、まだきわめて幼少であったため、もっぱら信長の遺業を左右し、後見人となっている者はすなわち、ここ、にわかには大鵬のかたちをあらわしてきた左少将羽柴秀吉。——つまり、早足の燕作が、はるばる尋ねてきたその人である。

「おっと、見物は帰りみちのこと、なにしろ役目を果さないうちは気が気じゃない……」

と燕作は、ふたたび笠のふちをおさえながら、一散に石段から石段をかけのぼっていくと、

「こらッ」

といきなり合羽の襟をつかまれた。

「へ、へい」

とびっくりしてふりかえると、具足をつけた侍——いかにも強そうな侍だ。

槍の石突きをトンとついて、

「どこへいく? きさまのような町人がくるころじゃないもどれッ」

とにらみつけた。

すると、焼け崩れの土塀のかげからさらに、りっぱな武将が四、五人の足軽をつれて見廻りにきたが、このていを見ると、つかつかとよってきて、

「才蔵、それは何者じゃ」

とあとでしゃくつた。

「ただいま、取り調べているところでござります」

「うむ、お城のご普請中をつけこんで、雑多なやつがまぎれこむようすじゃ。びしびしと締めつけて白状させい」

燕作はおどろいた。

そのびしびしのこないうちにと、あわてて密書を取りだし、

「もしもし、わたくしはけっしてあやしい人間じゃあござりません。この通り秀吉さまへ大事なご書面を持ってまいりましたもの、どうぞよろしくお取次ぎをねがいます。へい、これでございます」

「どれ」

武将は受けとって、と見、こう見、やがて、うなずいてふところに入れてしまった。

「よろしい。帰っても大事ない」

「へい……」

燕作はもじもじして、

「ですが、しつれいでございますが、あなたさまはいつたい、どなたでござりましょうか、お名まえだけでもうかがっておきます」と、その……」

「それがしは秀吉公の家臣、福島市松だわ」

「あ、正則さま」

と、燕作はとびあがって、

「それなら大安心、これでわたくしの荷も降りたというわけ。ではみなさんごめんなさいまし、さようなら」

いま、ツイそこでおじぎをしていたかと思うまに、もう燕作のすがたは、松の樹がぐれに小さくなって、琵琶湖のほうへスタコラと歩いていった。

「おそろしい足早な男もあるもの——」

福島正則は、家来の可児才蔵と顔をあわせて、しばし、あきたように竹ノ子笠を見送っていた。

吹針の蚕 婆

—

うえの羽織は、紺地錦へはなやかな桐散し、太刀は黄金づくり、草色の革たびをはき、茶釜鬚はむらさきの糸でむすぶ。すべてはでずきな秀吉が、いま、その姿を、本丸の一室にあらわした。

そこでかれは、腰へ手をまわし、少し背なかを丸くして、しきりに壁をにらんでいる。達磨大師のごとく、いつまでもあきないようすで、一心に壁とむかいあっている。

飯をかむまもせわしがっているほどの秀吉が、にらみつめている以上、壁もただの壁ではない。縦六尺あまり横三間余のいちめんわたって、日本全土、群雄割拠のありさまを、青、赤、白、黄などで、一目瞭然にしめした大地図の壁絵。——さきごろ、絵所の工匠を総がかりで写させたものだ。

「あるある。安土などよりはぐんとよい地形がある。まず秀吉が住むとなれば、この摂津の大坂だな……」

この地図を見ていると、秀吉はいつもむちゅうだ。青も赤も黄色も眼中にない、かれの目にはもう一色になっているのだ。

「関東には一カ所よい場所があるな。しかし、西国の猛者どもをおさえるにはちと遠いぞ。——お、これが富士、神州のまん中に位しているが、裾野一帯から、甲信越の塚にかけて、無人の平野、山地の広さはどうだ。うむ……なかなかぶっそうな場所が多いわ」

ひとり語をもらしながら、若いのか爺いなのか、わからぬような顔をちよつとしかめていると、

「秀吉どの——」
かるく背なかをたたいた人がある。

「おお」

われに返つてふりむくと、いつのまにきていたのか、それは右少将徳川家康であった。

「だいぶ、ご熱心なていに見うけられますのう」

「はッはッははは。いやほんのたいくつまぎれ。それより家康どのには、近ごろめずらしいご登城」

「ひさしく三法師君にもご拝顔いたしませぬので、ただいまごきげんうかがいをすまして、お暇をいただいてまいりました。時に、話はちがいますが、さきごろ、秀吉どのには世にもめずらしい品をお手に入れたそうな」

「はて？ なにか茶道具の類のお話でもござりますかな」

「いやいや。武田家につたわる天下の名宝、御旗楯無の二品

をお手に入れたということではござりませぬか」

「あああれでござるか、いや例の好みのくせで、求めたことは求めましたが、さて、なんに使うということもできない品で、とんだ背負物でござる。あはははははは」

と、秀吉は、こともなく笑つてのけたが、家康にはいたいた皮肉である。穴山梅雪に命じて、じぶんの手におさめようとした品を、いわば不意に、横からさらわれたような形。

しかし、秀吉はそんな小さな皮肉のために、黄金千枚を積んで買いもとめたわけでもなく、また決して、御旗楯無の所有慾にそそられたものでもない。要は和田呂宋兵衛という野武士の潜勢力を買ったのだ。

清濁あわせ呑む、という筆法で、蜂須賀小六の一族をも、その伝で利用した秀吉が、呂宋兵衛に目をつけたのもとうぜんである。

かれを手なずけておいて、甲駿三遠四カ国の大敵、げんに目のまえにいる徳川家康を、絶えずおびやかす、時によれば、背後をつかせ、つねに間諜の役目をさせておこう、——というのが秀吉のどん底にある計画だ。

と、折からそこへ、

「右少将さまにもうしあげます。ただいま、ご家臣の本多さまがお国もとからおこしあそばしました」

と、ひとりの小侍が取りついできた。すると、入れかわりにまたすぐと、べつな侍が両手をつき、

「左少将さま。福島正則さまが、ちとご別室で御意得たいと先刻からおましかねでござります」

ふたりは、大地図のまえをはなれて、目礼をかわした。

「ではまた、後刻あらためてお目にかかりましょう」
端敵、麒麟のごとき左将秀吉。風格、鳳凰のような
右少将家康。どっちも胸に大野心をいだいて、威風あたりを
はらい、安土城本丸の大廓を右と左とにわかれていった。

二

「野武士のうちにも人物があるぞ」

別室にうつって、福島正則の手から密書をうけ取った秀吉
は、一読して、すぐグルグルとむぞうさに巻きながら、

「丹羽昌仙というやつ、ちょっと使えるやつじゃ。したがこ
の手紙の要求などをいれることはまかりならん。ほっとけ、
ほっとけ」

「信玄の孫、伊那丸とやらが、ふたたび、甲斐源氏の旗揚げ
をいたす兆しが見えると、せっかく、かれからもうしてまい
ったのに、そのままにいたしておいても、大事はござります
まいか」

「市松、そこが昌仙のぬからぬところじゃ。われからことに援兵
をださせて、北条、徳川などの領地をさわがせ、その機に乗
じておのれの野心をとげんとする。——秀吉にそんな暇はな
い、乳くさい伊那丸ごとき者にほろぼされる者なら滅んでし
まえ」

「では、だれか一、二名をつかわして、呂宋兵衛のようす、
また、武田伊那丸の形勢などを、さぐらせて見てはいかががで
ござりましょうか」

「む、それはよいな。——だが、待てよ、家康の領内をこえ

ていかにやならぬ。腹心の者はみな顔を知られているし、そ
うかともうして、凡々な小者ではなんの役にも立つまいのう」
「それには、屈強な新参者がひとりござります」
「それやだれだ」

「可児才蔵という豪傑でござる。わたくしじまんの家来、ち
かごろのほりだし者と、ひそかに鼻を高くしておるほどの者
でござりまする」

「む、山崎の合戦このかた、そちの幕下となった評判の才蔵
か、おお、あれならよろしかろう」

正則は、秀吉のまえをさがって、やがて、この旨を可児才
蔵にふくませた。

才蔵は新参者の身にすぎた光栄と、いさんでその夜、こつ
そりと鳥刺し稼業の男に変装した。そしてもち竿一本肩にか
け安土の城をあかつきに抜けて、富岳の国へ道をいそぐ——
ずっと後年——関ヶ原の役に、剣頭にあげた首のかずを知
らず、斬っては笹の枝にさし、斬っては笹に刺したところか
ら、「笹の才蔵」と一世に武名をうたわれた評判男は、いよいよ
よこれから、武田伊那丸の身边に近づこうとする変装の鳥刺
し、この可児才蔵であった。

剣道は卜伝の父塚原土佐守の直弟子。相弟子の小太郎と同
格といわれた腕、槍は天性得意とする可児才蔵が、それとは似
もつかぬもち竿をかついで頭巾に袖なしの鳥刺し姿。

「ピピピピッ、……ピヨロツ、ピヨロ、ピヨロ……」

時々、吹きたくない鳥呼笛をふき、たまには、雀の後を
おっかけたりして、東海道の関所から、関所を、たくみに切
りぬけてくるうちに、これはどうだろう、かほどたくみに変装

したかれを、もうひとりの男が、見えつかくれつ、あとをつけて、慕っていく。

ところが、世の中はゆだんがならない、その男はとちゅうからつけだしたのではなく、じつは、安土の城からくつついてきているのだ。

同じ日に、浜松から安土へきた家康の家臣、徳川四天王のひとり本多忠勝が、こっそりその男をつけさせた。——というのは、竹ノ子笠の燕作が、正則に密書をわたしたようすを、休息所の窓から、とつくりならんでいたのである。

「はてな？」小首をかしげた忠勝は、主人家康と面談をすましてから、とものなかにいる菊池半助という者をひそかによんだ。そしてなにかささやくと、半助はまたどこかへか立ち去った。

この菊池半助も、前身は伊賀の野武士であったが、わけあって徳川家に見いだされ、いまでは忍術組の組頭をつとめている。いわゆる、徳川時代の名物、伊賀者の元祖は、この菊池半助と、柘植半之丞、服部小源太の三羽鳥。そのひとりである半助が、忍術に長けているのはあたりまえ、あらためてここにいう要がない。したがって偽鳥刺しの可児才蔵の後をつけ、落ちつく先の行動を見とどけるくらいな芸当は、まったく朝飯前の仕事だった。

三

ピキ ピッピキ トッピキピ

おながかへって北山だ

芋でもほって食うべえか
芋泥棒にやなりたくない
鳶を捕って食うべえか

ヒヨロヒヨロ泣かれちや喰べかねる
そんなら雪でも食っておけ

富士の山でもかじりてえ

ピキ ピッピキ トッピキピ

だれだろう？ そも何者だろう？ こんなでたらめなまずい歌を、おくめんもなく、大声でどなってくるものは。

この村には、家はならんでいるが、ほとんど人間はいなくなっているはず。五湖、裾野、人穴、いたる所ではげしい斬り合があったり、流れ矢が飛んできたりしたため、善良な村の人たちは、すわ、また大戦の前駆かと、例によって、甲州の奥ふかく逃げこんだ。

それゆえ、秋の日和だというのに、にわとりも鳴かず、杵の音もせず、あわれにも閑寂をきわめている。いま聞こえたへたくそな歌も、一つはこのせいで、いっそ、素頓狂にもひびいてきこえる。

「やア、こいつア、こいつアこいつアうまいものがあらあ——」

こんどは地声で、人なき村のある軒先に立ち——こういったのは竹童である。

かれが、目の玉をクルクルさせ、よだれをたらして見あげたのは、大きな柿の木であった。上には枝もたわわに、まだ青いのや、赤ずんできた猿柿が、七分三分にブラさがっている。

「こっちの端にある赤いやつはうまそうだなあ。取っちゃあ悪いかしら？ かまわないかしら……？」

いつまでも立って考えている。この姿を、果心居士が見たら、なんとあきれるだろう。

口に葉っぱをくわえているところを見ると、いま、木の葉笛を吹きながら、へんなでまかせを歌ったのもこの竹童にそういない。いったいこの子は、お師匠さまからいつつけられている計略なんか、とつくにドコかへ忘れてしまっているのではないかしら、第一きょうはかんじんな、かの昇天雲である驚にも乗っていない。

「いいや、いいや。一ツや二ツくらいとってかまうもんか。柿なんか、ひとりでに、地べたから生えてるものなんだ。これを取ったって、泥棒なんかになりやしない」

勝手なりくつをかんがえて、ぴよいと、木へ飛びつくと、これはまたあざやかなもの。なにしろ、本場鞍馬の山で鍛えた木のぼり。するツと上がって、一番赤い柿のなっている枝先へ、鳥のようにとまってしまった。

「ベツ、しぶいや」

びしゃつと下へたたきすてる。

「ありがたい——」

次のは甘かったと見える。もう口なんかきいていない。猿のようにカリカリ音をさせて頬ばり、たねだけを下へはきだしている。

「甘いなあ、これで一霜かかればなお甘いんだ。おいらばかり食べているのはもったいない、お師匠さまにも一つ食べさせてあげたいな……」

食うに専念、ことばはブツブツ噛みつぶれた寝言のようだ。

このぶんなら、まだ十や十五は食べえそうだという顔でいると、どうしたのか竹童、時々、チクリ、チクリと、変に顔をしかめた。

「ア痛！」と粘った手で頬ぺたをおさえた。が、またすぐ食う。

木を降りるのもおいしいようす。と、一口かじりかけると、またチクリ。

「ちえッ」と舌うちして襟くびをなでた。こんどは大へん、なでた手がチクリと刺された。

「なんだらう、さつきから——」

ソツとさぐってみると、こいつはふしぎ、針だ、キラキラする二寸ばかりの女の縫針。

「あッ！」

そのとたんに、竹童はおもわず肱をまげて顔をよけた。まへの萱葺屋根の家から、射るようなすどい目がキラツとこちらへ光った。

「降りろ、小僧！」

見ると、百姓家のやぶれ廂の下から、白い煙がスーッとはいあがっている。そこには、ひとりのお婆さん、麻のような髪をうしろにたれ、鍋や、糸かけを前に、腰をかけて、繭を煮ながら、湯のなかの白い糸をほぐしだしている。

四

柿の木から飛びおりた竹童は、はじめてそこに人あるのを

知って、軒先に近より、家の中をのぞいてみると、奥には雑多な蚕道具がちらかっており、土間のすみの土べっついのみえには、ひとりの男がうしろ向きにしゃがんで、スパリ、スパリ、煙草をつけながら火を見ている。

「ごめんよ、あれ、お婆さんとこの柿の木だったのかい？」

竹童は繭の鍋をのぞきながら、たツた一つおじぎをした。

婆さんは、ぎよろツとした目をあげて、

「人みしりをしねえ餓鬼だ。なんだって、人んとこの柿をだまってぬすみさらすのじやい」

「だからあやまつてるじやないか。ああそうそう、おいらも用があつてこの村へきたんだっけ。お婆さん、どこかこのへんに、物をあきなっている家はなにかしらなあ」

「でまかせをこけ。この村には、ここともう一軒鍛冶屋よりほかに人はいやしない。そんなことは承知のうえで、柿泥棒にきやがつたくせにして」

「ほんとだ、おいらまったく買いたい物があつてきたんだ。

お婆さんとこにあつたらゆずつてくれないか」

「なんだい」

「松明さ」

「松明？」

「アア、二十本ばかりほしいんだがなあ」

「餓鬼のくせに、松明なんかなんにするだ」

「ちよツといることがあるんだよ。お婆さんの家に持ちあわせはないかね」

「ねえッ、そんなものは！」

といった婆さんの顔を見て、竹童は「あッ」と叫んでしま

った。お婆さんの口の中で光った物があつたのだ。三、四本の乱杭齒の間を、でたり入ったりしているのは、たしかに四、五十本の縫針だ。

これだ！

さっき柿の木の上まで飛んできて頬つぺたを刺した針は——竹童はむツとした。

「たぬき婆。もう、松明なんかたのまない！」

「なんだと、この小僧」

「よくも、おいらをさんざん悩めやがつたなッ」

いきなり腰の棒切れを抜いてふりかぶり、蚕婆の肩をピシリと打っていったせつな、あら奇怪、身をかわした婆の口から、ピラピラピラピラピラピラ糸のような細い光線と

なつて、竹童の面へ吹きつけてきた含み針！

これこそ、剣、槍、薙刀の武術のほかのかくし技、吹針の術ということを、竹童も、話には聞いていたが、であったのは、きょうがはじめてである。

「その時に、目に気をつけろ、敵の目をとるのが吹針の極意」と、かねて聞いていたので、竹童はハツとして、とっさに顔をそむけて飛びのいた。

五

その時だった。

竹童と蚕婆の問答をよそに土べっつい火にむかつて煙草をくゆらしていた脚絆わらじの男が、ふいに戸外へ飛びだしてきた。

男は、やにわに、竹童の首ツ玉へ、うしろから太腕を引つけて、かんぬきしばりに、しばりあげた。

「鞍馬山の小僧、いいところであつた！」

「くッ、くッ……」

竹童はのどをひッかけられて声がでない。顔ばかりをまッ赤にし、喉首の手を、むちやくちやにひッかいた。

「ちッ、畜生。きようばかりはのがしやしねえ」

「だれだいッ、くッくくくくるしい」

「ざまあみやがれ。小ッぽけなぶんざいをしやがって、よくも武田伊那丸の謀者になって、人穴へ飛びこみ、おかしらはじめ、多くの者をたぶらかしやがったな。その返報だ、こうしてやる！ こうしてやる」

と、なぐりつけた。

「くそウ！ おいらだつて、こうなりや鞍馬山の竹童だ」

と、ぼつぜんとして、竹童もはんぼつした。

なりこそちいさいが、必死の力をだすと、大人もおよばぬくらい、ねじつけられている体をもちいて、男の鼻と唇へ指をつっこみ、鷲のように爪を立てた。

「あッ」

これにはさすがの男も、ややたじたじとしたらしい。ゆだんを見すまし、竹童は腕のゆるみをふりほどくが早いか一目散

「おまえみたいにな下っ端に、からかつてなんかいられるもんかい！」

すてぜりふをいって、あとをも見ずに逃げだした。

「バカ野郎」

男は割合に落ちついて見送っている。

「そうだそうだ。もツと十町でも二十町でも先に逃げてゆけ、はばかりながら、てめえなんか追いつくにや、この燕作さまにはひと飛びなんだ」

この男こそ、燕作だった。さてこそ、竹童を伊那丸の手先と見て、組みついたはず。

かれは、首尾よく、丹羽昌仙の密書をとどけて、ここまで帰ってきたものの、人穴城の洞門はかたく閉められ、そこには伊那丸の一党が見張っているの、山寨へも帰るに帰られず、蚕婆の家にかくれていたものらしい。

「あの竹童のやつをひつ捕らえていったら、さだめし呂宋兵衛さまもお喜びになるだろうし、おれにとつてもいい出世仕事だ。どれ、一つ追いついて、ふんづかまえてくれようか」

いかと思ふに、もう燕作は、礫のとんでいくように走っていた。それを見るとなるほど稀代な早足で、日ごろかれが、胸に笠をあてて馳ければ、笠を落とすことはないと自慢しているとおりに、ほとんど、踵が地についているとは見えな

い。竹童も、逃げに逃げた。折角村から蛭ヶ岳の裾を縫って街道にそって、足のかぎり、根かぎり、ドンドンドンンかけだして、さて、

「もうたいがい大じょうぶだろう——」と立ちどまり、ひょいとあとをふりかえってみると、とんでもないこと、もうすぐうしろへ追いついてきている。

「あッ」またかける。燕作もいちだんと足を早めながら、「やあい、竹童。いくら逃げてもおれのまえをかけるのはむ

だなこつたぞ」

「おどろいた早速だな、早いな、早いな、早いな」

さすがの竹童も敵ながら感心しているうちに、とうとう、ふたたび燕作のふと腕が、竹童の襟がみをつかんで、ドスンとおおむげさまに引つくりかえした。

そこは、釜無川の下、富士川の上、蘆山の河原に近いところである。燕作は、思いのほかすばしっこい竹童をもてあまして、手捕りにすることをだんねんした。そのかわり、かれはにわかによい殺気を肩間にみなぎらせ、

「めんどうくせえ、いッそ首にして呂宋兵衛さまへお供えするから覚悟をしろ」とわめいた。

ひきぬいたのは、二尺四寸の道中差、竹童はぎよツとしてはね返った。とすぐに、するどい太刀風がかれの耳たぶから鼻ばしらのへんをブーンとかすった。

哀れ竹童、組打ちならまだしも、駈け競べならまだしものこと——真剣の白刃交ぜをするには、悲しいかな、まだそれだけの骨組もできていず、剣をとつての技もなし、第一、腰に差してる刀というのが、頼みすくない櫛の棒切れた。

石投げの名人

—

秋の水がつめたくなくなって、鮠も山魚もいなくなつたいまじぶん、なにを釣る気か、ひとりの少年が、蘆川の瀬にむかっ

て、釣り糸をたれていた。

少年、年のころは十五、六。

すこし低能な顔だちだが、目だけはずるく光っている。鳥の巣みたいな髪の毛をわらでむすび、まッ黒によくれた山袴をはいて、腰には鞆のこわれを、あけびの蔓でまいた山刀一本さしていた。

「ちえッ、釣れねえつれねえ、もうやめた！」

とうとう、かんしゃくを起したとみえて、いきなり竿をビシビシと折つて、蘆川のながれへ投げすてた。

「あ、瀬の岩にせきれいが遊んでいやがる。そうだ、これからは鳥うちだ、ひとつ小手しらべにけいこしてやろうか」

と、足もとの小石を三つ四つ拾いとつたかと思つと、はるか、流れの中ほどをねらつて、おそろしく熟練した礫を投げはじめた。

「やッ——」と、小石に気合いがかかつて飛んでいく。

と見るまに、二羽のせきれいのうち、一羽が瀬の水に落ちて、うつくしい波紋をクルクルと描きながら早瀬のほうへおぼれていった。

「どんなもんだい。蛾次郎さまの腕まえは——」

かれはひとりで鼻うごめかしたが、もうねらうべきものが見あたらないので、こんどは、たくみな水切りの芸をはじめた。一つの小石が、かれの手からはなれるとともに、なめらかな水面を、ツイッ、ツイッ、ツイッと水を切つては跳び、切つては跳ぶ、まるで、小石が千鳥となって波を蹴っていくよう。

「七つ切れた！　こんどは十！」

調子にのって、蛾次郎がわれをわすれているときだ。

そこから二、三町はなれたところの河原で、ただならぬさけび声がおこった。かれはふいに耳をたって、四、五間ばかりかきだしてながめると、いまでも、ひとりの兇漢が、咬々たる白刃をふりかぶって、小ッぽけな小僧をまッ二つと斬りかけている。

それは、燕作と、竹童だった。

竹童はいまや必死のところ、櫂の棒切れを風車のようにふって、燕作の真剣と火を飛ばしてたたかっているのだ。しかし、大の男のするどい太刀かぜは、かれに目瞬するすきも与えず、斬り立ててきた。あわや、竹童は血煙とともにそこへ命を落としたかと思えたが、

「あッ——」

ふいに燕作が、唇をおさえながら、タジタジとよろけた。どこからか、風を切って飛んできた小石に打たれたのである。

「しめた！」と、竹童は小さな体をおどらせて、ピシリッと、燕作の耳たぶをぶんなくった。

「野郎ッ！」

怒髪をさかだてて、ふたたび太刀を持ちなおすと、またブーンとかれの小手へあたった第二の礫。

「ア痛ッ」

ガラリと道中差をとり落としたが、さすがの燕作も、それを拾いにとって、ふたたび立ち直る勇気もないらしい。笑止や、四尺にたらぬ竹童にうしろを見せて、例の早足。雲を霞と逃げだした。

「待て。意気地なしめ！」

竹童は、急に気がつよくなって、こんどはまえと反対に、

かれを追ってドンドン走りだすと、ちやうど、あなたからも河原づたいに、黒鹿毛の駒を疾風のごとく飛ばしてくるひとりの勇士があった。——見るとそれは秘命をおびて、伊那丸の本陣雨ヶ岳をでた奔馬「項羽」。——上なる人はいうまでもなく、白衣の木隠龍太郎だ。

「や、や、あいつは伊那丸がたの武将らしいぞ」

と、戸まどいした燕作が、その行く先でうろろしているうちに、たちまちかけよった龍太郎、

「これッ」

と、すれちがいざま、右手をのばして燕作の首すじをひつつかみ、ヤツと馬上へつるし上げたかとおもうと、

「往來のじやまだ！」

手玉にとつてくさむらのなかへほうりこみ、そのまま走りだすと、こんどはバツタリ竹童にいき会った。

「おお、それへおいでなされたのは龍太郎さま——」

「やあ、竹童ではないか」ピタリと「項羽」の足をとめて、
「なんでこんなところでうろついているのだ。呂宋兵衛の手下どもに見つけられたら、命がないぞ、はやく鞍馬山へ立ち帰れ」

「ありがとうございますが、まだこの竹童には、お師匠さまからいいつけられている大役があるんです。ところで龍太郎さまは、これからいずれへおいそぎですか」

「されば小太郎山へまいって、三百人の兵をかりあつめ、ここ四日のうちに、人穴城を攻めおとす計略」

「わたくしがやる仕事も四日目です。どうも、お師匠さまの

おさしずは、ふしぎにピタリピタリと伊那丸さまの計略と一致するのが妙でございます」

「ふーむ……してその密計とはどんなことだ？」

「天機もらすべからず。——しゃべるとお師匠さまからお目玉を食います。それよりあなたこそ、どうして三百人という兵がわずか四日で集められますか、まさかわら人形でもありますまいに」

「それも、軍機は語るべからずじゃ」

「あ、しつぺ返してございますか」

「才、そんなのんきな問答をいたしている場合ではない、竹童さらば！」

と、ふいに鞭をあげて、行く手をいそぎだそうとすると何者か、

「ばかだな、ばかだなあ！ あの人はいったいどこへいくつもりなんだい！」とあざわらう声がする。

木隠龍太郎も竹童も、そのことばにびっくりしてふりかえると、石投げをしていた蛾次郎がいつかのっさりそこに立っていた。

隠密落とし

—

「拙者をバカともうしたのはきさままだな」

龍太郎がにらみつけると、蛾次郎はいっこうにこたえのな

いふうで、ゲタゲタと笑いながら、

「ああおれだよ」

「ふらちなやつ、なんでさようなことをぬかした」

「だってお侍さんは、小太郎山へいくんだっていうのに、とんでもないほうへ馬の首をむけていそぎだしたから笑ったんだ」

「ふーむ、ではこっちへむかっていつてはわるいか」

「悪いことはないけれど、この蘆川を大まわりして、甲州街道をグルリとまわった日には、半日もよけいな道を歩かなけりやならない。それより、この川を乗っかって駿州路を左にぬけ、野之瀬、丸山、鷲の巣とでて、野呂川を見さえすれば、すぐそこが、小太郎山じゃないか」

と、すこし抜けている蛾次郎も、住みなれた土地の地理だけに、くわしく弁じた。

「なるほど、これは拙者がこのへんに暗いため、無益の遠路につかれていたかも知れぬ。しかし、この激流を、馬で乗っきる場所があるうか」

「あるとも、水馬さえ達者なら、らくらくとこせる瀬がある。ここだよ、お侍さん——」

と蛾次郎はまえに水切りをやっていたところを教えた。

「む。なるほど、ここは深そうだ、川幅も四、五十間、これくらいなところなら乗っ切れぬこともあるまい」

と龍太郎はよろこんで、浅瀬から項羽を乗りいれ、ザブザブ、ザブ……と水を切っていくうちに紺碧の瀬をあざやかに乗りきって、たちまち向こう岸へ泳ぎ着いてしまった。

「ありがとう」

と、それを見送るとほつとしたさまで、竹童が礼をいうと、
蛾次郎はクスンと笑って、

「なにがありがてえんだ、おめえに教えてやったわけじゃない」といった。

竹童はじぶんより三歳か四歳上らしい蛾次郎を見上げて、
へんなやつだとおもった。

「そのことじゃないよ、さっきおいらが悪いやつに、あやうく殺されそうになったところを、石を投げて逃がしてくれたから、その礼をいったのさ」

「あんなことはお茶の子だ、こう見えてもおれは石投げ蛾次郎といわれるくらい、礫を打つのは名人なんだぜ」

と、ボロ鞆の刀をひねくって、竹童に見せびらかした。

「蛾次郎さんの家はどこだい？」

「おれか、おれは裾野の折角村だ、だがいまあの村には、桑畑の蚕婆と、おれの親方だけしか住んでいないから人無村というほうがほんとうだ」

「親方っていう人は、あの村でなにをしているんだい」

「知らねえのかおめえは、おれの親方は、鼻かけ卜齋っていう有名な鍛冶だよ。おれの親方の鍛った矢の根は、南蛮鉄でも射抜いてしまっていて、ほうぼうの大名から何万ていう仕事かきているんだ。おれはその秘蔵弟子だ」

「偉いなあ——」竹童はわざと仰山に感心して、

「じゃ、蛾次郎さんそこには、松明なんかくさるほどあるだろうな」

「あるとも、あんなものなら薪にするほどあらあ」

「おいらに二十本ばかりそっとくれないか」

「やってもいいけれど、そのかわりおれになにをくれる」と蛾次郎はずるい目を光らした。

竹童はどうわくした。お金もない。刀もない。なんにもない。持っているのは相変らずの棒切れ一本だ。そこで、

「お礼には、鷲に乗せて遊ばしてやら。ね、鷲にのって天を翔けるんだぜ。こんなおもしろいことはない」といった。

「ほんとうかい、おい！」蛾次郎は、目の玉をグルグルさせた。

「うそなんかいうものか、松明さえ持ってきてくれれば乗せてやる。そのかわり夜でなくツチャイけない」

「おれも夜の方がつごうがいい。そしておまえはどこに待っている？」

「白旗の宮の森で待ってら、まちがいなくくるかい」

「いくとも！ じゃ今夜、松明を二十本持っていたら、きつと鷲に乗せてくれるだろうな、うそをいうと承知しないぜ、おい！ おれは切れる刀を差しているんだからな」

と、またあげび巻の山刀を自慢した。

二

木隠龍太郎のために、河原へ投げつけられた燕作は、氣をうしなっていたおれがいたが、ふとだれかに介抱されて正気づくくと、鳥刺し姿の男が、

「どうだ、気がついたか」

とそばの岩に腰かけている。見れば、つい四、五日前に安土城

で、じぶんの手から密書をわたした福島正則の家来可児才蔵である。

燕作はあつけにとられて、

「あ、いつのまにこんなところへ」と、思わず目をみはった。

「シッ、大きな声をいたすな、じつは、秀吉公の密命をうけて、武田伊那丸との戦いのもようを見にまいったのだ、ところで、さっそく丹羽昌仙に会いたい、そのほう、これより人穴城のなかへあんないいたせ」

「とてもむずかしゅうございます。敵は小人数ながら、小幡民部という軍配のきくやつがいて、蟻ものがさぬほど嚴重に見張っているところですから」

「どの城にも、秘密の間道はかならず一カ所はあるべきはず、そちは、それを知らぬのであろう」

「さあ、間道といえ、ことによると蚕婆が、知っているかもしれない。あいつは呂宋兵衛さまの手先になって、それとなくそとのようすを城内へ通じている、裾野の目付婆、とにかくそこへいってききただして見ることにいたしましう」

と燕作は、可児才蔵のあんなにたつて、人無村の蚕婆の家までもどつてきた。

「お婆さん、開けてくれないか、燕作だよ。燕作が帰ってきたんだから、ちょっと開けておくれ」

もう日が暮れている。

とざした門をホトホトとたたくと、なかから婆さんがガラリとあけて、灯影に立った可児才蔵のすがたをいぶかしそうに睨めました。

「だれだ、燕作さん、この人は村ではいっこう見たことがないかたじやないか」

「このおかたは、姿こそ、変えておいでなさるが、福島正則さまのご家臣で可児才蔵というお人、昌仙さまの密書で、わざわざ安土城からおいでくださったのだ」

と説明すると、蚕婆はにわか態度を変えて、下へおかぬもてなししよう。茶を煮たり酒をだしたりしてすすめた。

三

「それはようおいでなされました。さだめし、昌仙さまのお手紙で、多くの軍兵を秀吉さまからおかしくださることになるのでございましょうね」

「いや、とにかく軍師と会って、そうだんをしてみたうえじや。ところがこれなる燕作のもうすには、しよせん人穴城へは入れぬとのこと、せつかくここまでまいりながら、呂宋兵衛どのにも軍師にも、会わずにもどるとは残念千万」

「いえいえ。そういう大事なお使者なら、たった一つ人穴城へぬける秘しみちへ、ごあんなにいたしましう。これ燕作さん、おめえちよつと、裏表にあやしいやつがいらないかどうか検めておくれ」

「がってんだ」と燕作が家のあたりを見まわしてきて、「だれもあやしいような者はいない。なっているのは鹿ぐらいなもの——」

というと、蚕婆は、はじめて安心して、じぶんのすわっている下の蓆を、グルグルと巻きはじめた。

おやと、燕作がびつくりしている間に、さらに、一畳敷ほどの床板をはねあげると、縁の下は四角な井戸のように掘り下げられてあった。顔をだすと、つめたい風がふきあげてくる。

「ここをおりと、あとは人穴城の地下洞門のなかまで三十町一本道でいけますのじゃ、さ、人目にかからないうちに、すこしもはやく、おこしなざるがよい」

と蚕 婆がせきたてると、才蔵は、間道の口をのぞいてから、ふいと顔をあげて、

「婆、杖にして飛びこむから、長押にかかっているその錆槍を、かしてくれい」

と指さした。婆は彼のいう通り、石突きをたよりに、下へ降りるのであろうと、なんの気なしに取って渡すと才蔵は、

「かたじけない」

と受けとって、ポンと、槍の石突きを下へ降ろすかと思つて、まに、意外や、電光石火、

「やッ——」

と一声、錆槍の穂先で、いきなり真上の天井板を突いた。とたんに、屋根裏を獣がかけまわるような、すさまじい音が、ドタドタドタ響きまわった。

「やッ、なんだ——」

と蚕婆と燕作が、飛びあがっておどろくうちに、才蔵は、すばやく間道のなかへ姿をかくして、下からあおむいて笑っている。

「おどろくことはない、天井うらに忍んでいたやつは、徳川家の菊池半助だ、これで隠密落としての禁厭がすんだから、もう

安心。燕作、はやくこい！」

「じゃあ婆さん、あとはたのむよ」

と燕作もつづいてなかへ姿をけした。その足音が地の下へとおざかるのを聞きながら、蚕 婆はすぐもとのとおり床板や蓆を敷きつめ、壁にかかっている獣捕りの投げ縄をつかむが早いか、いきなりおもてへ飛びだした。

「いやがった！」

かがりのような目を磨ぎすまして、あなたこなたを見まわした蚕婆は、ふと、七、八間さきの闇のなかで、なにやらうごめいている人影を見つけて、じつとねらった。

と——それはまぎれもなく、天井裏で膝を突かれた曲者が、小川の水で傷手を洗っているのだ。頭から足のさきまで、烏のように黒装束をした隠密の男、すなわち徳川家からまわされた菊池半助。

「おうッ！」

ふいに吠えるような蚕婆の声とともに、さすがは半助、足の痛手を忘れて、ポーンと小川を跳びこえたが、よりはやく、闇のなかを飛んできた投げ縄の輪が無残、五体からんでザブーンと、水のなかへ捕りおとされてしまった。

鼻かけ卜齋と泣き虫蛾次郎

—

さすが伊賀衆の三羽鳥、菊池半助も、可児才蔵にみやぶら

れて、鏑槍の穂先を膝にうけ、そのうえ、投げ縄にかかって五体の自由を奪われては、どうすることもできない。

「ざまをみさらせ！ 命知らずが」

蚕婆が毒つきながら、縄のまま半助をひきずってきて、家の前の柿の木へグルグル巻きにしぼってしまった。

「夜明けまでに、手間いらずの法で殺してやる。うぬばかりでなく、この村へ隠密にはいる者はみんなこうだ」

蚕婆は、やがて枯れ木を集めてきて、半助の身辺に積みあげ、端のほうから火をつけてメラメラと燃えあがったのを見ると、そのまま家へはいつて寝てしまった。

焰がたつても、はじめのうちは覆面や衣類がぬれていたの、しばらくさまでは思わなかったが、やがて衣類がかわき、枯れ木の火焰が、パチパチと夜風にあおり立てられてくるにつれて、菊池半助は焦熱地獄の苦しみ。

「ア熱ッ、ア熱ッ、アアアアア」

おもわず悲鳴をあげて、必死に縄を切ろうともだえていた。

——すると、その火の手を見て、いっさんにかけてきたのは、鍛鍛冶卜齋の弟子蛾次郎であった。

「おうそこへまいったもの、はやく拙者の脇差をぬいてこの縄を切ってくれ、早く、早く！」

「やあどうしたんだお侍さんは？ 死んじまうぞ。死んじまうぞ」

「はやくしてくれ、早く助けてくれい」

「助けてやったら、なにをくれる？」

石投げの天才のほか、仕事も下手、もの覚えも悪く、すこし足りない蛾次郎だが、慾にかけては、ぬけぬけがない、半助

はひとときの熱苦もたまらず、うめきながら、

「なんでもつかわすからはやく、ア熱ッ、あツツツ」

「よし、きつただぜ」

念を押しながら飛びこんで、蛾次郎は枯れ木の火を蹴ちらし、山刀をぬいて半助の縄目をぶつ切り切った。火のなかから跳びだした半助は、ほつとして大地へたおれたが、やにわにまた足の痛手を忘れておどりたつた。

「わるいところへ、またあなたからあやしい人の足音がしてまいった。おい、おれに肩をかせ、そして、しばらく休息するところまで連れてゆけ。褒美はのぞみしだいにやろう」

「じゃ、おれの親方の家でもいいかい」

「頼む、あれ、あれ、もう軍馬の蹄がまちかにせまる」

「たいへんだ！ ことによると雨ヶ岳に陣どっている者たちがくだつてきたのかも知れないぞ」

蛾次郎もにわかにあわてだして、半助のからだを背負って、一目散にそこを立ちさつた。すると、たつた一足ちがいに、嵐のように殺到した一団の軍馬があつた。

「それ、常からあやしい蚕婆の家をあらためろ！」

「戸を蹴やぶつてなかへ、踏ンごめッ」

馬上から十四、五人の武士に、はげしく下知をしたふたりの武士、これなん、伊那丸の幕下でも、荒武者の双龍といわれている加賀見忍剣と巽小文治のふたり。

「おう！」

と部下は武者声をあげるやいなや、蚕婆の家の裏表から、メリメリッ、バリバリッと戸を踏みやぶつておどりこんだ。が、なかは暗澹、どこをさがしても、人かげらしい者は、見

あたらなかった。

と、聞いた忍剣は、

「いや、そんなはずはない。たしかにあやしい男と老婆とが、密談みつだんいたしていたのを、間諜かんちようの者が見とどけたとある。この上は自身であらためてくれる」

と禅杖ぜんじようをひっかかえひらりと馬を飛びおり、巽小文治とともに、家の中へはいつていつて八方家探やまがししたが、部下のことのとおり、何者もひそんでいなかった。

「ふしぎだ——」

小文治は、そこにもぬけの殻からとなつてゐる寢床ねとこへ手を入れてみて、

「このとおり、まだ人のぬくみがある。さすれば、いよいよ逃げた者こそ、あやしい曲者くせものにそういはない」

「む、では寢床のわきの床板ゆかいたをはねあげてみよう」

と、忍剣にんけんが先にたつて、蓆むしろを巻き、板をはいでみるとたちまち、一間四方けんかたうの間道の口が、奈落ならくの門のごとく一同の目につつた。

「おお、これこそ人穴城ひとあなじようへ通じる間道かんどうにそういはない」

「しめた！ その方どもはこの口もとを護まもつていて、あやしい者が逃げまいったら、かならず捕とりにがさぬように見張つておれ」

と、いいのこして、忍剣は禅杖ぜんじようをひっ抱かかえ、小文治は槍やりの石突きをトンと下ろして、ともにまっ暗な間道のなかへとびこんでいった。

あとにのこつた部下の者は、ひとしく間道口かんどうぐちに目と耳を磨とぎすまして、いまに、なにかかわつた物音がつたわってくる

か、あやしいやつが飛びだしてくるか、夜もすがら、ゆだんもなかった。

二

菊池半助きくちはんすけを肩にかけて、まっ暗な人無村ひとなしむらをかけていった蛾次郎がじろうは、やがて、おおきな荒屋敷あれやしきの門へはいつた。

見ると、そこが卜齋ぼくさいの細工小屋さいくごやか、東のすみにぽつと明るい焰ほのおがみえて、トンカン、トンカン、槌つちと鉄敷かねしきのひびぎがしている。そしてときどき、小屋のなから白い煙とともに、シューツとふいごの火の粉こがふきだしていた。

「親方、お客さまをつれてきた、旅のお侍さんで、けがをして難渋なんじゆうしているんだから、今夜とめてやっておくんない」

蛾次郎がじろうがおどおどしながら、細工場さいくばのとなりの雨戸あまどをあけて、ひろい土間へはいると、手燭てしやくをもって奥からつかつかとでてきたのは、主人の卜齋ぼくさいであろう。陣羽織じんばおりのような革かわの袖そでなしに、鮫柄さめづかの小刀こを一本さし、年は四十がらみ、両眼りやうがんするどく、おまけに、仕事場で火傷やけどでもしたけがか、片鼻かたはなが、そげたように欠かけている。

人呼んで、鼻かけ卜齋ぼくさいと綽名あだなしている名人の鍬師やじりし。なにさま、ひとくせありそんな人物である。

「蛾次公がじこう、昼間からどこをうろつきまわっているのだ。このバカ野郎やろうめ！」

卜齋ぼくさいは、つれてきた半助などには目もくれず、頭からこの怠なまけ者の抜け作なげなどとどなりつけて、さんざん油をしぼったあげく、

「それに、あとで聞けば、てめえは、夕方、物置小屋から二、三十本の松明をぬすみだしていったそうだが、いったい、そんな物をどこへ持ちだして、なんのために使ったのだ。うそをいうとこれだぞ！」

いきなり弓の折れを持って、羽目板をピシリッとうった。その音のはげしいこと、蛾次郎のふるえあがったのはむろん、菊池半助さえ度胆を抜かれた。

ト斎はその時はじめて、半助のほうへ気をかねて、

「まあよいわ、お客人がいるから、てめえの詮議はあとにしよう。ときに旅のお武家さま、なにしろ今夜は更けておりますから、この上の中二階へあがって、ごゆるりとお休みなさるがいい。そこに夜具もある、火の気もある、食い物もある、男世帯の屋敷ですから、好きにしてお泊りなさい」

「かたじけない、ではお言葉にあまえて夜明けまで……」

と、半助はそこにいるのも気まずいので、びっこを引きながら、おしえられた中二階の梯子を、ギシリ、ギシリと踏んでいった。

「はてな……」と、梯子をあがりながら一つの疑念——「どこかで見たとのことのある男だが? ……ただの鍬師ではない、たしかにどこかで? ……」と、しきりに思いなやんだが、とうとう、中二階へあがるまで考えだせなかった。

ト斎にいわれたまま、押入れから蒲団をだして、そのうえに身を横たえながら、膝の槍傷を布でまきつけていると、また、すぐ下の土間であららしい声が始まった。

「野郎、どうあつてもいわぬな! いわなければ、こうだッ」
弓の折れがヒュッと鳴ると、蛾次郎がオイオイと声をあげ

て泣きだした。まるで七つか八つの子供が泣くような声で泣いている。

「いいます、親方、いいますからかんべんしてください」

「では、何者にたのまれて、松明を盗みだした。さ、ぬかせ」
「白旗の森にいる、竹童というわたしより五歳ばかり下の童にたのまれたんです。その者にやりました」

「あきれかえったバカ者だ。じぶんより年下の餓鬼に、手先に使われるとは情けないやつ、しかし、てめえもなにかもらったろう。ただで松明をやるはずがない」

「いいえ、なんにももらいなんかしやしません」

「まだいいぬけをしやがるか!」

またピシリッと弓の折れがうなる、蛾次郎がヒイヒイと泣く、すぐその上にいる菊池半助は、これではとても今夜は寝られないと思った。

それに気をいらいらさせられたか、かれは寢床からはいだして、ふたたび梯子口からコマねずみのようにそつと顔をだした。そのとき、半助ははじめて、ト斎の姿容を、よく見ることができて、思わず、

「あッ」と、すべりでそうな声をかみころした。

「どこかで見たとしたはず——あれは、越前北ノ庄の主、柴田権六勝家の腹心だ——おお、鍬師の鼻かけト斎とは、よくも巧みに化けたりな、まことは、鬼柴田の爪といわれた上部八風齋という軍師築城の大家。いつも柴田権六が、攻略の軍をだすときに、そのまえから敵の領土へ住みこんで、岩のかまえ、水利、地の理、残るくまなくさぐって、一挙に掌握するという、おそろしい人物だ。——その八風齋がこの裾野

へ巢を作ったところをみると、さては、野心のふかい柴田勝家、はやくも天下をころぎす足がかりに、この一帯へ目をつけたものだろう。武田伊那丸といい呂宋兵衛といい、また秀吉の手の者が入りこんだことといい、いちいち徳川家の大凶兆。こりや、裾野一帯いよいよゆだんのならぬものばかりだ……」

半助は、耳を畳にこすりつけて、さらに、階下の声を一語も聞きもらすまいと息をのんでいた。と、下ではまた卜齋の声で、

「なに？ ではその竹童という童に、二十本の松明をくれて、そのかわりに驚にのせてもらったというのか。やい！ 泣きじゃくってばかりいたのではわからぬわい。はつきりと口をきけ」

「そ、そうなんです……」

ベソをかきながら答えてるのは蛾次郎の声だ。

「松明を持っていったら、そのお札に大きな驚の背なかへ乗せてくれましたから、白旗の森の上から空へあがって、五湖や裾野の上をグルグルとまわってまいりました」

「そうか、それでしさいがわかった」

と卜齋はうなずいて、なお、竹童のようすや、驚のことなどをつぶさにただしたから、蛾次郎はゆるされるのかと思っ
ていると、荒縄で両手をしばりあげたまま、松明をぬすみだした物置小屋のなかへ三日間の監禁をいいわたされてほうりこまれてしまった。

そのあとは、卜齋も寝入り、細工小屋の槌音もやんでシーンと真夜中の静けさにかえったが、半助だけは、うすい蒲団

をかぶって横になりながらも、まだ寝もやらず目をパチパチとさせていた。

「驚、驚！ 竹童というやつが、自由自在につかう飛行の大驚！ おお、そいつを一つ巻きあげて、こんどの手柄としてかえろう……」

とかれは、ふと思いついた胸中の奇策に、ニタリと悦をもちたが、そのとき、なんの気なしに天井を見あげるや否、かれは、全身の血を氷のごとく冷たくして、
「や、や、やッ」と、目をむいて、ふるえあがった。

三

菊池半助が、身をすくませたのも道理、中二階の天井には、いちめんの鉄板が張ってあって、それに、氷柱のような、無数の鏃が植えてあるのだ。

剣の切ツ先よりするどい鏃は、ちようど、あおむけになっている半助の真上に、ドギドギとぶきみな光をならべている。おお、もしその鉄板が、いちどおちてこようものなら、いかに隠身自由、怪力無双なものでも、五体は蜂の巢となつて圧死してしまふであろう。

「釣り天井——」

半助は、とっさに壁ぎわへ、身をすりよせた。

このおそろしい部屋へじぶんをあんないしたからには鼻かけ卜齋の八風齋は、すでに徳川家の伊賀衆菊池半助というところを見破ったにそういない——と半助は、こころみに梯子口をのぞいてみると、はたしていつのまにか梯子はとりはずさ

れて、下には、あやしい陥穽が伏せてあるようす、ほかに出口はむろんない。

半助は絶体絶命となった。

けれど五本の指と二本の足が、ままになる以上、こんなことで、おめおめ命をおとすような菊池半助ではない。

かれは脇差をぬいて、いきなり、あつちこつちの壁をズブズブとつき刺した。そしてそとへ通じるところをさぐりあて、たちまち二尺四方ぐらいの穴を切りぬいたかとおもうと、ほとんど、猫が障子の穴をすりぬけるようにするりと身をはいだして、一丈四、五尺の上から大地へポンと跳びおりた。そして、

「ここだな……」と、すすり泣きのもれている物置小屋の戸をねじあけて、なかにいる蛾次郎を助けた。

「あッ、お武家さん——」

蛾次郎が素ッ頓 狂な声をだす口をおさえて、

「しずかにせい。さっきそのほうがおれをたすけてくれた返礼に、こんどはきさまを救ってやる。徳川家へまいれば伊賀衆の組頭、いくらでも取り立ててやるから——しよについてくるがいい」

「あ、ありがとう。おれもこんなやかましい親方にくつついでいるのはいやでいやでたまらないだ」

「む、卜齋に気取られぬうち、ソツと馬小屋から足のはやいのを一ぴきひっぱりだしてこい」

「いいとも、馬ぐらい盗みだすのは、ぞうさもないよ」

蛾次郎が闇のなかへ飛んでいくと、そのとたんに半助のあたまの上で、ドッドッドッスーン！ というすさまじい家鳴り震動。

ふり仰いでみると、いまかれのがれだした壁の穴から、濛々たる土煙が噴きだしている。

「おれがここへ抜けだしているのに、卜齋めが釣り天井の綱を切ったんだらう。そんな壺におちるような者は、伊賀衆の中には一ぴきもいるもんか」

せせら笑っていると、ふいに、家のなかから轟然たる爆音とともに、火蓋を切った種子島のねらい撃ち。

「あッ、気がついたな、こいつはぶっそうだ」

バラバラとかけだしていくと、暗闇から牛をひきだしたという諺どおり蛾次郎のうろたえよう。

「お侍さん、——お侍さんじゃないのかい」

「おれだおれだ、馬は？ 馬はどこにいる？」

「ここだよ、馬を盗みだしてきたところだ」

「どこだ、アア、まっ暗。どこにいるのじゃ」

「ここだよ、ここだよ」

と蛾次郎が手をたたくと、その音をたよりにねらった鉄砲の弾が、またも、つづけざまに、二、三発、ズドンズドン！ と火の縞を走らせた。

「わあッ、だめだ、あぶねえ！」

ふいに、蛾次郎が胆をつぶして腰を抜かしたらしい弱音。

「えい、泣くなッ」

と叱りつけた菊池半助。いったい、この厄介者をなんに利用しようとするのか、むんずと横脇にひっかかえて馬の鞍壺にとびあがり、つるべうちの鉄砲を聞きながして、人無村から闇の裾野へ、まっしぐらに、逃げおちてしまった。

いっぽう、蚕 婆の家の床下から、人穴城の間道をすすんでいった加賀見忍剣と巽小文治。

瞳はいつか闇になれたが、道は暗々として行く手もしれない。冥府へかよう奈落の道をいくような気味わるさ。ポトリ、ポトリと襟もとに落ちてくる雫のつめたいこと。たえず、冷々と面をかすめてくる陰森たる風、ものいえば、ガアンと間道中の悪魔がこぞって答えるようにひびく。

——と、つねに沈着な巽小文治が、ふいに、「あッ」とさけんで一歩とびのき、片手で顔をおさえてしまった。

「どうした、小文治どの」

「なにか風のようなものに、さっと面をふかれたその痛さ。忍剣どのもかならずごゆだんなさるまいぞ」

「そんなバカなことがあるうか、あれは年へた蝙蝠のたぐいじゃ」

と入れかわって、忍剣が、さきに立って二、三步すすむと、かれも同じように奇怪ないたさに面を刺されて、たちまち片目を押さえてしまった。そして、ふと衣の上に、霜のように立つものを手でさぐってみて、

「こりや！ 針だッ」

と叫んだ。

「えッ、針？」

その時、はじめてふたりとも身がまえ直して、ジツとやみをすかして見ると、白髪をさかだてたひとりの老婆が蜘蛛のように岩肌に身を貼りつけて、プッププツとたえまなく、ふたりの面へ吹きつけてくる針の息……

おお、それこそ竹童がなやまされた蚕 婆の秘術吹針の目

つぶしだった。

深夜の珍客

一

早足の燕作と可児才蔵は、蚕 婆より一足先に抜け穴へはいったので、すぐあとにおこった異変もなにも知らず、ただひた走りに、地下三十三町の間道を人穴城へいそいでいく。

目というものがあっても、ここでは、目がなんの役にも立たない暗黒界、けれど、足もとは坦々とたいらであるし、両側は岩壁の横道なし。——いくら盲めつぼうに進んでも、けっして、迷う気づかいはないと、燕作はいつもの早足ぐせで、才蔵よりまえにタツタとかけていったが、やがてのこと、

「ホイ！ しまったり！」

目から火でもだしたような声で、勢いよく四ンばいにつんのめった。あとからきた才蔵も、あやうくその上へ折りかさなるところを踏みとどまって、

「どうした燕作」と声をかける。

「才才、痛え！ 才蔵さま、どうやらここは行止まりのようです」

「どんづまりにはちと早い、あわてずによくさぐってみい…… : おおこりや石段ではないか」

「え、石段？」

「人穴城は、裾野より高地となるから、この間道が、しぜん

のぼりになるのは、はや近づいた証拠といえる」

才蔵がのぼっていく尾について、燕作も石段の数をふんでいく……と道はふたたび平地の坂となり、それをあくまで進みきると、こんどこそほんとうのゆきづまり、手探りにも知れる鉄の扉が、ゆく手の先をふさいでいた。

「燕作燕作、殿堂の間道門は、すなわちこれであろう。なんとかして、なかの者にあいずをするくふうはないか」

「とにかく、どなってみましょう」

と燕作は鉄門の前に立って、器量いっばいな大声。

「やアやア搦手がたの兄弟、丹羽昌仙さまの密書をもって、安土城へ使いたした早足の燕作が、ただいま立ちかえったのだ。

開門！ 開門！

鉄壁をたたいて呼ばわつたとたん、頭の上からパツとさしてきた龕燈のひかり、と見れば、高いのぞき窓から首を集めて、がやがや見おろしている七、八人の手下どもの顔がある。

「おお、いかにも、燕作にちがいないらしいが、あとのひとりはお人穴城で見たこともないやつ、軍師さまの嚴命ゆえ、さような者は、ここ一寸も、とおすことまかりならん。開門ならん」

「ヤイヤイ、しつれいをもうしあげるな」

と、燕作はまばゆい光をあおむいて、

「鳥刺し姿に身をやつしておいでなさるが、このお方こそ、秀吉公の帷幕の人、福島さまのご家臣で、音にきこえた可児才蔵とおっしゃる勇士だ。うたがわしく思うなら、とつとと軍師さまのお耳に入れてくるがいい」

「なんだ、福島正則さまのご家来だと？」

おどろいた手下どもは、すぐことの由を、丹羽昌仙へ告げにいった。昌仙は、燕作の吉報をまちかねていたところなので、すぐさま、大將呂宋兵衛とともに、間道門のてまえまで、秀吉の使者を出むこうべくあらわれた。

しばらくすると、鉄の門をはずす音がして、明暗の境をなすおもい扉が、ギ、ギ、ギイ……と一、二寸ずつ開いてきたので、暗黒のなかに立っていた才蔵と燕作のすがたへ、一道の光線が水のごとくそそぎ流れた。

「はるばるお越しくだされた可児才蔵さま、いざお入りください」

内よりおごそかな声があつて、門扉は八文字にひらかれた。——と、ほとんど同時である。またも間道のあなたから、疾風

のように走ってきた人間がある！ すでに才蔵と燕作がなかへはいつて、ふたたびギーツと門が閉まろうとするところへ、あわただしくきて、

「大へんだ！ わたしを入れて、はやくあとを閉めておくれよ」

ころぶようにたおれこんだ蚕婆、いつものし太さに似ず、いきた色もしていない。

「おお裾野の見付婆、大へんとはなんだなんだ」

一せいに色めきたつ人々を見まわして、蚕婆は齒をむきだして、がなつた。

「なんだもかんだも、あるもんか、はやくはやく、さきに門を閉めなきや大へんだ、いまわたしのあとから忍剣と小文治というやつが追っかけてくる！」

「えッ、伊那丸の旗本がおいかけてくるッて？ それは、こ

こへか、こっちへか？」

「くだいことはいつておられないよ、あれ、あの足音がそう
だ！ あの足音だ！」

「それッ、かたがた、はやく門をとじて嚴重にかためてしま
え」

「やア、もうそこへ姿がみえた」

「門はどうした！」

「くさりをかせ！ 鎖を！」

「わーッ、わーッ」

——ととつぜん、暴風にそなえるように、うろたえた手下
どもは、扉へ手をかけて、ドーンという響きとともに、間道門
を閉めてしまった。

「むねんッ」

と、その下にふたりの声。ああ、たった一足ちがい——

蚕 婆を追いつめて、人穴城のかくし道をきわめてきた忍
剣と小文治は、いでや、このまま城内へ斬って入ろうと勢い
こんできたところを、内からかたく閉められてじだんだ踏ん
だ。

「卑怯なやつら、臆病ぞろいよ！ わずかふたりの敵をむか
えることができぬのか、和田呂宋兵衛の下ッぱには男らしい
やつは一ぴきもないのか、くやしければ、開ける、開ける
ッ！」

さんざんにいいののしったが、こっちでののしれば、内で
もののでしり返すばかり、果てしがないので、

「えい、めんどうだッ」

手馴れの禪杖を、ふりかまえた加賀見忍剣、どうじに

巽小文治も、

「よし、拙者は、あれからとびこんでゆく」

と、槍を立てかけて、足がかりとなし、十数尺上ののぞき
口へ、無二無三にとびつこうとこころみた。

グワーン！

たちまち、雷火をしかけたように、鉄門をとどろかした忍剣
の第一撃！ この鉄の扉が破れるか、この禪杖が折れるか
とばかり。

つづいて、第二、第三撃！

間道門のなかでは、呂宋兵衛をはじめ丹羽昌仙、轟 又八、
そのほか燕作も蚕 婆もおおくの手下どもも、思わず胆をひ
やして、ただ、あれよあれよとおどろき見ているまに、さし
もの鉄壁も、飴のようにゆがんでくる。

すわこそ、人穴城の一大事となった。

呂宋兵衛はまッさおになった。

手下どもも、見えぬ敵の恐怖におそわれた。こんな猛者に、
ふたりもおどりこまれた日には、よしや、城内に二千の野武士
はあるとも、どれほど死人手負いの山をきざされるか、さい
げんの知れたものではないと思つた。

「なにを気を吞まれてるか！ 意気地なしめ！」

ふいに、そのなかで、思いだしたようになつたのは轟
又八。

「すこしもはやく、水道門の堰をきって、間道のなかへ濁水
をそそぎこめ、さすれば、いかなる天魔鬼神であろうと、な
かのふたりが溺れ死ぬのはとうぜん、しかも、味方にひとり
の怪我人もなくてすむわ」

あっぱれ名案と、誇りがましく命令すると、手下どもが、おうと答えるよりはやく、

「いや、そりや断じていかん」

はげしく異議を申し立てた者は、軍師丹羽昌仙であった。

かれとは、つねに犬と猿の仲みたいな轟又八、すぐ眉をピリツとさせて、

「こういふときの用意のため、いつでも水道門の堰さえきれば、間道はおろか裾野一円、満々と出水になるようしかけておいた計略ではないか。軍師には、なんでお止めなさる」

「おろかなことをお問いめさるな、それ、溺兵の計りごとは、一城の危急存亡にかかわるさいこの手段、わずかふたりの敵をころすために、なんでそれほどの費えをなそうや」

「心得ぬ軍師のいい条、では、みすみす間道門をやぶられて、ここにおおくの手負いをだすとも、大事なといいはらるるか」

「なんで昌仙が、それまで手をつかねて見ていようぞ、拙者にはべつな一計があること、又八どの、それにてゆるりのご見物あるがよい。やあ者ども、この鉄門の前へ焼草をつみあげい」

たちまち、山と積まれた枯草の束。はこばれてくる獣油の瓶、かつぎだされた数百本の松明。

洞門のなかでは、それとも知らず、必死にあえぐ忍剣と小文治のかけ。と——いきなり、バラバラバラ、バラバラッ！

と上ののぞき口から投げこんできた枯草のたば！ つづいて焔のついた松明、獣油の雨、火はたちまちパツと枯草にっていた。いや、ふたりの袖や裾にもついた。

火は消しもする、はらいもする、が、もうもうと間道のなかへこもりだした煙はおえぬ。しかも異臭をふくんだ獣油の黒煙が、でどころがなく、渦をまいてふたりをつつんだ。

目からはしぶい涙がでる。鼻腔はつきさされるよう、咽はかわいて声さえでぬ。……そこにしばらくもがいていれば煙にまかれて窒息はとうぜんだ。ふたりは歯ぎしりをしながら、煙におしだされて、しだいしだいにあともどりした——といつても、充満している煙の底をはいながら……

間道の半ば過ぎまで引つかえしてきたころ、ふたりは、やつとどうやらうす目をあいて、たがいにことばをかわせるようになった。

「や、小文治どの、どうやらここは、先刻すすんでいった間道とはちがうようではないか」

「拙者もすこし変に思っているが、たしかいきがけには、ほかに横穴はないように心得ていた」

「しかし、このように両側のせまい穴ではなかつたはず……はてな？ こりやちとおかしい……」

「忍剣どの、また煙の渦がながれてきた。とにかく、もどるところまでもどつてみよう」

「せっかく、人穴の根もとまで押しよせたと、煙攻めの策にかかって引返すとは無念千万……ああまたまっ黒に包んできおつた」

「ちえッ、いまましいが、もうここにもぐずぐずしておれぬわ」

さすがの勇士も、煙の魔軍には勝つ術がなかった。息づまる苦しさと、目にしむ涙をこらえながら、いっさんにその穴

を走りもどった。

からくも、前にはいった床下へきた。まさしく、蚕婆の家の下にちがいない。とちゆうの道がちがつているように思えたのも、さすれば、煙のための錯覚であったかもしれない。「こりや部下の者、この板を退けて、綱をおろせ、早く早く！」と小文治が、槍の石突きを上へむけて、蓋の板を下からポンポンと突きあげた。

すると、入口に待ちかねていた部下の者であろう、板をはがして、二本の綱を無言のまま下へたれてきた。それを力に、忍剣と小文治は、ひらりと上へとびあがる！

——あがったところはまッ暗であった。

だれかが、カチカチ……と火打石を磨っている。部下は二十人ばかり、ここへ置いていったのに、イヤにあたりが静かである。

カチツ、カチツ、カチツ……火打石はなかなかにつかない……

「たわけ者め！」

忍剣は、部下の不用意を叱りつけた。じぶんたちがいない間に、あるいは、軍律を破って、夜半の眠りをむさぼっていたのではないかとさえうたぐった。

「なぜ、かがり火を焚いておらぬ、この暗さで、いざことある場合になんといたす。不埒者めが、はやく灯をつけい！」

「はい、ただいますぐに明るくいたします」

と答える者があつたが、すこし声音がへんである。調子がおかしい。

小文治は、部下の者のなかにこんなしわがれた声はなかつ

たはずと思つて、キツとなりながら、

「何者だツ、そこにいるのは！」

と、声あらく、どなりつけてみた。

にもかかわらず、相手は平気で、まだカチカチと闇のなかで、火打石を磨っている。

「名を申さんと突きころすぞツ、敵か、味方か！」

ピラリツ——朱柄の槍の穂先がうごいて、闇のなかにねらいすまされた。と、その槍先から、ポーツとうす明るい灯がともった。

「わしは敵でもなければ味方でもない。そうもうすおまえがたこそ、深夜に床下から忍びこんできて、ひとの家へなにしにきた！」

「やや、ここは蚕婆の家ではなかつたのか——」

忍剣も小文治も、あまりのことにぼうぜんとしながら、そこに立ったひとり的人物を、そも何者かと、みつめなおした。

いまでもした行燈を前にだして、しずかに席についたその男は、するどい両眼に片鼻のそげた顔をもち、熊の毛皮の胸服に、刻み鞞の小太刀を前挟みとなし、どこかにすごみのあるすがたで、

「あははははは、床下から戸まどいしてござつたのは、さてこそ、伊那丸が幕下のおかたでござるな。なんにせよ、深夜の珍客どの、お話もござりますゆえ、まずそれへおすわりください」

いう声から、容貌も、それは、まぎれもあらぬ鍔鍛冶の鼻かけ卜齋。

意外なおもいにくたれた忍剣と小文治の目は、つぎに部屋
のなかをながめまわした。

ここは卜齋の書齋とみえて、兵書、武器、種々な鏃の型、図面
などがざつたにちらかつており、なかにも一挺の種子島が、
いま使ったばかりのように、火縄をそえて、かれのそばにお
いてあつた。

「いかにもご推察のとおり、われわれはいま雨ヶ岳を本陣と
している、武田伊那丸さまの旗本でござるが、してそこもと
は何人？ またここはいつたいいいずでござりますか？」

ややあつて、忍剣が、こう問いただした。

「ここは、やはり裾野の村、おふたりが間道へはいられた蚕 婆
の家から、さよう、ざつと五、六町はなれた鏃鍛冶の小屋で
ござる。すなわち、手まえは主の卜齋ともうす者」

「ではそちも、鏃鍛冶とは世をあざむく稼業で、まことは蚕
婆とおなじように、人穴城の見付をいたしているのであるう
が！」

小文治が、グツと急所を押すと、卜齋は、ひややかに嘲笑
つて、

「とんでもないこと、けつしてさような者ではございません」
「だまれ、呂宋兵衛の隠密でない者が、なんで床下から間道
へ通じるようにしかけてあるのだ」

「なるほど、それはごもっともなおうたがいじゃ。いかにも
この卜齋鏃鍛冶とはほんの一時の表稼業で、まことはおさつ

しのとおり隠密にそういない」

「さてこそ、問者！」

小文治と忍剣は、腰の大刀をグイとにぎって、あわやおど
りかからんずる氣勢をしめした。

片手を斜めにさし向けて、きつと、体をかまえなおした卜齋、
「じゃが、おさわぎあるなご両所、隠密は隠密でも、呂宋兵衛
のごとき曲者の手先となつて、働くような卜齋ではございま
せん——」

と、左右のふたりへ、するどい眼をそそぎながら、

「——まことかくもうす卜齋こそは、北国一の雄、柴田権六勝家
が問者、本名上部八風齋という者、人穴の築城をさぐるうが
ため、ここに鏃師となつて、家の床下から八ぼうへかくし道
をつくり、ここ二星霜のあいだ、苦心していたのでござる」

「おう……」うめくがようにふたりは顔を見あわせて、

「音にきこえた鬼柴田のふところ刀、上部八風齋とはそも
とでござつたか。してその御人が、なんのご用ばしあつて、
われわれをお止めなされた」

「されば、それがしの主君勝家より密命があつて、ご不運な
る武田家の御曹司へ、ひとつの贈り物をいたそうがため」

「はて、柴田家より伊那丸君へ、そもなんの贈り物を？」
「すなわちこの品——」

と、八風齋がしめしたのは、かれが学力の蘊蓄をかたむけ
て、くまなくさぐりうつした人穴の攻城図、獣皮につつんで
大せつに密封してあるものだった。

「かねてから主君勝家は、若年におわし、しかも、孤立無援
に立ちたもう伊那丸さまへ、よそながらご同情いたしており

ました。折から、このたびのご苦戦、ままになるなら、北国勇猛の軍馬をご加勢に送りたいは山々なれど、四隣の国のきこえもいかが、せめては武家の相身たがい、弓取り同士のよしみの印までにもと、この攻城図を、ご本陣へさしあげたいというおいしいつけ」

「なんといわるる、ではそこもとが、苦心に苦心をかさねて写されたこの秘図を、おしげもなく、伊那丸さまへおゆずりなさろうとおっしゃるか」

「いかにも、これさえあれば、人穴城の要害は、掌をさすごとく、大手搦め手の攻め口、まった殿堂、櫓にいたるまで、わが家のごとく知れます。すなわちこの一枚の図面は、千人の援兵にもまさること万々ゆえ、一刻もはやく、ご本陣へまいらせたいこのほうの志、なにとぞ、伊那丸さまへ、よしなにお取次ぎを」

「ああ、世は澆季でなかった」

と、忍剣も小文治も、胸をうたれずにおられなかった。

越前北ノ庄の鬼柴田といえ、弱肉強食の乱世のなかでも、とくに恐ろしがられている梟雄だのに、こんな美しい、情けの持主であろうとは、きょうまで夢にも知らなかった。——なんとゆかしい弓取りのよしみであろう。

そして、むろんこれはこぼむことではないと思った。

さだめし、伊那丸さまをはじめ同志の人々がよろこぶことと信じて、そくぎに、八風齋の願いをゆるし、雨ヶ岳の本陣へあんないすることを快諾した。

八風齋も欣然として、衣服大小をりっぱにあらため、獣皮につつんだ図面を懐中にいれ、ふたりのあとについて屋敷を

でた。

いっぽう、蚕婆の家で、たむろをしていた部下の者たちは、床下の穴から濛々たる煙がふきだしてきたので、すわこそ、忍剣と小文治の身のうえに、変事があったにちがいないと、すくなくさわざわぎあっていた。そこへ意外な方角から、ふたりが無事でかえってきたので、一同あッけにとられてしまった。

やがて、勢ぞろいをして、人無村をでてゆく一列の軍馬を見れば、まっさきに馬上の加賀見忍剣、おなじく騎馬たちの上部八風齋、翼小文治、それにしたかう二十余人の兵。——この一列が整々として雨ヶ岳の本陣へかえってくるまに、富士の山は、銀の冠にうす紫のよそおいをして、あかつきの空に君臨し、流るる霧のたえまに、裾野の朝がところどころ明けかけてくる。

人無村の柿の木には、今朝も烏がむれていた。

死地におちた雨ヶ岳

—

富士川の名物、筏舟に棹さして、鯀沢からくだる筏乗りのふうをよそおい、矢のように東海へさして逃げたふたりのあやしい男がある。

海口へ着くやいな、しぶきにぬれた蓑笠とともに、筏をすて、浜べづたいに、蒲原の町へはいったすがたをみると、こ

れぞまえの夜、鼻かけ卜齋ぼくさいの屋敷から遁走とんそうした菊池半助きくちはんすけ。つれているのは、そのときゆきがけの駄賃だちんに、かどわかしてきた泣き虫なみむしの蛾次郎がじろうだ。

十五、六にもなりながら、人にかどわかされるくらいな蛾次郎だから、むろん、じぶんではかどわかされたとは思っていない。バカにしんせつで、じぶんを出世しゅっせさしてくるいいおじさんにめぐりあつたと心得ている。

「蛾次郎、もうここまでくれば、どんなことがあつても安心だから、かならずしんぱいしないで元気をだすがいい」

半助がふりかえつていうと、あとから宿しゆくのにぎやかさに、キョロつきながら、のこのこと歩いてきた蛾次郎、すこし口をとんがらせながら、

「元気をだせつたつて、元気なんかでやしねえや、お侍さむらいさんはよく腹がすかないねえ」

「ははア、どうもさつきからきげんがわるいと思つたら、空腹くうぶくのために、ふくれているんだな」

「だつてゆうべツから、一ツ粒もごはんを食べないんだもの、それで今朝けさになつても、まだ歩いてばかりいちゃあ、いくらおれだつてたまらねえや」

「さて、もうすこしのしんぼうじゃ。向田むこうだノ城しろへまいれば、なんでも腹いッぱい食くわせてやる」

「もうだめだ、アア、もう歩けない、なにか食たべなくツちゃ目がまわりそうだ……」

なれるにしたがつてそろそろ尻尾しつぽをだしてきた蛾次郎がじろうは、宿場人足しゆくばにんそくがよりのたかつて、うまそうに立ち食ぐいしている餅屋もちやの前へくると、ぎょうさんに、腹をかかえてしゃがんでしま

った。

半助はにが笑いして、いくらかの小銭こぜにをだしてやった。それをもらうと、蛾次郎は人ごみをかきわけてふところいッぱい焼餅やきもちを買かいもとめ、ムシヤムシヤほおばりながら歩きだした。

間もなく、ふたりのまえに見えた向田ノ城。

この砦とりでには、富士、庵原いんはら、二郡ふたぐんをまもる徳川家の松平周防守康重まつだいらしゅうちゆうのなかみやすしげがいる。菊池半助きくちはんすけは、その人に会つて、じぶんが探知たんちした裾野すそ野の形勢けいせいをしさいに書面しやめんへしたため、それを浜松の本城へ、早打ちで送りどけてもらうようにたのんだ。

書状の内容は、徳川家の領内である富士の人穴ひとあなを中心に、裾野すそ野の無人の広野ひろのに、いまや、呂宋兵衛ろそんべゑだの、伊那丸いなまるだの、あるいは秀吉ひでよしの隠密おんみつ、柴田勝家しばたかついえの間者かんじやなどが、跳ちやうり梁りやうして、風雲ふううんすこぶる険悪けんあくである。はやく、いまのうちに味方の兵をだして、それらの者を、掃滅そうめつしなければ一大事いちだいじで。——という意味のものであつた。

その密談のあいだに、
「ちえツ、ばかにしてやがら」

城内の一室で、ポンポンしていたのは蛾次郎がじろうである。もう焼餅やきもちを食たべつくし、腹はいっぱいになつたが、まさか寝ることもできず、半助はいつまでも顔を見せないし、遊ぶところはなし、文句もんくのやり場のないところから、ひとりでブツブツこぼしている。

「いやんなつちやうな。どうしたんだい、あの人は、向田ノ城むこうだのしろへいったら、なんでも好きなものはやるの、うまいものは食くいほうだいだのツて、いつておいてよ、ちえツくそ！ ばか

にしてやがら、うそつき！ 菊池半助の大うそつき！」

腹いせにわめいていると、ふいに、そこへ半助がはいってきたので、さすがの蛾次郎も、これにはすこし間が悪かったとみえて作り笑いをした。

「蛾次郎、さだめしたいくつであつたらう」

「ううん、そんなでもなかったよ、だけれど、菊池さんはいままでいったいどこへいつてたのさ」

「その方をりっぱな侍に取り立ててやりたいと、城主周防守さまとそうだんしてまいったのだ。どうだ蛾次郎、きさまもはやくりっぱな侍になり、堂々と馬にのったり、多くの家来をかかえて、こんなお城に住んでみたくはないか」

「うふふふふ、おれをその侍にしてくれるのかい」

蛾次郎は、目をほそくしてうれしがった。

「きつとしてやる。が、それには、ぜひなにか一つの手柄をあらわさなければならん」

「手柄をあらわすには、どんなことをすりやいいんだらう」

「その方法は拙者がおしえてやる。しかも蛾次郎でなければできぬことがあるのだ。これ、耳をかせ……」

と半助は、なにやらひそひそささやくと、蛾次郎は目をまわくして、あたりもかまわず、

「えッ、じゃあの竹童の使っている大鷲を、おれがぬすんでくるのかい！」

「シッ、大きな声をいたすな。——そちはたしか、あの大鷲に乗せてもらった経験があるだらう」

「ある、ある。竹童が松明をくれッていったから、それを持っていった、一晩じゅう、鷲に乗せてもらったよ」

「さすれば、あの小僧が鷲をつないでおくところも、鷲の背に乗ることも、そちはじゅうぶんに心得ているはず——じつは近いうちに、あの辺で大きな戦がおきるのだ、そのさわぎに乗じて、竹童の鷲を徳川家の陣中へ乗りにつけてくれればそれでよいのだ。なんと、やさしいことではないか」

「だけれど、……もしかやりそこなうと大へんだな、竹童ッてやつ、ちびでもなかなか強いからな」

「蛾次ッ」

半助がこわい目をしたので、かれは、ギョツとして飛びのいた。

「いやといえばこれだぞ——」

ギラリと脇差をぬいて、蛾次郎の鼻ッ先へつきつけた菊池半助は、また、左の手で、袂からザラザラと小判をつかみだして、刀と金をならべてみせた。

「おうといえは褒美にこれ。イヤといえは刀で首。さアどっちでもよい方をのぞめ」

二

菊池半助の書面が、家康の本城浜松へつくと同じ日にくさになれた三河武士の用意もはやく、旗指物をおしならべて、東海道を北へさして出陣した三千の軍兵。

精悍無比ときこえた亀井武蔵守の兵七百、内藤清成の手勢五百、加賀爪甲斐守の一隊六百余人、高力与左衛門の三百五十人、水野勝成が後詰の人数九百あまり、軍奉行は天野三郎兵衛康景。

法螺、陣鐘の音に砂けむりをあげつつ、堂々と街道をおし
くんだり、蒲原の宿、向田ノ城にはいつて、松平周防守のむ
かえをうけた。

ここで、裾野陣の大評議をした各将は、待ちもうけていた
菊池半助を、地理の案内役として先陣にくわえ、全軍犬巻峠
の嶮をこえて、富士河原を乗りわたし、天子ヶ岳のふもとか
ら南裾野へかけて、長蛇の陣をはるもよう。

西をのぞめば、雨ヶ岳のいただきを陣地とする武田伊那丸
の一党、北をみれば、人穴城にたてこもる呂宋兵衛の一族、
また南の平野には、葵の旗指物をふきなびかせて、威風りん
りんとそなえた三千の三河武士がある。

ここ、いずれも、敵味方三方わかれの形である。

甲を攻めれば乙きたらん、乙を討たんとせば丙突かんとい
う三角対峙。はたしてどんな駈引きのもとに、目まぐるしい
三つ巴の戦法がおこなわれるか、風雲の急なるほど、裾野の
なりゆきは、いよいよ予測すべからざるものとなった。

けれど、それは人と人とのこと、弓取りと弓取りのこと。
晩秋の千草を庭としてあそぶ、鶉や百舌や野うさぎの世界は、
うらやましいほど、平和そのものである。

ちようどそれとおなじように、のんきの洒アな顔をして、
またぞろ、裾野へ舞いもどってきた泣き虫の蛾次郎はばかに
いい身分になったような顔をして、あっちこっちを、のこの
こと歩いていた。

三

「木隠が立出してから、きょうで、はや四日目。——かれの
ことだ。よも、裏切りもすまいが、なんの沙汰もないのは、
どうしたのか。おいとしゃ、若君のご武運もいまは神も見は
なし給うか」

床几によって、まなこをとじながら、こうつぶやいた
小幡民部。

ここは、陣屋というもわびしい、武田伊那丸のいる雨ヶ岳
の仮屋である。軍師民部は、きのうから幕のそとに床几をだ
して、ジツと裾野をみつめたまま、龍太郎のかえりを、いま
かいまかと待ちかねていた。

が——龍太郎のすがたはきょうもまだ見えない。四日のあ
いだには、かならず兵三百を狩りあつめて、帰陣すると誓っ
てでた木隠龍太郎。ああ、かれの影はまだどこからも見えて
こない。

いよいよ、絶望とすれば、ふたたび、人穴城を攻めこころ
みて、散るか咲くかの、さいごの一戦！ それよりほかはみ
ちがない。すでに兵倦み、兵糧もとぼしく、もとより譜代の
臣でもない野武士の部下は、日のたつほどひとり去りふたり
にげ、この陣地をすて去るにちがいない。

「軍師、軍師、小幡民部どの！」

ふいに、耳もとでこうよぶ声。

あれやこれ、思いしずんでいた民部が、ふと、見あげると、
巽小文治と加賀見忍剣が連れ立ってそこにある。

「オ。これはご両所、なんぞご用で」

「昨日からかなたにあって、待ちわびている者が、もういちどこれを最後として、若君へお取次ぎを願って見てくれいと申して、いッかなきかぬ。——軍師から伊那丸さまへ、もういちどおことはぞえねがわれまいか」

「おお、上部八風齋のことですか、その儀は、拙者からも再三若君のお耳へいれたが、断じて会わんという御意のほか、一こうお取上げにならぬしまつ。事情をいうて追いかえされたがよろしかろう」

「は」

といったが、ふたりの面はとうわくの色にくもった。

じぶんたちが独断で、八風齋を本陣へつれてきたのがわるかったか。伊那丸は対面無用といったまま、耳もかさないのである。また、八風齋のほうでも、あくまで、会わぬうちはこの雨ヶ岳をくだらぬといひ張つて、うごく気色もなかった。

忍剣と小文治は、なかに立って板ばさみとなった。八風齋はだだをこねるし、伊那丸はきげんがわるい。これでは立つ瀬がないと、いまでも民部に、苦しい立場をうちあけていると、ふいに、帳のかけから伊那丸の声で、

「民部、民部やある」

としきりに呼ぶ。

「はッ」

とりいそいで、幕のなかへ姿をいれた小幡民部は、ふたたびそこへ立ちもどつてきて、

「よろこばれよご両所、にわかになら若君が、八風齋に会つてやろうとおおせだされた。御意のかわらぬうち、いそいで、か

れをここへ」

といった。

間もなく、上部八風齋はあなたの飯屋から、忍剣と小文治にともなわれてそこへきた。迎えにたつた民部は、そも、どんな人物かとかれを見るに、鼻かけ卜齋の名にそむかず、容貌こそ、いたつてみにくい、さすが北越の梟雄鬼柴田の腹心であり、かつ攻城学の泰斗という貫禄が、どこかに光っている。

「八風齋どの、それへおひかえなさい」

制止の声とどうじに、バラバラと陣屋のかけからあらわれた槍組のさむらい、左右二列にわかれて立ちならぶ。

と——武田菱の紋を打つたまえの陣幕が、キリリと、上へしぼりあげられた。

見れば、正面の床几に、気だかさと、美しい威容をもつた伊那丸、左右には、山県薦之助と咲耶子が、やや頭をさげてひかえている。

「これは……」

と、槍ぶすまにひるまぬ八風齋も、うたれたように平伏した。

四

初対面のあいさつや、陣中の見舞いなどをべおわつてのち、八風齋は、れいの秘図をとりだし、主人勝家からの贈り物として、うやうやしく、伊那丸の膝下にささげた。

が、なぜか、伊那丸は、よろこぶ色はおろか、さらに見向

きもしないで、にべなくそれをつツかえした。

「ご好意はかたじけないが、さようなものはじぶんにとって欲しゅうもない。持ちかえって、柴田どのへお土産となさるがましです」

「は、心得ぬ仰せをうけたまわります。主人勝家こそははるかに御曹司のお身の上をあんじている、無二のお味方、人穴城をお手にいれたあかつきは、およばずながらよしみをつうじて、ご若年のお行く末を、うしろだてしたいとまでもうしております。……なにとぞ、おうたがいなくご受納のほどを」

「だまれ、八風齋！」

はッたとにらんだ伊那丸は、にわかになりんとなって、かれの胸をすくませた。

「いかに、汝が、懸河の弁をふるうとも、なんでそんな甘手にのろうぞ。この伊那丸に恩義を売りつけ、柴田が配下に立たせよう計りごとか、または、後日に、人穴城をうばおうという汝らの奸策、この伊那丸は若年でも、そのくらいなことは、あきらかに読んでいる」

「うーむ……」

うめきだした八風齋の顔は、見るまにまツさおになつて、じツと、伊那丸をにらみかえして、眼もあやしく血走つてくる。

「益ないことに暇とらずに、汝も早々、北越へひきあげい。

そして、勝家とともに大軍をひきい、この裾野へでなおしてきたおりに、またあらためて見参するであろう。そちの大事がる図面とやらも、そのとき使うように取っておいたがよい」

深くたくらんだ胸のうちも、完全に見やぶられた八風齋は、本性をあらわして、ごうぜんとそりかえつた。

「なるほど、さすが信玄の孫だけあって、その眼力はたしかだ。しかしわずか七十人や八十人の小勢をもって、人穴城がなんで落ちよう。敵はまだそればかりか、呂宋兵衛にもましておそろしい大敵が、すぐ背後にもせまっているぞ。悪いことはすすめぬから、いまのうちに柴田家の旗下について、後詰の援兵をおおぐが、よいしあんと申すものじゃ」

「だまれ。よしや伊那丸ひとりになつても、なんで、柴田ずれの下風につこうや、とくかえれ、八風齋！」

「ではどうあつても、柴田家にはつかぬと申しはるか、あわれや、信玄の孫どものも、いまに、裾野に屍をさらすであろうわ、笑止笑止」

毒口たたいて、秘図をふところにしまいかえした八風齋、やおら、伊那丸のまえをさがろうとすると、面目なげにうつむいていた忍剣と小文治が、左右から立つて、

「若君にむかつてふらちな悪口、よくもわれわれ兩人をだましおつたな！」

と、猿臂をのばして、八風齋のえりがみをつかもうとしたとき、

「方々！ 方々！ 敵の大軍が見えましたぞッ」

にわかにかつた起つたさけび声、陣のあなたこなたにただならぬどよみ声、伊那丸も咲耶子も、民部も蔦之助も、思わずきツと突つ立った。

「それ見たことか、はやくも地獄の迎えがきたわッ！」

さわぎのすきに、すてぜりふの嘲笑をなげながら、疾風

のように逃げだした上部八風齋。

忍剣と小文治が、なおも追わんとするのを伊那丸はかたく止めて、かれのすがたを見送りもせず、

「小さき敵に目をくるるな、心もとない大軍の出動とやら、だれぞ、はようもの見せい！」

「はい、かしこまりました」

こたえた声音は意外にやさしい、だれかとみれば、伊那丸のそばから、蝶のように走りだしたひとりの美少女、いうまでもなく咲耶子である。

見るまに、物見の松の高きところによじのぼって、梢にすがりながら、片手をかざし、

「才、見えまする！ 見えまする！」

「して、その敵のありどころは」

松の根方から上をあおいで、一同がこたえを待つ。

上では、緑の黒髪を吹かれながら、咲耶子の声いっばい。

「天子ヶ岳のふもとから、南すそのへかけて、まんまんと陣取つたるが本陣と思われまます。才、しかも、その旗印は、

徳川方の譜代、天野、内藤、加賀爪、亀井、高力などの面々」

「やや、では呂宋兵衛が人穴城をでたのではなかつたか。してして軍兵のかずは？」

「富士川もよりには、和田、樋之上の七、八百騎、大島峠にも三、四百余の旗指物、そのほか、津々美、白糸、門野のあたりにある兵をあわせておよそ三千あまり」

「その軍兵は、こなたへ向かって、すすんでくるか？」

「いえいえ、満を持してうごかぬようす、敵の気ごみはすさまじゅう見うけられます」

咲耶子の報告がおわると、物見の松のしたでは、伊那丸と軍師を中心にして、悲壮な軍議がひらかれた。まえには、人穴城の強敵あり、うしろには徳川家の大軍あり、雨ヶ岳は、いまやまったく孤立無援の死地におちた。

おそらくは、主従の軍議もこれが最後のものである。軍議というも、守るも死、攻むるも死、ただ、その死に方の評定である。

時は、たそがれ刻か、あるいは、宵か夜中か明け方か、いずれにせよ、闇でも花とちる身にはかわりがない。

こい！ 徳川勢——。伊那丸方の面々は、馬には飼糧、身には腹巻をひきしめて、雨ヶ岳の陣々に鳴りをしずめた。

そのころ、人穴城の望楼のうえにも、三つの人影があらわれた。大将呂宋兵衛に、軍師丹羽昌仙、もうひとり客分の可児才蔵。三人は、いつまでも暮れゆく陣地をながめわたり、なにやら密議に余念がない。心なしか、こよいはことに砦のうえに、いちまつ殺気がみち満ちていた。

富士はくれゆく、裾野はくれる。

きょうで四日目の陽は、まさに沈もうとしているのに小太郎山へむかって、駿馬項羽をとばせた木隠龍太郎はそも、どこになにしているのだらう。

かれは、よもや雨ヶ岳にのこした伊那丸の身や、同志の人々を忘れはてるようなものではけつしてあるまい。いや、断じてないはずの人間だ。それなのに、晩秋の靄ひくくとぶ鳥はみえても、駿馬項羽にまたがったかれのすがたが、いつま

でも見えてこないのはどうしたわけだ？

人無村で、とんだ命びろいをしたツきり、白旗の森のおくへもぐりこんでしまった竹童も、ほんとに、頭脳がいいならば、いまこそどこかで、

「きようだぞ、きようだぞ、さアきようだぞ」

と叫んでいなければならぬはず。

お師匠さまの果心居士から、こんどこそ、やりそこなったら大へんだという秘命を、とつくのまえからさすけられていた竹童が、その、一生いちどの大使命をやる日はまさにきようのはずだ。

ところが、きのうあたりから、あの蛾次郎が、団子や焼餅などをたずさえて、チヨクチヨク白旗の森にすがたを見せ、竹童のごきげんとりをやりだしたのも奇妙である。

密林の出来事

—

雨のような落葉が、よこざまに、ばらばらと降る。

くろい葉、きいろい葉、まっかな葉、入りまじってさんらんと果てしなくとぶ。

さしもひろい湖の水も、ながい道も、このあたりは見るかぎり落葉の色にかくされて、足のふみ場もわからないほどである。

と——どこかで、

「ぐう、ぐう、ぐう……」

不敵ないびきの声がする。

つかれた旅人でも寝ているのであろう、白旗の宮の、蜘蛛の巣だらけな狐格子のなから、そのいびきはもれているのだ。

旅人なら、夕陽の光がまだ、雲間にあるいまのうちに早くどこか、人里までたどり着いておしまいなさい——と願わずにいられない。

この地方は、冬にならぬころから、口のひつ裂けた、れいの狼というのが、よく出現して、たびの人を、骨だけにししてしまう。

するとあんのじょう、森のかげから、ガサガサという異様な音がちかづいてきた。みると、それは幸いにして狼ではなかったが、針金頭巾や小具足で、甲虫みたいに身をかためたふたりの兵。手には短槍を引っさげている。

服装の目印、どうやら徳川家の斥候らしいが、きょう、天子ヶ岳に着陣したばかりなのに、はやくもこのへんまで斥候の手がまわってきたとはさすが、海道一の三河勢、ぬけ目のないすばやさである。

斥候の甲虫は、一步一步、あたりに気をくばって、落葉をふむ足音もしのびやかにきたが、

「しッ……」

と、さきのひとり、白旗の宮のそばで、うしろの者へ手あいずする。

「なんだ……」

おなじく、ひくい声でききかえした。

「あやしい声をする」
「エッ」

「しずかに」

ぴたりと、ふたりは槍とともに落葉のなかへ身をふせてしまった。そして、ややしばらく、耳と目を研ぎすましていたが、それっきり、いまのいびきも聞えなくなつたので、甲虫はふたたび身をおこして、いずこともなく立ちさつた。

あとは、またものさびしい落葉の舞い。

暮れんとして暮れなやむ晩秋の哀寂。

ぎい……とふいに、白旗の宮の狐格子がなかからあいた。

そして、むっくり姿をあらわしたのは、なんのこと、鞍馬山の竹童であつた。

「あぶない、あぶない。もうこんなほうまで、徳川家の陣笠がうろついてきたぞ。ところで、おいらは、いよいよ、今夜お師匠さまのおいつけをやるのだが、それにしては、もうそろそろどこかで、関の声があがってきそうなもの……どれ、ひとつ高見から陣のようすをながめてやろうか」

ひらりと、宮の縁から飛びおるがはやいか、湖畔にそびえている樅の大樹へ、するするすると、りすの木のぼり、これは、竹童ならではできない芸当。

数丈うえのてっぺんに、鳥のようにとまった竹童、したり顔して、あたりの形勢をとくと見とどけてのち、ふたたび降りてくると、こんどは、白旗の宮の拜殿にかくしておいた一たばの松明をかつぎだしてきた。

この松明こそは、竹童が苦心さんたんして、蛾次郎から手にいれたものである。かれは、この松明、二十本をなんに使

うつもりか、腰に皮の火打石袋をぶらさげ、いっさんに、白旗の森のおくへ走りこんでいった。

二

そこは密林のおくであつたが、地盤の岩石が露出しているため、一町四方ほど樹木がなく、平地は硯のような黒石、裂け目くぼみは、いくすじにもわかれた、水が潺湲としてながれていた。

ギアアギアアギアア

——ふしぎな怪物の啼き声がある。そして、すさまじい羽ばたきがそこで聞えた。見ると、ひとつの岩頭に金瞳黒毛の大鷲が、威風あたりをはらい、八方を睥睨してとまっている。いうまでもない、クロである。

むろん、足はなにかで岩の根っこへしばりつけてあるらしかつた。

「やい、もひとつ啼け、もひとつ啼いてみる」

七尺ばかりはなれて、鷲とあいむきに、腰かけていた者は、れいの蛾次郎、竹の先ツぼに、兎の肉をつき刺して、しきりにクロを馴らそうとしていた。

「おい、蛾次公、なにをしてるんだい」

「え」

ふいに肩をたたかれて、蛾次郎がひよいと、うしろを見ると、竹童が、松明を薪のようになしよって立っている。

「なにもしてやしないさ、餌をやっているんだ」

「よけいなことをしてくれなくてもいい、さっきも、おい

らが鹿の股を二つやったんだから」

「ああ、竹童さんにも、おれが土産を持ってきたぜ、きょうは焼栗だ、ふたりで仲よく食べようじゃないか」

「いやにこのごろは、おいらにおべっかを使うな、そんなにおせじをつかってきたって、もう、そうはちよいちよい驚に乘せてやるわけにはゆかないぜ」

「そんなことをいわないで、おれを弟子にしてくれよ、な、たのまあ、そのかわりに、おまえのためなら、おれはどんなことだって、いやといわないからよ」

「きつとか」

「きつとだ!」

「じゃ。さっそく一つ用をたのもうかな」

「たのんでくれよ、さ、なんだい」

「大役だぜ」

「いいとも」

「他人の用ばかりしていると、おまえの主人の鼻かけ卜齋に、叱られやしないか」

「大じょうぶだつてことさ、おらあもうあすこの家をとびだして、いまでは徳川家の……」

と、いいかけて、さすがの低能児も、気がついたらしく、口をにがらしながら、

「いまじゃ、天下の浪人もおんなじ体なんだ」

「ふうむ……じゃね、これからおいらのために、ちょっとそこまで斥候にいつてくれないか」

「斥候に?」

蛾次郎ぎよつと、目を白くした。

竹童は、ことさらに、なんでもないような顔をして、

「このあいだから、雨ヶ岳に陣取っている、武田伊那丸さまの軍勢が、人穴城へむかってうごきだしたら、すぐここまで知らしてくれりゃいいのだ」

「そしたら、いったい、どうする気なんだい?」

「どうもしないさ、この驚にのつて、大空から戦見物にでかけるのさ」

「おもしろいなあ、おれもいっしょに乗せてくれるか」

「やるとも」

「よしきた、いつてくら!」

よく人のだしにつかわれる生まれつきだ。年下の者のおちようにのつて、もう、一もくさんにかけていく。

そのあとで竹童は、驚の足をといてやった。クロは自由の身になつても、竹童のそばを離れることなく、流れる水をすつていると、かれはまた火打石を取りだして、そこの枯葉に火をうつし、煙の立ちのぼる夕空をあおぎながら、

「おそいなあ。あのぐずの斥候を待っているより、またじぶんでそこいらの木へ登ってみようかしら」

と、ひとりつぶやいたところである。

すると、いつの間にか、かれの身边をねらつて、じりじりとはいよつてきたふたりの武士——それはまえの甲虫だ、いきなり飛びついて、

「こらッ、あやしい小僧!」

「うごくなッ」

とばかり、竹童の両腕とつてねじふせた。竹童はまったくの不意打ち、なにを叫ぶ間もなく、跳ねかえそうとしたが、

はやくも、甲虫の短刀が、ギリリと目先へきて、

「うごくと命がないぞ、しずかにせい、しずかにせい」

「な、な、なにをするんだい！」

「なにもくそもあるものか、きさまこそ、餓鬼のぶんざいで、この松明をなんにつかう気だ、文句はあとで聞いてやるから、とにかく天子ヶ岳のふもとまでこい」

「や、ではきさまたちは徳川方の斥候だな」

「おお、亀井武蔵守の手の者だ」

「ちえツ、そう聞きやおいらにも覚悟がある」

「生意気なツ」

たちまち、大人ふたりと、竹童との、乱闘がはじまった。

こいつ、体はちいさいが、一すじなわではいかないぞ——とみた甲虫は、やにわに短槍をおつ取って、閃々と突いて突いて、突きまくってくる。

あわや、竹童あやうし——と見えたせつなである。にわか
に、大地をめくり返すような一陣の突風！ と同時に、パツ
と翼をひろげた金瞳の黒鷲は、ひとり片つばさではねとば
し、あなよというまに、あとのひとりの肩先へとび乗って、
銀の爪をいかり立って、かれの顔を、ぱりつとかいて宙天へ
つるしあげた。

「わッ！」

と、大地へおちてきたのを見れば、目も鼻も口もわからな
い。満顔ただかくれないの一口の首。

信玄の再来

—

さても伊那丸は、小袖のうえに、黒皮の胴丸具足をつけ、
そまつな籠手脛当、黒の陣笠をまぶかにかぶって、いま、馬
上しずかに、雨ヶ岳をくだつてくる。

世にめぐまれたときの君なれば、鍬がたの兜に、八幡座の
星をかざし、緋おどしの鎧、黄金の太刀はなやかにかざるお身
であるものを……と、つきしたがう、民部をはじめ、忍剣も
小文治も蔦之助も、また咲耶子も、ともに、馬をすすめなが
ら、思わず、ほろりと小袖をぬらす。

兵は、わずかに七十人。

みな、生きてかえる戦とは思わないので、張りつめた面色
である。決死のひとみ、ものいわぬ口を、かたくむすんで、
肅々、歩をそろえた。

まもなく、梵天台の平へくる。夜の帳はふかくおりて
徳川方の陣地はすで見えなくなつたが、すぐ前面の人穴城
には、魔獣の目のような、狭間の灯が、チラチラ見わたされ
た。その時、やおら、岩の上に立つた軍師民部は、
人穴城をゆびさして、

「こよいの敵は呂宋兵衛、うしろに、徳川勢があるとてひる
むな——」

高らかに、全軍の気をひきしめて、さてまた、

「味方は小勢なれども、正義の戦い。弓矢八幡のご加勢があるぞ。われと思わんものは、人穴城の一番乗りをせよや」

同時に、きつと、馬首を陣頭にたてた伊那丸は、かれのことはをすくうけついで、

「やよ、面々、戦いの勝ちも電光石火じゃ、いまこそ、この武田伊那丸に、そちたちの命をくれよ」

凛々たる勇姿、あたりをはらった。さしも、烏合の野武士たちも、このけなげさに、一滴の涙を、具足にぬらさぬものはない。

「おう、この君のためならば、命をすててもおしくはない」と、骨鳴り、肉おどらせて、勇氣は、日ごろに十倍する。

たちまち、進軍の合図。

さつと、民部の手から二行にきれた采配の鳴りとともに、陣は五段にわかれ、雁行の形となって、闇の裾野から、人穴城のまんまへ、わき目もふらず攻めかけた。

「わーッ。わーッ……」

にわかにあがる鬨の声。

「かかれかかれ、命をすてい」

いまぞ花の散りどころと、伊那丸は、あぶみを踏んばり、鞍つぼをたたいて叫びながら、じぶんも、まっさきに陣刀をぬいて、城門まぢかく、奔馬を飛ばしてゆく。

と見て、帷幕の旗本は、

「それ、若君に一番乗りをとられるな」

「おん大将に死におくれたと聞えては、弓矢の恥辱、天下の笑われもの」

「死ねやいまこそ、死ねやわが友」

「おお、死のうぞ方々」

たがいに、いたたく死の冠。

えいや、えいや、かけつづく面々には、忍剣、民部、蔦之助、そして、女ながらも、咲耶子までが、筋金入りの鉢巻に、鎖襦袢を肌にかけて、手ごろの薙刀をこわきにかいこみ、父、根来小角のあだを、一太刀なりと恨もうものと、猛者のあいだに入りまじっていく姿は、勇ましくもあり、また、涙ぐましい。

ただ、こよいのいくさに、一点のうらみは、ここに、かんじんかなめな、木隠龍太郎のすがたを見ないことである。

上は大將伊那丸から、下は雑兵にいたるまで、死の冠をいただいてのこの戦いに、大事なかれのいあわせないのは、かえすがえすも遺憾である。ああ龍太郎、かれはついに、伊那丸の前途に見きりをつけ、主をすて、友をすて去ったであろうか。——とすれば、龍太郎もまた、武士の風上におけない人物といわねばならぬ。

二

「いよいよ攻めてまいりましたぞ」

「なに、大したことはない。主従合しても、せいぜい八十人か九十人の小勢です」

「小勢ながら、正陣の法をとって、大手へかかってきたようすは、いよいよ決死の意気、うっかりすると、手を焼きますぞ」

「おう、そういえば、天をつくような鬨の声」

「伊那丸は、たしかに、命をすてて、かかってきた……」

まっ暗な、空の上での話し声だ。

そこは、人穴城の望楼であった。つくねんと、高きところの間に立っているのは、呂宋兵衛と可児才蔵である。

呂宋兵衛は、いましがた、軍師昌仙と物頭の轟又八が、すべての手くばりをしたようすなので、ゆうゆう、安心しきっているていだった。

が、可児才蔵はかんがえた。

「待てよ、こいつは見くびったものじゃない……!」と。

そして日没から、伊那丸の陣地を見わたしていると、小勢ながら、守ること林のごとく、攻むること疾風のようだ。

かれは、心のうちで、ひそかに舌をまいた。

「いま、天下の者は豊臣、徳川、北条、柴田のともがらあるを知って、武田菱の旗じるしを、とうの昔にわすれているが——いやじぶんもそうだったが——こいつは大きな見当ちがい、あの麒麟児が、一朝の風雲に乗じて、つばさを得ようものなら、それこそ信玄の再来だろう。天下はどうなるかわからない、下手をすると、主人の秀吉公のご未来に、おそろしいつまずきを、きたそうものでもない——これは、ぐずぐずしている場合ではない。すこしもはやく安土城へ帰って、この由を復命するのがじぶんの役目、もとより秀吉公は、呂宋兵衛には、あまり重きをおいていられないのだ、そうだ、その勝敗を見とどけたら、すぐにも安土へ立ちかえろう」

「臍をきめたが、色にはかくして、大手の形勢を観望している。」

そこには、たちまち矢叫び、呐喊の声、大木大石を投げおとす音などが、ものすさまじく震撼しだした。濠——と、煙硝

くさい弾けむりが、釣瓶うちにはなす鉄砲の音ごとに、櫓の上までまきあがってくる。

おりから、望楼の上へ、かけあがってきたのは、轟又八であった。黒皮胴の具足に大太刀を横たえ、いかにも、ものしいでたちだ。

「お頭領に申しあげます」

「どうした、戦いのもようは?」

「城兵は、一の門二の門とも、かたく守って、破れる気づかいはありません。だがかれもまた、伊那丸をせんとうに、一歩もひかず、小幡民部のかけ引き自在に、勝負ははてしないところですよ。これは、丹羽昌仙のれいの叢虫根性から起ること、なにとぞ、とくにお頭領よりこの又八に、城外へ打ってでることを、お許し願わしゅうぞんじます」

「む、では汝は城門をおっ開いて、いっきに、寄手を蹴ちらそうというのか」

「たかのしれた小人数、かならずこの又八が、一ぴきのこらずひっからげて、呂宋兵衛さまのおんまえにならべてごらんにいます」

「昌仙の手がたい一点ばかりも悪くないが、なるほど、それでは果しがあるまい。ゆるす、又八、打ってでろ」

「はッ、ごめん」

と会釈をして、バラバラと望楼をかけおりていった。可児才蔵はそれを見て、

「ああ、いけない」とひそかに思う。

軍師の威命おこなわれず、命令が二途からでて、たがいに功をいそぐこと、兵法の大禁物である。

「おおて 大手へかけもどつた又八は、すぐ、城兵のなかでも一粒よりの猛者、久能見の藤次、岩田郷祐範、浪切右源太、鬼面突骨齋、荒木田五兵衛、そのほか穴山の残党、足助主水正、佐分利五郎次などを先手とし、四、五百人を勢ぞろいしておしだした。」

「軍師の昌仙がそれを見て、おどろき、怒るもかまわず、呂宋兵衛のことはをかさに、

「それッ」

と、城門を八文字に開いた。

「わーッ」

と、たちまち、寄手の兵と、ま正面にぶつかつて、人間の怒濤と怒濤があがつた。たがいに、退かず、かえさず、もみあい、おめきあつての太刀まぜである。それが、およそ半刻あまりもつづいた。

しかし、やがて時たつほど、むらがり立つて、新手新手と入りかわる城兵におしくずされ、伊那丸がたは、どつと二、三町ばかり退けいなる。

「それ、この機をはずすな」

とみずから、八角の鉄棒をりゅうりゅうと持って、まッ先に立つた又八、

「追いつぶせ、追いつぶせ、どこまでも追つて、伊那丸一味をみなごろしにしてしまえ」

と、千鳥を追いたつ大浪のように、逃げるに乗つて、とうとう、裾野の平までくりだした。

時分はよしと、にわかには踏みとどまった小幡民部。

とつぜん、采配をちぎれるばかりにふつて、

「止まれッ！」

と、いった。

算をみだして、逃げてきた足なみは、ぴたりと踵をかえして、稲むらにおりた雀のように、ばたばたと槍もろともに身をふせる。

「かかれッ、轟又八をのがすな」

「おうッ」

たちまちおこる胡蝶の陣。かけくる敵の足もとをはらつて、乱離、四面に薙ぎたおす。

なかにも目ざましいのは、山県篤之助と巽小文治のはたらし。見るまに、鬼面突骨齋、浪切右源太を乱軍のなかにたおし、縦横無尽とあばれまわつた。

「さては、またぞろ民部の策にのせられたか」

と、又八は色をうしなつて、にわかには道をひき返してくると、こはいかに、すでに逃げみちを断つて、ふいに目の前にあらわれた一手の人数。

そのなかから、ひとときわ高い声があつて、

「武田伊那丸これにあり、又八に見参！」

「めずらしや轟、小角の娘、咲耶子なるぞ」

「われこそは加賀見忍剣、いで、素ッ首を申しうけた」と、耳をつんざいた。

轟又八は、思わず、ぶるぶると身の毛をよだてた。腹心の剛力、荒木田五兵衛は、忍剣に跳びかかって、ただ一討ちとなる。

手下の野武士は、敵の三倍四倍もあるけれど、こう浮足だつてしまつては、どうするすべもなかった。かれはやけ半分の眼をいからして、

「おう、山寨第一の強者、轟又八の鉄棒をくらつておけ」と、忍剣の禅杖にわたりあつた。

龍うそぶき虎哮えるありさま、ややしばらく、人まぜもせず、石火の秘術をつくし合つたが、隙をみて、走りよつた伊那丸が、陣刀一閃、又八の片腕サツと斬りおとす。

「うーむ」

よろめくところを、咲耶子の薙刀、みごとに、足をはらつて、どうと、薙ぎたおした。

又八が討たれたと見て、もう、だれひとり踏みとどまる敵はない、道もえらばず、闇のなかをわれがちに、人穴城へ、逃げもどつてゆく。

その時、はるか南裾野にあたつて、ぼう——ぼう——と鳴りひびいてきた法螺の遠音、また陣鐘。

みわたせば、いつのまにやら、徳川三千の軍兵は、裾野半円を遠巻きにして、焰々たる松明をつらね、本格の陣法くずさず、一鼓六足、鶴翼の備えをじりじりと、ここにつめていくようにす。

また、人穴城では、いまの敗北をいかつた呂宋兵衛がこんどはみずから望楼をくだり、さらに精銳の野武士千人をすくつて嵐のごとく殺到した。

ひゅッ！ ひゅッ！

と早くも、闇をうなつてきた矢走りから見ても、徳川勢の先手、亀井武蔵守、内藤清成、加賀爪甲斐守の軍兵はほど遠からぬところまで押しよせてきたものとおもわれる、その証拠には、伊那丸の陣した、雨ヶ岳のうえから噴火山のような火の手があがった。

三河勢が火をかけたのである。

その火明かりで、梵天台にみちている兵も見えた。まぢかの川を乗りわたしてくる軍馬も見えはじめた。裾野は夕焼けのように赤くなつた。

「若君、いよいよご最期とおぼしめせ」

小幡民部が、天をあおいでこういつた。

「覚悟はいたしておる。わしはうれしい、わしはうれしい！」

「おお、おうれしいとおっしゃいまするか」

「野武士ずれの呂宋兵衛をあいてに討死するより、ただ一太刀でも、甲斐源氏の怨敵、徳川家の旗じるしのなかにきりいて死ぬこそ本望、うれしゅうなくてなんとするぞ」

「けなげなご一言、われらも、斬つて斬つて斬りまくろう」と、忍剣もいさみたつたが、かえりみれば、前後に、この

強敵をうけながら、伊那丸のまわりにのこつた人数は、わずかに四十五、六人。

竹童ちくどうにたのまれて、人穴ひとあな城附近じやうの斥候しやくこうにでかけた蛾次郎がじろうは、
 どうやら戦いがはじまりだしたようすなので、草むらをざわ
 ざわかきわけてもどつてくると、とある小道で、向こうから
 くるひとりの男のかけを見つけた。

「ア、あいつは雨ヶ岳あまのほうからきたらしい、あいつに聞け
 ば、伊那丸いなまるがたの、くわしいようすがわかるだろう……」

道ばたに腰かけて、さきからくるのを待っている。

ビタ、ビタ、ビタ……足音はちかづいてきたが、星明かり
 ぐらいでは、それが百姓だか侍だか判じはんがつかないけれど、
 蛾次郎は、ひよいとまえへ立ちあらわれて、

「もし、ちよつと、うかがいます」

と、頭をさげた。

おおかたびっくりしたのだろう、あいてはしばらくだまっ
 て、蛾次郎のかけを見すかしている。

「もしやあなたは、雨ヶ岳のほうから、やってきたのではご
 ざいませんか」

「ああ、そうだよ」

「あすこに陣どっている、武田伊那丸たけだいなまるの兵は、もう山を下り
 ましたろうか、戦いは、まだおッぱじまりませんかしょうか
 しょう」

「知らないよ。そんなことは、おまえはいつたいたいなにものだ」
 「おれかい、おれはさ、もと鼻かけ卜齋ぼくさいという鍔鍛冶やじりかじのどこ
 にいた、人無村ひとなしむらの蛾次郎がじろうという者だが、どうも卜齋という師匠ししやう
 が、やかまし屋で気に入くわれないから、そこを飛びだして、い
 まではあるところの大大名だいだいみやうのお抱えかかさまだ」

「バカッ」

「ア痛ッ。こんちくしょう、な、な、なんでおれをなぐりや
 がる」

「蛾次郎、いつきさまにひまをくれた」

「えーッ」

「いつ、この卜齋が、暇ひまをやると申したか」

「あ、いけねえ！」

蛾次郎が、くるくる舞まいをして逃げだしたのも道理、それ
 は、雨ヶ岳あまからおりてきた当の卜齋とう、すなわち上部八風齋かんばんはっふうさいで
 あった。

「野郎！」

ばらばらッと追いかけて、蛾次郎の襟えりがみをひつつかみ、
 足をはやめて、人無村の細工小屋さいくへかえってきた。

「親方、ごめんなさい、ごめんなさい」

「えい、やかましいわい」

「ア痛え、もう、もうけっして、飛びだしません、親方ア、
 これから、気をつけます。か、かんにんしておくんなさい……
 ……」

わんわんと手ばなしで泣きだした。もつとも、蛾次郎がじろうの泣
 き虫なること、いまにはじまったことではないから、その泣
 き声も、たいして改心の意味をなさない。

「バカ野郎、てめえに叱言などをいっていられるものか。こ
んどだけは、かんべんしてやるから、これをしょって、早く
あるけ」

と、今夜は八風齋の鼻かけ卜齋も、家にかえって落ちつく
ようすもなく、書齋をかきまわして、だいたいな書類だけを、一包
みからげ、それを蛾次郎にしょわせて、夜逃げのように、
立ちのいてしまった。

門をでると、いま泣いた烏の蛾次、もうけろりとして、
「親方、親方、こんな物をしょって、これからいったいどこ
へでかけるんですえ」

とききだした。

「戦ばかりで、この人無村では仕事ができないから、越前北
ノ庄へ立ちかえるのだ」

「え、越前へ」

蛾次郎はおどろいた。

「いやだなア」

と、口にはださないが、肚のなかでは、渋々した。せつか
く、菊池半助が、ああやって、徳川家で出世の蔓をさがして
くれたのに、越前なんて雪国へなんかいくなんて、なんとつ
まらないことだと、また泣きだしたくなった。

ちようど、夜逃げのふたりが、人無村のはずれまで来た時、

——八風齋がふいにピタリと足をとめて、

「はてな? ……」

と、耳をそばだてた。

「な、なんです親方」

「だまっていろ……」

しばらく立ちすくんでいると、たちまち、ゆくての闇のな
かから、とう、とう、とう——と地をひびかせてくる軍馬の蹄、
おびただしい人の足音、行軍の貝の音、あッと思うまに、三、
四百人の蛇形陣が、嵐のごとくまっしぐらに、こなたへさし
てくるのが見えだした。

八風齋は、ぎよつとして、さげんだ。

「蛾次郎、蛾次郎、すがたをかくせ、早くかくれろ」

「え、え、え、なんです。親方親方」

「バカ! ぐず——見つかつては一大事だ、はやくそこらへ
姿をかせ」

「ど、どこへ消えるんです? ……」

と、不意のできごとに、蛾次郎は、度をうしない、まだう
ろろしているの、八風齋は、「えいめんどう」とばかり、
かれをものかげに突きとばし、じぶんはすばやく、かたわら
の松の木へ、するするとよじ登ってしまった。

ふたりが、からくも、すがたを隠したかかくさないうちで
ある、八風齋の目のしたへ、潮の流れるごとき勢いで、さし
かかってくる蛇形の行軍、その人数はまさに四百余人。みな、
一ようの陣笠小具足、手槍抜刀をひっさげて、すでに戦塵を浴
びてるようなものしき。

なかに、目立つはひとりの将、漆黒の馬にまたがって身に
は鎧をまとわず、頭に兜をかぶらず、白の小袖に、白鞆の
一刀を帯びたまま、鞭を裾野にさして、いそぎにいそぐ。

「あ、あの人は見たことがあるぜ」

ものかげにいた蛾次郎は、目をみはって、その馬上を見お
くったが、ふと気がついて、

「そうだ、そうだ」とばかり、あとからつづく人数のなかにまぎれこみ、まんまと、八風齋の目をくらまして越前落ちのちゆうから、もとの裾野へ逃げてもどってしまった。

「おお、あの矢さけび、火の手もみえる、流れ矢もとんでくるわ、この一時こそ一期の大事、息もつかずに、いそげいそげ！」

人無村をかけぬけて、渺漠たる裾野の原にはいると、黒馬の将は、鞍のうえから声をからして、はげました。雨ヶ岳の火はまだ赤々ともえている。

「敵！」

「敵だッ！」

「討て！」

と、俄然、前方の者から声があがった。四、五間ばかりの小石河原、そこではしなくも、徳川家の先鋒、内藤清成の別隊、四、五十人と衝突したのである。

暗愴たる闇いくさ、ただものすごい太刀音と、槍の折れる音や人のうめきがあったのみで、敵味方の見定めもつかなかったが、勝負は瞬間に決したと見えて、前の蛇形陣は、ふたたび一糸みだれず、しかも足なみいよいよはやく、人穴城の山下へむかった。

「おうーい、おうーい」

かけつつ馬上の将は何者をか呼びもとめた。それにつづいて、陣笠の兵たちも、かわるがわる、声をからして、おーい、おーいとなみのように鬨の声を張りあげた。

二

地から湧いたように、忽然と、人無村をつきぬけて、ここへかけつけてきた軍勢は、そもいずれの国、いずれの大名に属すものか、あきらかな旗指物はないし、それと知らるる騎馬大将もなかには見えない。ふしぎといえればふしぎな軍勢。

海に船幽霊のあるように、広野の古戦場にも、また時として、武者幽霊のまぼろしが、野末を夜もすがらかけめぐって、草木も霊あるものごとく、鬼哭啾々のそよぎをなし、陣馬の音をよみがえらせて、里人の夢をおどろかすことが、まああるという古記も見える。

それではないか？

この軍勢も、その武者幽霊の影ではないか、いかにも、まぼろしの魔軍のごとく、天颯のごとく、迅速な足なみだ。

「おうーい、おうーい」

魔軍はまた、潮のように呼んでいる。

時しもあれ——

ほど遠からぬところにあつて、亀井武蔵守の、精悍なる三河武士二、三百人に取りまかれていた武田伊那丸の矢さけびを聞くや、魔軍は忽然と、三段に備えをわかつて、わツとばかり斬りこんだ。

ときに、矢来の声があつて、伊那丸をはじめ苦境の味方を、夢かとはかり思わせた。

「やあ、やあ、若君はご無事でおわすか、その余のかたがたも聞かれよ、すぐる日、小太郎山へむかった木隠龍太郎、た

だいまこれへ立ち帰ったり！ 龍太郎これへ立ちかえったり！」

「わーッ」

と、地軸をゆるがす歡喜の声。

「わーッ」

と、ふたたびあがる乱軍のなかの熱狂。しばしは、鳴りもやまず、三河勢はその勢いと、新手の精銳のために、さんざんになつて敗走した。

木隠龍太郎は、やはり愛すべき武士であつた。かれはついに、主君の危急に間にあつた。

それにしても、かれはどうして、小太郎山から、四百の兵を拉してきたのであろう。それは、かれについできた兵士たちのいでたちを見ればわかる。

陣笠も具足も、昼のあかりで見れば、それは一夜づくりの紙ごしらえであらう、兵はみな、小太郎山の、とりでの工事にはたらいでいた石切りや、鍛冶や、大工や、山崩しの土工なのである。武器だけは、砦をつくるまえに、ひそかに、蓄えてあつたので不足がなかつた。

この成算があつたので、龍太郎は四日のあいだに、四百の兵を引きうけた。そして、その機智が、意外に大きな功をそつた。

しかし、一同は、ほつとする間もなかつた。ひとたび、兵をひいた亀井武蔵守は、ふたたび、内藤清成の兵と合して、堂々と、再戦をいどんできた。

のみならず、人穴城を發した呂宋兵衛も、すぐ六、七町さきまで野武士勢をくりだして、四、五百挺の鉄砲組をならべ、

いざといえば、千鳥落としにぶつばなすぞとかまえている。

三

鼻かけ卜齋の越前落ちに、とちゅうまでひっぱられていった蛾次郎が、木隠龍太郎の行軍のなかにまぎれこんで、うま逃げてしまつたのは、けだし、蛾次郎近來の大出来だつた。

かれはまた、その列のなかから、いいかげんなところで、ぬけだして、すたころと、白旗の森のおくへかけつけてきた。見ると、そこに焚火がしてあり、鷲もはなたれてゐるが、竹童のすがたは見えない。

蛾次郎は、しめた！ と思つた。今だ今だ、菊池半助にたのまれているこの鷲をぬすんで、徳川家の陣中へ、にげだすのは今だ、と手をたたいた。

「これが天の与えというもんだ、あんなに資本をつかつて、おまけに、竹童みたいなチビ助に、おべっかをしたり、使ひをしたりしてやつたんだもの、これくらいなことがなくっちゃ、埋まらないや、さ、ク口、おまえはきょうからおれのものだぞ」

ひとりで有頂天になつて、するりと、やわらかい鷲の背なかへまたがった。

蛾次郎は、このあいだ、竹童とともにこれへ乗つて、空へまいあがつた経験もあるし、また、この数日、腹にいちもつがあるので、せいぜい兎の肉や小鳥をあたえているので、かなり鷲にも馴れている。

竹童ちくどうのする通り、かるく翼つばさをたたいて、あわや、乗りにけしようとしたとたん、頭の上から、

「やいッ」

すると木から下りてきた竹童、

「なにをするんだッ」

いきなり鷲わしの上の蛾次郎がじろうを、一、三間げんさきへ突きとばした。

不意をくって、尻しりもちついた蛾次郎は、いたい顔をまがわるそうにしかめて、

「なにを怒おこったのさ、ちよつとくらい、おれにだってかしてくれてもいいだろう。命いのちがけで、いくさのようをさぐってきてやったんだぜ、そんな根性こんじょうの悪いことをするなら、おれだって、なんにも話してやらねえよ」

「いいとも、もうおまえになんか教えてもらうことはない。おいらが木の上から、およそ見当けんとうをつけてしまった」

「かつてにしやがれ、戦いくさなんか、あるもんかい」

「ああ、蛾次公がじこうなんか、かまっちゃいられない、こっちは、今夜が一生一度の大事なときだ」

竹童は、二十本の松明たいまつを、藤ふじづるでせなかへかけ、一本の松明には焚火たきびの焰ほのおをうつつして、ヒラリと鷲わしのせへ乗った。

「やい、おれも一しよにのせてくれ、乗せなきゃ、松明をかえせ、おれのやった松明をかえしてくれえ」

「ええ、うるさいよ！」

「なんだと、こんちくしょう」

と、胸をつつかれた蛾次郎がじろうは、おのれを知らぬ、ぼろ鞞ざやの刀をぬいて、いきなり竹童に斬りつけてきた。

「なにをッ」

竹童は、焰ほのおのついた松明で、蛾次郎の鈍刀なまくらをたたきはらい、とつさに、鷲わしをばたばたと舞いあげた。蛾次郎はそのするどい翼つばさにはたかれて、

「あッ」

と、四、五間けんさきの流れへはねとばされたが、むちゅうになつて、飛びあがり、およびもない両手をふって、

「やーい、竹童、竹童」

と、泣き声まじりに呼びかけた。

けれど、それに見向きもしない大鷲おおわしは、しずかに、宙ちゆうへ舞いあがって、しばらく旋回せんかいしていたが、やがて、ただ見る、一条の流星か、焰ほのおをくわえた火食鳥ひくいどりのごとく、松明たいまつの光をのせて、暗夜あんやの空を一文字もんじにかけり、いまや三角戦かくせんのまっ最中さいちゆうである人穴城ひとあなじょうの真上まで飛んできた。

虎穴こけつに入る鞍馬くらまの竹童ちくどう

—

軍令ぐんれいをやぶって抜けがけした轟とどろき又八またやちが、伊那丸いなまるがたのはかりごとにおちて、ついに首をあげられてしまったと聞き、人穴城ひとあなじょうのものは、すっかり意気を沮喪そそうさせて、また城門を固かためなおした。

敗走の手下から、その注進をうけた丹羽昌仙にわしやうせんは、

「ええいわぬことではないのに……」と苦にがりきりながら、望楼ぼうろうの段を踏ふみのぼっていった。

そこには、宵のうちから、呂宋兵衛と、可児才蔵が床几をならべて、始終のようすを俯瞰している。

「呂宋兵衛さま」

「おお、軍師」

「又八は城外へでて討死いたしました」

「ウム……」

と、呂宋兵衛は、じぶんにも非があるので、決まりわるげに沈んでいたが、

「おお、それはともかく——」

と、話をそらして、

「伊那丸と徳川勢との勝敗はどうなったな。かすかに、矢さけびは聞えてくるが、この闇夜ゆえさらにいくさのもようが知れぬ」

「いまはちようど、双方必死の最中かと心得ます」

「そうか、いくら伊那丸でも、三千からの三河武士にとりかこまれては、一たまりもあるまい」

「ところが、斥候の者のしらせによると、にわかには四、五百のかくし部隊があらわれて、亀井武蔵守をはじめ、徳川勢をさんざんに悩めているとのことでごさる」

「ふむ……とすると、勝ち目はどつちに多いであろうか」

「むろん、さいごは、徳川勢が凱歌をあげるでござりましようが」

「さすれば、こっちは高見の見物、伊那丸の首は、三河勢が槍玉にあげてくれるわけだな」

「が、ゆだんはなりません。なるほど、伊那丸がたは、徳川の手でほろぼされましようが、次には、勝ちにのつた三河の

精銳どもが、この人穴城を乗つとりに、押しよせるは必定です」

「一難さってまた一難か。こりや昌仙、こんどこそは、かならずそちの采配にまかす。なんとか、妙策をあんじてくれ」

と、とうとう兜をぬいでしまった。

「仰せまでもなく、機に応じ、変にのぞんで、昌仙が軍配の妙をござらんにいれますゆえ、かならずごしんはいにはおよびませぬ」

「それを聞いて安堵いたしました。オオ、また裾野にあたって武者声が湧きあがった。しかしとうぶん、人穴城は日和見でいるがいい、幸いに、可児才蔵どのも、これにあることだから、伊那丸がたがみじんになるまで、一献酌むといたそう」

手下にいつつけて、望楼の上へ酒をとりよせた呂宋兵衛は、昌仙と才蔵をあいてに、ゆうゆうと酒宴をしながら、こししばらく、裾野の戦を、むこう河岸の火事とみて、夜をふかしていた。

するとにわかには、星なき暗天にあたって、ヒューツという怪音がはしった。その音は遠く近く、人穴城の真上をめぐつて鳴りだした。

「風であろう、すこし空が荒れてきたようだ」

杯を持ちながら、三人がひとしく空をふりあおぐと、こはなに？ 狐火のような一朵の怪焰が、ポーツとうなりを立てつつ、頭の上へ落ちてくるではないか。

可児才蔵も呂宋兵衛も、また、丹羽昌仙も、おもわず床几を立って、

「あっ」

と、櫓の三方へ身をさけた。

とたんに、空から降ってきた怪火のかたまりが、音をたててそこにくだけたのである。

たおれた壺の酒が、望楼の上からザツとこぼれ、花火のような火の粉がまい散った。

「ふしぎ——どこから落ちてきたのであろう」

「昌仙昌仙、早くふみ消さぬと望楼へ燃えうつる」

「お、こりや松明じゃ」

「え、松明？」

三人は啞然とした。

いくら天変地異でも、空から火のついた松明が降ってくるはずはない、あろう道理はないのである。もし、あるとすれば世のなかにこれほどぶつそうな話はない。

しかし、事實はどこまでも事実で、瞬間ののち、またもや同じような怪焰が、こんどは竊蔵へおち、つづいて外廊、獣油小屋など、よりによって危険なところへばかり落ちてくる。

「火が降る、火が降る」

「それ、あすこへついた」

「そののをふみ消せ、ふしぎだ、ふしぎだ」

城中のさわぎは鼎のわくようである。ある者は屋根にのぼ

り、ある者は水をはこんでいる。

なかでも、気転のきいたものがあって、闇使いの龕燈をあつめ、十四、五人が一ところによって、明かりを空へむけてみた結果、はじめて、そこに、おどろくべき敵のあることを知った。

かれらの目には、なんとというはんだんもつかなかったが、地上から明かりをむけたせつな、かつて、話にきいたこともない怪鳥が、虚空に風をよんで舞ったのが、チラと見えた。それは鷲の背をかりて、白旗の森をとびだした竹童なることは、いうまでもない。

鞍馬そだちの竹童も、こよいは一世一代のはなれわざだ。果心居士うつしの浮体の法で、ピタリと、クロの翼の根へへばりつき、両端へ火をつけた松明をバラバラおとす。火先はさんらんと縞目の筋をえがいて、人穴城へそそぎ、三千の野武士の巢を、たちまち大こんらんにおとし入れてしまった。

「ああ、いけねえ」

と、その時、ふと、つぶやいた竹童。

空はくらいが、地上は明るい。人穴城のなかで、右往左往している態を見おろしながら、

「こっちで投げける松明を、そうがかりで、消されてしまっちゃ、なんにもならない。オヤ、もうあと四、五本しかないぞ」
なに思ったか、クロの襟頸をかるくたたいて、スーと下へ舞いおりてきた。いくら大胆な竹童でも、まさか人穴城のなかへはいるまいと思っていると、あんのじょう、れいの望楼の張出し——さっき呂宋兵衛たちのいたところから、また一段たかい太鼓櫓の屋根へかるくとまった。

ク口をそこへ止らせておいて、竹童は、残りの松明を背負って、スルスルと望楼台へ下りてきた。もうそこにはだれもいない、呂宋兵衛も昌仙も才蔵も、下のさわぎにおどろいて降りていったものと見える。

「しめた」

竹童は、五つ六つある階段を、むちゅうでかけおりた。

そこは、七門の扉にかためられている人穴城のなかだ。

あっちこっちの小火をけすそうどうにまぎれて、さしもきびしい城内ではあるが、ここに、天からふったひとりの怪童ありとは、夢にも氣のつく者はなかった。

三

果心居士の命をおびて、いつかここに使用したことのある竹童は、そのとき、だいぶ、ようすをさぐっておいたので、城内のかつても、心得ぬいている。

おそろしい、はしっこさで、かれがねらってきたのは鉄砲火薬をつめこんである一棟だった。見ると、戦時なので、煙硝箱も、つみだしてあるし、庫の戸も、観音びらきに開いている。しかも願ったりかなかったり、いまのさわぎで、武器番の手下も、あたりにいなかった。

ちよこちよこと、庫のなかへはいった竹童は、れいの松明に、火をつけて、まん中におき、藁縄の綱火が火をさそうとともに、このなかの煙硝箱が、いちじに爆発するようにしかけた。そして、ポンと、その扉を閉めるがはやいか、もってきた望楼へ、息もつかずにかかけあがってくる。

「ありがたい、ありがたい。これで人穴城の蛆虫どもは、間もなくいっぺんに寂滅だ。伊那丸さまも、およろこびなら、お師匠さまからも、たくさん褒めていただかれるだろう」

望楼に立って、手をふった竹童、待たせてあるク口が飛び去っては一大事と、大いそぎで、欄間から棟木へ手をかけ、棟木から屋根の上へ、よじ登ろうとすると、

「小僧、待て！」

ふいに、下からグングンと、足をひッぱる者があった。

「あ！ あぶない」

「降りろ、神妙におりてこないと、きさまのからだは、この望楼からころがり落ちていくぞ」

「あ、しまった」

竹童はおどろいた。

平地とちがって、からだは七階の櫓のすてっぺんにあった。棟木へかけている五本の指が、命をつっているようなもの、ひとつ力まかせに下からひっぱられたひには、たまったものではない。

「降りるともうすに、降りてこないか」

「いま降りるよ、降りるから、手をはなしてくれ、でなくっちゃ、からだか自由にならないもの」

「ばかを申せ、はなせば、上へあがるんだらう」

足をつかんでいる者はゆだんがない。

竹童は観念してしまった。

ままよ、どうにでもなれ、お師匠さまからいいつけられた使命は、もう十のものなら九つまでしとげたのもどうよう、呂宋兵衛の手下につかまって、首をはねられても残りおしい

ことはないと思つた。

「じゃ、どうしろつていうんだい」

おのずから、声もことばも、大胆になる。

「その手をはなしてしまえ」

「手をはなせば、ここから下まで、まっさかさまだ」

「いや、おれがこう持つてやる」

下の者は背をのばして、竹童の腰帯をグイとつかんだ。もうどうしたつてのがれッことはない、竹童は、運を天にまかせて、棟木の角へかけていた手を、ヒョイとはなした。

「えいッ」

はッと思うと、竹童のからだは、望楼台の上へ鞠のように投げつけられていた。覚悟はしていても、こうなると最後までにげたいのが人情、かれは、むちゆうになつてはね起きたが、すかさず、いまの男が、上からグンと乗しかかつて、

「まだもがくか！」

と手足の急所をしめて、磐石の重みをくわえた。それをだれかで見れば、さつき、呂宋兵衛や昌仙とともに、ここにいた可児才蔵である。

安土から選ばれてきた可児才蔵とわかつてみれば、なるほど、竹童が、つかまれた足を離せなかつたのもむりではない。

「いたい、いたい。苦しい」

竹童も、呂宋兵衛の手下にしては、どうもすこし、手強いやつに捕まつたとうめきをあげた。

「痛いのはあたりまえだ、うごけばうごくほど、急所がしまる」

「殺してくれ、もう死んでもいいんだ」

「いや、殺さない」

「首を斬れ」

「首も斬らぬ。いったいきさまは、どこの何者だ」

「聞くまでもないではないか、おいらはいつか、果心居士さまのお使いとなつて、この城へきたことのある鞍馬山の竹童だ。首の斬り方をしらないなら、さつさと、呂宋兵衛の前へひいていけ」

「ウーム、鞍馬山の竹童というか」

可児才蔵も、心中舌をまいておどろいた。

安土の城には、じぶんの主人福島市松をはじめ、幼名虎之助の加藤清正、そのほか豪勇な少年のあつたことも聞いているが、まだこの竹童のごとく、軽捷で、しかも大胆な口をきく小僧というものを見たことがない。

四

竹童はまた竹童で、才蔵に組みふせられていながら、肚のなかで、ふとこんなことを思った。

「こいつはおもしろい、いましかけてきたあの綱火が、松明の火からだんだん燃えうつつて、もうじきドーンとくるじぶんだ。そうすれば煙硝庫も人穴城の野武士も、この望楼もおいらもこいつも、いっぺんにけし飛んでしまふんだ」

と、かれはいきなり下から、ぎゅッと才蔵の帯をにぎりしめた。

「あはははは、およばぬ腕だて」

と、才蔵は力をゆるめて笑いだした。

「笑っている、笑っている、そして、いまに見ているがいい、この下の煙硝庫が破裂して、やぐらもきさまもおいらも、一しょくたに、木ッ葉みじんに吹ッ飛ばされるから」

「えッ、煙硝庫が？」

「おお、あのなかへ松明を、ほうりこんできたんだ。ああいい気味、その火を見ながら死ぬのは竹童の本望だ、おいらは本望だ」

「いよいよ、よいならん小僧だ」

さすがの才蔵も、これにはすこしとうわくした。がいまの一言を聞いて、

「では、もしや汝は、伊那丸のために働いている者ではないか」と、問いたました。

「あたりまえさ、伊那丸さまをおいて、だれのためにこんなあぶない真似をするものか、おいらもお師匠さまも、みんなあのお方を世にだしたいために働いているんだ」

「おお、さてはそうか」

と才蔵は飛びのいて、にわかにな態度をあらためた。竹童は、手をひかれて起きあがったが、少しあつけにとられていた。

「そうとわかれば、汝を手いたい目にあわすのではなかった。なにをかくそう、拙者はわけがあつて、秀吉公の命をうけ、この裾野のようすを探索にきた、可児才蔵という者だ」

「おじさん、おじさん、そんなことをいっていると、ほんとうに鉄砲薬の山が、ドカーンとくるぜ、おいらのいったのは、うそじゃないからね」

「では竹童、すこしも早く逃げるがいい」

「えッ、おいらを逃がしてくれんというの」

「おお秀吉公は、伊那丸どのに悪意をもたぬ。あのおん方に、会つたらつたえてくれい、可児才蔵と申す者が、いずれあらためて、お目にかかり申しますと」

「はい、しょうちしました」

ないとあきらめた命を、思いがけなく拾つた竹童は、さすがにうれしいとみえて、こおどりしながら、まえの欄間へ足をかけた。

「あぶないぞ、落ちるなよ」

まえには足をひつ張つた才蔵が、こんどは下から助けられる。竹童は棟木の上へ飛びつきながら、

「ありがとう、ありがとう。だが、おじさん——じゃあない可児さま。あなたも早くここを降りて、どこかへ逃げださないと、もうそろそろ煙硝の山が爆発しますよ」

「心得た、では竹童、いまの言伝を忘れてくれるな」

といいすてて、可児才蔵はバラバラと望楼をおりていったようす、いっぽうの竹童も、やっと屋根瓦の上へはいのぼつてみると、うれしや、畜生ながら靈鷲ク口にも心あるか、巨人のように翼をやすめてかれのものもどるのを待っていた。

「さあ、もう天下はこつちのものだ」

鷲の翼にかくれた竹童のからだは、みるまに、望楼の屋根をはなれて、磨墨のような暗天たかく舞いあがった。

——と思うと同時に、とつぜん、天地をひっ裂くばかりな轟音。

ここに、時ならぬ噴火口ができて、富士の形が一夜に変わるのかと思われるような火の柱が、人穴城から、宙天をつい

た。

トドトドトドトドウン！

二どめの爆音とともに、ふたつに裂けた望楼台は、そのとき、まっ黒な濛煙と、阿鼻叫喚をつつんで、大紅蓮を噴きだした殿堂のうえへぶっ倒れた。

そして、八万八千の魔形が、火となり煙となって、舞いおどる焔のそこに、どんな地獄が現じられたであろうか。

果心居士の壁叱言

—

「また富士山が、火をふきだしたのであろうか」

「おお、まだ今朝もあんなに、黒煙が、あがっている」

「なあに、お山はあのとおり、いつもと変わったところはない、きつと猟師が、野火でもだしたんだらうよ」

「いやいや、野火ばかりで、あんな音がするものか、戦のためた、戦があつたにきまつている」

「え、戦？ 戦とすればたいへんだ、このへんもぶつそうなことになるのじゃないかしら」

「ここは、裾野や人無村からも、ズツとはなれている甲斐国の法師野という山間の部落。」

人穴城がやけた轟音は、このへんまで、ひびいたとみえて、家に落着けない里の人があつち一群れ、こつちにひとかたまり、はるかにのぼる煙へ小手をかざしながら、今朝もガヤ

ガヤあんじあつていた。

「おい、与五松」

そのうちのひとりがいった。

「おめえの家で、ゆうべ宿をかした旅の客があつたな。なんだかこわらしい顔をしていたが、物しりらしいところもある、一つあの客人にきいて見ようじゃないか」

「なるほど、矢作がいいところへ気がついた、どこに戦があるのか、あの人なら知っているかもしれないねえ、はやくお呼びもうしてこいやい」

「あ、その人は、おれがでてくるときに、先をいそぐとやらで立ち支度をしていたから、ことによるともうでかけてしまったかもしれないが、おいでになったらすぐ連れてこよう」

与五松という若者は、すぐしぶんの家へかけだしていった。ちようど、立ちかけているところへ間に合ったものか、しばらくらくすると、かれはひとりの旅人をつれて一同のほうへ取ってかえしてきた。

「あれかい、与五松の家へとまった、お客というのは」

里の者たちは、袖ひき合つて、クスクス笑いあつた。なぜかといえ、片鼻そげている顔が、いかにも怪異に見えたのである。

旅の男というのは、鼻かけ卜齋の八風齋であつた。越後路へむかつていくかれは、蛾次郎を見うしなつて、ひとりとなり、昨夜はこの部落で、一夜をあかした。

「わざわざ恐れいりまする」

と、年かさな矢作が、卜齋のまえへ、小腰をかがめながら、ていねいにききだした。

「あなたさまは、裾野からおいでになった鏃師とやらだそう
でござりますが、あのとおりな黒煙が、二日二晩もつづいて
立ちのぼっているのは、いったいなんなのでござりましょう」
「あれかい」卜齋はくだらぬことに、呼びとめられたといわ
んばかりに、

「あれはたぶん、人穴の殿堂が焼けたのでしよう」

「へえ、人穴の殿堂と申しますると」

「野武士の立てこもっていた山城——和田呂宋兵衛、丹羽昌仙
などというやつらが、ひさしく巢をつくっていたところだ。
それもとうとう時節がきて、あのとおり、焼きはらわれたも
のだろう」

「ああ野武士ですか、野武士の城なら、いい気味だ」

「お富士さまの罰だ」

と、里人はにわかにはッと安心したばかりか、日ごろの鬱憤
をはらしたようにどよみ立った。

するとまた二、三の者が、

「あ、だれかきた」と叫びだした。

見ると鳥刺し姿の可児才蔵が、山路をこえてこの部落には
いつてきたのだ。ここは街道衝要なところなので、甲府へい
くにも南信濃へはいるにも、どうしても、通らねばならぬ地
点になっている。

「おお鳥刺しだ」

と、部落の者たちは、また才蔵を取りまいて、裾野のよう
すをくどく聞きたがった。けれど才蔵は、これから安土へ昼
夜兼行でかえろうとしている体、裾野におけるちくいちの
仔細は、まず第一に、秀吉へ復命すべきところなので、多く

を語るはずがない。

「さあ、ふかいようすは知りませんが、なにしろ、裾野はい
ま、人穴城の火が、枯野へ燃えひろがって、いちめんの火で
すよ、そのために、徳川勢と武田方の合戦は、両陣ひき分け
になったかと聞きました。人穴城から焼けたされた野武士
は、駿河のほうへは逃げられないのでたぶん、こっちへ押し
なだれてきましたよう」

「えッ、野武士の焼けだされが、こっちへ逃げてきますって？」
「ほかに逃げ道もなし、食糧のあるところもありませんか
ら、きつとここへやってくるにそういありません。ところで
みなさん、わたしがここを通ったことは、その仲間がきても、
けっしていわないでくださいまし、ではさきをいそぎますか
ら——」

と、可児才蔵はほどよくいって、いっさんに、部落をかけ
だした。

そして、甲信両国の追分に立ったとき、右手の道を、いそ
いでいく男のかけがさがきに見えた。

「ははあ、きやつは、柴田の廻し者上部八風齋だな、これか
ら北ノ庄へかえるのだろうが、とても、勝家の腕ではここま
で手が伸びない。やれやれごくろうさまな……」

苦笑を送ってつぶやいたが、じぶんは、それとは反対な、
信濃堺の道へむかって、足をはやめた。

二

法師野の部落は、それから一刻ともたたないうちに、昼な

から、森としてしまった。たださえ兇暴な野武士が焼けたさ
れてきた日には、どんな残酷をほしいままにするかも知れな
いと、家を閉ざして村中恐怖におののいている。

はたして、その日の午後になると、この部落へ、いような
落武者の一隊がぞろぞろとはいって来た。各戸の防ぎを蹴破
って、

「ありったけの食べ物を持たせ」

「女老人は森へあつまれ、そして飯をたくんだ」

「村から逃げだすやつは、たたツ斬るぞ」

「家はしばらくのあいだ、われわれの陣屋とする」

好き勝手なことをいって、財宝をうばい、衣類食い物を取
りあげ、部落の男どもを一人のこらずしばりあげて、その家々
へ、飢えた狼のごとき野武士が、わがもの顔して、なだれ
こんだ。

焼けだされた狼は、わずか三、四十人の隊伍であったが、
なにせよ、武器をもっている命知らずだからたまらない。な
かには、呂宋兵衛をはじめ、丹羽昌仙、早足の燕作、吹針の
蚕婆までがまじっていた。

あの夜、殿堂へ、煙硝爆破の紅蓮がかぶさったときには、
さすがの昌仙も、手のつけようがなく、わずかに、呂宋兵衛
その他のものとともに、例の間道から人無村へ逃げ、からく
も危急を脱したのであるが、多くの手下は城内で焼け死んだ
り、のがれた者も、大半は、徳川勢や伊那丸の手におちて、捕
われてしまった。

城をうしない、裾野の勢力をうしなった呂宋兵衛は、たち
まち、野盗の本性にかえって、落ちてきながら、通りがけの

部落をかたっぱしから荒らしてきた。そしてこれから、秀吉
の居城安土へのぼって、助けを借りようという虫のよい考え。
——ところが、一しょにおちてきた可児才蔵は、こんな狼連
につきまとわれては大へんと、いちはやく、とちゅうから姿
をかくし、一足さきに上方へ立っていったのである。

三

ここに、一世一代の大手柄をやったのは鞍馬の竹童。

その得意や、思うべしである。

飛行自在のク口あるにまかせて、かれは、燃えさかる人穴城
をあとに、ひさしぶりで、京都の鞍馬山のおくへ飛んでかえ
り、お師匠さまの果心居士にあつて、得意のちくいちを物語
ろうと思つたところが、莊園の庵はがらん洞で、ただ壁に、
一枚の紙片が貼つてあり、まさしく居士の筆で、いわく、

竹童よ。誇るなよ。なまけるなよ。ゆだんするなよ。お

前の使命はまだ残っているはず。

ふたたび、われとあう日まで、心の紐をゆるめるなかれ。

果心居士

「おや、こんなものを書きのこして、お師匠さまはいつたい、
どこへ隠れてしまったんだろう」

竹童は、がっかりしたり、不審におもったりして、しばら
く庵にぼんやりしていた。

「おまえの使命はまだ残っている——おかしいなあ、お師匠

さまの計略は、いつつけられたとお里まんまとしたのに……ああそうか、徳川軍にかこまれた伊那丸さまが、勝ったか負けたか、生きたか死んだか、その先途も見とけないのがいけないというのかしら、そういえば、可児才蔵という人からたのまれている伝言もあつたつけ」

と、にわかにながついた竹童は、数日来、不眠不休の活動に、ともすると眠くなる目をこすりながら、ふたたび、クロに乗って富士の裾野へ舞いもどつた。

やがて、白砂青松の東海道の空にかかつたとき、竹童がふと見おろすと、たしかに徳川勢の亀井、内藤、高力なんどの武者らしい軍兵三千あまり、旗幟堂々、一鼓六足の陣足ふんで浜松城へ凱旋してきたようす。

「おや、あのあんばいでは、裾野の合戦は伊那丸さまの敗亡となつたかしら？」

竹童、いまさら気が気でなくなつたから、いやがうえにも、クロをいそがせて、裾野の空へきて見ると、人穴から燃えひろがった野火は、止まるどころを知らず、方三里にわたつて、濛々と煙をたてているので、下界のようすはさらに見えない。

遠術日月の争い

—

なぬかななよ
七日七夜、燃えにもえた野火の煙は、裾野一円にたちこめて、昼も日食のように暗い。

富士の白妙が銀細工のものなら、とツクに見るかげもなく、くすぶつてしまったところだ。見よ、さしも人穴の殿堂すべて灰燼に帰し、まるで鬼の黒焼、巖々たる岩ばかりがまっ黒にのこつている。

すると、さつきから、その焼け跡を見まわっていた三騎のかけが、廃城の門をまっしぐらに駈けだした。そして濛々たる野火の煙をくぐりながら、金明泉のちかくまできたとき、さききた山県蔦之助が、ふいに、ピタツと駒をとめて、

「や？ ご両所、しばらく待つてくれ」
と、あとからきた二騎——巽小文治と木隠龍太郎へ、手をふつて押しとどめた。

「おお、蔦之助、呂宋兵衛の残党でもおつたか」

「いや、よくはわからぬが、あの泉のほとりに、なにやらあやしいやつがいる。いま、拙者が遠矢をかけて追いたてるから、あとは斬るとも生けどるとも、おのおの鑑定しだいでくれ」

「ウム、心得た」

といったへんじよりは、龍太郎と小文治、金明泉へむかつて馬を飛ばしていたほうがはやかつた。

蔦之助は、鷹の石打ちの矢を一本とつて、弓弦につがえ、馬上、横がまえにキラキラと引きしぼる。

——小一町は、駿馬項羽で一足とび、
「やッ、しまった！」

と、そこまできて龍太郎はびつくりした。なぜといえは、いましも金明泉のほとりから、笹叢をガサガサ分けてでてきたのは、呂宋兵衛の残党どころか、大せつな大せつな鞍馬の

竹童。

竹童はなんにも知らない。金明泉の水でも飲んできたか、袖で口をふきながら、ヒョイと、岩角へとび乗ってわざわざ鳶之助のまに立ってしまった。

龍太郎はあわてて、うしろのほうへ馬首をめぐらし、

「待てッ、味方だ！」

「竹童だ、うつな！」

小文治も絶叫した。

が、間にあわなかつた。プツン！ とたかい弦鳴りがもうかなたでしてしまつた。

射手は名人、矢は鷹の石打ち、ヒューツと風をふくんで飛んだかと思うと、狙いはあやまたずかれの胸板へ――

あつけらかんと口をふいていた竹童、睫毛の先にキラリツと鏃の光を感じたせつなに、ヒョイ――と首をすくめて右手すばやく稲妻つかみに、名人の矢をにぎり止めてしまつた。

「竹童、みごと」

矢にもおどろいたし、褒め声にもおどろいた竹童、龍太郎と小文治のすがたを見つけて、

「木隠さま。大人のくせに、よくないいたずらをなさいますね」

と、ニツコリ笑つた。

「いや竹童、いまのは木隠どののわるさではない。むこうにいる山県氏の見そこないだから、まあかにんしてやるがよい」

小文治がいいわけしていると、鳶之助も遠くから、このよすを見てかけてきた。そして、今為朝ともいわれたじぶん

の矢を、つかみとるとは、末おそろしい子だという。

けれど当の竹童には、末おそろしくもなんにもない。こんな鍛練は、果心居士のそばにおれば、のべつ幕なしにためされてる「いろは」のいの字だ。

「ときに龍太郎さま、なによりまつ先に、うかがいたいのは、伊那丸さまのお身の上、どうか、その後のようすをくわしく聞かしてくださいまし」

「ウム、当夜若君の孤軍は、いちどは重圍におちいられたが、折もよし、人穴城の殿堂から、にわかには猛火を発したので、さすがの呂宋兵衛も、間道から逃げおちて、のこるものは阿鼻叫喚の落城となつた。どうじに三河勢も浜松より急命がくだつて総退軍。そのため、味方の勝利と一変したのだ」

「そして、ただいま、ご本陣のあるところは」

「五湖をまえにして、白旗の森一帯、総軍一千あまりの兵が、物の具をつくろうて、休戦しておる」

「呂宋兵衛の部下が軍門にくだつて、それで急に、味方がふえたわけなんですね」

「そうだ。して竹童、おまえはきょうまで、どこにいたのか」「ちよつと鞍馬へかえつて見ましたところが、お師匠さまの叱言が壁にはつてあつたので、あわててまた舞いもどつてきたんです」

「フーム、では果心先生には、鞍馬の庵室にも、おすがたが見えなかつたか」

「いっこうお行方しれずです。またお気がむいて、日本くまなく行脚しておいになるのかも知れませんが、困るのはこの竹童、先生のおいつけは、やりとげましたが、こんどは

なにをやっているのか見当が付きません。龍太郎さま、あそんでいると眠くなりますから、なにか一つ中役ぐらいなところを、いいつけておくんなさい」

龍太郎も、じぶんの手柄話らしいことを、おくびにもださなかつたが、竹童もまた、あれほどの大軍功を成しとげていながら、鼻にもかけず塵ほどの誇りもみせていない。

そしてなお、なにか一役いいつけてくれという。よいかな竹童、さすがは果心居士が、藜の杖で、ピシピシしこんだ秘蔵弟子だ。

二

武田伊那丸、小幡民部、そのほか帷幕のものが、いまなお白旗に陣をしいて、しきりにあせっているわけは、和田呂宋兵衛の所在が、かいかく知れないためであつた。

人穴城という外廓は焼けおちたが、中身の魔人どもはのこらず逃亡してしまつた。丹羽昌仙、吹針の蚕婆、穴山残党の佐分利、足助の輩にいたるまで、みな間道から抜けだした形跡。しかも、落ちていったさきが不明とあつては、真に、この一戦の痛恨事である。

「そこできょうも、咲耶子さまをはじめ忍剣もわれわれ三名も、八ぼうに馬をとばし、木の根、草の根をわけてさがしているところだ」

——と龍太郎からはなされた竹童は、聞くとともに、こともなげにのみこんで、

「では龍太郎さま、この竹童が、ちよつと、一鞭あてて見て

まいりましょう」

「ウム、なにかおまえに、成算があるか」

「あてはございませんが、そのくらいのことなら、なんのぞうさもないこつです」

「いや、あいかわらず小気味のいいやつ、ではわかりしだいにその場所から、この狼煙を三どうちあげてくれ、こちらでも、その用意をして待つことにいたしているから」

「ハイ。きつとお合図もうします。じゃ薦之助さま、小文治さま、これでごめんこうむりますよ」

竹童、龍太郎から受けとつた狼煙筒を、ふところに納めると、またまえにでてきた笹叢のなかへ、ガサガサと熊の子のように姿をかくしてしまつた。

おや？ あんな大言を吐いておいて、どこへもぐりこんでゆくのかと、こなたに三人がながめていると、折こそあれ、金明泉のほとりから、一陣の旋風をおこして、天空たかく舞いあがつた大鷲のすがた——

地上にあつても小粒の竹童、空へのぼると、鷲の一毛にもたらず、かれの姿は、翼のかげにありとも見え、なしとも思われつつ、鷲そのものも、たちまち鳩のごとく小さくなり、雀ほどにうすらぎ、やがて、一点の黒影となつて、眼界から消えてゆく。

雲井にきえた鷲と竹童。甲駿二国のさかいを、蛇の目まわりに、ゆうゆうと見てまわつて、とうとう、この法師野の部落に、和田呂宋兵衛一族の焼けだされどもが、よわい村民をしいたげているようすをとくと見さだめた。

このあたり、野火の煙がないので、竹童が鷲の背から小手

をかざしてみると、法師野の山村、手にとるごとしだ。部落の家には、みな人穴城の残党がおしこみ、衣食をうばわれた善良な村人は、老幼男女、のこらず裸体にされて、森のなかに押しこめられている。真にこれ、白昼の大公盗、目もあてられぬ惨状だ。

「ちくしょうめ、人穴城でやけ死んだかと思つたら、またこんなところで悪事をはたらいていやがるな……ウ又いまに一あわふかせてやるからおぼえていろ」

空にあって、竹童は、おもわず歯がみをしたことである。そして、一刻もはやく、この状況を、伊那丸の本陣へ知らせようと、大空ななめに翔けおるる——

するとそのまえから、法師野の大庄屋狛家の屋敷を横奪して、わがもの顔にすんでいた和田呂宋兵衛は、腹心の蚕婆や昌仙をつれて、庭どりの施無畏寺へでかけて、三重の多宝塔へのぼり、なにか金目な宝物でもないかと、しきりにあつちこつちを荒らしていた。

吹針の蚕婆は、ちょうどその時、三重の塔のいただきへのぼって、朱の欄干から向こうをみると、今しも、竹童のつた大鷲が、しきりにこの部落の上をめぐるってあなたへ飛びさらんとしているとき——

「あッ、たいへん」
顔色をかえて、蚕婆がぎょうさんにさわぎだしたので、塔のなかの宝物をかきまわしていた呂宋兵衛と昌仙なにごとかとあわてふためいて、細廻廊の欄干へ立ちあらわれた。

見ると空の黒鷲、その翼にひそんでいるのは、呂宋兵衛がうらみ骨髓にてっしている鞍馬の小童。丹羽昌仙はきツと見

て、

「ウーム、きやつめ、伊那丸方の斥候にきおつたな」

と拳をにぎつたが、かれの軍学も空へはおよばず、蚕婆の吹針も、ここからはとどかず、ただ唇をかんんでいるまに、鷲はいっさんに裾野をさしてななめに遠のく。

「呂宋兵衛さま、もうこうはしておられませぬ」

さすがの昌仙が、ややろうばいして腰をうかすと、いつも臆病な呂宋兵衛が、イヤに落着きはらって、

「なアに、大丈夫」

と苦つぽく嘲笑い、じつと、鷲のかけを見つめていたが、やがて、右手に持っていた金無垢肉彫りの鷹の黄金板——それはいまの塔内から引ツベがしてきた厨子の金物。

「はッ……、はッ……」

と三たびほど息をかけて、術眼をとじた呂宋兵衛、その黄金の板へ、ヤツと、力をこめて碧空へ投げあげたかと思うと、ブーンとうなりを生じて、とんでいった。

「あッ」

「オオ」

と丹羽昌仙も蚕婆も、おもわず金光の虹に眼をくらまされて、まぶしげに空をあおいだが、こはいかに、その時すでに、黄金板のゆくえは知れず、ただ見る金毛燦然たる一羽の鷹が、太陽の飛ぶがごとく、びゅツ——と竹童の鷲を追ツかけた。

これは、前身悪伴天連の和田呂宋兵衛が、蚕流幻術の奇蹟をおこなって、竹童を、鳥縛の術におとさんとするものらしい。——知らず鞍馬の怪童子、はたして、どんな対策がある

だろうか？

三

「あら、あら、あら！ コンちくしょうめ」

竹童は、にわかにか空でめんくらった。

いや、乗ってる驚がくるいだしたのだ。——で、いやおうなく、かれが、大声あげて、叱咤したのもむりではない。

「こらッ、クロ、そっちじゃねえ、そっちへ飛ぶんじやないよ！」

いつも背なかで調子をとれば、以心伝心、思うままの方向へ自由になるクロが、にわかには、風をくらった凧のように、一つとところを、くるくるまわってばかりいる。

はるか、多宝塔の上で、呂宋兵衛が、放遠の術気をかけているとは知らない竹童、ふしぎ、ふしぎとあやしんでいると、怪光をおびた一羽の大鷹が、かつと嘴をあいて、じぶんの目玉をねらってきた。

「あッ」

竹童はぎよツとして、驚の背なかへうつぶした。——とク口は猛然と巨瞳をいからし、鷹をめぐけて絶叫を浴びせかける。らんらんたる太陽のもと、双鳥たちまち血みどろになつてつかみあった。飛毛ふんぷんと降って、そこはさながら、日月あらそって万星うずを巻くありさまである。

「えいッ」

そのとき竹童、腰なる名刀がわりの棒切れ、ぬく手もみせず、怪光の鷹をたたきつけた。とたんに、その鋭い気合いが、

術気をやぶったものか、鷹は、かーんと黄金板の音をだして、一直線に地上へ落ちていった。

「ウーム、しまった！」

多宝塔の上で、遠術の印をむすんでいた呂宋兵衛、あおじろい額から、タラタラと脂汗をながしたが、すぐ蛮語の呪文をとなえ、満口に妖気をふくみ入れて、フーと吹くと、はるかな、竹童と驚の身辺だけが、薄墨をかけたように、円くぼかされてしまった。

はじめは、そのうす黒い妖気が、雲のように見えたがやがて、チラチラ銀光にくずれたのを見ると……数万数億の白い毒蝶。——打てども、はらえども、銀雲のように舞って、さすがの竹童も、これには弱りぬいた。同時に、さては何者か、妖気を放術してさまたげているにそういないと知ったから、かねて果心居士におしえられてあった破術遁明の急法をおこない、蝶群の一角をやぶって、無二無三に、驚を飛ばそうとすると、クロは白蝶群の毒粉に眩暈で、翼を弱められ、クルクルと木の葉おとしに舞いおりた。

多宝塔の上から、それをながめた呂宋兵衛、してやったりとほくそ笑んで、塔のなかへ姿をかくしたが、まもなく金銀珠玉の寺宝をぬすみだして、庄屋の狛家へはこびこみ、野武士の残党どもに、酒蔵をやぶらせて、面にくい大酒宴。寺には、僧侶が斬りころされ、森には裸体の老幼がいましめられて、飢えと恐怖におののいている。戦国の悲しさには、この暴悪なともがらの暴行に、駈けつけてくる代官所もなく、取りしめる政府もない。

こうして呂宋兵衛たちは、この村を食いつくしたら、次の

部落へ、つぎの部落を蹂躪しきつたらその次へ、群をなして桑田を枯らす害虫のように渡りあるく下心でいるのだ。それは、この一族ばかりでなかったとみえて、戦国時代のよわい民のあいだには「狼」と野武士がいなけりや山家は極楽」と、

という諺さえあった。

さて、いっぽうの竹童は、どこへ降りたろう。

降りたところで、ふと見るとそこは、つごうよく、五湖方面から法師野地方へかよう街道のとちゆう。小広い平地があつて、竹林のしげった隅に、一軒の茅葺屋根がみえ、裏手をながるる水勢のしぶきのうちに、ゴットン、ゴットン……水車の悠長な諧調がきこえる。

さつきは、呂宋兵衛の遠術になやまされて、クロがだいぶつかれていようすなので、竹童は、水車のかけてある流れによつて、驚にも水を飲ませしづんも一口すつて、さて、一刻もはやく合図の狼煙をあげてしらせたいがと、あつちこつちを見まわした後、クロをそこへ置きすて、いっさんにうらの小山へ登りだした。

ところが、その水車小屋には、一昨日からひとりの男が張りこんでいた。

呂宋兵衛から、張り番をいいつけられていた早足の燕作。

毎日たいくつなので、きょうは通りかかった泣き虫の蛾次郎を、小屋のなかへ引っぱりこみ、このいい天気なのに小屋の戸を閉めきつたまま、ふたりでなにかにむちゆうになつていた。

驚盗み

一

入口も窓も閉めきつてあるので、水車小屋のなかはまっ暗だ。ただ、蝋燭が一本たつている。

そこで、早足の燕作が、泣き虫の蛾次郎に、よからぬ秘密を、伝授している。

なにかと思えば、かけごとである。するものに事をかいて、かけごとの方法をつたえらるとは、教授する先生も先生なら、また、教えをうける弟子も弟子、どっちも、褒められた人物でない。

「おい蛾次公、まだふところに金があるんだらう、勝負ごとは、しみつたれるほど負けるもんだ、なんでも、気まえよくザラザラだしてしまいなえ」

「だって燕作さん、いまそこへだした小判は？」

「わからねえ男だな、いまのはおまえが負けたからおれにとられてしまったんだよ。それを取りかえそうと思つたら、いっぺんに持つてるだけかけて見ろ」

「だって負けると、つまらねえや」

「そこが男の度胸じゃねえか、鍬師の蛾次郎ともあるおまえが、それぐらいな度胸がなくなつて、将来天下に名をあげるこ

とができるもんか、ええ蛾次ちゃん、しっかりしろやい」

と燕作は、ここ苦心さんたんで、蛾次郎の持ち金のこらず

巻きあげようとつとめている。

蛾次郎が、身にすぎた小判を、ザラザラ持っていたのは、向田ノ城の一室で、菊池半助からもらった金だった。——かれは、本来その報酬として竹童の鷲をぬすんで、裾野戦のおこるまえに、菊池半助の陣中へかけつけなければならなかったはずだが、密林のおくで、鷲をぬすみそこねて、竹童のため、したたか痛められていらい、もうこりこり、のこりの金で買食いでもしようかと、甲府をさしてきたとちゅう、ここで張り番役をしていた燕作の目にとまり、ひっぱりこまれたものである。

そしてさつきから、うまうまとふところの小判を、あらかた巻きあげられ、もう三枚しか手になかった。燕作は、その三枚の小判をふんだくってしまったら、おとといおいでと、小屋からつまみだしてしまうつもりだ。

「おい、蛾次郎先生、いつまで考えこんでいるんだい」

「だけれど、こわいなあ、この三枚をだして負けになると、おれは、空ッぽになつてしまふんだらう」

「そのかわり、おめえが勝てば、六枚になるじゃねえか、六枚はつて、また勝てば十二枚、その十二枚をまたはれば、二十四枚、二十四枚は二十四両、どうでえ、それだけの金をふところに入れて、甲府へいってみる、買えねえ物は、ありやしねえぞ」

「よし! はった」

「えらい、さすがは男だ、よしかね、勝負をするぜ」

「ウム、燕作さん、ごまかしちゃいけねえよ」

「ばかをいやがれ、いいかい、ほれ……」

と、燕作が壺へ手をかける、蛾次郎は目をとぎすます——と、その時だ……

ドドーンと、裏山の上で、不意にとどろいた一発の狼煙。燕作は見張り番の性根を呼びさまして、「あっ!」とばかりはねかえり、窓の戸をガラツとあけて空をみると、いましも、打ちあげられた狼煙のうすけむり、水に一滴の墨汁をたらしように、ポーッと碧空にじんんで合図をしている。

「やッ、なにか伊那丸の陣のほうへ、合図をしやがったやつがあるな。ウム、もうこうしちやいらねえ」

あわただしく取つてかえすや否、賭けてあった小判をのこらずかきあつめて、ザラザラとふところにねじ込む。

蛾次郎はぎょうてんして、その袂にしがみついた。

「ずるいやずるいや、燕作さん、おれの金まで持つていっちゃいけないよ、かえしてくれ、かえしてくれ」

「ええい、この阿呆め、もう、てめえなんぞに、からかつているひまはねえんだ」

ポンと蛾次郎を蹴はなして、脇差をぶちこむがはやいか、ガラリツと土間の戸を開けっぱなしで、狼煙のあがった裏の小山へ、いちもくさんにかけあがった。

あとで起きあがった蛾次郎、親の死目に会わなかつたより悲しいのか、両手を顔にあてて、

「わアん……わアん……わアん……」

と、手ばなしで泣きだした。

しかし天性の泣き虫にかぎって、泣きだすのものはやいが泣きやむのもむぞうさに、ケロリと天気がはれあがる。

しばらくのあいだ、おもうぞんぶん泣きぬいた蛾次郎は、

それで気がさっぱりしたか、プーと面をふくらましてそとへ
でてきた。と思うと、なにかんがえたか、賽の河原の亡者の
ように、そこらの小石をふところいっぱいひろいこんだ。

「燕作め！ 見ていやがれ」

怖ろしい怖ろしい、低能児でも復讐心はあるもの。蛾次郎
が、小石をつめこんだのは、れいの石投げの技で、小判の仇
をとるつもりらしい。

燕作がかえってくるのを待伏せる計略か、蛾次郎はギョロ
ツとすごい目をして水車小屋の裏へかくれこんだ。

と、どこまで運のわるいやつ、ワツと、そこでまたまた腰
をぬかしそこねた。

「やあ、おめえは、クロじゃねえか」

一どはびつくりしたが、そこにいた怪物は、おなじみの竹童
のクロだったので、蛾次郎は思わず、人間にむかっていうよ
うなあいさつをしてみた。

そして、いまの泣きツ面を、グニャグニャと笑いくずして、
「しめ、しめ！ 竹童がいけないまに、この驚をかつぱらッて
しまえ。驚にのって菊池半助さまのところへいけばお金はく
れる、侍にはなれる、ときどきクロにのって諸国の見物は
したいほうだい。アアありがてえ、こんな冥利を取りにがし
ちやあ、天道さまから、苦情がくら」

竹の小枝を折って棒切れとなし、竹童うつしにクロの背な
かへのつた泣き虫の蛾次郎。ここ一番の勇気をふるいおこし
て、驚ぬすみのはなれわざ、小屋の前からさツと一陣の風を
くらって、宙天へ乗り逃げしてしまった。

二

血相かえて、小山の素天ツペンへ駈けあがってきた早足の
燕作、きツと、あたりを見まわすと、はたして、その粘土
の地中に狼煙の筒がいてあった。

スポンとひき抜いて、その筒銘をあらためていると、すき
をねらったものかげから、バラバラと逃げだしたひとりの少
年。

「うぬ、間諜！」

ぱツと飛びついて組みかぶさった燕作、肩ごしに相手の頤
へ手をひっかけて、タタタタと五、六間ひきずりもどした
が、きツと目をむいて、

「やツ、てめえは鞍馬の竹童だな」

「オオ竹童だが、どうした」

「狼煙をあげて、伊那丸方へ合図をするなんて、なりにも
あわぬふてえやつ。きょうこそ呂宋兵衛さまのところへ引
つるすからかくごをしろ」

「だれがくそ！」

「ちえツ。この餓鬼め」

「なにをツ、この大人め」

組んずほぐれつ、たちまち大小二つの体が、もみ合った。
——赤土がとぶ、草が飛ぶ。それが火花のように見える。

さきに、釜無川原でぶつかった時、燕作の早足と腕まえを
知った竹童は、もう逃げては、やぼとおもったか、いきなり
かれの手首へかじりついた。

「あ痛ッ！ ちくしょうッ」

燕作は拳をかためて、イヤというほど、竹童のびんたをなぐる。しかし竹童も、必死に食いさがって、はなればこそ。

「ウム」と唇から血をたらして同体に組みたおれた。そしてややしばらく芋虫のように転々として上になり、下になりしていたが、ついに踏またいでねじふせた燕作が、右の拇指で、グイと対手の喉をついたので、あわれや竹童、喉三寸のいきの根をたたれて、

「ウム……」

と、四肢をぶるとふるわせたまま、ついに、ぐったりしてしまった。

「ざまア見やがれ！ がらの小せえわりに、ぞんがいほねを折らせやがった」

燕作は、すぐ竹童をひっかかえて、法師野にいる呂宋兵衛のところへかけつけようとしたが、ふと気がつくとき、いまの格闘で、さつき蛾次郎からせしめた小判が、あたりに山吹の落花となつていたので、

「ほい、こいつをすてちやあゆかれねえ」

あっちの三枚、こっちの五枚、ザラザラひろいあつめていると、突！ どこからか風をきって飛んできた石礫が、コツンと、燕作の肩骨にはねかえった。

「おや」

とふりむいたが、竹童は気絶して横たわっているし、ほかにあやしい人影も見あたらない。どうもへんだとは思ったが、なにしろ大せつな小判をと、ふたたびかき集めていると、こゝろはバラバラ小石の雨が、つづけざまに降ってきた。

「あ、あ、あいたッ！」

両手で頭をかかえながら、ふとあおむいた燕作の目に、そのとたん！ さつと舞いおりた大鷲の赤銅色の腹が見えた。

首尾よく、驚ぬすみをやった泣き虫の蛾次郎、その上にあつて、細竹の杖を口にくわえ、右手に飛礫をつかんで、

「やい燕作、やアい、燕作のバカ野郎。さつきはよくも蛾次郎さまの金を、いかさまごとで、巻きあげやがったな。その返報には、こうしてやる、こうしてやる！」

天性、石なげの妙をえた蛾次郎が、邪魔物のない頭の上からねらいうちするのだからたまらない、さすがの燕作も手むかいのしようがなく、あわてまわつて、竹童のからだを横わきに引つかかえるや否、小山の降り口へむかつて、一足とびに逃げだした。

が——一せつな、蛾次郎がさいごの力をこめた飛礫がピュツと、燕作のこめかみにあたったので、かれは、急所の一撃に、くらくらくと目をまわして、竹童のからだを横にかかえたまま、粘土の急坂を踏みすべつて、竹林のなかへころがり落ちていった。

「やあ、いい気味だ、いい気味だ！ ひっヒヒヒヒ」

白い歯をむきだして、虚空に凱歌をあげた蛾次郎は、口にくわえていた細竹の杖を持ちなおし、ここ、竹童そっくりの大得意。

「さ、ク口、あっちへ飛べ」

南——遠江の国は浜松の城、徳川家康の隠密組菊池半助のところを指して、いっきに驚をかけらせた。

幸か不幸か、いま竹童は息の根絶えてそれを知らない。醒

めてのち、かれが天下なものよりも愛着してやまないクロが、蛾次郎のため盗みさられたと知ったら、その腹立ちはどうなんだろう。

三

ゴットン、ゴットン、ゴットン……

水車の諧調に、あたりはいつか、たそがれてきた。

竹林のやみに、夜の風がサワサワゆれはじめると、昼はさまでに思えなかった水音が、いちだんとすごみを帯びてくる。

——ことに今夜は、小屋の灯をともしず者もなかった。

星あかりで見ると、その燕作は、水車場のすぐ上の崖に、竹童をかかえたまま、だらりと木の根に引つかかっている。

——ふたりとも、死せず活きず、氣絶しているのだ。

すると上の竹の葉が、サラサラ……とひそやかにそよぎだしたかと思うと、笹の雫がそそぎこぼれて、燕作の顔をぬらした。で、かれはハツと正気をとりもどし、むくむくと起き、闇のなかにつつ立った、——立ったとたんに、笹の枝からヌルリとしたものが、燕作の首に巻きついた。

「あッ——」と、つかんですてると、それは小さな白蛇である。こんどはたおれている竹童の胸へのつて、かれのふところへ鎌首を入れ、スルスルと襟首へ、銀環のように巻きついた。

夜はいよいよ森々としている。燕作は、なんだかゾツとして手がだせないでいた。そして、顔のしずくをなでまわした。

と、それはあまりに遠くない地点から、ぼウ——ぼウ——

と鳴りわたってきた法螺の音、また陣鐘。耳をすませば、ごくかすかに甲鎧のひびきも聞える。兵馬漸進の足なみかと思われる音までが、ひたひたと潮のように近づいてくる。

「オオ！」

燕作はいきなり、そばの木へのぼって、枝づたいに、小屋の屋根の上へポンとどびうつた。そして、暗憺たる裾野の方角へ小手をかざしてみると、こはなにごと！

急は目前、味方の一大事、すでに十数町の近くまでせまってきた。

竹童があいずの狼煙をみて、この地方に敵ありと知った。武田伊那丸は、白旗の森に軍旅をととのえ、裾野陣の降兵をくわえた約千余の人数を、星、流、騎、白、幻の五段にわかち、木隠、翼、山泉、加賀見、咲耶子の五人を五隊五將の配置とした。

采配、陣立て、すべてはむろん、軍師小幡民部これを指揮するところ。

陣の中央はこれ天象の太陽座、すなわち、武田伊那丸の大將座、陰陽脇備え、暈備え、旗本随臣たち楯の如くまんまんとこれをかこみ、伝令旗持ちはその左右に、槍組、白刃組、弓組をせんとくに、小荷駄、後備えはもっともしんがり、いましも、三軍星をいただき、法師野さしていそいできた。ひる、それを見れば、孫子四軍の法を整々とふんだ小幡民部が軍配ぶり、さだめしみごとであるうが、いまは荒涼たる星あかり、小屋の屋根から小手をかざしてみた燕作にも、ただその殺気しか感じられなかった。

「ウーム……」

と、燕作はおもわずうなつて、

「いよいよ伊那丸のやつばらが、呂宋兵衛さまのあとをかぎつけてきやがったな。オオ、すこしも早くこのことを、法師野へ知らせなくっちゃならねえ」

ひらりと、屋根をとびおりた燕作、この大事に驚愕して、いまはひとりの竹童をかえり見ている暇もなく、得意の早足一もくさん、いずこともなくすッ飛んでつた。